



案山子



2014年夏号

新潟大学文芸部

もくじ

■お題作品『太陽』

精神性共依存的善悪論	双梳空	3
革命の翌朝	高天美月	4
M氏の太陽	松本惇暉	5

■通常作品

十億の良心	古井龍	7
メロディ・トリップ	鈴野拓海	8
轟く	松井流吏	9
幸せにする粒子	三ツ葉葵	10
juratio	加々美翔	11
strascinand	七乙女昂	12
エレフオーン	葉月遼	13
華獣奏楽	夏村晋	14
勇者のアフターストーリー	幼夏	15
スクランブルエッグズ	今畑鏡	16
背徳者—chaos(前編)—	山吹弓穂	17
ヤンデレ少女と・・・	遇新来三	18
春は別れ、空高く橋かかる日に	遠瀬瑠依歌	19
こ	双梳空	20
待ち人		21
混合(上)	Puney Loran Seapon	22
青を吐く	日曜日憂	23
糸を紡ぐ浪漫伝	高天美月	24
テクノスタルジア		25
地に平和を 後編	外衛眞希	26
地図にない村	芳野朔	27
黄昏の巡礼者 - 零 -	七分の六	28
RPG. Until the day I die.	松本惇暉	29
さくらのよいがさめるまで	浦木英智	30

お題作品「太陽」

精神性共依存的善悪論（双梳空）

精神性共依存的善悪論 ～彼女と彼女の場合

双梳空

靴箱を開け、出てきたのは手紙だった。このパターンにはもう慣れ切り、内容も大体予想できつつ開いて読み流す。……が。

「しい、どうした？」

「ねえ日奈、これどう思う」

背を叩いた日奈は手紙を見て軽く口笛を吹く。しかし、見覚えのある差出人の名に彼女もまた訝しげな視線を送ってきた。

「何だ？ 調子乗ってんのかコイツ。気い付けとけよ詩月」

「分かってる」

放課後に指定された校舎裏は、良くある告白スポットという奴だ。二日続けての無駄な運動にうんざりしながら辿り着けば、学校でも人気の先輩がいた。

「やあし」

「昨日のお話はお断りしたはずですがまだ何か御用でも？」

「恥ずかしがり屋だね。そんなところもまた可愛いけど」

嫌悪感を隠しもしない言葉にその台詞。Mか。

「その程度なら聞き飽きています。用件があるなら手短に」

「そう急かさないでくれよ。ボクとのお喋りは嫌いかい？」

「嫌に決まっているでしょう」

ああもう本当にうんざりする。

「言っておきますが、その程度の聖気でこの私は屈服しません——する訳がない」

「なっ……」

この手の輩は大嫌いだ。

「追手かと思い警戒していたが……全く。最近の天界には墮天していないにも関わらず力を悪用する者が出ていたとは聞いていたが、実際会ったのは初めてだな」

「貴様、一体」

「私の存在が忘れ去られているなら結構だ。また閉じ込められるのは御免被るからな」

瞬けば其処に居たのは四枚翼の天使。

「中下位、しかも真新しい。力に酔ったか、呆れ果てるな」

「そう言ってやるなよしい、若い奴にはよくあることだし。ま、最近は上も下も忙しいらしいし？ 管理が行き届いてねえんだよ、きっと」

「ッ何故ここにほかの生徒が！」

右手に触れる心地良い温もりは、確かめるまでもない。

「閉鎖空間にしい閉じ込めてイイコトしようってかセンパイ？ 弱っちい癖にバレバレなんだよ。アンタの聖気は」

長めの前髪から覗くのは金色に染まった瞳。

「その色——〈太陽の瞳〉だと？ だが……」

「残念、これってのは単純に聖気の量しか表さねえのよ天使クン。あたしは——」

軽く鳴る指と浮遊感。右手を握れば笑い声が漏れた。

「カミサマのとんだ間違いの被害者、しがない下級悪魔さ」

人を惑わす者らしく露出の高い黒に、同時に解放された衣から白マントを外し被せれば「しいってばイケメン！」なんて歓声が飛んできた。

「まさか、貴様等は」

「気付くの遅えよ天使クン。でもま、知っちゃったら帰すわけにはいかねえな」

「笑止！ 悪魔は人を惑わすのみ、天使であれば同族殺しは大罪だ！ 人界に堕ちてそんなことも忘れたか」

「誰がお前程度を手にかけるか、煩わしい」

「そーそー。つうか知らねえんだな」

平気だと言っているのに抱き寄せて景色を見せないようにする優しさが酷く愛しく、せめてと日奈の身体を抱き締める。

「アンタが勝手に灼けるだけだ」

聖気というモノは太陽に似ていると誰かは言った。どんなに強くともある程度離れてしまえば居心地の良さを与える。しかし、受け取る側が弱過ぎたり近づき過ぎたりしてしまえば、その熱は途端に牙を剥く。〈太陽の瞳〉が姿見ること叶わない上位神ばかりに与えられるのもその辺りが理由だろう。

そう、酷く簡単な問いだ。中下位というそこそこ程度のレベルの天使が、上位神すらも遥かに超える聖気に直面すればどうなるか。

ぎゅっと力の籠められた腕に振り返れば、そこはもう何の変哲もない校舎裏。天使は灰すらも残せず灼き尽くされ、それだけ確認してからもう一度右手を強く握った。

「日奈」

「……」

「日奈、大丈夫。日奈の聖気でも私は満たせない。灼けはしないよ、ね？」

「しづきい……」

「一人には絶対しない、約束したよね」

小さな頷きに抱き締めてやることしかできないけど。

「優し過ぎるよね、やっぱり君は」

「貴石」

ちょっと派手にやらかしたかな、と突如現れた青年が二人の肩を叩く。そこは既に三人で暮らすマンションの一室に変わり、まだ離れたがらない日奈を撫でながら、にこやかな彼を見上げた。

「ああいう輩はどうにかならないの貴石。貴方も神の端くれじゃない」

「んー、そうは言ってもね。僕は墮天済みだし、あんまり大っぴらに関わってられないのよね」

頼られたりはするけどねーと軽く肩を竦める彼が、日奈の聖気にも耐えられる程高位の神が何故墮天し、事情を知りながらも私達を保護したのか、私は知らない。まあ、日奈と一緒に居られるのならどうでもいいことなのだが。

ぐりぐり頭を肩に押し付ける彼女はそれでも大分落ち着いたのか、貴石は笑ってそちらを見た。「部屋に戻りなよ二人とも。晩御飯はまだだし。それに日奈さん、さっきので内臓の辺りやったでしょ。詩月さんに治してもらいなさいね」

日奈はちらりと目線を上げただけで答えはしなかったけれど、行こうと囁けばもう一度頭が擦りつけられた。

扉を閉めた途端溢れる感情にともすれば震えそうな手を押さえ、二人ベッドに腰掛けた。

「無理はしないで日奈。いくら聖気が宿っているとは言っても日奈の身体は悪魔なんだよ？」

「りょーかい詩月」

過ぎる力は自らも灼く。本来聖を苦手とする悪魔の身体には少しの間であろうともダメージは避けられない。皮膚の下の明らかな異常に顔を顰めると、うにり、頬が引っ張られた。

「しい、しーい。可愛い顔が台無しだぜ」

「ひにゃ？」

コツリ、額を合わせると強い瞳に見つめられて。金に染まらずともその光は、彼女の名の通り太陽のようで。

「んなに心配すんなよ。詩月の治癒術は三界一だぜ」

「そういうことじゃないでしょ！」

思わず睨んでも日奈は堪えた様子無く「そういうことなんだよ」と思いのほか真面目に返した。

「詩月の治癒術は三界一だ。んで、あたしがいる限り聖気切れは起きない。ほら、大丈夫じゃねえか」

「それは、そう、だけど」

「ね、詩月」

一度閉じた瞳が、再び開く。金色の太陽を宿して。

「詩月はあたしを一人にしないんだろ」

強過ぎる聖を宿した身故に、長い孤独を味わった悪魔は言う。

「あたしだって詩月を離してやんない。絶対、死なせやしない」

翼と聖性を剥奪され、消されかけた天使に誓うように。

○/◎

聖気を取り込み銀に変わってゆく瞳は、まるで月が満ちていく様を見るようだった。急激に軽くなる負荷に頭はくらくらしながらも、倒れこむ無様は見せないように。

『ねえ詩月。あたしの月』

太陽が無ければ月は輝けないように、月が無ければ太陽は独り寂しく焼け死ぬだけ……なんて。戯言言ってみても結局あたしが詩月を縛っていることには変わらない。この悪魔めと罵ったところで、詩月に必要とされているこの形が堪らなく嬉しくて仕方がないのだからどうしようもない。

「ほら、終わったよ」

「ん。サンキュー」

術の巡りが止まり緊張していた精神が解けてしまうと、自然ぐたりと詩月に凭れ掛かった。背に回された手が一瞬怯えたように震えるから、重たい腕を少しだけ持ち上げ抱き締める。

「馬鹿しい。この程度の聖気じゃ死にやしないよ」

「分かってる……」

不安定で心配性。人のことを言える身じゃないが、そうしてくれることは幸せに近い温かさをくれるから、言葉の代わりに肩へ埋まった頭に頬づった。

「日奈」

「なーに？」

「死なないでね」

「死なない。ずっと詩月の傍にいるから」

「約束だからね」

「約束する。絶対に」

臆気になる口調に背を優しく叩いてやって、灼けない程度に聖気を解放する。温もりに安心したように力が抜けるから、その耳に小さく囁いた。

「おやすみ詩月。良い夢を」

「んで、いつまで其処に居るつもりなんだ貴石」

「あららバレてた？」

寝顔を見せないように少しずらして、扉の先の彼を睨む。

「アンタのせいで無駄に気い張ちまって詩月に心配かけたじゃねえか」

「ええー。もう三年もこうしているんだし、そろそろ慣れてくれてもいいんじゃないの？ 偶には僕にも甘えてほしいんだよ、親心としてはさ」

「よく言うぜ。興味半分聖気の量狂わしたくせによ」

「だって知ってるだけじゃつまらないじゃない。中々嬉しいよ、君達が足掻く姿は。大丈夫、生

き方まで手出しはしないからね」

「そんなんされて堪るか」

全知全能でありながら三界を治めることに飽き、愉しみの為自ら墮天した神。全ての物事は彼の手の上で回り、自分達もまた彼の現在お気に入りの人形という立ち位置に過ぎない。

それでも、と唇を噛む。

「本当に優し過ぎるよね。君は、君達は」

「うるさい！」

「ああごめんね、詩月さんが起きちゃうか。それじゃあおやすみ日奈さん、楽しい夢を」

閉ざされた扉から気配が消えて、それからやっと詩月に視線を落とした。

「ごめん詩月。あたしがもっと大人で強かったら、あんな奴に頼んなくてもちゃんと守れたのに」

自らを創生した神からは逃げられない。宇宙の理を壊すことがどんな星にだって出来やしないように。それでも抗うと、詩月に出会った時に決めたから。

「この魂果てる時まで、絶対守るから」

おやすみ、せめて温かな毎日を。

革命の翌朝（高天美月）

革命の翌朝Revolutionary next morning

高天美月

私を乗せた一台のセダンは、夜が染み込んだ黄金の都市を、音もなく、まっすぐに走る。

満月の光を浴びて輝く数多の高層ビルたちは、あるものは崩れ、あるものは傾き、闇を滲ませる窓からは、幼い蝙蝠たちが賛美歌を唄いながら、夜空の星を獲得するために飛び立ってゆく。カー・ウィンドウの外を流れてゆく、一瞬の生命を終えた、また、これから始まろうとしている、その冷たい夜気の群れは、飴のように煌めく砂粒に彩られている。雲ひとつない漆黒の空では、赤や青、あるいは橙色の星たちが、地上の惨めな人間たちを見て、くすくすと笑っている。道路沿いの街路樹たちは、夜に身を委ね、その微かな手と、僅かな希望、そして、諦めの囁きと、ひと握りの溜息で、自分たちの末裔を、躰からそっと切り離してやるところ。

.....静かだ。

誰も、息をしていない。

何も、生きていない。

こんな世界が、この世に存在するなんて、もはや、奇跡的ではないか。

私は、^{くわ}啜えた煙草から滲み出る煙に目を細めながら、ゆらめく黄金の夜に口笛を贈る。ハンドルを握っている二つの白い手袋からは、真っ白の鳩が飛び出し、ファンファーレを送る観衆たちに、平和の勲章を配って回るので。

そんな中、子どもたちは首を傾げて大人たちに問う。

「平和って、そんなに大事なこと？」

その問いに大人たちは、知ったような顔で応える。

「そう、とても大事だ。大人になったら、いずれわかるよ」

バック・ミラーに映る、燃える赤を眺めながら、私はアクセルを踏み込んだ。

「煙草はちょっといただけないわね」

助手席に座っている女は言った。

「ああ.....、もしかして、煙草、お嫌いですか？」

そう言うとは私は、カー・ウィンドウを少し下げて、冷たい空気を入れた。そして、まだ長かった煙草を灰皿に押しつける。

「煙草って、できれば綺麗な空気で吸いたいじゃない？」

女は微笑みながら煙草を啜えると、金属製のライターで火を点けた。ゆっくりと私の方を向いて、息を吹きかける。

「思っても、言いませんよ、普通」私は小さく舌打ちをした。

「もしかして、お気に障りました？」女はくすりと笑う。

「車を降りていただこう、と真剣に考えました」

しかし女は、そう言った私の目を見つめながら、^{すすき}薄のような声で言う。「正直に言ってくださら

ない？」

私は女を見た。その瞳には、満月が二つ、妖しく光っている。まるで子どものように、無邪気な顔だ。

.....私は溜息交じりに応える。

「首を絞めて.....、殺そう、と思いました」

「そう.....、素敵だわ」助手席の麗しい女は、両手を絡ませながら、うっとりしたような声で言った。「是非、やってくださらないかしら。私、出来れば.....、そうやって死にたいのです。そういった、理不尽な死が.....、私は、欲しいのです。恋しい、とでも言うのでしょうか。この感情が、^{あなた}貴方に、理解出来ますか？」

「ええ.....、出来ます」

「私も、そう思います」女は言った。「貴方は、その手でいったい何人を殺したの？」

「まだ、誰も殺していませんよ」私は苦笑した。

「ということは、いつかは.....、殺すおつもりなのね？」女は微笑んだ。

「ええ.....、いつかは」私は応える。

女は煙を吐き出した。

潤んだ唇から洩れる吐息が赤紫色に彩られ、くすんだネオンが、ガラス越しに羨みの表情で見つめている。シートに背中を預けて、瞼を閉じている彼女。月光に透ける危険なボディ・ラインが、ひどく誘惑をそそる。

なめらかな肌。^{からす}白い脚。鴉のように黒い髪。写真に残しておきたいという月並みな気持ちでは、その躰は征服できない、と私は思った。

「そういえば、まだ.....、目的地を訊いていませんでしたね」

私は訊ねるが、視線は正面に向けられたまま。彼女に征服されてしまうことを、少なからず恐れている証拠だ。

「目的地」彼女は、目を瞑ったまま応えた。「そうね、夜が明けるまで.....、ずっと、私を、運んでくださらない？ 運転手さん」

「そうですね.....、私の希望としては、出来れば、どうか.....、こちらを向いて、^{おっしや}仰つてくれませんか？ お嬢さま」

私は努めて冷静な感じで言った。ビデオ・テープみたいに使い古された陳腐な言葉だな、と思いつつ。

すると彼女は、優雅な仕種で、啜えた煙草を手にとると、ゆっくりと躰を起こして、

「わがままな人」

眩き、

そのまま.....、

私の頬にキスをした。

そして、まるで蠟燭のようになめらかな二本の指で挟んだ煙草を、私の口に啜えさせ、私の耳元で彼女は囁く。

「どうか.....、お願いします、私の運転手さん」

しかし私は、凍ってしまったかのように、暫くの間何も言うことが出来ず、ただただ、アクセルを踏み続けることしか出来なかった。彼女の方を見ることも出来なかった。

「どうして……、^{あなた}貴女は、私の車を選んだんです？」

私はやっとのことでそう言った。十年が一気に過ぎ去ったような感触が唇に残る。

「他に車が見当たらなかったからです。いえ……、」彼女の口調は既に元に戻っていた。「他に生きている人が、いなかったからです」

「そこに、^{たまたま}偶々僕が現れたと……、そういうことですか？」

「偶々、ね……、貴方が、悪魔でない限りは、そうかもしれません」

「それ……、ちょっとひどい言い方ですね。僕、結構、そういうの、気にする方なんですよ」

「それとも……、もしかして、私が悪魔なのかも」彼女はきっと、冗談めかして言った。

しかし私は、「実際、そうかもしれない」と思い始めていた。私が応えないでいると、彼女は私の方を向いて、「貴方も充分、失礼な人ですよ」と言った。その仕種は最高にビューティだ、と私は密かに評価した。

「この街に人間がない、と貴女は言いましたけど……、それが何故だか、ご存知ですか？」私は話題を変える。

後方で、眩しい太陽がうっすら現れ始めていた。

「さあ……、何故なんでしょう？」彼女もその光に気がついた様子だ。ちらりとバック・ミラーを覗く。

「この街ではですね、今夜、いえ、もう昨夜ですか……」私は応えようとしたが、途中でその言葉を切った。「貴女、本当は、ご存知なんでしょう？ その服装を見れば……」

ちらりと視線を向けると、彼女は、まるで透けるように白いワンピース。その他には、裸足に白いサンダルを履いているだけ。少女のような軽やかさで。

「ええ……、知っています。何もかも……、あの朝日に……」

彼女は応えた。

しかし、ラジオのようなノイズにかき消されて、最期の言葉は、ほとんど聞き取ることが出来なかった。彼女は、窓から差し込む光に照らされながら、微笑んだ。

私は、煙草を灰皿で消した。

もはや、何の感情も残らないように、

何の生命も残さないように、

念入りに……。

日は、瞬く間に昇って来る。

骨の山と血の霧を、射るように突き刺しながら、夜を塗りつぶすほどに眩しく、鋭い白が、赤紫の^{もや}霧を照らし出す。

車は、音もなく世界の淵を走り続ける。

私はアクセルを踏み込んだ。

しかし、太陽はどこまでもやって来る。

私が気づいたときには、助手席の女は、いつの間にか、跡形もなく消えていた。

私に遺されたものは、

シート^の砂粒と、

煙草の吸殻と、

彼女の悩ましい微笑みだけ。

^{ひび}罅割れたバック・ミラーに反射する白が、血に濡れた私の心臓を映し出す。ハンドルを握る二つの手袋は冷たい風に飛ばされてゆく。アクセルを踏み込む脚も粉々に散ってゆく。

すべてが消えてゆく。

何もかもが……、

元通りの場所に帰ってゆく。

「何もかも、あの、朝日に、書かれているから……」

彼女が遺した、最後の言葉。

世界は、どんどん消えてゆく。

朝日に照らされながら、少しずつ、砕けてゆく。

そして、

私も……、

彼女と同じ場所に。

M氏の太陽（松本惇暉）

M氏の太陽

松本 惇暉

これは私の親友の、M氏から聞いた話である。

彼は著名な小説家である。ゆえに、一年に一回は取材旅行へ出かけなくてはならない。

彼はその取材旅行中に、奇妙で面白い経験をした。

それは彼に長編小説を一本書かせるほど、刺激的なものだったらしい。

私がこれから紡ぐ物語は、彼の小説の番外編のようなものだ。

是非、時間のあるかたは、M氏の作品と読み比べていたただきたい。

さて、前置きはこれくらいにして、そろそろ本題に入るとしよう。

*

時は八月某日。場所は新大阪行き『ひかり』の普通車指定席。

M氏は膝の上でノートパソコンを開いていた。ちょうど明後日締切の原稿があったからである。

帰省ラッシュのせいで、車内はほぼ満席だった。しかし、M氏の隣は空席だった。

どうせ新横浜あたりで乗り込んでくるだろう。M氏はそう考えていた。

案の定、新横浜で隣の席は埋まった。

しかし、座った客が今まで見たこともない人間だった。

M氏の隣に座った人物は、半袖のワイシャツにネクタイを締め、プレスの利いたズボンを履いていた。

典型的なサラリーマンスタイルの男性である。普通なら、記憶に残らない人物だ。

だが、問題はその男の顔にあった。

男の顔が太陽だった。

まぶしくて、太陽を直視できないというのは、誰も知っていることだろう。

もちろん、M氏も例外ではない。強烈な日差しにあてられて、咄嗟に目を閉じてしまった。

彼のそのしぐさを見ていたのか、太陽はいきなりM氏に話しかけてきた。

「すみません。私の顔、まぶしいですか？」

まるで日本語の下手くそな外国人のような話し方だった、というのは当のM氏の弁である。

彼は黙って肯いた。文句を言うにしても、適当なセリフが思いつかなかったらしい。

太陽は悲しそうな声を出した。

「ああ、私はいつもやっかい者だ……」

そして、なんとか目を開けようと努力しているM氏に向かって、こんなことを言った。

「なにかお詫びをしなくては……そうだ！ あなたが今一番行きたいところへ、連れて行ってあげましょう」

彼は馬鹿馬鹿しいと思いつつも、心の底では、これは面白いことになったと考えていた。

だから、なるべく突拍子もない答えをしよう、という意識が生まれた。結果、M氏の出した答えは、ろくでもないものだった。

月に行きたい。

彼はふざけてそう答えた。

太陽はおもむろにM氏の手をつかんで、念仏のようなものを唱え出した。

それを聞いていると、彼の意識はじよじよに遠のいていった。

その呪文は、子守唄のように心地のよいものだった。

彼は気がつくやうに、月面にいた。まわりは歪な形の岩石が転がっており、頭上には青い地球があった。

M氏はなにを思ったのか、地球に向かって走り出した。いつの間にか、彼の身体は宇宙空間へ飛び出していた。

彼は星々の間を飛翔した。

彼は運よく地球にたどり着き、大気圏へ突入した。M氏の身体は激しく燃えた。

そのとき、彼は自分が太陽になった、と思った。

その瞬間、彼は燃え尽きて、小さな塵になった。

*

以上がM氏の体験したことである。

彼がどうやって塵から人間の姿に戻ったのか、私は知らない。

彼はその点について語ってくれなかった。ただ、ニヤニヤ笑うばかりだった。

私はこの話を他の友人たちにしたところ、意外な反応が返ってきた。

何人かが、自分も太陽に会ったと言い出したのである。

それを聞いて、私も是非太陽に遭遇したいと思っているのだが——いまだに実現していない。

もし、この掌編を読んでいるかたの中に、太陽に会った人がいたならば——それは類なき幸運というものだろう。

〈終〉

付記

めでたくM氏の小説のタイトルが決定した。私はなかなか良いタイトルだと思う。

『炎帝』

あとがき

例大祭で買ったすべてのCDに、感謝。

谷崎潤一郎と、W・P・ブラッティに感謝。

一般作品

十億の良心 (古井 龍)

十億の良心

古井 龍

I

「君を社長に任命したい」

……………えっ？

社長室にあっけらかんとした声が響く。

徳川正義（とくがわまさよし）はしがない一サラリーマンだった。

残業がようやく終わり、クタクタになっているところを上司に呼び出された。

ここの社長は部下に対して何の配慮も、思いやりもないと評判だった。『社員は家族です！』なんてこの前テレビのインタビューに答えていたが、奴隷同然の扱いをしている。

正義自身もこの社長からは悪い印象しかなかった。

「いやあ、私もこんな老いぼれてしまっていては、会社を把握、管理していくことは難しくなってきたねえ、是非、君に頼みたいのだよ」

「お、お言葉ですが……なぜ私を。もっと適任がいるのでは？」

「いやいや、君以外適任はいないと私は考えているのだよ。君は若い営業の才能もあるし、肩書きだってすごいじゃないか。若手の中で君が営業成績トップだろ。それに、今の中堅や老獪な層を会社を任せたくはないんだよ。君もこの会社の空気が分かるだろ。淀んだ空気が。古い体裁や伝統も残っている。私を変えようとも思ったんだが、どうもうまくいなくてね。もちろん全てを否定したいわけじゃない。いいところもある。ただ、今の我が社に求められているのは変革なのだよ。次から次へと新しいモノが出てきているこの時代で、古い考えに囚われない人間を、次にここを任ようと前々から思っていたんだ」

「は、はあそうですか」

「そう！ 君ならできるさ。期待しているよ」

初めは信じられなかった。まさかこの俺が社長だなんて。

でも嬉しかった。

面倒な仕事だけ押し付けて、言いたいことだけ言って、自分は何もしない上司を今度は俺が命令できる。

いつも業績を争っていた同僚とも、これでピリピリしなくて済む。

社員一人一人を大切に、それこそ家族のような関係を作り上げていきたい。

暖かく、居心地の良い会社にしたい。

期待と希望と夢で胸を膨らませ、ワクワクしていた。

そう、初めは……。

II

「社長、大量の書類が届いていますよ」

依然の上司が今は秘書となり、正義の部下になっている。

なんだろう。辞書並に厚い。

「ありがとう。今日はもう帰っていいぞ」

「はい。失礼します」

秘書の高橋は、わずかばかり口角を上げて帰っていった。

誰もいなくなった会社で一仕事終え、帰ろうとしたとき、辞書のように厚い例の封筒を開いた。

「なんだ……これは」

正義は現実を認識できなかった。自分が今どこに居て、何をして、何を考えているのか、認識することができなかった。

白一色の世界が、限りなく広がっていた。

分厚い辞書のような封筒を開けると、大量の債務、借金催促の書類が溢れだしてきた。

……なぜだ。俺が社長に就任してから数年、今まで経営状態は良好だったし、内部留保といった資産は少なからずあったはずだ。

それがほとんど消えている。

——倒産。

嫌な単語が頭を過り、冷たい汗が頬を伝う。

嘘だ。こんなはずじゃない。何かがおかしい。

だれがこんなことを予想できたって言うんだ。

誰が？

機を狙ったかのようなこの莫大な債務。急遽変わった人事。

会社の資産を自由に操れる人物。

———操れた人物。

すべてを、否、その一片を理解した瞬間から記憶が途切れた。

記憶は、思いだそうとする記憶を、頭が必死にそれを押さえつけていた。

「……はい。期日までには。はい。必ず……。いえ、そんなことを考えておりません……。はい。はい。失礼します」

正義（まさよし）は小さなアパートの一室で苦悩と苦悶と苦痛を、何よりも絶望感を味わっていた。

自然と頭（こうべ）は垂れ、身体は小さく縮こまってしまう。

高級アパートに住んでいた正義は、今は一転してボロアパートで暮らしている。

学生時代もこんなボロアパートに住んでいたな。

大学生活を思い出す。

あの頃は苦労を共にする仲間もいたし、自分に好意を持ってくれた恋人もいた。何よりも充実した楽しい日々だった。

しかし、今は何も、ない。

面白いことも、楽しいことも、遠い過去のように思える。

最後に笑ったのはいつ頃だろうか。会社が倒産した日かな。

はは。

無理に笑ってみせるが、凝り固まった表情筋は動かない。

頭の中にあるのは金、金、金。

金がいつも頭の中を飛び回っている。

明かりを求めて、蛍光灯に群がる虫のように。

その羽音が、響きが、存在が煩（わずら）しくてしょうがない。

正義は丸い小さな机に目をやる。

契約書や債務、借金の催促など、金融関係の紙が山のように積み上げられている。三百六十度、どこから見渡しても金という文字は目に入ってくる。

……はあ。正義は生気のない息を吐いた後、顔を俯けながらも山の一部を抜き取った。
……これは先月分の借金……これは今月の支払利息……その他は………もういいや。
十億。

積もりに積もった借金は十億近くの金額に膨れ上がった。

当初なんとかして、社員の給料を守り、会社を立て直そうと、様々な金融機関に頼り、そしてついに、正義は裏の金にまで手を出してしまった。正義を貶めた当の人物も、今は行方知れず。結果、違法な金の貸し借りや悪徳の企業家に騙されてしまい、法律では救済することができなくなってしまった。

とどのつまり、果てしない地獄。

紙を捲る手がすぐに重くなり、文字を眺めるだけの作業になっていった。

それでも、紙面には負の遺産しか目には入らない。

………金……死亡……入金……ん？ ああ、生命保険の類か何かかな。

正義は窓越しに外を見る。

アパートの二階からは、真っ赤な夕日が刻一刻と沈み始めていた。

ここからじゃ無理だな。

気がつくとうしたら楽に、どうしたら苦痛を感じないですむかを考えることがある。

正義はその書類にサインした。

どうせ人間はいつか終わりが来るんだ。それが少し早くなっただけだ。どうせ、もう詰んでいる。逃げ道も進む道もない。今の人生何も楽しくない。何も面白くない。全てきれいさっぱり忘れて消えよう。

明日はせめて、良い天気だといいな。

そんなことを考えながら床に就いた。

II

どうしてこうなった。

「今日は久々にパーッとやろうぜえ！」

黒い角と黒い尻尾、赤い翼をはためかせた少年が、正義の右肩付近を浮遊していた。

「さあ、何に金を使う！ ギャンブルか？ 酒か？ 女か？ 派手にやろうぜえ！」

なぜだ。何でこうなった。

朝起きると、少年が目の前で浮いていた。

場違いという意味もあるが、今回はそっちではない。

黒い角、黒い尻尾、赤い翼。子どもくらい背丈。

……迷子か？

「契約により、参上つかまつったぜえ。主よお」

……夢か。寝よう。

「おいおいおい、お前自分が何をしたか分かってねえのか？ こいつをよく見な」

よく分からない子どもが、一枚の紙切れを突き出してきた。

いぶかりながら目を擦ってそれを読む。

契約書

悪魔（以下甲という）と契約者（以下乙という）は次の通りに契約をする。

第一条 乙は甲との交渉により、甲が提示する加護を受けることができる。

第二条 乙、または甲が交渉の対価を支払った場合、その片方は交渉条件に提示した内容を必ず執行しなければならない。

第三条 乙と甲および、お互いの世界には直接干渉することはできない。

第四条 この契約および一度受諾した交渉を途中で破棄することはできない。

第五条 上記の契約に基づき、乙は甲を召喚する。

———徳川正義

……なんだこの胡散臭(うさんくさ)い契約書は。

子どもが書いたのか？ いや子どもだけど。

「うん？ まだ分かってねえみてえだな。しょうがねえ。初回限定サービスだ」

パチン。少年が親指と中指を擦り合わせた。

ドサッ。足元に金が降って来た。

「おおお！」

金だ。虚空から金が出現した。

すごい。百万近くあるぞ。

「カカカ。人間は金に素直だなあ。つーわけで、契約を開始する。俺の名はアドラ。よろしく頼むぜ？」

「あ、ああ、よろしく頼む」

「クク……了承したな」

アドラと名のつた少年は鋭く尖った尻尾を使い、自分の指の腹を切り、正義の指の腹も切った。

契約書の上に落ちた血は、マーブリングのように赤い血と黒い血が綺麗に混ざり合っていた。

「さあさあ！ シャバで金を何に使うんだあ」

変声期を経ていない独特の高い声が、正義の耳元で独唱する。

せっかくまとまった金が入ったから、たまには美味しいものを食べようと外に出てみたらこの様だ。

しかし、行き交う人々に聞こえそうな大声を出しているが、誰もその声に、その存在に反応しない。

「言っとくが、俺はお前ら人間と直接干渉することはできない。それはお前らも同じだ。契約の第三条を覚えているだろう？ あと契約した人間しか俺は見えない。つまり俺がいくら大騒ぎしたところで、お前しか聞こえないし見えないっつーことだ！」

キャハハハ。

耳を劈くような笑い声は、近くにいた女子高生には届かなかった。

正義は後悔の念に再び苛まれた。

勢いでなんだか知らない契約をしてしまったが、大丈夫だろうか。だが、百万円近くの金を得られたのも事実だ。

正義はあまり人が通らない、路地裏などを歩いた。

外を出るにしても、もしも顔が厳ついあの人たちと鉢合わせになったら、どうなるか分かったもんじゃない。

とはいえ住所はバレているし、向こうもそんな甘くはないからだろうから、焼け石に水程度の効果だ。

——それにしても暑いな。

今年の夏は夕暮れになっても暑さは長いていた。

正義はふと自動販売機に目をやる。

一瞬目をそらしたが、厚くなった財布を思い出した。

「なんだよ。缶コーヒーかよ。しけてんなあ」

アドラの悪態をよそに、つめた〜いのボタンを押す。

良く冷えたコーヒーは、身体と心を和やかに癒してくれた。

今日は何を食べようかな。

「……………あ」

飲食店を見ながら歩いていたら、もう全部飲んでしまった。ゴミ箱は……見当たらないな。

しょうがない。家まで持ってかえ——

「なあ交渉しねえか？」

不意にニンフが正義の顔を覗き込んだ。

『環境美化という良心に背き、その良心を俺に差し出せ。空き缶を道端に捨てろ。対価は十万くれてやる』

低く、深く、重音なその声は、耳を介して聞こえる言葉ではなく、もっと深い何かに語りかけてきた。

「どういうことだ」

「道端にゴミを捨ててはいけないという良心に背けば、その行動分の金をお前にやろうって言ってんだよ。その代わりに、お前が背いた分の良心をいただく」

「良心？」

「契約の第一条。乙は甲との交渉が成立すれば、甲の加護を受けることができる。説明不要だが乙はお前で、甲は俺のことだ。俺との交渉に応じれば、それ相応の加護をお前に受けさせてやるってことだよ。もちろん加護はお前らが大好きな金だ」

正義は口をあんぐりと開け、額に皺をよせた。

「俺の言う交渉とは、お前が良心に背き、俺にその良心を差し出す。代わりに俺がお前に加護を、つまり金を差し出すってことだ。まあつまり、ポイ捨てすれば金をくれてやるって話だよ」

「……本当か？」

「本当だ。サタンに誓って本当だ」

それは信じられるのか。だが、缶コーヒを捨てるだけで十万も手に入るっていうなら——。

飲食街だが、今はちょうど人がいなかった。

正義は飲み干した缶コーヒーを見つめる。

正義は、五指をゆっくりと開いた。

カランコロン。

誰もいないアスファルトの上に、乾いた音が響く。

「対価の支払いを確認。先にいただくぜ」

アドラは大きく口を縦に開け、外気を吸い込んだ。

————フツ。

瞬間、身体の奥底から、何かを引き抜かれた感じがした。

よく見ると、胸から淡い光を帯びた靄（もや）のようなものが、大きく開けられたニンフの口に一直線で吸込まれていった。

ゴクン。

「うーん。まあこんなものか」

「お前……何をした」

「あん？だから対価を喰ったんだよ」

アドラは胸にトントンと指差す。

『心を』

「こ、心！？」

「厳密に言うと、お前が捨てた良心分を喰ったんだがな。でも、お前は心配しなくていい。心はいくら喰ったって、減るモンでも無くなるモンでもない。日常生活には何ら問題はねえぞ。空気はいくら吸ったて、なくならないだろ。それと一緒に。それじゃあこちらもお前の対価を払おう」

ニンフはまたパチンと指を鳴らした。

「ほら、少々割高だが受け取りな」

正義のポケットには、数十枚の札束が仕込まれていた。

すかさず手に取る。……これは。

手触り、質感、日本札独自の絵の構造、さっき虚空から降ってきた金もそうだが、それらから察すると多分本物だろう。

「あと、その金は俺が本物を作り出したわけじゃないからな」

「えっ。ならこの金は」

アドラは純粋なほどキレイな悪意を込め、笑顔で言った。

「他人の金だ」

「他人の……金」

「そうだ。これからお前にくれてやる金は全て、赤の他人の者だ。日々生きるのに必死なお前みたいな奴から取るときもあれば、一生遊んで何不自由な暮らせるような大富豪まで、様々な人間から頂いている。その割合もすべてランダムにだ。今朝お前にくれた百万円は貧乏人百人から一人一万円ずつもらったかもしれないし、金持ち一人から百万円もらったかもしれないし、その逆かもしれない。だが、お前は何も心配しなくていい。お前は今日一日を生きるのに必死だ。なら少しくらい、周りの人間から貰ったってかまわない。そうだろう？」

正義は言葉に詰まった。

他人の金を貰って……奪って。

「そ、……そうだよな」

「そうさ。その場合だってあり得る。たかが十万円だ。気にすることはない。それよりも借金を返さないと大変なんだろう？」

そうだ。こんな生活もう嫌だ。

銀行のみならず、裏の世界の金にまで手を出してまった。

金のみならず、人までも恐怖と化して正義を襲っている。

今更、四の五の言ってはいられない。

正義は十万円を静かに財布の中に閉まった。

食欲はとっくに失せていた。

II

正義は白いシャツ着て外に出た。

倒産した会社の大量の不良在庫を売って、少しでも生活費の足しにするためだった。

「どうでしょうか。一つだけでもいいので」

「あ、結構です」

ボタン。

炎天下に晒された身体に、涼しげな風が一瞬身体を包む。

しかし、内までは気持ち良くなるらない。

むしろ余計に暑く、重苦しくなった。

「今日もこれで五件連続で断られたなあ。どこまで連敗記録が伸びるか見ものだけ」

近くの公園のベンチで汗を拭く。

「うるさい。ほっといてくれ」

「そうかい。そうかい。これりやあ失礼。外回りご苦労さんです。ギャハハハハ！」

人の神経を逆なでするような、いかにも耳障りな笑い声が聞こえた。

「あの～すみません」

「なんだよ！いちいち――」

顔を上げると、若い女性が身構えた。

「あ、ああ、すみません」

「い、いえ、こちらこそすみません。ちょっと道をお尋ねしようと思ったのですが、ごめんなさい」
アドラが横でニヤニヤと笑っていた。

「いえ、いきなり声を上げてしまいすみません。えっと、どこに行きたいのですか」

「あ、はい。スイーツヘブンというお店なんですけど、そこで友達と待ち合わせしてまして」
スイーツヘブンか。確か駅前に新しくできた店だな。

パフェの看板がどんと構えあり、やけに目立っていたのを思い出した。

「ああそこなら、この道を――」

『なあ、交渉しないかあ？』

アドラが正義の顔のすぐ横で語りかけて来た。

『道を教えて上げるという良心を差し出せ。目的地とは逆の道を教えろ』

「何言ってやが――」

「はい？」

「あ、ええとこの道をですわね――」

『対価は五十万』

不意に、目的地へと指し伸ばした指が止まった。

『楽でいいよなあ。簡単だよなあ。道を教えるだけで大金入ってくるんだもんなあ』
……五十万。

今日、何回も断られたセールスが、道を教えるという動作だけですべてキャラにできる。

正義の脳裏に巨額の実態のない数字がよぎる。

あまにも重たく、精神と肉体にのしかかる。

目の前の若い女性は、正義が指した方角を熱心に見ていた。

…………正義は目を閉じ、奥歯を噛みしめた。

「こっちの道はうねうねしていて複雑だから、あっちの道を真っ直ぐ下って行くといいですよ。その先の交差点を右に曲がれば――、遠くからでも看板が目に入るの、あとは分かるはずですよ」

「そうですか。ありがとうございます！ これで友達の待ち合わせの時間に間に合いそうです」

若い女性はお辞儀をし、公園の外に出てまた頭一礼した。

「対価の支払いを確認。いただくぜ」

アドラは大きく口を縦に開け、外気を吸い込んだ。

また、身体の奥底から何かを引き抜かれた感じがした。

胸から淡い光を帯びた靄のようなものが、大きく開けられたニンフの口に一直線で吸込まれていく。

しかし、今度は白い靄の量が前とは違い、より大きな靄になって吸い込まれていった。

ドクン――――。

その時、身体が軽くなったような気がした。

いや――――違う。

空虚になったんだ。

ゴクン。

「ククク。美味しいなあお前の良心。知ってるか？ 純粹かつもがき苦しんだその良心は、いつもよりスパイスが効いて美味になるんだ。刺激的なほどにな。ククク……。それじゃあこちらもお支払おう」

アバンはパチンと指を鳴らした。

錆びついたベンチの上に、数十枚の札束が積み重なっていた。

正義はまたそれから動かなかった。

心が無性に寂しく、虚ろになったのは、あの一瞬だけだったが、なぜか身体はやるせなく、動けなかった。錆びついたベンチにただ頭を垂れて、真夏の暑い日差しをもらに身体全体に浴びていた。

やがて、いつまでも浴びせられる熱線に嫌気がさし、金を乱雑にバックにしまって立ち上がった。

公園を出た後、自販機で冷たいお茶を買った。

味は感じない。

昨日のコーヒーとは打って変わって、まるで美味しくなかった。

しかし、この真夏の外を歩くならば、味があろうとなかろうと、水分だけは取らなければならない。

そう思いながら角を曲がった。

——ゆらりゆらり。

何かが道路でゆらめいていた。

よく見ると老人がおぼつかない足取りで歩いている。

まるでそよ風に吹かれるロウソクの灯のように、ゆっくりと右へ左へと身体を傾けている。

大丈夫かな。あのおじいさん。

近くまで行くと、足元がおぼつかないのが良く分かった。

禿げかけている白髪のはらは、大粒の滴で一杯だった。

「大丈夫で——」

『なあ交渉しないかあ？』

アドラが語りかけて来る。

『老人を労わるという良心を差し出せ。関わるな』

ふざけるな。

「大丈夫——」

『対価は三百万だ』

ビタッ。

肩に置こうとした手が、先程誤った道を教えた時と同様に空中で停止した。

三百万……。

普通に働いていたら一年近くはするだろうその額。

それが、この手を老人の肩に手を置くか否かで分かれる。

老人は正義の存在に気づいていない。

不安定な足取りで。

今にも倒れそうな足取りで。

正義は下を向き、顔全体に皺(しわ)を作った。

正義は幼い頃から、名前通り正しい行いをする子どもだった。

悪いことが嫌いで、良いことをするのが好きだった。

いっ子ぶっていると周りから言われていた。

そのせいでクラスメイトとよくぶつかったり、いじめられたこともあったが、自分は悪くないと信じていた。

人を助けて、人にやさしくすることで、自分も幸せになれた。

なのに、今は……。

さんさんと照りつける太陽の下、一人の男が顔を下に向け、手を差し伸べたまま動かなかった。

顔を上げることができない。声を出すこともできない。

ただの自分の都合で、不運で、エゴで助けることができない。

他人の不幸より、自分の幸運を優先してしまう。

手を伸ばせば届くはずだった老人の肩は、今は踏み出さないと届かない。

助けてよ。声を出せよ。踏み出せよ。今なら、まだ！

遠い、遠すぎる一歩、足が、あまりにも重たい。

—————ごめんなさい。

さめざめと、嗚咽をまじえながら、正義はゆっくり……………身体の向きを反転させた。

「対価の支払いを確認。いただくぜ」

アドラが口を大きく開ける。

なぜだろう。心が引き抜かれるたびに、心が空虚になるのに、それを望んでしまう自分がある。思考が止まり、一時、感情が全て無になるのに、それでもいいと思ってしまう自分がある。

「ククク……ハハハ……うまい。うまいぞ！ さすがにこの良心はうまい。よかったなあ。三百万だぞ。そうそう手に入らない金額だぞ！よろこべよ。カカカカ。そらよ！」

アドラは止まらない笑いを押さえずに右手の指を弾いた。

ガサッ。

鞆が急に、少し重くなった。

「ハハハ……。その様子じゃあ直接渡しても手に持てないだろうから、直接鞆の中に入れといたぜ。俺なりの良心をな」

再び、高らかに、天を劈(つんぎ)く笑い声。

しかし、アバンのその笑い声は、正義の耳には入らなかった。

ただ遠くの方で、水を吸ったスポンジが、地面に叩きつけられたかのような、そんな、そんな静かな音が聞こえた。

IV

本当は殺せばよかったのだろうか。

経営悪化が判明した日、すぐに社員を切り、会社を潰し、自分が受けるリスクを最小限までに引き下げておけば、こんなことにはならなかったのだろうか。

今はもう引き返せない。

正義は普段行かない土手沿いを歩いた。

じっとしていると、嫌なことしか考えない。

なるべく外に出ようとした。

しかし、それでも無意識に思考は動き出す。

善とは何か、悪とは何か。

良い事をすれば、良い見返りがくるなんて本当だろうか。

もし、悪いことをして良い見返りがくれば、人々は悪事の限りを尽くすのだろうか。

悪いこととはなんだろう。

人を殺すことは悪いことです。でも、それが何百人もの命を奪った殺人鬼だったら？自分を殺そうしてきたら？

……ああもうやめよう。最近は変なことばかり考えてしまう。

思考をリセットしよう。もう過去は忘れよう。

天をあおぎ、目を瞑る。

その時、空気を引き裂く爆音が鼓膜を叩いた。

グラッと身体が揺れた。

辺りを見渡す。何が起こった。

音の方向へ近づくと、そこには黒煙と白煙が立ち上り、道路からはみ出したへしゃげた車が、ガードレールに突き刺さっていた。

運転手はエアバックに顔を埋めて動かない。

—————その時、目を見開いた。

車とガードレールに挟まっている人間がいた。

「さ……幸！」

恋人の福原幸が車とガードレールに挟まれていた。

恋人といっても元恋人であり、正義の会社が倒産した時、正義から一方的にふったのだが、今でも好きだった

。

彼女は、『お金であなたを好きになったんじゃない。あなたの心に引かれたのよ！』と言ってくれた。

しかし、その時正義は彼女を抱きしめられるだけの資格はないと、一方的に別れを告げた。

走った。

ひたすらに走った。息をするのも忘れるくらい、筋肉が悲鳴を上げるくらい、全身全霊を持って走った。

あと数十メートル。数十歩……。

『なあ交渉しないかあ？』

アドラが語りかけて来た。

『ケガ人を助けたいという良心を差し出せ。見捨てろ。対価は一千万だ』

聞こえない。正義は聴覚を放棄した。ただ走った。

『これじゃだめか。なら一億』

聞こえない。正義は走った。

『そうか……。なら十億くれてやる』

聞こえない。そのはずだった

走っている。そのはずだった。

手を伸ばす。そのはずだった。

なのに、何で、どうして、身体が動かないんだ……。

この手は、この足は、この心は、せめて、愛する人のためだけでいいから……動いてくれよ！

「さあ、お前のその良心、いやその反応から愛ってやつか？ 愛を捨てろ。そうすれば、お前は自由の身だぞ」

「……………ふ、ふざけるな。何が……何が良心だ！ 人間は、そんなレベルの話で動いてるわけじゃねえんだよ！」

「だが、これを見過ごせば、全て、何もかも消えて本当の自由を手にすることができるんだぞ？」

気が付けば、足は止まっていた。

耳も聞こえていた。

あと数メートル。数歩で彼女に届く。

足を前に——。

「おい、何やってる？ このままだと一生、地獄をさまようことになるんだぞ。今、ここから手を引けば、その瞬間にも地獄から解放されるんだぞ」

動けない。おじいさんと同じだった。

目の前の恋人は、血を流し、だらりと腕と身体を垂らしている。

動いてくれ。なあ動いてくれよ……。

正義の足は痙攣し、指し伸ばした手もぶるぶると震える。

このままじゃ……。このままじゃ……。

「このままじゃ、一生金に追いかけて回される。言っとくが、俺とお前との契約日数はもう残りわずかしかない。大金を手に入れるチャンスはこれが最後だになるだろう」

悪魔が、囁いた。

金が欲しかった。

もう、生きた心地のしない生活はしたくなかった。

苦しかった。辛かった。悲しかった。

終わらない悪夢をずっと見続けた。

……………生きたい……。ただ生きたかった。

気がついたら、正義の視界にはへしゃげた車も、恋人もいなかった。夢だった。悪夢だった。

「まさ……くん……？」

身体が一瞬、硬直した。

「まさ……くんなの……？」

声が後ろから聞こえる。

首より下は、聴覚を持たない。だから前に歩いた。

機械油のような涙を流しながら、ロボットのように。

それから後ろから声は聞こえなかった。聞こえたような気もするし、聞こえなかったような気もする。

「対価の支払いを確認。いただくか」

引き抜かれた心は辺りを照らすほど眩しく、また靄は辺りを見えなくなるくらい、いままでとは比べものにならないくらいに量と質を醸（かも）し出していた。心はますます一枚の羽毛のように軽くなった。

「……………美味い！格別かつ中毒的な美味さだ！ククク、ハハハ……。最高だよ。これが『愛』の味ってやつか！ たまらねえなあ。ハハハ……ハハハハハ」

アドラは身を振（よじ）りながら、息ができないうらいに笑っていた。

「————うるせえ。お前が全て仕組んだんだろ」

「ハハハハ————あん？」

「お前が全てこれまでの事を起こし、俺の身体や思考の自由を奪ったんだろ！」

「フフフ。なあに言い出さずかと思えば、つまらんことを……。おい、この一連の出来事は全てお前が望んで起こしたことだぞ」

「な、何を……そんな訳ねえだろ！」

「前にも、契約書にも書いてあるが、俺はお前らとこの世界直接干渉することはできない。トリガーなだけだ。お前という存在が運命的に引き起こしているにすぎない。身体、思考の自由を奪ってる？フフフ。何呑気なことってやがる。これはすべてお前自身が考えて導いた結果だ」

「違う。違う違う違う！嘘だ。そんなこと俺は望んで——」

「そうか、なら金はいらねえのか」

正義はハッとアドラを振り返る。

「ククク……。安心しろ。金は払うさ」

アドラは指をパチンと鳴らした。

「十億は重いだろから、お前の部屋に送っといたぞ。望んでいたから、この結果を招いたんだらうが。金を欲しいと望んだから、人を見捨てることも望んだんだらう。人を見捨てることを望んだんだらう、俺との交渉に応じたんだらう。お互いに良いパートナーを持ったなあ！」

ヒヤハハハハ……………。

激しい憤りと、深い怒りが体中を回る。だが、もっと許せないのが、心がどこかそれを認めている。それが許せなかった。

V

あらから一週間たち、アドラからあと二日、三日の契約期限だと言われた。

もう何の為に生きているか分からなかった。

厳つい顔をした連中は、また俺をゆすりにこようと来たが、借りている分の金を差し出したら、面を喰らっていた。金融機関にも金を出したら、まさかという顔をした。ボロアパートの大家もそんな反応をしていた。

全ての借金を支払って、正義は街の外をただ歩いていた。

もう何も理解しなくなかった。

途中何度か人にぶつかったりしたが、もう何も感じられなくなった。ただ、歩いて歩いて全て忘れたかった。

————ここは。

無意識に歩いているつもりだったが、いつものクセで人通りのない裏路地に来てしまった。

「分かった。金は出す。だから見逃してくれ！」

「うるせえ。ささっと出せ！」

何か異様な雰囲気、裏路地から発せられていた。

「わわ、分かった。これでいいだろう。もう消えてく——」この声、どこかで……。

ドサッ。

鈍い音の後、水っぽい音がした。

現場から若い男が出て来たあと、正義はすぐそこに入った。

やっぱり、こいつは—————。

裏路地には腹から血を流し、倒れている中年の人間がいた。

「—————社長」

辺りには財布、バック、パスポート、ガイドブック、旅行用品、そして血がべったりついた刃物が散乱していた。

「おやあ知り合いかあ。そうかそうか、ククク。お前は運がいいなあ」

アドラが興味津々に近づいてきた。

『なあ交渉しねえか』

アドラは笑う。

『命を助けるという良心を差し出せ。————そいつを殺せ。対価は前と同じく十億くれてやろう』

「十億あれば、人生やり直せるぞお。よかったなあ。これで借金地獄から億万長者だ！　すげえな。フフフ。

さあ、お前の良心味あわせてくれよお！」

味？　そうか、それなら……………。正義の呼吸は荒くなり、目は獣を狙う猛獣のように見開いていた。

「社長。あなたが会社の資金を全て奪っていったんですか」

「き、君は……徳川君か……す、すまない。……あの時どうしようも……なかったんだ。そうだ。助けてくれたら、お礼に資金の半分をやろう。……君も、今金に……困っているだろう」

「そうですね。金には困っていますね」

「だ、だろ……。なら、今すぐきゅうきゅ————」

「今すぐあなたを殺しましょう」

グチャッ。生暖かいシャワーを浴びたみたいだった。

「ククク。対価の支払いを確認。いただくぜえ」

「なあ、アドラ」

「あーん。ああ？」

口を大きく開けたまま、子どもが欲しいおもちゃをねだるように、催促した顔で聞き返した。

「ありがとな」

ゾワッ。

その時、アドラが初めて恐れという感情を抱いた。

アドラはすぐ、正義から心を吸い取り始めた。

白い靄が光り輝いていた。眩しすぎるくらいに。

「——ウ……ナッ、グッ……。ガアア……ナ、ンダコレハ。……ヤケル。カラガ……ヤゲル！」

言葉にならない叫びが空気を震わすほど響くが、誰もその声は届かなかった。契約者である正義以外は。

「お前は言ったな。純粹かつもがき苦しんだ良心は、いつもよりスパイスが効いて刺激的なほど美味いって」

アドラは七転八倒した。

「お前が今、喰ってる良心にこめた感情は———復讐心、怨恨、そして殺意だ」

アドラは口を閉じるが、契約により、とめどめない正義からの良心が歯をすり抜けて、直接アドラの胃袋に入る。

「良心とは、様々な感情が混じっている。お前らにとって、それが美味と感じるものは、悲哀や憐み、同情といった感情が混ざったもんがそれに当たるだろう。なら、憤怒の感情を入れ、みせかけの良心ならどんな味になるか。そしてそれだけじゃない」

アドラ身体は紅蓮の炎に包まれ、もがいてもがき狂った。

正義は包丁を心に刺した。

「痛みという良心もくれてやる」

アドラと正義から大量の血が噴き出した。

正義は包丁をさらに深く刺した。

「今までありがとう。もう一緒に死のうか」

ごめんな幸。おじいさんすみませんでした。お姉さんもすみません。今から償いに行きます。そしてアドラ、ありがとう。死んだ顔で、死んだ目で、正義は笑っていた。

メロディ・トリップ（鈴野拓海）

メロディ・トリップ

鈴野 拓海

「あ～、楽しかった～！ やっぱライブはいいよね～！」

帰宅途中、ハイテンションで騒ぐのは、ギター担当のラウム。

「うるさいですよ、ラウム。あまり騒がないで下さい」

顔をしかめてそう言ったのは、ベース担当のセーレ。

「そんなに怒らないであげなよ。ラウムの気持ちはボクにも分かるし」

常に笑みを絶やさずに話すのは、ドラム担当のシトリー。

「やっぱそうだよな！ オリアスもそう思うでしょ？」

「あ～、はいはい。とりあえずとつとと帰るぞ」

そして、彼らのまとめ役になっているのが、ボーカル担当のオリアス。

四人は幼馴染であり、同じバンドのメンバーだ。一年ほど前にバンドを結成し、それからずっとライブを続けている。

「で、今日はこれからどうするんだよ？」

「え、オレの家の片づけするから手伝ってって言ったじゃん！」

「あれ、そうだっけ？ 記憶にないなあ」

「ちょ、冗談でしょ？」

「確かに、そんなことを言われたような気もしますが……どうだったでしょう」

「言ったから！ 昨日もちゃんと言ったから！」

三十分後、結局四人はしっかりラウムの家で片づけをしていた。あまりの散らかりように、ラウムは他の三人から制裁を食らう羽目になったが。

一段落した頃、クローゼットを整理していたシトリーが、思い出したように言った。

「そういえばラウム、オルゴールなんていつの間に買ったの？」

「オルゴール？ なんでラウムがそんなもん持ってんだよ」

「え、ちょっと待って。オレ、オルゴールなんて知らないんだけど」

「自分で買ってないなら、誰かから貰ったとか？」

「どうしてラウムにオルゴールなんて贈るんですか。ミスマッチにも程があるでしょう」

「確かにそうだけど、そんなにはっきり言わなくてもよくない？」

「とりあえず、そのオルゴール持ってきてみるよ」

「そうですね。怪しいですが、放置するわけにもいきませんから」

「了解。ちょっと待ってて」

「ちょ、みんなしてオレのことスルー？」

部屋を出て行ったシトリーは、すぐにオルゴールを持って戻ってきた。

「これなんだけど、ラウム、見覚えはある？」

「全然！」

テーブルに置かれたアンティーク調のオルゴールは、静かな存在感を放っている。

「随分古いものそうですね。いつからこの家にあっただいしょうか」

「前に片づけしたときはなかったよね？」

「もしそうなら、いくらなんでも気づくだろう」

「——よし！ とりあえずこのオルゴール聞いてみよう！」

「はあ？ なんてそうなるんだよ。明らかに怪しいだろうが」

「同感です」

ラウムの提案に、オリアスとセーレは表情を歪めた。そんな二人に、ラウムは続ける。

「だって、このままじゃ何にも分かんないじゃん。もしかしたら、音だけなら聞き覚えあるかもしれないし」

「確かにそうかもしれませんが……」

「聞いたところで、どうにかなるってわけでもないだろう」

「でも、ちょっと聞いてみるくらいはいいんじゃない？ ラウムの言ってることも一理あるし」

「……お前、楽しんでるだけだろう」

「まあね」

オリアスの指摘に、シトリーは肩をすくめた。

「じゃ、いくよ？」

ラウムがオルゴールのふたを開け、ネジを巻くと、オルゴールは美しい旋律を奏で始めた。ドレスを着た人形が、ゆっくりと踊りながら回転する。

最初に異変に気づいたのは、オリアスだった。

「……なあ。なんか俺、眠いんだけど……」

「僕も、です……」

「どういうこと、かな……？」

「分かんない、けど……。とりあえず、おや、すみ——」

体の力が抜け、だんだんと瞼が重くなっていく。そして、四人は意識を失った。

*

*

「——い、起きろ。起きろと言っている！」

誰かの声に、四人はゆっくりと目を覚ました。そして、声がした方へ全員が目を向ける。

そこにいたのは、なんとも時代錯誤な格好をした青年だった。古代ギリシャを連想させる白い服を身に着け、杖を手にしている。

「……誰だ、コイツ」

「さあ？ 少なくとも、マトモな人間じゃないね」

「なんであんな恰好なんだろうね～。コスプレ？」

全員が青年を不審な目で見る中、セーレが青年に話しかける。

「あなたは一体誰ですか。僕たちをどこに連れてきたんですか？」

「私は神。そしてここは、次元の狭間と呼ばれる場所だ」

「……おい、誰か精神科医を呼んで来い」

「無理でしょ。ここまで来ちゃったら、もうどうしようもないと思うよ？」

「見た目だけじゃなく、中身もイタイとかヤバいね～」

「全くです」

四人の反応が予想外だったのか、青年は表情を歪める。

「なんだ、その眼は？ 私をバカにしているのか！」

「別にそういう訳じゃないよ。で、（自称）神様がボクたちに一体何の用かな？」

青年は、シトリーの言葉に含みがあったことには気づかなかつたらしく、得意げに言った。

「お前たちを、別の世界に連れて行ってやる！」

「……あ～、ホントに頭ヤバそうだね～」

「とんだ茶番ですね。付き合ってもらえません」

「俺たちだって暇じゃねえんだがな」

呆れを隠さない三人とは逆に、シトリーは楽しげな表情になって続きを促す。

「へえ。それで、（自称）神様は、ボクたちをどこに連れて行ってくれるのかな？」

「聞いて驚け！ あの『メロディ・トリップ』の世界だ！」

「マジで！」

突然青年の言葉に反応したラウムを、他の三人は不思議そうに見た。

「どうしたんですか、いきなり大声を出して」

「だって、聞いたでしょ？ あのゲームの世界に行けるんだよ！ テンション上がるに決まってるじゃん！」

「……ああ、前にお前がやたら騒いでたやつか」

「へえ、オリアスも知ってるんだ。ボクは名前くらいしか知らないんだけど」

「僕もです」

「俺だってほとんど知らねえよ」

すると、ラウムは自慢げに語り出した。

「『メロディ・トリップ』っていうのは、最近人気の音楽RPGだよ！ 簡単に言うと、旅しながら自分の音楽のレベルを上げていくゲームなんだ～。この間ようやくクリアしたんだけど、超楽しかったんだよね～。もしホントに行けるなら、何が何でも行かないと！」

既にその気満々のラウムに、他の三人はそろってため息をついた。

「全く……相変わらずバカで単純ですね」

「しょうがないよ、ラウムだからね」

「まあ、ラウムだからな」

「そうですね、ラウムですから」

「ちょ、みんなしてヒドくない？」

「「「どこが」」」

「もうヤダこの人たち！」

相変わらずのやり取りをしている四人に、青年は持っていた杖を向けた。

「それでは、お前たちの幸運を祈る」

「は？ 俺たちは行くなんて言ってな——」

オリアスの抗議も空しく、杖の先が光ったと同時に四人は再び意識を失った。

*

*

次に四人が目覚めたのは、どこかの宿の一室だった。傍には、四人が普段使っている楽器もある。シトリーとラウムが確認しに行ったところ、宿代は支払われているらしい。恐らくあの青年の配慮だろう。

「そもそも、ここは本当にゲームの中なんですか？」

「うん、間違いのないと思うよ。さっき下に行った時にいろいろ見たけど、お金の単位とか違ったし」

「他の建物も、オレがゲームしてた時に見たのと一緒にだったしね～……」

「マジかよ……。まったく、あのクソヤロー、人の話も聞かねえで——」

「本当に勝手な人でしたね。ああ、そういえば人ではないでした」

「まあまあ、そんな怖い顔しないで。来ちゃったものはしょうがないよ。どうせなら、楽しまなきゃ損だよ？」

「なんでこの状況を楽しめるんだよ……。いきなり訳の分かんねえ所に飛ばされたんだぜ？」

「いいじゃん、好きなだけライブできるんだし」

「本当に貴方たちは楽観的ですね」

「実際にボクは楽しんでるからね。まあ、オリアスやセーレみたいな反応が普通なんだろうけど」

「……今はきちんと、今後のことを話し合っておくべきでしょう。現状に納得できないのは事実ですが、今この場でどうかなる問題ではありませんから」

「まあ、まずこれからのことを考えねえといけねえのは確かだよな……」

全員の意見がまとまったところで、改めて話し合いが始まった。

「じゃあラウム。とりあえず、お前が知ってることを話せ」

「え、オレ？」

「当然でしょう。このゲームに関する知識は、貴方にしかないんですから。覚えていることは全て話してもらいますよ」

「ラウムしか頼れないっていうのは不安だけど、しょうがないよね。せめて、キミの記憶力が人並みであることを祈るよ」

「……ホント、なんでいちいちグサツとくることばっか言うかなあ……」

それからラウムは、三人からの精神攻撃を受けつつ『メロディ・トリップ』というゲームについて語りだした。その内容をまとめると、以下ようになる。

- ・基本的に、旅をしながら音楽のレベルを上げる。
- ・ライブをすることで、経験値とお金が貰える。
- ・一定の経験値を貰うとレベルが上がる。
- ・それぞれの町で、定期的にライブ大会が行われる。それで優勝すると、大量の経験値と多額の賞金が貰える。
- ・歩いている途中に、突然勝負を仕掛けられることもある。
- ・道端に時々宝箱があり、開けるとアイテムが貰える。
- ・旅の途中で出会った人を仲間にし、足りないパートのメンバーを補うことができる。（人数は自分も含めて四人まで）
- ・ライバルが一人存在し、数回勝負することになる。
- ・最後の町で行われる大会で優勝するとゲームクリア。

「とりあえずはこんな感じかな～」

「まあ、だいたい分かったから大丈夫だと思うよ」

「それにしても、いろいろと考えるべきところがありますね」

「ああ。七番目はどうでもいいけどな。そもそも、これ以上メンバー増やせねえし」

「ゲームだと最初は主人公一人だけだから、好きなようにメンバー入れられるんだよね～」

「ライバルはどうなるのかな。もしボクたちが主人公と同じ立場なら、多分いるはずだよね？」

「場所はよく覚えてないけど、多分そのうち会うんじゃない？ っていうか、オレたち四人だけど、どうなるんだろ？」

「まあ、それはいずれ分かるでしょう。それより、もっと重要なことがあるでしょう。経験値やレベルなんてものは、どうやって確認するんですか？ 視認できる形で貰える可能性は、限りなく低いと思いますが」

「……そういえばそうだね。そもそも、レベルが上がると何が変わるのかな？」

「確か、全体の歌唱力とか演奏力とかだったと思うけど」

「なら、自分たちじゃ分かるはずねえな。とにかく、一回ライブやってみるしかないか」

「そうですね。まずはそうするのが最善でしょう」

「曲はいつも通りでいいんだよね？」

「ああ」

「やったあ！ この世界での初ライブだ～！」

結果的に、ライブは大成功を収めた。ライブで得たお金で生活用品を購入し、四人は宿へ戻って来た。

「それにしても、思ったよりお金残らなかったね～」

「仕方ありませんよ。いくらここがゲームの中でも、僕たちにとっては現実なんですから。いろいろと必要なものが出てくるのは当然です」

「まあ、不便ではあるよね。ゲームなら、食事にお金使うことなんてないんだし」

「この世界に来る前は普通のことだったでしょう」

「おい、とつとつ次の行き先決めろぞ」

オリアスの言葉に、全員がテーブルに置かれた地図を見た。

「今俺たちがいるのはここで、最後の町はここらしい」

「ん～、多分ここ、ゲームだと三番目くらいの町だったと思う。確か、次はこっちに行くんだっただけかな？」

「やはり、ゲームのシナリオ通りに進むべきでしょうか？ そうすれば、次に起こることを予測しやすくなるのは確かですが……」

「別にどっちでもいいんじゃない？ 結局行き先は同じなんだから、どんなルートで行ったって問題ないと思うよ」

「じゃあ、とりあえずオレの知ってる通りに行かない？ ホントにゲームと同じなのか確かめたいし！」

「まあ、とりあえずそうするか」

*

*

四人は旅の途中で、女子四人で構成されたバンドグループと知り合った。

「それにしても、ウチら以外にもトリップしてきた人がいたなんてね～！」

どこかの誰かと似たようなテンションなのは、その誰かと同じくギター担当のフレイヤ。

「オレ、話聞こえたときはホントにびっくりしたよ！」

「ふ、二人とも、声が大きいです。誰かに聞かれたら大変ですよ……！」

慌ててフレイヤとラウムに注意するのは、ベース担当のディアナ。

「彼女の言う通りですよ。さっきは、話を聞いたのがたまたま僕たちだったからよかったんです。普通の人なら何を言われるか……」

「そうよ。アタシたちが変人扱いされたらどうしてくれるの？」

含みのある笑顔で二人を見るのは、ドラム担当のイザナミ。

「まあ、いいじゃない。さっきの話を聞いてなかったら、ボクたちは知り合えなかったわけだし」

「そうだな。結果論にすぎないが、これで余計な気を遣わずに情報交換できる」

男口調で話すのは、ボーカル担当のセクメト。

「そういえば、お前らはどうやってこっちの世界に来たんだ？」

「恐らく、そちらと変わらないだろう。自分たちはフレイヤの家において、そこから出てきたオルゴールを聞いていたんだが、いつの間にか寝てしまってな。目を覚ましたら、神を名乗る男が現れて、勝手にこちらの世界に飛ばされた」

「オレたちと全く一緒だね～」

「アタシたちがこっちに來たのは昨日なんだけど、本当に大変だったわよ。なんせ唯一の情報源に、恐ろしいほど記憶能力がないんだもの」

「う、ちゃんとゴメンって謝ったじゃん！」

「だったら、ボクたちと知り合えたのはラッキーだったね。こっちは一応、それなりに覚えてるやつがいるから。とりあえず、ある程度は信用できると思うよ」

「あ、あの、出来れば、このゲームについて知ってること、私たちにも教えてもらえますか？」

「ええ、構いませんよ。ラウムなんかの知識でよければ、存分に搾り取ってください」

「さっきからオレ、さりげなく貶されてない？」

「いつものことだろ、いい加減諦めろ」

「お願いだから、もうちょっと俺に優しくしてよ！」

しばらくの間情報交換は続いたが、ようやくそれも一段落した。

「それで、結局そっちはこれからどうするの？ ボクたちはとりあえず、ラウムが知ってる通りに行くけど」

「多分、ウチらも同じじゃない？」

「そうね。ただ、この世界に慣れるまでは、ここから動かないと思うけど」

「賢明な判断だと思いますよ。焦って進む必要もないですから」

「また会えたら、オレたちみんなでライブ見に行くから！」

「はい。楽しみにしていますね」

「その時はぜひ、そちらのライブも見せてもらいたいものだな」

「ああ。じゃ、俺たちは行くぜ」

そして、四人は次の町へと出発した。

* * *

とうとう四人は、最後の町にたどり着いた。

「やった～！ 着いた～！」

「ようやくですか……。本当に長い道のりでした」

「これでゴールだと思うと、なんだか感慨深いね」

「おい、まだ終わってねえんだぞ。安心するのは早いだろ」

「オレたち四人なら、絶対大丈夫でしょ！ 優勝できないわけないって！」

「そうやって油断してると、いつか痛い目に合うんじゃない？」

「それはいつものことでしょう」

「だな。せいぜい俺たちに被害が来ないようにしろよ」

「みんなして、オレに何か恨みでもあるの？」

「特にありませんが」

「うん。全然ないよ」

「強いて言うなら、お前はそういう運命なんだよ」

「そんな運命呪ってやるう！」

ひとしきりラウムで遊んだあと、四人はライブ大会の会場へ向かった。

* * *

「ねえねえ、『メロディ・トリップ』ってゲーム知ってる？」

「あ、俺それ持ってる。あれ、面白いよな」

「うん。僕もこの間、ようやくクリアしたよ」

「あたしは名前しか知らないかなあ。どんなゲーム？」

「あ、ネタバレいいか？」

「うん、大丈夫」

「じゃあ遠慮なく。まず、主人公がゲームの中に入るっていう設定なんだよな」

「だからああいうタイトルなの？」

「それもあると思うけど、主人公が入るゲームのタイトルそのものが『メロディ・トリップ』なんだよね」

「うわ、ややこしい」

「それで、旅しながらライブして、集めたメンバーで最後の大会に優勝してクリア、って感じかな。まあ、簡単に言えば音楽のRPGだよ」

「あと、主人公とライバルのキャラ、自分で選べたりするんだよ！ 男女で四人ずついるんだけど、主人公を男の子にしたらライバルは女の子から選ぶんだ～。私は逆にしたけど」

「へえ、面白そうね」

「今度貸すからやってみろよ」

「うん、そうする」

「あ、そう言えば、最近アニメ化したよね。僕、この間一話見てみたけど、ちょっとゲームと設定違ったみたい」

「ああ、確か、初めから男主人公の四人でバンド組んでたよな」

「私としては、そうしてくれてよかったかなあ。誰か一人だけ主人公にしちゃったら、そうならなかったキャラがかわいそうだもん」

「まあ、メンバー集めるところ入れたら、終わらなくなるだろうしね。ストーリー自体、結構長いし」

「主人公が四人組ってことは、ライバルも四人で出てくるってこと？」

「続き見ないと分かんないけど、多分そうだろうな」

「はあ……。私も『メロディ・トリップ』の世界に行きたいな……」

「いや、無理だろ」

「分かんないじゃん！ もしかしたら私の家にも、いつの間にかオルゴールがあるかもしれないし？」

「まあ、もし行けるなら行ってみたいかもね」

「でしょ？ そしたら絶対楽しいのにな～」

「はいはい、現実逃避はその辺にして、早く家に帰って勉強しましょうよ。明後日のテスト、忘れてないよね？」

「わ、分かってるって！」

END

～後書き～

鈴野です。小説の執筆自体が約一年ぶりで、かつての自分の文体すら思い出せないまま書き上げました。しかも、これだけ書いたのに、練習どころかハビリにすらなっていないという事実……。

ネタそのものは高校時代の使いまわしですが、あまりの短さと中途半端さのため、大幅な修正を加えた結果、ほとんど別物に。一人称から三人称になったうえ、キャラの名前すら変わるとは思っていませんでした。

一応後書きということになっていますが、会話文のみのおまけが続きます。

～おまけ（入れる場所が分からなかった話） 1～

「それにしても、トリップさせられたゲームがこれで本当に良かったですよ」

「まあ、確かにね」

「え、なんで？ 好きなだけライブ出来るから？」

「バカか。もし魔物やら妖怪やらがいるゲームだったらどうすんだ？ ソッコーで死ぬだろうが」

「あ、そっか……」

「もしそんなことになっていたら、一生恨んでも恨み切れませんよ」

「少なくとも、一発殴らなきゃ気が済まなかつたろうな」

「え？ 一発じゃ足りないでしょ。十発は殴らせてもらわないと」

「よかったですね、ラウム。命拾いしたですよ」

「え、殴られるのってオレなの？ あの神様じゃなくて？」

「しょうがねえだろ。あいつの居場所なんて知らねえし」

「理不尽！」

～おまけ（入れる場所が分からなかった話） 2～

「それにしても、ボーカルは男前な性格っていう決まりでもあるのかしら？」

「そう言われてみるとそうだよ」

「確かに、セクメトさんとオリアスさんは似てますよね」

「そうか？ 自分ではよく分からないが……」

「それなら、セーレとディアナだってそうだろう」

「二人とも、ずっと敬語だもんね～」

「ウチは絶対ムリ。疲れないの？」

「私はもう癖なので……」

「僕の方も同じです。僕としては、イザナミとシトリーの方が似ていると思うのですが」

「ボクたち？ どこが？」

「もちろん、笑顔が真っ黒いところ！」

「あら、フレイヤ。一体何を言っているのかしら？」

「そうだよ。誰の笑顔が黒いって？」

「……スミマセンデシタ」

「ボクはむしろ、ラウムとフレイヤが似てると思うよ？」

「それは自分も思っていた」

「アタシも」

「え？ オレたち、そんなに似てる？」

「僕はむしろそっくりだと思いますが」

「なんで？ ウチとラウムに同じところなんてあるの？」

「む、無自覚なんですか……？」

「しょうがねえだろ。両方バカなんだから」

轟く

松井 流吏

俺、柏木大悟。都内の大学に通っている大学二年生である。一年前は志望校に落ち、行きたくもない大学に嫌々通いながら墮落した生活を送っていたが、ある日をきっかけに俺の生活は一転してしまうのである。全く、人生ってやつは何がおこるかわからないから厄介で面白い。

「おい、仕事だ大悟。行くぞ」

土曜日の早朝。気持ちよく寝ていた俺はある男に叩き起こされた。かすむ視界で机の上の置き時計を見れば、まだ六時をまわったところじゃないか。

「さっさと着替えて出発するぞ」

せっかくの休日の朝を台無しにしながら、男は俺を急かす。

その男の名は根室京介。俺の人生をすっかりかえてしまった原因である。現在は俺が借りているアパートで居候をしている。

彼の愛車のフェアレディZに乗り込み仕事に向かう。根室はこんな風に、行き先も告げずに俺を車に乗せることが多い。正直迷惑な話ではあるが。

『……べています。続きまして速報です。今朝、都内の……川の中に乗用車が水没しているのが発見され、中からその運転手とみられる男性の遺体が見つかりました。警察は事故と自殺の両面から捜査をしています。次は天気予報です。昨夜の冷え込みから一転……』

カーナビから流れるラジオを聴いて、ピンときた。

「根室サン、もしかして今日の現場ってこの川っすか」

そう言うと、根室は黙ってうなずいた。

俺が大学入試に失敗し、毎日をダラダラと無駄に過ごしていた頃のこと。なんと俺のアパートで殺人事件がおこったのだ。半ば呆然とする俺の目の前に現れたのが根室京介だった。彼は探偵を自称し、警察もだまされかけた事件を見事解決してみせた。その際根室は、ほぼ初対面の俺を助手として連れ回し、俺はすっかり探偵業の虜となってしまった。事件の後、住居を探していた根室にシェアハウスを望まれ、それと引き替えに正式な助手としてもらい今に至る。

しばらくして、車は都内某所の川原に着いた。六月頭の川は太陽の光を反射してきらめいている。一方の川原で目に入るのは、数人の警察官と張り巡らされた規制線。

「根室、休日の早朝から呼び出してすまなかったな」

声をかけてきたのは刑事の箸立さん。根室とは旧知の仲であるらしい。

「大悟君も、いつもご苦労さま」

いくつか根室について事件を解決していく内に、顔馴染みになった警察の人も多い。箸立さんや、彼の部下の筒井さんはその筆頭である。

「俺を呼んだってことは気になることでもあるんだろ」

「ああ、まずは事件の概要を説明する」

こんな風に、警察が疑問に感じたり、何らかの不思議な現象が生じたりしている案件には、探偵の根室が呼ばれて捜査に加わることがある。これは何も箸立さんと根室が親しいからというわけではない。根室は過去にいくつもの難事件を解決した実績があるからだ。こうして根室は警察庁の信頼を獲得し、警察庁は現場の警官が根室の協力を仰ぐことを黙認している。ただの大学生である俺がこうして現場に入ることが許されているのも、すべて根室のおかげなのである。

箸立さんの話を聞いている間、根室は現場を注意深く観察する癖がある。俺も現場を観察してみた。川のほうには巨大な重機があり、どうやらあれが水中の車を引き上げたらしい。水没していたホンダのフリードは、運転席と助手席の窓が開いているため車内も完全に水没していたようだった。今は水が抜かれ、鑑識の人たちが検証をおこなっている。車内は荷物であふれていて大変そうだ。その集団から少し離れて、筒井さんが誰かに電話しているようだった。そういえば今朝根室に電話したのも筒井さんだったっけ。

「……以上が今回の事件の概要だ。調べたところ遺体で発見された運転手は昔も危険運転で減点された経緯があるみたいだから、このままいけば事故として処理されるだろう。ただ、少し気になることがあってな」

「助手席の窓、だろ」

話を聞き、ちょっと現場を見るだけで、根室は話の核心をついてしまう。俺も言われてもう一度フリードを見た。助手席の窓は運転席と同様全開である。特に不思議なところはない。

「根室サン、助手席の窓のどこがおかしいんすか？」

「やはり力不足は否めないな、大悟。いいか、確かに六月の初めに車の窓を全開にしても違和感はない。だが昨日の気候をよく思い出してみろ」

そう言われて気が付いた。確か昨日は低気圧の影響で初夏とは思えないほどの冷え込みだったんだ。夜中は特に冷え込んだ。よく思い出してみれば今朝もラジオのニュースで言ってたじゃないか……。

「そういうことだ。いくら冷え込んだとはいえ真冬ほどの寒さだったわけじゃないから運転席の窓が開いていたとしてもまだ許容できる。ただ、助手席の窓まで開いていたのはさすがに不自然だと思わないか」

「さすがだな、根室。俺もそこがひっかかった。こうなると事故でも自殺でもない第三の可能性が見えてくる」

「第三の可能性、ですか」

根室は頷いて答えた。

「助手席にも人が乗っていたことが考えられる。しかしお前も今朝のニュースや今の箸立の話で聞いたように、見つかった遺体は運転手とみられる男性の遺体だけ。仮に助手席に人が乗っていたとしてその人物が助手席の窓から脱出したとしても、その人物が通報していない以上第三の可能性として、その人物による他殺の線も挙げられる」

一見事故のようにしか見えない出来事も、隠された事実が浮き彫りになったりする。

「ありがとう根室。お前の意見が聞けてよかった。他の捜査員にも伝えてくるよ」

そういうと、箸立さんは鑑識のもとへ向かった。

しばらく根室の現場検証に付き添っていると、今度は電話を終えた筒井さんが話しかけてきた。

「いやあ根室さん、お疲れ様です。しかしびっくりしましたよ。てつきり事故かと思っていたんですが、電話が終わってから箸立先輩から他殺の可能性もあるだなんて言われて……」

筒井さんは新米の刑事らしい。実力のある箸立さんをリスペクトしていて、その友人でありこちらも実力者である根室も尊敬している。箸立さんのサポートを行っているが、少々おしゃべりなのが難点だと箸立さんがこぼしてたっけ。

「……そういう訳で俺は先輩に言われて片っ端から関係者に電話してたんですよ」

筒井さんの少々長い話が終わった。要約すると、免許証から被害者の身元がわれ、関係者に連絡していたとのことだ。

被害者は遠山仁さん。三十二歳の会社員だそうだ。遺留品から連絡先の書かれたメモが見つかり、遠山さんの両親や奥さんに訃報が届けられた。妻の遠山春野さんからの情報で、昨晚は大学時代の友人たちと遅くまで飲んでいたようだ。

「根室サン、これって飲酒運転による事故の可能性だってありませんか」

「もちろんその可能性もあるが、今は規制が厳しいからな。店側にも責任が問われることがある以上、最近の居酒屋は安易にドライバーに酒を出したりなんかしない」

改めて事件現場を見る。川原沿いの道路はT字路になっている。そのT字部分に急カーブしたような痕跡があり、そのまま川原へ落下し、川へダイブしたとみられる。

「事故の可能性があったら、運転中に急に人か車が飛び出してきて、あわててハンドルを切った場合だな」
不運なことに、シートベルトの接続部にガムがつかまっていて、はずすことができなかったようだ。

「根室さん、もしも他殺だとすると、これも犯人が仕組んだことでしょうか」

筒井さんが聞いた。それにしてもこの人、警察としての仕事はしなくてもいいのだろうか……。

「そこなんだ。運転席に細工をするのは簡単じゃない。例えば犯人を助手席に残しながら運転手がコンビニなどに寄っているとか、大きな隙がなければ仕掛けられない」

「おい、いつまで油売ってるんだ」

ため息交じりに箸立さんがやってきた。おしゃべりが過ぎる筒井さんを注意するのはいつもの光景だ。

「箸立、遠山さんの帰宅ルートの調べはついてるか」

「一応な。ただお前が言ったみたいにどこかに寄った可能性があるかは現在調査中だ。さて、俺たちはこの後いったん署に戻って、筒井が連絡を取った関係者に任意で事情聴取をおこなうよ。もしだったら来てくれると助かる」

根室が捜査に加わると、関係者に探偵根室が紹介される。そのやりとりは基本聴取の際に行われ、その時点で根室は関係者に対し、独自の捜査を行うことができる。

「よし、俺たちも警察署に向かうか。大悟、お前今日のスタンドでのバイトは何時からだ」

「十六時からラストまでっす」

「そうか、じゃあ十五時半までは時間あるな」

「え、ちょ、バイトまで休み無しっすか！」

根室は基本人使いが荒い。俺には特に。

俺と根室は警察署の前で、聴取する人たちを待っていた。普通は署内で待っているものなのだろうが、探偵根室はそれを許さない。

「探偵の基本中の基本はファーストコンタクトだ」

と前に言っていたのを思い出す。この他にも根室には、彼なりの心得があって、俺はいくつか教え込まれている。

今日は四人の聴取をとる。一人は妻の春野さん。残りは昨晚の飲み仲間、長井友樹さん、香山真一さん、長谷川誠也さんの三人だ。

しばらく待っていると、一台の車がやってきた。トヨタのプリウスから降りてきたのはスーツの男性。あたりをきょろきょろと見回した後、根室に話しかけてきた。

「すみません、今日事情聴取のために伺いました香山と申します。入口に担当の者が二名いらっしゃると聞いたのですが、担当の方でしょうか」

なんと丁寧な人だろう。休日にも関わらずスーツで登場し、話し方や用いる言葉もずいぶんと上品だ。思わず

この人を容疑者リストから外したくなる。

そして筒井さんはちゃんと仕事をしてくれた。根室に電話をした時点でこうなることがわかっていたのだろう。今朝の電話で俺たちが署の前で待機していることを伝えていたようだ。

「はじめまして。私は今回の事件の捜査のお手伝いをさせていただきます根室と申します。こちらは部下の柏木です」

この時点では、探偵や助手という言葉は出さない。下手に警戒されないためだと根室は言う。

「ご友人の訃報を聞いた後ですので、少々心苦しいこととは思いますが、昨日の話を中で聞かせていただきたく存じます」

「ええ。しかし、未だに信じられませんよ。昨日まで当たり前のように会話していた仁が突然死んでしまったなんて……」

そういうと香山さんは言葉をつまらせた。

すると、再び車が入ってきた。ピカピカのスカイラインは根室の愛車を思わせる。

降りてきたのは長身の男性。助手席からは女性も降りてきた。女性は心なしか顔がこわばっている。きっと警察署という場所に緊張しているのだろう。香山さんが振り返り、声をかけた。

「ああ、誠也に春野さん」

とすると、こちらの長身の男性が長谷川誠也さんか。そして隣の女性が遠山春野さん。

「わざわざ春野さんを送ってもらってすまないな」

「しょうがねえさ、仁が車ごと落とされちまったんだから。しかしなんてことだ、あの仁がこんな急に……」

「春野さんも、さぞお辛いことでしょう。本当に、なんと申し上げたらよいか」

それまでうつむいて黙っていた春野さんは顔をあげた。

「大丈夫、私は大丈夫です」

そう言いつつも、目には涙が滲んでいる。

「それで、担当者ってのはお二人のことでいいのかい」

誠也さんがこちらに話題を振る。しかし答える前に、一同はもう一台の車に気をとられた。

赤いフィットがさっそうと現れた。三人が振り返ったことから、運転手はおそらく長井友樹さんだろう。

下車した人物は案の定こちらに向かってきた。眼鏡をかけた中肉中背の男性は開口一番に謝りだした。

「いや、すみません。道が混んでおりまして、少々遅くなりました。みんなもこんなところで待たせてしまって本当に申し訳ないよ」

「いえ、とんでもございません。この度はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。この度はご愁傷さまでございますが、少々今回の件で少しお伺いしたいことがございますので中のほうにお願いします」

役者がそろった。根室が署内へと案内する。一行は口数も少なくとぼとぼと廊下を進んだ。全員が今回の出来事を悲しんでいるような態度であった。しかし根室の仮説によれば、もしかしたらこの中に、事故に見せかけて遠山さんを殺害した犯人がいるのかもしれない。これからの取り調べで何か手掛かりが手に入るかもしれないと、俺はふっと息をついて気を引き締めた。

やがて取調室に到着した。中には箸立さんと筒井さんが待っていた。

「警視庁捜査一課、箸立優衛です」

「同じく、筒井純平です」

「これから私たちがみなさんから一人ずつお話を伺いたいと思いますが、その前に一つご説明させていただきたいことがあります」

たいていこの流れになると、誰もがぼかんとする。関係者はてっきり俺たちから聴取を受けると思っていたのに、実際に聴取を行うのは別の人だったからだ。じゃあこの二人は何者なんだと、そういう不思議そうな顔つきをする。

「今回の案件の捜査に、探偵の根室京介氏が加わることとなりましたのでご紹介させていただきます。では、根室さん、お願いします」

ここまでくるとさらに関係者の顔が変化する。正直、根室もこの茫然とした可笑しな変化が見たくて初めに正体を隠しているのかもしれない。なにせドSな男なので。

「今ほどご紹介に預かりました、探偵の根室京介と申します。みなさんにはあまり馴染みが無いかも知れませんが、いくつかの事件は探偵が警察と協力して捜査を行っています。どうかみなさんご理解とご協力のほど、よろしく願いいたします」

しばらく言葉を失っていた四人だったが、やがて長井さんが声をしぼりだした。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。探偵というのもよくわかりませんが、それ以前にどうして今回の件で探偵がでてくる必要があるのですか。だって事故なんでしょう、仁が死んだのは」

「事故という見方も当然あります。しかし我々は遠山さんが何者かによって殺害された可能性もあると考えています」

そこまで言って、声を取り戻した長谷川さんが声を荒げた。

「冗談じゃねえ、仁が殺されただって？ いったい何をわけのわからねえこといつてんだよ。ってことはあれか、俺たちは被害者の単なる関係者ってわけじゃなくてこの事件の容疑者でもあるわけか。ふざけるんじゃないよ！」

「誠也、落ち着いて」

今にも根室に殴りかかりそうな長谷川さんを鎮めながら、香山さんも続いた。

「私はあなた方がお聞きしたことはなんでも答えるつもりです。それで事実が究明されるのであれば、私はよろこんで協力しましょう。しかし、あり得るくらいでしかない可能性の話をこのタイミングでされるのはあまりにも酷ではありませんか。特に夫を亡くして間もない春野さんの気持ちを少しは考えてさしあげることはできませんか」

当の春野さんは、うつむいたままだ。かすかに見える顔には血の気がみられない。

一方根室は落ち着いている。常にポーカークフェイスを崩さず、それぞれの反応を冷静に観察している。箸立さんもさすがで、無表情のまま黙って腰かけている。あわあわしているのは俺と筒井さんくらいだ。

「みなさんのお気持ちもわかります。しかし私の仕事はありとあらゆることを疑うことです。ここに少なからずの可能性がある以上は、しっかりと検討せねばなりません。第一、真相がうやむやのまま闇に葬られれば、遠山さん本人がむくわれません。もちろん任意での聴取ですので、みなさんには拒否する権利があります。しかし、どうか協力してはいただけませんか、遠山さんのためにも」

根室はこういう言葉回しが非常にうまい。こんな風に言われれば、四人も協力せざるをえなくなる。

「では、よろしいですね。遠山春野さん、長井さん、香山さん、長谷川さんの順にお話を聞いていきます。遠山さん以外の方は外のベンチに腰掛けてお待ちください」

箸立さんが総括し、事情聴取がはじまった。

取調室の隣には、聴取の様子が一望できる部屋がある。たいてい俺と根室はその部屋で、箸立さんの行う聴取の様子を見ている。

「なんかブーイングでしたね、周りの反応」

「まあある程度は仕方ない。あからさまな殺人ならともかく、どうみても事故である案件なのに自分や友人が犯人かもしれないとぬかされたんだからな」

ただ、と根室は続ける。

「この中に犯人がいるのは間違いない。あとは必要なカードをいくつかそろえるだけだ」

と、驚くようなことを言った。

確かに、さっきのやりとりだけで色々な反応はみられた。ただ、それだけで犯人が四人の中にいると断定できたのか。

「今からそのカード集めに入る訳だが、お前バイトは大丈夫なのか？」

言われて時計を見る。十五時四十分……。

「根室サン！ ちょっとヤバいじゃないですか！」

「走れば二十分以内には着くだろ」

うちは十分前にはシフトインしなきゃいけないんだよ！

そんなこんなでバイト先のスタンドにダッシュする俺。ほんとにドSだ、根室は。

バイトが終わり、帰宅したのは二十一時過ぎだ。根室は一階の応接室のソファで何やら資料を読んでいた。ちなみにうちのアパートは全部屋二階建てだ。

「おう、おかえり。間に合ったか」

「マジギリギリでしたよ。マネージャーからもっと早く来いって怒られるし、受注ミスしそうになるし」

「それはお前個人のミスだろ」

何を言っても勝てないにも関わらず、つつい根室に愚痴ってしまう。ひどいときにはボコボコにけなされるのだが。

ただ今日は案件を抱えているためそこまで口撃されなかった。

「それで、カードは何枚か集まったんすか」

「そうだな、今日の聴取でいくつか重要なことがわかった」

そう言って根室はいったん言葉を切る。

「重要なことって……」

「遠山仁さんにはいくらかの保険金がかけていた」

「ってことは保険金殺人の線が濃厚ってことですか」

「いや、保険金はずいぶん前にかけていたようだから保険金目当ての殺人だとするのは時期尚早だ。また保険金の受け取り手である奥さんの春野さんには完璧なアリバイがあって、このことから動機が保険金とは断定しがたい。それともう一つ。少し前にも仁さんは事故を起こしていて、車に傷がついたために中古で同じ色、同じ型のフリードを買っていたようだ。それも相当格安で譲ってもらったらしい」

「そういえば、仁さんは危険運転していたって箸立さんが言ってましたね」

「彼の運転の荒さに関しても四人は口々に言っていた。だから事故だと思っていたそうだ。それから、事件の日の被害者の動きも判明した」

そう言うと、根室は説明を始めた。

遠山仁、長井友樹、香山真一、長谷川誠也の四人は、都内のある居酒屋で二十時に飲みを開始した。久々の飲みで昔話に花が咲き、三時間ほどそこで飲んでたという。二軒目に行く前に、眠気を訴えた長谷川がタクシーで帰宅。三人で二軒目に移って飲みを再開。深夜二時頃に解散し、長井と香山はタクシーで帰宅し、遠山は自家用車のフリードで帰宅路についた。

「つまり、遠山さんは飲酒してはいなかったと」

「そう。五時間以上にわたる飲み会にもかかわらず、仁さんが一滴も酒を飲まなかったと三人の意見は一致している。遺体の血中から検出されたアルコール濃度は正常だったし、店の人からも裏はとれた」

「しかし、遠山さんはどうして飲まなかったんすかね」

「それが、奥さんのアリバイとつながる」

奥さんの春野さんも、知人宅で女子会をおこなっていたようだ。元々仁さんが春野さんを車で迎えに行く予定だったらしい。ただ、春野さんも期待していなかったという。どうせ飲み会が白熱するだろうと思っていた春

野さんは、その知人宅に泊めてもらうことにした。仁さんが迎えに来なくてもその時はさほど気にしていなかったらしい。

「春野さんの証言はその知人から裏がとれたよ。仁さんの訃報もその知人宅で聞いたようだ。距離的に考えても春野さんが犯行を行うのは不可能だ」

「確かに完璧なアリバイっすね」

一方仁さんは事件の少し前、ガソリンスタンドに寄ったことがわかっている。スタッフの証言によると、助手席には誰もおらず、車に乗っていたのは確かに仁さん一人だけだったという。

その後、そのスタンドの近くにある例のT字路にさしかかり、車は着水。午前四時十分頃、川原をジョギングしていた六十代の男性によって通報された。

「ちなみに奥さんの証言によると、仁さんは深夜の運転中に眠気覚ましとしてガムをかむ癖があるようだ。だからシートベルトの接続部にガムが付着していたのはあり得ない話じゃ無いわけだ。もちろん確率は低いけどな」

「つまり根室サンは、あのガムが自然に付着したわけじゃないと思ってんすね」

「ああ。誰がどうつけたのかもある程度目星はついている。だから明日罨をかけようと思っててな。大悟、明日バイトは？」

「いや、入ってないっす」

「決まりだ。明日は勝負の日だな。じゃあ俺は眠るとするよ」

そういうと根室は二階に上がっていった。一階は応接間。二階は根室の部屋だ。俺の部屋は、俺の家に無い。

いつものように、俺は応接間のソファに横になる。根室の言う罨とはいったいなんだろう。根室には目星がついている犯人とは誰だろう。俺も助手になってから幾分かは推理力がついたと思っているが、まだまだ根室の域には達せそうも無い。なんてことをつらつら考えていたら、いつの間にか眠りについてしまっていた。

日曜日の早朝。気持ちよく眠っていた俺は根室に叩き起こされた。これはなんてデジャヴだ。

「大悟、今日は忙しいぞ。準備して出発だ」

どういうわけか、その日の移動は徒歩だった。妙に思いながら目的地に着いてみれば、レンタカー屋である。それも、聞いたことのないような店名である。

「ご自慢のフェアレディはどうしたんすか」

「今日はあいつじゃダメなんだ」

根室はなかなか車にうるさい。隔週で洗車を行い、愛車をキレイにすることに余念がない。以前には中古車なんて反吐が出るとまで言っていた男がレンタカーを借りるなんて。

しばらく外で待っていると、根室はホンダのオデッセイをレンタルして店から出てきた。

「もしかして事故車と同じメーカーじゃなきゃダメってことっすか？ でもそれならフリードのほうがよかつたんじゃ」

「フリードなんてまたブーイングくらいだけだしな。それに犯人に警戒される恐れもある」

根室はそういうとオデッセイに乗り込んだ。助手席に乗ろうとすると、後ろに乗るように指示を受けた。

「助手席には容疑者の方々に乗っていただくんだ。これからその人たちと一人ずつドライブに行くぞ」

なるほど、だんだん根室の言う罨というのが見えてきた。証言では仁さんは一人で車に乗っていたようだが、それがトリックなどによって真実でなかった場合も考えられる。似た車の助手席に容疑者を乗せることでボロが出るのを誘い、犯人をあぶりだそうとしているわけだ。

「ほう、今日はなかなか察しがいいな、大悟」

「でも、レンタカーなんでカメラは無いつすよ」

根室はたまに容疑者を車に乗せることがある。その際に重要な発言をもらす可能性を考えてカメラがある。証拠として利用できるからだ（そして何度か役に立っている）。他にも根室はボイスレコーダーも所持している

。

「大丈夫、今から設置するよ」

「えっ、いいんすか、そんなことして」

「もちろん許可はとったさ。ここの店長は俺の知り合いだしな」

根室は妙なコネをいくつも持っている。なるほど、聞き覚えのないような店名だったのはこういうことだったのか。

それから根室、俺、容疑者の三人による不思議なドライブが始まった。ドライブがてら飲食店に行き、食事をしながらまた少し話を聞くという。費用は全てこちらが持つという破格ぶりに、休日にもかかわらず四人は承諾してくれた。

トップバッターは春野さん。

「すいません、葬式の準備とか、色々しなければならぬこともありますのであまり時間がないのですが」

と暗そうな顔をしていた春野さん。根室のチョイスで最近話題のパンケーキ専門店へ。朝食をとりながら他愛のない話をしつつ、さりげなく心のケアも行うところはさすがである。事件の話も全くせずに春野さんとのドライブは終わった。別れ際は少し顔色が戻ったようだ。

「彼女はシロっすかね」

となにげなく尋ねると、またも驚くようなことを言った。

「いや、あの表情は何か隠しているよ。この短時間じゃさすがに暴けなかったけど、ヒーリングはやっといたから次に会ったときに聞けるとは思う」

確かに、言われてみればファーストコンタクトの時から春野さんはこわばった顔をしていた。旦那を失った時の悲哀の表情とは少し違う。あの時点で何かを秘めていたのだろうか。

次は香山さん。少々高めのカフェで優雅な昼食をとる。今度は少し仁さんの話も混じる。

「大学時代、仁は非常に活力のある男でした。一方の私は特にやりたいこともなく、そんな彼がうらやましかったものです」

そう言いながら上品に食事をする香山さん。実におしゃれだ。

香山さんから聞いた話も、特に事件とは関係ありそうもないものばかりで、香山さん自身も、つまらない話をしてしまいましたと言っていたのだが……。

夕飯は長井さんと一緒だ。

「それはもう春野さんは昔からきれいな人でね、俺たちにとって憧れの先輩だったんだよ。後になってわかったんだけど、なんと俺たち四人ともあの人に告白してたんだよ！ 結局仁が選ばれたんだけどね……」

どうやらゴシップが好きならしい長井さん。眼鏡をきらつかせながらそんな話をしてくれた。面白い人である。

。

最後は長谷川さんと居酒屋だ。

注文した料理が来る前から、長谷川さんは会社のことだの、家のローンのことなどをさんざん愚痴っていた。そうこうするうちにお酒が届いた。

「おいおい、お前が飲んじゃ誰が運転すんだよ」

と、長谷川さん。勢いで根室が酒を飲んでしまった。

「俺、免許持ってないっすよ」

と俺が言うと、根室は少し微笑んだくれた。

本当は香山さんの時点で根室の張った罠に気がついていて、というのも、根室の心得の一つにこんなものがある。

「探偵が注目すべきは、同じ事象に対する差異を探ることだ。ある事柄に対して一人だけ違う動きをしてはいないか。あるいは本来すべきことをしていない人はいないか。お前もよく注意しておけよ」

実は、帰りの運転をしたのは根室ではない。春野さんであり、香山さん、長井さんである。根室は何らかの言い訳をしては帰りの運転を容疑者の人たちに任せた。そしてこう切り出した。

「すみません、この車はレンタカーなのでガソリンスタンドによってもらえませんか？ もちろん費用は私が負担しますので」

つまり、根室の狙いはガソリンスタンドによってもらうことにあったのだ。これは仁さんが事件の直前によったところ。行き先はバラバラだったが、四人ともスタンドによることになる。これが、根室が注目すべきだという同じ事象というやつだ。

今回は根室が酒を飲み、俺が運転できないということで長谷川さんに帰りの運転をしてもらおうというわけだ。

「一日ご苦労だった、大悟」

深夜、四人とのドライブが終わってレンタカー屋に帰ってきた。長谷川さんが送ってくれ、彼はそのまま徒歩で帰った。

「根室サン、罠ってもしかしてスタンドに寄ることっすか」

「今日はほんとに察しがいいな。大悟も少しは成長したか。免許持ってないなんてアドリブもよくぞ言った」

俺は本当は免許もっている。ただ根室の狙いに気づいていたので嘘をついたわけだ。

「今日は帰って寝るぞ。そして明日の午後、犯人を暴く。お前も、トリックはわからずとも誰かは察しがついていられるかもしれないしな」

そういつて、俺と根室は帰路についた。

俺も、今回ばかりは気がついた。実はスタンドで奇妙な動きをしている人を見つけたのだ。それは香山さんである。スタンドに着くなり、香山さんは運転席できょろきょろし始めた。これは他の三人には見られなかった行動である。正直上品で礼儀正しい香山さんを疑いたくなかったが、どうにもあやしい動きである。仁さんをうらやんでいたというし、その辺が殺害の動機につながったのかもしれない。

ただ、トリックがよくわからない。それはきっと根室が解いてくれるのだろう。明日、この事件の蹴りがつく。

月曜日。三限で授業が終わり帰宅すると、根室が待っていた。

「さあ、署に人を集めた。行くぞ、謎解きだ」

いよいよだと、俺は強く息を吐いた。

「……以上が、昨日の皆さんとのドライブの様子です。車内、及び食事中の会話の記録にご協力いただき誠にありがとうございました」

署内の一室。容疑者四人と箸立さん、筒井さんが待っていた。挨拶のあと、さっそく根室が午前中に編集していたというドライブのビデオを放映した。

「行き先はバラバラでしたがある場所には全員に寄っていただきました。それがガソリンスタンドです。今ご覧になりましたように、そこで奇妙な行動をとった人間が一人だけいます。これはおかしいですね」

すると、香山さんが驚いたような表情を見せた。

「私の予想通りでした。仁さんは殺されたのです。その犯人は、長谷川誠也さん、あなただ」

え……犯人は香山さんじゃなくて、長谷川さん？

「ちょっと待てよ、スタンドで変にきよろきよろしてたのは真一じゃねえか！ あんたもそれがおかしいって言っただろ」

「私は、奇妙な行動をとった人が一人だけしかいなかったことがおかしいと言ったのです。香山さんがあの行動をとったのは極めて自然なこと。私が気になったのはあなたがその行動をしなかったことだ」

根室の、『本来すべきことをしていない人はいないか』の言葉が思い出される。

「順を追って説明しましょう。まず事件当日、仁さんは車で飲み会に参加しました。その時普通に出てきたことから、この時シートベルトにガムは付着していなかった。つまり飲み会の最中から事件までの間にガムがつけられたこととなります」

根室の謎解きが始まった。

「一次会の後、あなたは眠気を訴えタクシーに乗って帰ろうとしたそうですね。別な証言からもあなたがタクシーに乗ったことは間違いないでしょう。ただ、あなたが本当に家に帰ったかはわかりません。都内には無数のタクシードライバーがいるわけで、あなたが乗ったタクシーのドライバーから証言を得ることが難しい以上、あなたにだけその間アリバイがありません」

「だからどうした、俺には仁の車のキーが無えんだから仮に時間があつたとしてどうやってシートベルトに細工できるんだよ」

「あつたんですよ。あなたにはあのフリードのキーが。なぜならあのフリードは、あなたが仁さんに譲渡した車だから」

衝撃の言葉に、一同が息をのんだ。

「私も他殺を疑いながらも、どうやって車内に仕掛けをしたのかわからずにいました。しかし署内での春野さんの話を聞いて閃きました。車を譲渡した人間なら車内に仕掛けをするのは可能だと。そして私は初日から気になっていた人に罠をかけました。それがこのガソリンスタンドでの一件です」

「根室、お前初日から長谷川さんを疑っていたのか？」

箸立さんにそう問われると、根室はおもむろにポケットからテープレコーダーを取り出した。

『しょうがねえさ、仁が車ごと落とされちまったんだから』

「これは初めて会った時の長谷川さんの言葉です。署に来るまで、みなさんが持っていた事件の情報は、その日の報道と電話をした筒井刑事の言葉だけです。電話を掛けた後に筒井刑事は他殺の線も考えられると伝えられたのだからあなたたちは事故か自殺だと思っていたはずですよ。なのに長谷川さんは車は『落とされた』と断言しました。事故か自殺だと思っている人ならば『落ちた』と表現するはずですよ」

次第に、長谷川さんは青ざめていく。

「そしてあなたの乗ってきたスカイラインが妙に光っていたのも印象的でした。私も洗車はよくするのでわかりますが、あれは洗車をしているというよりも新車が持つ輝きに近かった。帰り際にあなたの車のおいをかいてみましたが、やはり新車の香りがしました。そこで思ったんです。あなたが前に乗っていた車がフリードで、それが仁さんの手に渡っていたなら、と」

「それとスタンドはどんな関係が……」

「私は、長谷川さんが以前にフリードに乗っていた可能性も考えてスタンドに連れて行きました。理由は簡単。ホンダの車は、ほかの日本車には見られない特徴を持っているからです。それは給油口が外から開くということ」

「そうか、そういうことか。俺はスタンドに勤務しながら気付くことができなかった。確かに、ホンダのレンタカーに乗車してきたお客が給油口のレバーはどこかと問うことがある。」

香山さんが運転席できよろきよろしていたのはレバーを探していたんだ。彼は普段プリウスに乗っているから

つい運転席に給油口のレバーがあると思って探していたんだ。そしてそれと同じことを、日産のスカイラインに乗っている長谷川さんもするはずである。なのにしなかった。

「もちろんそれだけであなたがフリードを譲渡したとは断定できない。しかし可能性はずいぶん高まりました。あとは春野さんから、その情報を聞くだけでよかった」

根室は、ビデオの編集をしながら春野さんに電話したという。あまりにもピンポイントで聞かれた春野さんは驚いて、答えてくれたそうだ。

「なぜそんな大事な情報を黙っていたんですか！」

つめよる筒井さん。春野さんは思わず涙ぐんだ。

「か、確証がなかったんです。仁は誰から買ったか言わなかったの。ただナンバープレートに見覚えはありましたし、仁が安くフリードを買ったほぼ同じタイミングで長谷川さんが新車に乗り換えましたから、もしかしてとは思っていましたが……」

「そう、あなたはどこかで長谷川さんに疑問を抱いていた。にもかかわらず長谷川さんは春野さんを慰めるという名目で近づいてくる。さぞ複雑な感情だったことでしょう」

「なぜ、誠也は春野さんに近づいたのですか」

「仁さんには多額の保険金が掛けられていました。そしてもう一つ、あなたの証言にあったように、みなさん少なからず春野さんを気になっていました。おそらく長谷川さんはそのことで仁さんを恨んでいた。そしてきっと彼はこんなシナリオを考えたことでしょう。まず、仁さんを殺す。次に春野さんを慰める形で接近し、あわよくば結婚する。そして保険金を手に入れる。長谷川さんは家のローンのことで愚痴を言っていたのにもかかわらず、新車の、それもグレードの高いスカイラインを購入している。実に奇妙だ。まるであたかもこの先多額のお金が手に入ることを予期していたかのようだと思いますか？」

探偵根室が、犯人を追いつめていく。

「そしてあなたは実行に移した。まずあなたは仁さんに車を譲歩する前に車の合鍵を作っておく。次に事件の日、理由をつけて家に帰るふりをして、作った合鍵でこっそり車内に侵入する。シートベルトの接続部にガムを付けるとあなたはそのまま車内で息をひそめた。仁さんの車は荷物が多く、かつ自分の車に誰かがいるかもしれないだなんて普通は考えない。助手席の後ろでくるまっていれば、深夜の暗さも手伝って気付かなくても仕方ないでしょう。あとは例の道路で突然運転席のハンドルをきればいい。いくら急にやられても助手席の人間が行えばさすがに持ち直される。しかし全く誰もいないと思っていたところに突然人が現れハンドルをとられたら……。完全に不意を突かれるでしょうね。ほぼ抵抗もできないままに」

「全部想像にすぎない、俺は確かに仁にフリードを打ったが、だからといって俺がやったと断定はできないだろ！」

「とることができるんです。今朝あなたが捨てたごみの中にこんなものがありました。試してみたら、仁さんのフリードの合鍵でした。なぜあなたは今朝までこれをもっていたのですか、そしてなぜ、今朝になってからこれを捨てたのですか？」

もはや弁解はできなかった。犯人、長谷川誠也はがっくりとひざをついた。

帰り道、車の中で根室はおもむろに口を開いた。

「まさかスタンドでバイトしてたのにもかかわらず、お前は今回の事件の真相には気付かなかったなんてな」

「それは」

「第一注意力がないというか、推理力がないというか、そもそも頭が悪いというか……」

くそっ、昨日は珍しくほめたと思ったのに今日はさんざんけなすわけか、ひょっとして昨日の時点ですでに、俺が勘違いしていたことにも気づいていたんじゃないのか、このドSめ！

「……わかったっすよ、根室サン」

「ふん、敬称なんて、心の中ではつけてないくせに」

フェアレディZは、夕暮れの街を疾走していった。

完

幸せにする粒子 (三ツ葉葵)

幸せにする粒子

三ツ葉葵

「助手くん、成功だよ」

どうやら、博士はすべての物質を復元することのできる粒子を開発したようだ。「二つ目の太陽」のせいでも人類は僕と博士の二人しかいなくなってしまうが、この粒子があれば人類はきっともう大丈夫だろう。

「助手くん、すまなかったね。本当は君の義眼の開発を優先したかったのだが」

「いえ、この粒子の開発は人類にとっての悲願ですから」

僕の目は「二つ目の太陽」の強い光でやられてしまっていて、今では明暗が辛うじて分かるくらいだ。

「では助手くん、何か直したいものはあるかね」

「ええと、じゃあ博士の部屋の水晶玉を。あれは僕が落してしまったものなので」

博士は目の見えない僕のために、聴覚からものの位置を把握する装置を開発してくれた。水晶玉はその初期型の開発実験中に落としてしまったものだ。

「いいのかい、と聞くのは野暮だろうな。助手くんのご厚意に甘えるところか。ではここで少し待っていてくれ」

一人でいるときはいろいろ考え事をしてしまう。「二つ目の太陽」とは何だったのだろうか。そして、なぜ博士と僕だけが生き残ったのだろうか。何度か博士に聞いてみたことはあるが、「二つ目の太陽」は核ではないであろうことと、生き残ったのは偶然だろうとしか答えてくれなかった。博士は本当にこれしか知らないのだろうか。それとも――

「助手くん、準備ができたよ。こっちの部屋に来てくれ」

「はい、すぐに」

「この粒子は破損した時と同じ程度のエネルギーを与えることで破損部を復元してくれる。では助手くん、私がこの水晶玉を押さえているから、その金槌で思い切り叩いてくれ」

「はい、それじゃあ、行きますよ」

金槌を振り上げ、狙い澄まして水晶玉を打ちつけた。

ゴッ

――つもりだったのだが、何やら鈍い音が。

「……助手くん。乙女の手を何だと思っているのかな」

どうやら僕はやらかしてしまったらしい。

「それとも何かな。君は私を女性だとは思っていないのかな」

「い、いえ、まったくそんなことは」

「もう三十路なのに研究に打ち込みすぎて恋愛経験がなくて料理も彼氏も結婚もできない、そんな私は女性ではないと君は言いたいのかね」

「その、あの、ええと、博士はとても魅力的だと思いますし、博士の作ったカレーは美味しかったですし、女性的でないなんてそんなことは」

「ぷっ……あっはっは！ 助手くん、冗談だよ、冗談。ほら、水晶玉はこの通り元どおりだよ。あー、おかしい」

そう言って博士は部屋から出て行ってしまった。僕には博士の笑いのツボがまったく理解できない。博士から渡された水晶玉を触ってみて完全に球体であることを確認した。だけど、なんだかもとのものより小さいような気がした。

*

「助手くん、準備はできたかね」

「はい、準備万端です」

粒子の完成から約半年、博士はその粒子を使って人類を元に戻す方法を実行しようとしている。方法は実に単純だ。地球全体にその粒子をばら撒き、「二つ目の太陽」と同程度の光と熱と衝撃を与える、というものだ。既に博士と僕はつい一週間ほど前まで地球上のありとあらゆるところまで粒子を撒いてきた。あとは「二つ目の太陽」をどうするかが問題であったが、博士がその方法をなんとかしてくれただけで、こうして実行を待つだけとなった。

「では助手くん、最後に言っておかなければいけない事があるから、覚悟を決めたら聞いてくれ。君の命に関わることだ」

今日は寒くて、天気はおそらく曇りだ。

「覚悟なんかありませんよ、博士」

前に「二つ目の太陽」があった日もこんな天気だった。

「そうか、では聞いてくれ、助手くん」

突然雲に大きな穴があいて、冷たい光が地上を刺した。

「この方法を実行すれば、私たちは今度こそ死ぬ」

そのあとにはすべてを焼き尽くす炎が下りてきて、人や建物を飲み込んだ。

「すべての罪を背負って、実行をやめて、私と君がアダムとイブになる方法もある。何年かかるがわからんがね」

最後に、すべてを押し潰す風の壁が大地をまっさらにした。

「博士、この方法にかけましょう。すべてを元どおりにするんです」

そして地球は何もない星になってしまった。

「そうか、助手くんが望むのならそうしよう。君と私は運命共同体だからな」

後に残ったのは僕と博士だけ。

「助手くん、発射成功だよ」

「……博士、どうして僕たちだけ生き残ったんですか。『二つ目の太陽』って何なんですか」

「助手くん、今打ち上げたのは『二つ目の太陽』だ、本物の」

「博士、何を言っているんですか」

「助手くん、私はこの粒子を『幸せにする粒子』と名付けるよ」

「博士、質問に答えてください！」

「……この粒子はきっこう言っているんだ」

その声を聞いた瞬間、博士が僕に近づいて、柔らかいものが僕の唇に触れた。

「知らない方が幸せなこともある、とね」

強い光が降り注ぎ、劫火が地面を舐める前、博士が「すまない」と言った気がした。

juratio

加々美 翔

陽光降り注ぐ昼下がりに。澄んだ青空が広がって風は穏やか。

これ以上ないくらい良い日和だ。だが、俺にそんなのどかさに浸る余裕は……ない。

「だああ！ くそっ、なんでこの城はこんな広いんだよ！」

何を今更とどこかで声がしたが、知るか。いつもなら気にならないことも、思い通りにいかないときには理不尽に思えるんだからしょうがない。

絨毯のひかれた廊下を疾走し、階段を駆け下る。

時々すれ違う人にぶつからない様に脇を駆け抜ければ、お疲れ様などの声が背中に聞こえた。中には俺を呼び留める声もあったような気がするが、今は無理だ。あとでな。

それからまたいくつかの階段を（飛び）降りて廊下をわたり、ようやく目的地にたどり着いた。一応鍛えているとはいえさすがにキツイ。心臓が煩わしいくらい大暴れしている。喉の奥の鉄っぽさを不快に感じつつ、目の前の扉の上の『訓練場』の文字を見上げた。

「ここに……いなかったら……今なら泣けるな、俺」

軽く深呼吸をして気休め程度に息を整えてから扉に手をかける。

重たい扉を一息に押し開けた。

一応ダメだった時のことも覚悟してはいた……が、どうやら必要なかったらしい。

「だあから！ もっと本気で来いって命令しただろ、お前ら」

中央に立って呆れたような表情で声を上げる金髪の女性。

周りには憔悴しきった一般兵たちが倒れていたり、座り込んでいたり……死屍累々だ。またやったのかよ……。ため息をつきながら、この元凶たる女性に話しかけた。

「……シエル様、一体ここで何をやっておられるのですか？」

「アオ！ ちょうどいいところに。手合せしようぜ」

一つに結い上げた金髪を揺らし、手に細身の剣を握ったまま振り返るこの国の第一王女、シエル・インフィアノ。

額に軽く汗を滲ませながら、なお勝負を仕掛けてくる王女様に俺は頭を抱えなくなった。

「一般兵を6人連続でなぎ倒しておいてまだやるんですか？」

「アオと勝負するのが好きなんだ。私相手でも本気でやってくれるからな」

俺も好きですよと言いそうになって慌てて口をつぐむ。危ない危ない。シエルのこの誘いは、周りから剣術バカと評される俺にとっては麻薬だ。

「俺は仕事です。それにシエル様もこんなところで遊んでいる場合じゃないでしょう」

なかば自分に言い聞かせるように呟いて剣を取り上げる。

あからさまに残念そうなシエルの顔を見ないように手を引いて訓練場から引きずりだした。周りの兵士で気絶してない奴らがなにやら苦笑していたり、ニヤニヤしていた気がするが知ったことじゃない。

「子供ではないんですから、逃げ出すなんてことはしないでください。こっちは散々探したんですから」

廊下に出たところで手を放して彼女の部屋に向かう。シエルも俺の横に並んで歩き出す。その表情は若干不満げだ。

「逃げたわけじゃないって。ただ最近……パーティーとかばっかりで退屈だったからちょっとだけ体動かそうかなって思っただけだよ。……時間忘れてたのは謝るけど」

苦虫を嘔み潰したような顔でブツブツと呟くシエルに、少し強く言い過ぎたかなと罪悪感が沸き上がる。とはいえ、城の端から端までを探し回ったのは事実だし、この後の予定はずらせないのも確かだ。

「なんか消化不良だなあ……あ、今日の夜は見回りか？」

「いえ。今日はありません」

俺の答えにシエルの顔がばあっと華やぐ。

「じゃあさ「王女様！」

切羽詰まったような少女の声がシエルの言葉を遮った。

声のした方に目を向けると、こちらへ駆け寄ってくる侍女の姿。

「ミ、ミレイ……」

「急にいなくならないで下さい！ 探したんですよ！」

さっきの俺と同じようなセリフでつめよるミレイ。

「また訓練場に行っていたんですね？ 大事な接見の前に怪我でもしたらどうするんですか。それでなくても一言言ってからにしてください！」

「わ、悪かったって……」

ミレイの剣幕にシエルはたじたじだ。自業自得とはいえさすがにかわいそうかもしれない。ついでに時間も迫っている。

「……ミレイ、お説教はもうしたから大丈夫だ。それより王女様の支度の用意を」

「え、あ！ わ、私としたことが……済みません、すぐに用意を。アシリオ様、ありがとうございます」

お辞儀を一つしてミレイは部屋に引っ込んだ。シエルがふうっと息をはいて肩をすくめる。

「助かった、ありがと。ミレイはいい子なんだけどなあ、ちょっとまじめすぎんだよね」

ミレイの反応は侍女としては実に普通だ。いや、お前が自由すぎるんだろ、とは言わないでおく。

「……それでは俺はこれで」

「あ、ちょっと」

なんだ？ 背を向けようとしたところでかけられた声に振り返る。

「今夜は暇なんだろう？ さっきの続きな。日が落ちたら中庭」

「え、ちょ、聞いて……聞けよ」

俺の返答を待たずにシエルは部屋に入ってしまう。

拒否権は初めからない。閉じた扉の外で再びため息を吐いて、今度こそ、その場から立ち去った。

さて、早いとこ残りの仕事を片付けるか……

藍色の夜空に満月が煌々と輝いている。おかげで夜とはいえかなり明るい。ひんやりとした夜の空気の中に草を踏む音だけが響き渡る。どことなく神秘的な雰囲気さえ漂う静寂の中、約束の場所に向かう俺はといえば……再び全力疾走していた。

「んでこんな時に限って……あいつのほうが先にきちまうじゃねえか！」

中庭に向かう道を走りながら小声で悪態をつく。脳裏に浮かぶのは昼間のシエルの姿。一国の王女をあいつ呼ばわりしていいわけがないが、誰もいないとついつい素に戻るのはどうしようもない。シエルからも二人の時は敬語はやめろと命じられてるしな。曰く、幼馴染で親友の俺に敬語なんか使われても気味が悪いだけらしい。

「なんか俺……今日走ってばっかりだな」

体力づくりにちょうどいいかと半ば現実逃避しかけながら、漸く中庭にたどり着く。案の定、庭の真ん中にたつシエルの姿が見えた。昼間と同じように、金髪を一つに結び上げ、手には細身の剣を握っている。

遅れたことに対する罪悪感を抱きながら急いで駆け寄った。

「あの……シエル？」

「ん？ あ、アオ。随分遅かったな、仕事長引いたか？」

「わりい。ちょっとメイドの一人に捕まって……ってなんだよ」

なにやら意味ありげな目を向けられる。その口元には楽しげな笑みが浮かんでいた。いい予感はない。

「最近メイドさんに告白されたって聞いたけど、もしかしてその子か？」

「ちげえよ！ てかそれ誤解だからな」

実際告白されたのではなく、恋愛相談を受けていただけだ。

まさかそんな噂が広まっていて、しかもシエルの耳にも入っているなんて……一人慌てふためく俺を見てシエルが吹き出した。

「ちょ、慌てすぎ。冗談だって。相談されてたって知ってるよ。 あ、あとついでにお前が当て馬役にされてたこともな」

「いや、そっちの方はなんで知ってんだよ！」

そうなのだ。なんで俺なんかに相談するのかと思っていたら、どうやら相手の奴をけしかけるためのものだったらしく……つまり俺は当て馬。で、さっき色々あってそれを知って、その所為で今回遅れたわけだが。

「ミレイがそのメイドの子と知り合いでさ。彼女が好きな人のことは私も知ってたんだ。だからお前に告白したって噂聞いて多分そういうことなんだろうなってミレイと話してたんだ。あの子結構一途だからアオを好きになるなんてないだろうなって」

さいですか。つか、知ってるなら聞くなよ。

しかも、お前顔立ちは悪くないけど目つき悪いから結構怖がられてるし、なんてありがたくない情報を追加してくれる。

多少なりとも利用された親友に対する仕打ちがこれか。薄情な奴だ。

「拗ねんなよ、実際そんなに気にしてないくせに」

「拗ねてねえし、気にもしてねえ」

実際そこは気にしてはいない。当て馬にされたと分かった時も寧ろうまく行って良かったなと思ったくらいだ

。

「アオって何気にお人よしだよな。なんだかんだこうやって私の無茶な誘いにも乗ってくれるし」

「別にこの程度無茶とは思わねえよ」

「言ったな？ それはこれからもこのくらいの事は言ってくけど乗ってやるってことで受け取っても？」

わざとらしくにんまり笑うシエルを、肩を竦める程度で流す。

実際王女様からの命令でも親友からの頼みでも、それがそんなに無茶なものでも、シエル自身を害するものでなければ俺は聞くんだろうが。それは俺だけが知っていればいいことだ。

「まあ、それなりに。つか、そろそろ始めようぜ。先手は譲る」

「ん、じゃあもう。とりあえず一本勝負ってことで」

適度に間隔をあけて向かい合う。

お互いに左腰にさした剣を鞘から引き抜き体の正面に構えた。構えた剣越しに、視線が交差する。瞬きさえも隙になる。この瞬間が俺は堪らなく好きだった。これだから俺はいつもいつもシエルとの勝負で手が抜けない。沸き上がる高揚感。どうしようもなく血が騒ぐこの感覚。

宣言どおり、先にシエルが地面を蹴った。

間合いは一瞬でつまり、剣同士がぶつかりあって火花が散る。耳をつんざく金属音が夜の空気を震わせた。

「ああ、もうまた負けた！」

何度かの攻防の末、ギリギリではあったがなんとか勝ちを決めたのは俺だった。草の上に座り込んだシエルが悔しそうに地面をはたく。充実感と安堵感に浸りつつ、ほっと肩の力を抜いて俺も座り込んだ。時間的には数分だっただろうが、感覚的には数十分やっていた気分だ。正直白熱しすぎだ。

「駄目だなあ……最近全然勝てないわ。腹立つくらい強くなりやがって。私に負けて泣いてた頃が懐かしいっての」

「……いつの話だよ、それ。てか、お前も十分強いだろ。この前護衛だった兵士がお前が仕事させてくれないって言ってたぞ」

曰く、視察中の一行を襲おうとした奴を、兵士の剣を奪い取ってそのまま倒してしまっただらしい。あまりの早業に誰も反応できず剣を取られてしまった兵士は後で怒られたらしい。さすがにそれを聞いた時はその兵士にもシエルにも呆れた。

「いやだって、私がやった方が早かったし」

「そりゃお前は強いけどさ。こっちはお前を守るためにいるんだし。俺でもへこむからな、それやられたら」

王女だとか女だとか関係なくシエルは確かに強い。

力では勝てないことをしているから、身のこなしと小回りの良さ、そしてそれを生かすスタミナが彼女の武器だ。

大体の兵士連中は王女相手に本気で相対することはできないが、

そもそも真面目にやっても彼女に勝てるものは少なくとも一般兵にはいないだろう。だから彼女との勝負は面白い。

だが、その強さゆえに自ら危険の矢面に立とうとするのはやめてほしかった。

「自分が動けば傷つかななくてもいい人がいるって思うのは分かるけどよ。お前に何かあったら取り返しがつかないんだからな」

「取り返しならつくだろ？ 国を継ぐのはルークだし、リノもいる」

「ちげえよ」

反射的に言い返して自分でも予想外に低い声が出たことに軽く驚く。シエルも目を丸くして俺を見た。

「それは王女としてこの国のためにとって意味だろうが。俺がいったのはそういう意味じゃねえ。王女とか関係なくお前自身を守りたいって奴だっているんだよ」

なんか洒落にならないくらい恥ずかしいこと言ってる気がするが、そここのところは譲れなかった。

「それは……………そっか」

シエルは何か言いたげに口を開きかけたまま暫く無言を貫き、そして何か納得したように呟くと

「ありがとう、アオ」

微笑んだ。優しく、柔らかく。

シエルの笑った顔はいくつも知っている。でも、この笑顔は知らない。こんな綺麗で大人びた笑顔、俺は見たことがなかった。

ひときわ強い風が辺りの草木を揺らす。なぜか胸がざわついた。

何か言わないと……理由もなくこみ上げる焦燥感に口を開きかけた。が、それはシエルが急に立ち上がったことで遮られた。

「なあ、もう一本だけやろうぜ」

そうやって俺を見下ろすシエルは見慣れた方の笑顔浮かべている。

「……まだやるのかよ」

「いいだろ？ 一本だけだからさ」

しゃあねえなどと呟いて立ち上がる。再び強い風が吹いた。

月が雲に隠れたのか、辺りが少しだけ暗くなる。

「先手もう一回もらってもいいか？」

「ん？ 別に構わねえけど」

意外だなと首をかしげる。一度に二回以上勝負するときは勝ち負けに関わらず、先手は交互にするのが俺たちのお決まりだった。とはいえそこまで拘っているわけでもない。

先ほどと同じように剣を抜き、向かい合う。

シエルが動き出す瞬間を見定めるべく、神経を集中させ

「そういえばさ、私結婚するって」

え？

「で？ 動揺して負けたんですか？」

「……だよ」

「なんですか？ 聞こえませんかよお」

「だああうるせえ！ そうだよ！ んで負けたんだよ！」

たった二人しかいない訓練場に俺の苛立ちに満ちた叫びが響く。苛立たせた張本人、ラクト・アケディアはうるさいのはアシリオさんです、とか言って素知らぬ顔だ。いつも通りの無表情に再びつものる苛立ち。もう一回怒鳴ってやろうかと思ったが、それをやっても目の前の男は動じないだろう。

そもそもこれじゃ八つ当たりでしかない。

「わりい、大声出して」

「別にいいですよ。煽ったの僕ですしね。あ、つぎます？」

差し出された瓶に無言でグラスを出す。赤紫でいっぱいになったグラスはわきに置いて、テーブルの上のパンをかじる。

「硬てえ……」

「端の方食べるからですよ。これと変えますか」

パンを啜えたまま首をふる。ラクトは特に何も言わずにそれを皿に戻した。

「で？ その後どうなったんですか？」

「どうって……」

「王女様の結婚発言に動揺して負けた後です」

負けた後……。脳裏をよぎる、茫然とする俺を見下ろして、再びあの綺麗な笑顔で笑ったシエル。

——ごめんな、アオ。

「謝られた」

「ふむ」

「饑別が……欲しかったんだと」

俺たちにとっての最後の勝負。その上での一勝をあいつは俺からもらいたかったらしい。

「なるほど。じゃあやっぱり王女様はあなたを連れて行かないつもりなんですね」

侍女一人と近衛から一人。王女が隣国へ嫁ぐのについていくこの国の人間はその二人だけ。色々選考基準はあるが、王女直々の指名により選ばれる。侍女はミレイ。そして近衛兵は

「まさか僕に指名がくるとは思ってませんでした。そりゃ、近衛の中で独身なのは僕かアシリオさんしかいませんけど。実力から考えてもアシリオさんが選ばれるとばっかり」

ラクトだった。

近衛の中でそこそこ親しいこの男は選ばれたのが自分で俺じゃないことに疑問を抱き、俺に直接問いただしに来たのだ。

まさか、昨日のことを全部喋らされるとは……。

「……そりゃ、ヴィシアに俺がついていったら不味いだろ」

シエルが行くのは隣国ヴィシア。大きさはこの国と大体同じ。大国とまでいかずとも、そこそこ栄えた名のあ
る国だ。かねてよりこの国とは付き合いがあったが、今度さらに結びつきを強めるためにこの結婚が結ばれるら
しい。

「不味いって何かあるんですか？」

ピンと来ていないのかラクトは相変わらず無表情で俺を見たまま淡々と聞いてくる。そっか、こいつは知らないのか。

「俺、あの国の生まれなんだけどよ」

「え……」

ラクトが僅かに目を見開く。あれ？ これも言ってなかったっけ？

「初耳です。アシリオさんってフェデルタ家の出身なんじゃないんですか？」

「俺は養子。こっち来たのは八歳だから十二年前か？」

「そうだったんですか……でもならなおさらアシリオさんが行く方がいいと思うんですけど」

確かにこれだけなら普通そう思う。問題は俺があの子の出身ということではない。

「お前さ、俺の目どう思う？」

脈絡のない俺の問いかけにラクトが首をひねる。

「どうって……瞳、青いですよね？ 珍しいなと思います」

そう、俺の瞳は両眼とも青い。琥珀色の瞳が一般的なこの国では珍しい。それだけだ。だが、ヴィシアでは
違う。

「あの国だと青い瞳ってのは災いの元って言われててさ。それだけで忌み嫌われるって感じなんだ」

なんでも昔、あの国の王族で青い瞳の人がいきなり目から血を流して死に、その周りとかも元々青い瞳では
なかったのに急に瞳の色が変わり、同じように死ぬとかいうことがあったらしい。原因のわからない現象を誰と
もなく呪いと呼び、青い瞳は災厄をもたらすものとして忌み嫌われた。

「家族の中でこんな俺だけなんだよ。でもって周りの奴らの態度がすげえの。相手はガキだったのにさ。俺
の両親は必至でかばってくれたけどそれも限界があって、しょうがないから父親の知り合いだったフェデルタの
家に引き取られることになったわけだ」

「そんなことが……」

「ちなみにこっち来て暫くして、その呪いが何とかっていうれっきとした病気だって発見されたんだけどな」

十二年の歳月は伊達じゃない。今じゃちゃんと治療法もあるし、検査もできる。ちなみに俺も受けたけど何に
もなかった。

「じゃあもう呪いなんて言われることはないんじゃないか……」

多分あからさまに忌み嫌われることはないだろう。実際のところが分からないけれど。

「……アシリオさんを連れていてからって自分が周りから色々いわれることを王女様が気にするとは思えません
。それは貴方もでしょう？ 連れて行かないのには他にも理由があるのでは？」

「……かもな」

何か言いたげなラクトの視線が痛い。

「アシリオさんはいいんですか？ それで」

「いいもなにも一近衛兵が王女様の決定に逆らえるかよ」

むしろなんでこいつはそんなに俺に構うんだ？

「お前こんなにお節介だったっけ？」

「まさか。僕は基本自分本位な人間です。僕に利益がないのにアシリオさんをけしかけたりなんかしませんよ。正直なところですね。僕は行きたくないんです」

至極真面目な顔で、とはいってもほとんど無表情なのだが、ラクトは言い切った。あまりの潔さにこっちは二の句がつけない。

「王女様の判断に異を唱えるのは不忠でしょうけど、今回はアシリオさんが行くべきだと僕は思います。僕に貴方ほどの実力も王女様への忠誠心もありませんから」

「忠誠心……ね」

「実際王女様のことどう思っているんですか？」

シエルの事をどう思ってるか。そういえば考えたことなかった気がする。俺たちの関係。幼馴染、親友、主従……

——綺麗な色だねっ

「……無理だ」

言い表せる言葉は結局見つからない。

ぐしゃぐしゃに混ざりまくった気持ちじゃ、名前をつけるのも難しい。俺の足りない頭じゃなおさらだ。

「まあ、でも……」

混ざりきって原型さえとどめない気持ちでも共通してる一つくらいは俺にもわかる。

「あいつが何よりも大事ってのは確かだな」

シエルには笑ってほしいし、幸せでいてほしい。

「とりあえず、一回話すだけでもやってみるわ」

「そうですか」

グラスの中身を飲み干して立ち上がる。

「いい結果を期待してます」

ちょっとだけ薄く笑みを浮かべたラクトが空っぽになった俺のグラスに自分のグラスを触れさせる。ガラス同士のぶつかる軽い音がなった。

「おう。なんか色々ありがとな」

「いえ、お礼を言われる筋合いはありません。さっきも言いましたが僕は僕の都合のために動いただけなので。それにまだどうなるかわからないですから」

最後まで淡々と言葉を紡ぐラクトに苦笑しながら、今度こそ部屋を出た。廊下へ差し込む光はすでに橙に染まっている。

「うわ、夕方かよ……」

夜は結婚を祝したパーティーがある。そうなったら主役であるシエルを捕まえるのは至難の業だ。俺も仕事あるし。

「今の時間なら部屋だな」

そう見当をつけて歩き出した、その時だ。

「アシリオ様！」

廊下の向こうから縋り付くような声。ミレイだ。

かなり慌てた様子でこっちへと駆けてくる。嫌な予感がした。

「あ、あの今訓練場から出てこられました？」

「そうだけど……どうしたんだ？」

「王女様が……どこにもいらっしやなくて」

的中する嫌な予感。

思わず見えるはずのない空を仰いでため息を吐いた。

「またですか……」

「やっぱりアオが探しに来たんだ」

シエルがいたのは城の北塔の最上部。よりもよって城の中で一番辺鄙な場所で、普段着のワンピースに身を包んだシエルが夜風に吹かれていた。

階段を駆け上ってきた俺をみて、苦笑するシエルにふつつよ怒りが沸き上がる。

「お前……探す方の身にもなれよな」

さすがに北塔なんてラクトに指摘されなきゃ気が付かなかった。それぐらい普段行くことのない場所なのだ。

「近衛のアケディアだっけ？ がここだったら大体見つからないからおすすめだって」

あの野郎……何食わぬ顔して発案はお前かよ！

「ラクトと話したのか？」

「自分を連れていくの考え直してくださいって直談判されちった。あいつ中々大した奴だな」

何してんだよ、あいつ。怖いもの知らずか。

「でな、多分この後アオが直接話に来るからそれ聞いて考えろっていわれたんだ。来たってことは……なんか言いたいことがあるんだよな？」

なんか……思った以上に俺はラクトの手の上で踊っている感じがしてならない。とはいえ、ある意味ここまでお膳立てしてくれた以上乗らないわけにはいかないだろう。

「シエル」

ぼいっとシエルに向かってそれを放る。

「え……私の剣？」

手の中に納まった自分の剣を見てシエルが目を丸くしている間に、俺は剣を抜いて彼女の真正面に立った。

「とりあえず俺があげたという餞別を返してもらおうか？ あれはあげたっていわないぜ」

「ちょ、まさかここで勝負すんのか？ 今、剣やる格好じゃないってば」

慌てふためくシエル。俺は意に介さない。

「全然動けないわけじゃないだろ？ パーティー用の正装だったらやめたけどな」

あれは高いから弁償できないと呟くとシエルが引きつった笑みを浮かべる。昨日の仕返しをされてると気づいたらしい。

「ああもう、悪かったよ……餞別は返すからさ」

シエルが降参と両手を上げる。俺も剣をしまった。

「折角アオとの勝負勝ち逃げしようと思ったのにな」

「勝ち逃げもさせねえし、大体勝負事態最後なんかにしねえよ」

シエルが黙り込む。俺の言わんとしていることは分かったらしい。

「連れて行かないつもりだったんだけど？」

「俺もな、そのつもりだったぜ」

ついさっきまでは。

「でもやっぱ無理だわ。お前危なっかしいからさ」

自分のために誰かが傷つくの嫌いだから、守られるのが苦手で。だから守られる必要がないくらい強くなりた

がる。

「だったらお前を守るにはお前より強く居続けなきゃダメじゃねえか。それはラクトには荷が重いと思うぜ」
結局幼馴染だろうが親友だろうが、俺とシエルの関係は一生王女と一近衛兵でしかない。気づきたくなくて、気づかないふりをしていても絶対的な隔たりが俺たちの間にはある。

笑わせたい、幸せにしたい。は俺が望んでいいことじゃない

「だからお前を守る役目は……俺にくれ」

しばらくの沈黙。ゆっくり目を伏せたシエルが泣きそうな声でつぶやいた。

「だから……連れていきたくなかったんだ。いつかそうやって私を守って私の前から消えそうだから……」

顔をあげたシエルは涙目で俺を睨みつける。

が、それも一瞬。すぐにまた視線は下をむく。

「どうやったって守られる立場からは逃れられないのに、わがままだよな。ごめん」

俺の望みとシエルの望み。唯一許される王女と兵士の関係の上でさえ俺たちの望みは平行線だ。

「じゃあ、命じろよ」

気休めでも俺にはこれしか選択肢はない。

「お前が望めば、俺はお前が生きてる限りお前の前から消えたりしないって約束する。お前を守って死んだりなんかしない。そもそも死んだらそれ以上守れなくなるしな」

「……アオってほんと……馬鹿だよな」

シエルがうるんだ瞳のままで笑う。我ながら無茶苦茶言ってる自覚はある。守れるかなんてわからない。そんな保証はどこにもない。それでも

「じゃあ……命じる。アシリオ、お前は絶対生きて私を守れ。

誓えるな？」

「……仰せのままに、王女様」

こいつが笑っているならそれでいいかと思うのだ。

strascinand (七乙女昴)

s t r a s c i n a n d

七乙女昴

「私、結婚することに決めたの」

グラスに残っていた少量のカシスオレンジをクイツと飲み干し、彼女はそう言った。彼女にしては、やけに真剣な眼差しだった。

「そっか。とうとう結婚するんだね」

グラスに残っていたヴェスパー・マティーニをグイツと飲み干し、僕はそう言った。僕にしては、やけに弱々しい声だった。

——おめでとう。

その一言がどうしても喉から出てこない。……いや、心に浮かんでこない。

「どうしたの？ 眠いの？」

彼女が下から覗き込むようにして尋ねてくる。彼女の視線の先に手を当てると、妙に冷たかった。……濡れていた。

「うん、ちょっと最近寝不足でね……」

本当は解っているくせに、彼女は敢えてとぼけた。その厚意が嬉しくもあり悲しくもある。だから僕は、嘘を重ねた。

「ふふっ、わざわざ私の話を聞いてくれてありがとう」

彼女がニコリと僕に微笑む。相変わらず綺麗だ。

昔から変わらない魅力的な笑顔を直視することができず、僕はグラスに注がれている液体へ目を逸らした。

泣かないと決めたはずなのに、どうして涙が零れてしまうのだろう。そんなものはとうの昔に流しきったはずなのに。

三杯目のヴェスパーは、リレ・ブランの甘味と苦味がよく現れていた。

*

僕と瑞姫は、所謂『幼馴染』という間柄だ。同じ町で生まれ、同じ校舎で学び、同じ瞬間に大人になった。

僕達は仲が良かった。

四六時中というわけにはいかなかったが、基本的にはいつも一緒だった。登校、昼休み、下校。クラスが違って、これらの時間の殆どは一緒に過ごしていた。

休日は休日で、よく一緒に出掛けた。二人で買い物をしたり、映画を観に行くのはしょっちゅうのことだった。互いの家に泊まることだってあった。

そういう光景を、僕達は何度も同級生に目撃された。

その度に『二人は付き合っているのか？』と尋ねられた。その問いに対し、僕達は曖昧な笑みで答えていた。多分、否定したことはお互いに一度も無かったと思う。

でも、その噂は真実ではなかった。僕達は互いに告白したことがなかったのだ。限りなく近い距離に居ながら、恋人というラベルは持ち合わせていなかったのだ。ただの一度も。そして、これは現在に至るまで変わらない、純然たる事実だ。

僕は瑞姫のことが好きだ。過去形ではなく、現在形で。

瑞姫は僕のことを好きでいてくれたと思う。現在形ではなく、過去形で。

僕の初めては、殆ど瑞姫だった。

瑞姫の初めても、殆ど僕だった。

ファーストキスは中学二年生の冬だった。今でもハッキリと憶えている。あれは一月の下旬だった。瑞姫の隣で冷える両手を擦り合わせていた下校中、『寒いね』という一言が同じタイミングで互いの口から零れた。そのことに驚き、僕は瑞姫を見た。瑞姫も、僕の方を見た。

……目が合った。

その瞬間、世界は僕と瑞姫だけのものになった気がした。見つめ合った瑞姫との距離は想像以上に近く、黒真珠のような瑞姫の瞳には僕だけが映っていた。

……気付いたときには、互いに唇を寄せていた。

初めて身体を重ねたのは高校三年生の夏休みだった。瑞姫の家で勉強会をしていた日のことだ。夕方を過ぎた辺りから大雨が降り、夜には雷鳴が上空で轟いた。瑞姫の両親は旅行中で、家には僕と瑞姫しか居なかった。だから僕は、瑞姫の『一人にしないで』という懇願に頷き、急遽泊まることに決めた。僕のトラベルセットとパジャマは瑞姫の家にも昔から常備してあり、徒歩三分の距離を往復する必要は無かった。

シャワーを浴び終えて部屋に戻ってみると、瑞姫は布団の中に隠れていた。窓の外の雷光に堪えられなくなったらしい。そんな様子の瑞姫を僕は放っておけなかった。瑞姫が寝るまで、と思い、盛り上がった布団の中に入り、話しかけながら赤子をあやすように背中をさすった。五分ほどそうしていたと思う。その後、一際大きい轟音が僕達を襲った。その音に意識を奪われた瞬間、唇を押し付けられた。

……それからは、瑞姫の温もりと匂いを記憶することしか頭になかった。気付いた時には、窓の向こうにあったはずの光や音は既に何処かへ消えていた。

改めて振り返ってみると、明らかに、客観的には、付き合っていたように見える。むしろ、その域を超えていた気さえもする。それでも、僕達は交際していたわけではなかった。身体を重ねていたとしても、だ。

互いに『好き』と言ったことは一度も無かった。

互いに『愛してる』と言ったことも一度も無かった。

互いのことについて訊かれた時、僕達は決まって、『一緒に居ると落ち着く』と答えていた。二人の関係を言い表す上で最も適切な表現だと当時の僕は思っていた。

話を戻そう。

『付き合っているのか?』という問いにイエスともノーとも答えなかった僕達は、結局『幼馴染カップル』や『姫様と従者』として周囲に認識されていた。

瑞姫は綺麗だ。僕の鼻根目無しに、客観的に見ても綺麗だ。セミロングの艶やかな黒髪に、モデルのような体型。そして、誰の目にも魅力的に映るあどけない笑顔。瑞姫は高校時代に何度も告白されていた。しかし、瑞姫は一度も彼氏を作らなかった。無論、僕も彼女を作らなかった。

高校卒業後、とうとう僕達は離れてしまった。僕は地元の国立、瑞姫は関東の私立大学に進学した。簡単に行き来できる距離ではなかったのも、高校時代と比べて会う機会は極端に減り、今まで年に数百日だったものが僅か数日に激減した。それでも、週末になれば電話やメールで連絡を取り合っていたし、瑞姫が帰郷してきた時は必ず会っていた。物理的な距離があったとしても、心は離れていないのだと感じられた。

そういうこともあって、僕は大した根拠も無く、瑞姫とはいつまでも繋がっていられるのだと思っていた。

*

大学生になってから二度目の夏休みを迎えた。その初日、早朝四時三十七分。蝶の羽ばたきとなる電話がかかってきた。

それまで熟睡していた僕は一刻も早くその騒音を止めたくて、眠い目を擦りながら電話に出た。しかし、瑞姫

の泣き叫ぶような第一声を聴いて一気に目が覚めた。

「どうしよう、みなとお！ わたし、わたしい……っ！ ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

最初はドッキリか何かだと思った。だけど、瑞姫の声色は明らかに懇願の意を伴っていて、冗談や嘘ではないことを物語っていた。

「瑞姫、よく分からないけど落ち着いて！ とりあえず、深呼吸しよう」

僕の方も、突然のこと過ぎて動揺していた。とにかく、電話をかけてきた理由と事情を聞きたかった。

「うん、うん……」

瑞姫は泣きながら器用に深呼吸を始めた。それに合わせて、僕も深呼吸をした。途中で喉の渇きを感じ、枕もとにあったペットボトルのお茶の残りを一気に飲み干した。

三分間ほど深呼吸をすると、瑞姫の声もだいぶ聞き取れるようになった。僕の方も、十二分に眠気が飛んだ。

「瑞姫、落ち着いた？」

「うん……もう大丈夫。だいぶ落ち着いた。ありがとう」

電話越しに、瑞姫が歩く足音と車の走行音が聞こえた。

「瑞姫、今、何処に居るんだい？」

「……今は外に居る。ごめんね、湊人。勝手に電話掛けて、勝手に泣いちゃって。これからすぐ家に戻るから、ちょっと電話切るね。五分くらいで戻れるはずだから、部屋に入ったらすぐに電話かけ直す。こっちから電話しておいて何様だよって感じだけど、一回切るね。本当、ごめん」

「僕は別に構わないけど……八分経っても電話が鳴らなかったら、僕の方からかけるからね」

「うん、大丈夫。六分以内にかかけ直してみせるから。それじゃあ、また」

瑞姫との回線が切れた。時計を見ると、針は四時四十二分を示していた。ベッドから起き上がり、洗面所へ移動して冷水を四度顔にかけた後、タオルで拭いてから両手で頬を何回か叩き、気合を入れた。瑞姫があそこまで取り乱したことはそれまで無かった。だからこそ、僕は酷く不安になった。

『ごめんなさい』という言葉の意味を考えながら、僕は電話を待った。約束通り、五分後にコール音が鳴り響いた。

……瑞姫は涙を堪えきれなかったが、僕は堪えきった。瑞姫との通話中はなんとか堪えきれた。

瑞姫の話を纏めるところだ。

――サークルの打ち上げ（夏休み記念という名目らしい）の後、先輩宅で二次会が行われた。そこで酔い潰れた瑞姫を送り届けるために、男女一人ずつの先輩が付き添った。ところが、女先輩の家の方が二次会の会場から近くにあり、先に女先輩が退場。そこで女先輩と別れてからの記憶が全く残ってもなく、目覚めると瑞姫は男先輩の家の布団で寝ていて、男先輩らしき人物のシャワーを浴びる音が聞こえて……そして事態を理解し、部屋を飛び出して僕に電話を掛けた。

ベッドに腰掛けると、抜けきった眠気の代わりに酷い疲労感が身体に纏わり付いていた。瑞姫の嗚咽が、鼓膜から離れなかった。瑞姫のもとに駆けつける余裕も気力も無かった。

それから約一時間、僕はベッドから立ち上がれなかった。

日付が変わるまであと三十分ほどという時間に、再び瑞姫からの電話があった。

瑞姫の話を要約するところだ。

――先輩とやらかしたというのは瑞姫の勘違いで、昨晚は何事も無かったらしい。

今朝のテンションとは打って変わり、昨晚の真相を饒舌に語る瑞姫の声色に、この時の僕は、ただ無性に安堵と呆れの感を抱くだけだった。

この事件を境に、瑞姫からの近況報告の内容は少しずつ変化していった。

増田康弘、という名前をよく見聞きするようになった。

彼も瑞姫と同じサークルのメンバーで、二次会が終わるまで同じ会場に居たらしい。そして、瑞姫の誤解を解くために男先輩との仲介役を引き受けたそう。彼のおかげで真相が掴めた、と瑞姫は嬉々として語っていた。

彼は僕達より一歳年上で、爽やか系のイケメンだ。ただ、彼の性格や趣味はあまり知らない。……いや、知ろうとしていないだけなのかもしれない。彼の存在を認めたくないのだ。

夏休みという、何をやるにも時間的余裕がある時期のせいなのか、瑞姫が彼とどんどん親しくなっていく様子は、電話越しでも、メールの文面からでもハッキリと伝わってきた。

瑞姫曰く、『趣向が合う』らしい。それは、僕には一度も言ってくれなかった言葉だった。

瑞姫曰く、『料理も上手』らしい。それを聞いて以来、僕はコンビニ弁当を買わなくなった。

瑞姫曰く、『腹筋が凄い』らしい。それを聞いた翌日、僕はランニングシューズを買った。

瑞姫曰く、『一緒に居ると落ち着く』らしい。それを聞いた瞬間、僕の中で不動だったはずの何かが崩壊した。

お盆の時期。瑞姫がこっちに戻ってくるはずだった。

——今年バイトが忙しくて戻れそうにない……

夏の間、瑞姫とは一度も会えなかった。

*

長く、苦しかった夏休みが終わり、十月になった。ようやく残暑から解放され、秋の匂いを感じ取れるようになった。

「湊人先輩、こんにちは。今日も相変わらず素敵ですね」

昼食を食べに学生食堂へ向かっていたところ、皐月——僕の一つ下の学年で、同じサークルに所属している後輩——が僕の方へ駆け足で寄ってきた。

皐月は少々変だ。いや、少々どころではないかもしれない。少なくとも、僕は今まで赤い糸を盲信している女の子を他に見たことがない。曰く、『一目で運命の人だって判りました』らしい。何度僕が断ってもめげずに告白してくる。最近では、挨拶代わりに『付き合しましょう』と言ってくる始末だ。おかげで、サークル内ではワンペアとして周囲から扱われるようになってしまった。お前のせいで、と叱ってやりたい。

しかしながら、皐月は可愛い。小柄な体格に庇護欲をそそる愛らしい仕草は男心をくすぐる。手入れの行き届いたセミロングの黒髪とまだ幼さの残る顔立ちは、美少女という表現がしっくりくる。ニュアンスグレーのカーディガンに白のミニスカートと黒タイツがよく似合っており、今日もすれ違う男共の視線を集めている。それを十二分に解っているはずなのに、彼らには流し目一つやらない。本当に、僕を悩ませるほどに一途なのだ。

「やあ、皐月。ちょうど良かった。夕方になったら連絡を取ろうと思っていたんだ」

「おお、先輩からお誘いですか！ つまり……アレですか？ 遂に私のアタックに陥落しちゃいましたか？」

僕のツッコミを期待しているのか、皐月はわざとらしくオーバーにのけぞった。平常ならその要望に応えるだろう。

「ああ、そういうことだ。だからさ、皐月。今晚空いてる？」

でも、今日の僕は、いつもとは一味違った。

「ど、どうぞっ」

「……やっぱり皐月も女の子なんだね」

「あ、あんまりジロジロ見ないでください！」

「なんだよ、さっきまで一人で悦に浸ってたくせに」

「な、何と言いますか、その……今さらながら見られるのが恥ずかしくなりました……」

「そう？ 僕は綺麗だと思うよ」

「あ、ありがとうございます。汚れないように一応の手入れもしていますので……って、勝手に触らないでください！」

「ん？ ああ、ごめんな。可愛いなあと思って、つい」

「つい、じゃありません！ 早く仕舞ってください！」

時刻は午後九時二十八分。場所はとあるマンションの一室。室主の名前は、川田皐月。そこで僕が何をしようとしていたかという……

「中じゃなくて、外に出した方が良くない？」

「結構です！ このコ達は観賞用なんですから！ 埃を被らないように普段はガラス棚に仕舞ってあるんです！」

簡単に言えば、宅荒らしだった。

落ち着ける場所で話がしたい、と僕が言ったら、皐月はすぐに場所を提供してくれた。確かにここなら誰にも聞かれずに落ち着いて話せる。若干居心地が悪いのが難点だが。

皐月の部屋は、何と言うか、思っていた以上にファンシーだった。ヌイグルミの数がやたら多い。犬、猫、鼠、熊に……ゴーヤ？ これは沖縄のご当地キャラなのだろうか？

その中でも特に目を惹くのは、ガラス越しに見える五体の熊のヌイグルミだ。大きな二頭の上に小さな三頭が配置されていて、家族写真のように並べられているのが微笑ましい。「無駄に緊張していたのが馬鹿らしくなってきました」

「いや、女の子が男を部屋に上げるときは緊張しなきゃ駄目だよ。防犯的な意味で」

「少なくとも大学生のうち、湊人先輩以外の男性を連れ込む気はありませんので、モーマntyですよ」

ベッドにドサッと勢いよく腰掛け、溜息を吐くようにして皐月はそう言った。僕だけ、という言葉が無性にありがたく感じる。皐月の何気ない一言に、僕は何度も救われてきた。

「さて、そろそろ本題に入ろうと思います」

背筋を伸ばし、姿勢を正す。瑞姫とのことは誰にも話したことがなかった。だからこそ、皐月には知ってもらいたかった。ありのままの僕を受け止めてほしいと思った。

「ああ、そうでしたね。それで、湊人先輩の言う`話、というのは、どういった内容なのでしょう？」

「どういった……かあ」

失恋？ 妄執？ 告発？ どれも適切でない気がする。

「そうだな……僕って格好悪いよね、っていう話、かな」

「ふむ……それは興味深いですね。いいでしょう！ この私、川田皐月が、湊人先輩の`格好悪い、話を全て`格好良い、話に変換してあげましょう！」

よく分からないテンションだが聞いてくれるらしい。下手に構えられても話しにくいので、それはそれでありがたい。

僕は頭に浮かんだことを思いつくままに口に出した……

「ふむ、なるほど。最近の先輩に元気がない理由が良く解りました。それと、私の告白を頑なに拒む理由も」

似合わない腕組みのポーズをしながら、皐月は一人でうんうんと頷いて納得している。

一度語り始めたら、止められなかった。

正直、ドン引きされるかもしれないと思っていた。語っている途中、自分のことながら気持ち悪い奴だと思った。そのくらい、痛々しいことまで語ってしまった。

「一つ、質問です」

皐月が人差し指を立てて僕の方を向いた。

「何だい？」

「湊人先輩は、その、瑞姫さんって人のことをどう想っているのですか？」

「どう、って？」

「あまり深く考えないでください。最初に頭に浮かんだワードで答えてくだされば結構です」

そう言われると、適切なワードがなかなか浮かばない。『一緒に居ると落ち着く』関係では既になくなってしまった。少なくとも僕にとっては。僕は今、瑞姫のことをどう想っているのだろう。目を瞑って暫くの間考え込んだ。

「……特別」

無意識に僕はその言葉を口にしていて。そう、瑞姫は特別なのだ。僕にとっては唯一無二の特別な存在なのだ。

「特別、ですか……」

皐月は人差し指を額につけ、目を瞑って考え込む。

似合わないポーズを十秒ほど続けた後、皐月は顔を上げた。

「湊人先輩は多分、順序を間違えたのだと思います」

「うん？ どういうことだい？」

思わず聞き返す。皐月は大きく深呼吸をし、それから、ゆっくりと、確かめるような物言いで語り出した。

「湊人先輩は、その、瑞姫さんという方と想いを確認し合ったことが無いんですよね？」

「ああ、残念ながら。それが？」

「瑞姫さんはきっと、湊人先輩の強すぎる想いに応えられる自信が無かったんですよ。だから、湊人先輩の前から逃げ出した。増田さんに逃げてしまった」

皐月はここで口を閉じた。

「つまり……僕が重すぎたってということ？」

「……おそらくは。瑞姫さんは、湊人先輩の想いを受け止めきれない自分を肯定してくれる誰かが欲しかったのだと思います。湊人先輩以外の、誰かが」

「……ねえ、皐月」

「なんででしょう？」

「僕って、最高に格好悪いね」

「いいえ。一人の女性を一途に`愛し、続けられる湊人先輩は、私にとっては世界一格好良い男性ですよ」

日付が変わった瞬間、瑞姫から電話が来た。内容は、増田康弘と付き合うことになった、という旨のものだった。

＊

結婚式に出席するのは初めてだな、とふと思った。やっぱり、僕の`初めて、はいつも瑞姫が奪っていくようだ。

ザワザワとしている会場には、知っている顔と知らない顔が半々くらいだ。いや、僕が憶えていないだけかもしれないので、実際は七割くらいが知り合いなのかもしれない。

――まもなく準備が整います。参列者の皆様は、着席してお待ちください。

先程までのざわめきが嘘のように静まり返る。腕時計で時間を確認すると、入場の予定時刻まで二分を切っていた。

――それでは、これより新郎、増田康弘と、新婦、瑞姫の挙式を行います。

神父が口を開く。いよいよ、式が始まるのだ。

――新郎は入堂してください。

康弘さんがゆっくりと歩いてくる。その歩く姿はとて凛としていて、様になっていて、どうしようもなく、羨ましい。

――それでは、新婦、入堂してください。

いよいよ瑞姫がやって来る。興奮のあまり、指先が震え始める。でも、そんな些細なことに注意を向ける余裕はない。

扉の向こうから、光をバックに瑞姫の姿が見え始める。少しずつ、その輪郭は鮮明になる。そして……

瑞姫はまさしく天女だった。

純白のウエディングドレスに身を包んだ瑞姫に、僕は目を奪われる。瑞姫以外のあらゆるモノが意識から消える。

呼吸が上手く出来ない。

艶やかな黒髪がヴェールに覆われている。

僕と同じ庶民とは思えないくらい、ドレスが似合っている。

瑞姫が一步進むごとに世界も動く。

瑞姫が一呼吸するごとに空気も動く。

この世界は、完全に瑞姫のものだった。

この瞬間まで、と最初から決めていた。

二人の顔が近づく。多分、いや、間違いなく、瑞姫の瞳には康弘さんだけが映っている。

それを確認してから、僕はゆっくりと瞼を閉じた。

瞬間、世界はハッピーエンドを迎えた。

*

あれから三年が経った。そう、三年も経った。

三年もあれば、様々なことが変わる。

たとえば、職場での評価。お供ではなく、一人分の戦力として勘定されるようになった。

たとえば、身体。なんだかんだ地道に頑張り続けていたので、体脂肪率は一桁になった。

たとえば、料理。『私が作るよりも湊さんが作った方が美味しい』と言って作ろうとしない彼女のために、僕は毎日二人分の料理を作り続けている。

たとえば、所帯。僕は今、彼女と同棲している。ただいま、と言える喜びと、お帰り、と言われる嬉しさを日々噛み締めながら、僕は順風満帆な生活を送っている。

首相が変わったり、新しい電子機器が発明されたり、新しいテーマパークが造られたり等々、日本も色々変わった。

技術の進歩により、画面越しとは言え、彼女とはいつでも顔を見ながら話すことが出来るようになった。

それはそうと、最近、貯金を少しずつではあるが頑張っている。目標金額には、あと二カ月で到達する算段だ。

そう、あと二ヶ月なのだ。その時に、僕の一世代の大舞台が訪れる。

二ヶ月後、僕は、彼女に、プロポーズするのだ。

他でもない、僕自身の意志によって。

「ん…おはよお…みあとしやん……」

上半身だけを起こし、彼女はまだ眠そうな目を擦りながら朝の挨拶をする。彼女はいつも、僕が朝食を作り終わったと同時に起きる。彼女は嗅覚が優れているのだろうか？

彼女——皐月が朝に弱いということは、同棲をし始めてから、つまり、約三年前に知った。

そう、あれから三年が経った。

皐月と付き合い始めたのは、瑞姫と康弘さんの結婚式が執り行われた翌日からだ。その時以来、皐月は僕のことを『湊人さん』と呼ぶようになった。そして、その二ヶ月後には、僕達は同棲をし始めた。両親には特に反対はされなかった。それから約三年、僕達は仲睦まじく暮らしている。

僕と皐月はあらゆる面で相性が良かった。皐月が僕に絶対的な好意を持っているせいかもしれないが、皐月は僕のどんな不手際も笑い飛ばしてくれる。そんな底無しの包容力を持つ皐月に僕は救われ、惹かれ、魅了された。誰の目から見ても、順風満帆な二人暮らしをしていることは明らかだった。

「おはよう、皐月。朝ご飯できたから顔洗ってきな。いつも通りだけど、焦点が定まってないよ」

「ふあい……行ってきまふ……」

フラフラとした足取りで、皐月は洗面所に向かう。今となっては、もうすっかり見慣れてしまった光景だ。

この間にコーヒーを準備する。僕のカップにはコーヒーだけを注ぎ、皐月のカップにはコーヒーと牛乳を七対三の割合で注ぐ。隠し味は、ひとつまみ分の砂糖だ。

これで朝食の準備は完成した。トースト、ベーコンエッグ、大切りのトマトにコーヒーというシンプルなメニューだけど、朝は何かと忙しいので仕方ない。

洗面所からトコトコと戻って来る皐月が座るまで待ち、それから、二人で合掌する。これもまた、いつもの光景だ。

——いただきます。

窓の向こうに目を遣ると、そこには雲一つない青空が映っていた。いつも通りの朝だ。今日も一日、頑張ろう。

仕事が終わりに、午後六時。駅前へと続く大通りに足を踏み入れたと同時に、右ポケットの中で携帯が震えているのを感じた。取り出して確認してみると、ディスプレイには半年振りに目にする名前が映っていた。

久しぶり、半年振りくらいかな？ 元気してた？

仕事はもう終わった？ まだだったらゴメン。

なんで突然メールしたかって言うと、実は、ちょっと相談したいことがあってね……

取り敢えず、都合のつきそうな日があったら教えて。

場所と時間は……いつものので良いよね？

「で、相談したいことって何だい？」

グラスに注がれたマンハッタンを一口飲んでから、目の前の女性に尋ねる。この店の味は、昔から全然変わらない。隣に座っている女性は、先程から左右の人差し指でグラスをトントンと叩いている。多分、苛立ちではなく、躊躇いだ。

「あの人、浮気……しているみたいなの」

視線を橙赤色の液体に落としたまま、女性はそう言った。今さら気付いたが、女性は珍しくネイルをしていた。

「あの康弘さんが？ 何か証拠でもあるのかい？」

女性――瑞姫はこくりと頷く。両目は前髪で隠れてしまい、その表情を伺うことは出来ない。

「最初はね、私の思い込みかなって思った。上司との付き合いで、`お店、に行く機会だってあったらろうし、一夜の関係にわざわざ口酸っぱく言う必要もないかなって思ってた」

瑞姫がグラスの中身を呷る。アルコールに弱い瑞姫にしては、だいぶペースが速い。セーブさせるべきだろうか。

「でも、見ちゃったの。泰宏さんがシャワーを浴びている間に届いたメールを。別に、見ようと思って見た訳じゃないのよ？ ただ、偶々視界に入っちゃったから、つい……」

テレビでよく見るような話だ。夫がシャワーを浴びている間に妻がこっそり携帯を覗く。そこには、妻も知らない女の名前が表示されていて……

「そこには、『山口所長』と表示されていたわ。まあ、その人とのやり取りを遡ったら『美緒』っていう本名が出てきたけど。そして、そのメールには……『次の出張はいつですか？』って書いてあったの」

「`出張、か……それで、康弘さんに`出張、の予定はあるの？」

「ええ、先週聞いたわ。来週の金曜からで、日曜の朝に帰って来るって」

「……康弘さんに直接このことを聞いたことは？」

「するわけじゃないじゃない、そんなことお」

瑞姫は重い溜息を吐き、新たに注がれたカンパリ・オレンジを再び呷る。もうこれで七杯目になる。

「それが原因で離婚することになったらあ、って考えただけで震えが止まらないだもん」

瑞姫の瞳は既に焦点が定まっていなかった。当たり前だ。ただでさえ酔いやすい体質なのに、普段の倍以上のペースでグラスを空にしているのだから。

「そりゃそうだよね……その後のことを考えたら、誰だって不安になるよね。でも、だからと言って……瑞姫？」

瑞姫は船を漕ぎ始めていた。もう潰れてしまったらしい。

そう言えば、以前にも瑞姫が酔い潰れたことがあった気がする。そうだ、思い出した。酔い潰れた瑞姫をタクシーに乗せて家まで送り届けたら、『妻を送ってくれたお礼だ』と言って、康弘さんが車で家まで送ってくれたことが二年前に確かあった。あの時は六杯目でダウンしていたと思う。

妙な懐かしさを感じつつ会計を済ませ、まともに歩けない瑞姫の肩を支えながらタクシーを呼んだ。

今日の瑞姫の香水は、普段よりも少し甘い匂いがした。

タクシーから降りた僕達を待ち構えていたのは、真っ暗な一軒家だった。康弘さんは既に眠っているのだろうか？

「……あの人はねえ、今週も`出張、なんだよお」

さっきまでうんともすんとも言わなかった瑞姫が呂律の回らない口でそう言った。いつから二人はこうなっていたのだろう。全然知らなかった……知ろうとしてなかった。

「……家の鍵、持ってる？」

「んーとねえ……はいっ」

瑞姫のポーチから鍵が出てくる。それを拝借し、玄関を開けて瑞姫を家の中に押し込む。とにかく、横になれる場所に連れていかないと。

増田家の玄関をくぐるのは、実はこれが初めてだった。

「瑞姫、台所は何処？」

「ええっとねえ……コッチ？」

瑞姫の頼りない足取りの後ろに続いて歩く。

「ココがリビングでえ、コッチが台所」

スイッチを押してリビングの明かりを点けると、驚くほど物が少ないことに気付いた。僕と皐月の部屋とは大違いだ。

取り敢えず瑞姫を中央のソファに寝かせる。それから、左手側にある台所に向かい、食器棚からコップを取り出して水を汲む。一応、二杯分用意して、リビングに戻る。

「ほら、水だぞ。ゆっくりで良いから飲みなさい」

ポーっとしている瑞姫に水を差し出すと、瑞姫は素直に従い、両手でコップを握ってコクコクと飲み始めた。その間に、僕は皐月に電話をかける。

「あつ、湊人さん。今日はちょっと遅いですね……もしかして、何かありました？」

こういう時に察しが良いのが本当に助かる。

「ああ。今、増田家に居るんだけど、康弘さんが出張で居なくてね……それで、酔い潰れた瑞姫を寝かしつけるまでもう少しかかりそうなんだ」

「なるほど、了解しました。私は先に休日の夜を満喫していますので、帰ってきたら起こしてください」

「ああ、分かった」

「それでは、一度お休みなさい、ということで」

「ああ、お休……っ！」

「湊人さん？ どうしました？」

「あ、いや、なんでもないよ。瑞姫がちょっと吐きかけただけだから」

「……相変わらず酔い易いんですね、瑞姫さん。取り敢えず、旦那さんが不在なら、簡単な介抱はしてあげてください」

「あ、ああ。そのつもりだ。それじゃあ、また後で」

電話を切る、と同時にバツと後ろを振り返る。本来ならありえない感触と匂いが先ほど僕に触れた。

……下着姿の瑞姫が、泣き出しそうな目で、僕を見ていた。

「皐月ちゃんのところに帰っちゃうの？」

瑞姫が僕に、一歩近付く。

「当たり前だろ。あと、酔いが醒めたなら服を着なさい」

僕は後方に、一歩下がる。

「……今日は、もう、ウチに泊まっていかない？」

赤色の下着が目玉だ。瑞姫の妖艶さを更に際立たせている……相変わらず、呆れるほど綺麗だ。

「酔っ払いの介抱までが僕の任務だからね。これだけハッキリ喋れるなら僕はもう用無しだよ」

チラリと後方を確認してから、僕は再び一歩下がる。

「もう、湊人しかいないの」

瑞姫は更に距離を詰めてくる。背後に空間はもう無い。

「僕には既に皐月がいる」

瑞姫に対し、僕は後ろを向く。明確な意思表示のつもりだった。しかし、背中に、酷く柔らかく、懐かしい感触がした。

……不意にあの時の事を思い出した。

「今晚だけでいいの。寂しくて、堪らないの……」

背中に手を置かれた。その温もりに、僕は痛みを感じる。

「お願い、湊人。一度だけで良いから……」

——今晚、私を抱いて。

耳元でそう囁かれた瞬間、僕の内部で何かが暴発した。

シャツの中に手を入れ、瑞姫は僕の背中に直に触れ始める。あの時は爪を立てられた。それが今は、淫猥な気分を引き出そうと蠢いている。撫でられているはずなのに、酷く痛い。古傷が抉られているような気がする。…我慢できそうになかった。ゴメン、皐月。約束、守れそうにない。

「っ、ふざけるなっ！」

瑞姫の手を無理やり引き抜き、正面から見据える。潤んでいただろう瞳には困惑の色が宿っていた。

「何で今さらそんなこと言うんだよ！ どうして今さら僕を必要とするんだよ！ 瑞姫が先に僕を捨てたんだろ！ 勝手に康弘さんの方に行ったんだろ！ それなのに……何で今さら僕に振り向いてくれなんて言うんだよ！ そんなの狡いじゃないか！ 僕は一生懸命忘れようとしていたのに！ 忘れかけていたのに！」

抑えきれない想いが一気に溢れ出る。涙はとうの昔に流し切ったはずだった。

「……っ！ ごめんなさい！ 今まで、本当にごめんなさい！ 私は、湊人が私にしてくれるみたいに湊人を愛せる自信がなかったの！ だから……あの人に逃げてしまった。でも……だからこそ！ あの人に愛想を尽かされてしまった今は湊人しか居ないの！ だから、もし湊人まで私の前から居なくなってしまうたら、私……わたしいっ！」

瑞姫の目からも涙が零れる。その表情は既に妖艶さとはかけ離れていた。……孤独に対する恐怖がそこにはあった。

「僕は瑞姫を受け入れられない」

誰よりも愛していた幼馴染に、僕は涙を堪えて告げる。

「もうすぐ皐月にプロポーズするんだ。そう、決めたんだ」

誰よりも僕のことを心配してくれる可愛い後輩の笑顔を思い浮かべる。誰よりも愛している彼女の顔を、思い浮かべる。大丈夫、僕は彼女を愛している。

「で、でも、まだ、してないんだよね！ それなら、皐月ちゃんには黙ってあげて。黙ってるから！ お願い！ 一番じゃなくてもいいの！ 二番でも、何番でもいいから、私を愛して……一人にしないでえ……」

溢れる涙を拭おうともせず、瑞姫は僕の胸に顔を埋める。強烈な既視感をおぼえる。そうだ、あの時も、こんな風に、瑞姫に懇願されていた。そう、こんな風に……

「……駄目だ」

でも、僕はもう、瑞姫の肩を抱くこともしない。

「……っ、どうしてよお！」

「瑞姫のことは、今でも好きだ。……いや、今は好きだ」

背中をさすことも、耳を塞ぐこともしない。

「な、なら！ 同情でも何でもいいから、私を一人にしないでえ！ あの時みたいに傍に居てよお！」

かつて愛した幼馴染へ、今でも好きな女性へ、僕は静かに言葉を紡ぐ。もう、涙を流すわけにはいかなかった。

「駄目なんだ！ 僕が愛してるのは！ 僕が愛せるのは！ ……皐月、ただ一人だけなんだ」

*

「お帰りなさい。あと……お疲れ様です」

足を引き摺るようにして我が家に戻ってきた頃には午前一時を過ぎていた。寝ると言っていたくせに、結局起きていたのが彼女らしい。深く言及してこないのはありがたい。正直、暫くの間は、さっきのことを思い出したくなかった。

「ただいま、皐月。……あのさ」

でも、これだけはハッキリと伝えておかなければ。

「はい、何でしょう？」

「やっと、終わったよ。全部、終わらせたよ」

やっと、瑞姫という存在から自立できるようになった。これで、ようやく皐月に堂々と……

——私を一人にしないでえ！

瑞姫の声が、顔が、涙が、フラッシュバックした。

「ええ、よく頑張りました。……湊人さん？」

「あ？ ああ、大丈夫だ。何でもない」

そう、大丈夫だ。もう、終わったことなんだ。

「……湊人さん、一つアドバイスしてあげます。『大丈夫』というのは、相手を安心させるための言葉なのです。自分に言い聞かせるための言葉ではありません」

人差し指をピシッと僕の方に向け、皐月はそう言った。僕の心情は、やっぱり皐月には全てお見通しのようだ。

「私は瑞姫さんのことを忘れろ、なんて言いません。むしろ憶えていてほしいと思います。それが、湊人さんが私を選んでくれた証なのですから。だから……瑞姫さんのことで沢山泣いてください。我慢しなくてもいいんです。それも含めて、私は湊人さんを受け止めます。私を選んで良かった、と心から思わせてみせます。だから、泣いてください。私に、ありのままの湊人さんを受け止めさせてください」

皐月がゆっくりと近付いてきて僕を抱きしめる。とても温かい。背丈は僕の方が圧倒的に高いはずなのに、全身を包まれているような気分になる。

泣いてもいい。皐月はそう言った。どうしてだろう。その一言が堪らなく嬉しい。だから、これは、嬉し泣きだ。

「皐月……ありがとう。ありがとうっ！」

膝を床につけ、皐月の胸に顔を埋めて子供のように泣く。流しきれなかった涙が次から次へと溢れてくる。

皐月への感謝の言葉を口にしつつ、瑞姫のことを想って泣く。酷く未練がましい奴だと思ふ。最低な奴だと思ふ。多分、これからもずっと、瑞姫のことは引き摺るだろう。それでも、この温もりを一生離したくないと心からそう思う。

皐月、ありがとう。そして、瑞姫、ありがとう……ごめん。

了

～あとがき～

人生で初めて書いた作品で感想が頂けるのなら、処女作ですアピールをせざるをえない。尺に収まってない感がヤバイ。

ストラッスイナンドは音楽用語で『ゆっくりと音を引き伸ばす』とか『音を引き摺るように』という意味です。ちなみに、作者は別に音楽に詳しいわけではありませんので。

エレフオーン （葉月遼）

エレフオーン

葉月 遼

「元気そうだな、クロイ」

本来は黒いはずの毛並みを泥や雑草で汚し、からだじゅうの毛をごわつかせた犬が、青いカーディガンを羽織った青年を見上げた。老朽化や子供の怪我によってことごとく遊具が取り潰された狭い公園。

夕日が沈みかけ、春先とは言え冷たい風が通る公園は物寂しげな空気に包まれていた。

『またお前か。随分と暇なようだな』

そこには犬の声はしない。当然ながら犬は喋らない。それでもその青年、東里凱は憎まれ口を叩かれたように困った笑みを浮かべ、しゃがみ込んで袋から一本の魚肉ソーセージを取り出した。

「言ってくれるじゃないか。折角お前のぶんの飯を持って来てやったのに」

クロイと呼ばれた犬は大儀そうに赤いビニールの包装を見た。

『貰えるものは貰うよ。お手でもおかわりでも、芸の一つか二つでも？』

「バカ言うな。友達にそんなことをさせるかって」

ビニールを器用に食いちぎり、クロイはピンク色の肉を齧る。その様子を眺めながら凱はクロイの耳の裏を撫でていた。

『寂しい奴だな、お前。これは良いのか』

「撫でまわすくらいはいいだろう。悪い気はしてないくせに」

『まあな。今度はノミ取りブラシでも買ってきてくれ』

遠慮の無いクロイの物言いを凱は滅法気に入っていた。クロイは取り立てて可愛らしいわけでも人気のある犬種でもない、どこにでもいる雑種の野良犬だった。

そんな野良犬を妙に構ってしまうのは、ひとえに自分を気味悪がったりしないからだ。

いつ頃から動物の言葉が理解できるようになっていたのかは彼自身も覚えていない。気が付いた時から彼は動物の、人ではない生き物の声を聞き取ることが出来た。

そのことを誰かに伝えたことは数えるほどしかない。その数少ない経験の中で、それは不自然なことだ、気味悪がられることだということに気付いていた。

それさえ分かれば簡単だった。そのことを黙って過ごせば、それなりに充実した生活を送ることが出来る。しかし、それで満足していない自分があることも凱は自覚していた。

『おい』

バウとクロイが吠えた。

『まだ、中に食いもんが残ってんだろ。くれ』

クロイの読み通り、レジ袋の中には、自分用に買っていたフライドチキンが残っていた。

「犬の食うものじゃない。こっちはおれの飯だ」

『そんな辛気臭い顔で飯を食ったら作った奴に申し訳ないだろう。だから、俺が食ってやる』

凱が眉間に手を当てる。少しだけ寄っていた。

「そんなに辛気臭い顔をしているか、おれは」

『まあな。これくらい見抜けなきゃ人間に媚びて飯を貰うこともままならんよ。なあ、いいだろ。くれってば』

「……一口だけだからな」

渋々と凱は油が染みてきた紙袋からフライドチキンを取り出し、中の肉をクロイに差し出した。

『歯ごたえが無い』

脂でぬらぬらした肉を黒い犬と青年が、早くも遅くもないペースで食べ進める。不満を漏らしながらも、クロイは食べ終わる度に、クロイはベンチに座る凱の足元に頭を擦り付ける。それがおかわりのサインだった。

『いいじゃないか、別に』

三回目のおかわりを求め、それを凱が首を振って断ったところで、クロイが唸った。

「さすがにこれ以上はやらんぞ」

『そうじゃない。こっちは、お前の悩みごとについて、さ』

凱の口に運ばれようとしていたチキンが止まる。

『犬と話せようが、それで死ぬほど困ることは無いだろう。そこそこ美味しいものを買い食いして、休める所がある。十分だ』

凱は頷いた。その隙を見て、クロイが飛び上がり、彼の手からチキンをひったくった。

『少なくとも普通の人間は犬と話なんかはしないだろうよ。いや、会話だ。会話はしない。だが、それだけだ。黙って暮らして、ここまで来れるなら、それで十分だろう』

その通りだ。実際に凱はそれなりに充実した生活を送れている。心の友、とまでは行かなくとも人付き合いで困るようなことは無かった。

「違う」

それでも、凱は反射的に呟いていた。

『何が』

クロイのまっすぐな目を見て、凱は答えを飲み込んだ。

「……いや。違わないか。しかし、大して長い付き合いでもないのにな。大正解」

沈黙の後、凱はクロイの頭をわしわしと乱暴に撫でた。

『俺らと本当に話が出来るってんだから、想像はつくさ。いっそバラしちまえよ。そりゃ、千人いれば、九百人は笑う。九十九人には気味悪がられる。でもよ、一人くらい、信じてくれる奴はいるかもしれん』

凱はかぶりを振った。居るかも分からない一人の信頼を得るために全てから嘲笑を受ける覚悟は彼に無かった。

『やっぱりお前は贅沢だよ。』

「そうだな」

沈黙が訪れる。時折クロイを撫でてやりながら、凱はどこか懐かしい思いだった。

『何でクロイなんだ。俺の名前』

「黒いからだ」

油で湿った手をコンビニで貰ったウェットティッシュで拭う彼にクロイは尋ねた。悩みどころではなく、他愛の無い世間話だった。

『クロじゃダメだったのか』

凱は首を縦に振った。理由は言わなかった。

『帰らなくていいのか』

「親は妹にせがまれて回転寿司だ。留守だよ」

携帯電話を取り出しかけたところで、凱は左腕に着けていた腕時計を思い出し、そちらを見た。ぼんやりと蛍光色の黄緑色を発する針は七時半を示している。辺りはすでに薄暗い街灯が人気の少ない通りを照らしているだけだった。

『今度俺を紹介してくれ。お前が通訳だ。そうすれば俺は赤身の一切れでも食えるかもしれん』

「する気は無い。万一おれの気が向いてそんなことをすれば、お前はガス室送りかもしれん」

『怖いこと言うな、お前』

「事実を言っただけさ。昔……」

凱の言葉を、公園の前で停まったバンのエンジン音が遮った。

見慣れないクリーニング店の名前が書かれたバンから帽子を目深に被った二人の男が凱たちに近付いてきた。『連れションって様子でも無さそうだ。こっちに近づいてきてらあ。お前に話でもあったりしてな』
「少し黙っている。変な奴と思われたくない」

『おいおい、お前がこっちに話しかけなきゃ済む話だろう』

憎まれ口を叩いたものの、クロイはそれきり喋らなかつた。凱は頭を軽く撫でてから立ち上がる。クロイの指摘通り、彼らは凱に近付いてきた。避けるように大きく回って歩く。

「犬と話をしていたな」

すれ違うところで背の低い男が呟いた言葉に、凱は足を止めた。大して広くない公園とはいえ、声の届くような距離ではないはずだった。

「ええ。まあ。好きなんですよ、動物。可愛い奴ですよ。遊び足りないって言うから、また明日なって声を……」

凱はどうかか笑みを浮かべ、動物好きな若者といった体で振る舞おうとした。

「少し黙っている。変な奴と思われたくない。だっけか」

目を見開く。彼がクロイに言った言葉だった。

「情報通り。精神感応持ちのサインズだ」

「俺たちは、アンタを変な奴とは思わないさ。な、東里凱」

二人の男が口々に言う。理解者を自称してくる出会った事も無い人間から名前を呼ばれ、精神感応だとかサインズだとか言葉を聞かされた。凱の背中に薄ら寒いものが走った。

クロイにそれが杞憂だと、単なる強い思い込みだと笑って貰えればいくらか気は休まっただろう。

「着いて来てくれ」

物腰は穏やかだが、有無を言わせない迫力で背の高い方の男が近づき、凱の腕を掴んで引っ張る。

「っ、いきなり何を」

驚き、凱が振り払おうと抵抗する。それを意に介さず、男は左腕の力だけで凱を引き寄せた。急に引っ張られ、前につんのめる。凱の鳩尾に男の膝が刺さる。凱が呻きながらうずくまる。

「おい」

「加減はしてるさ。まったく、まどろっこしいことしないでハナからこうすりゃ良かったんだ」

背の低い男の制止を遮って彼がぼやく。

「バックアップも無駄になったな。これなら抵抗のしようも……いっ！」

男が苦悶の声を上げた。その足首の辺りに、黒い野良犬が、クロイが噛みついていた。

「く、クロイ……」

『コイツらはヤバい。どうと説明は出来んが、走れ』

凱がよろよろと立ち上がる。クロイがどうなるかなどを考える余裕さえ無かった。背の低い男は突然現れたクロイを引き離そうとしている。長くは保たないようだった。

逃げるならば今しかない。凱が足を踏み出す。危なげな足取りが一步を踏みしめる度にしっかりとしていき、速度が乗る。

低いフェンスを跳び越え公園の外に出る。地面を蹴る感覚が短くなり、最高速度に乗る直前。凱の耳に柔らかな歌声が聞こえた。

公園を離れるほどに歌声が鮮明になった。それとは逆に、彼の意識は徐々に朦朧としていく。足取りが鈍くなり、やがて立つこともままならず、凱はアスファルトの上に倒れ伏した。

薄暗い路地から、絵本の中から飛び出したような白いローブで全身を包んだ人間が凱の前に現れる。

彼が仰々しいお辞儀を終えると同時に、凱の視界は真っ黒になった。

凱が目を覚ますと、辺り一面の淡い色が、陽炎のようにゆらゆらと揺れていた。自分は今夢の中にいるらしいと凱は気付く。訳の分からない人間に襲われ、逃げ出したと思ったら道端で倒れ、散々な目にあつたにも関わらず、その結果のまどろみのようなふわふわとした感覚は彼にとって心地の良いものだった。

肌寒い朝に毛布のなかで丸くなっているような陶酔。それが急速に冷めていくのを凱は全身で感じた。

誰かが自分を見ている。彼が小さな点に見えるような遠い場所から。鼻先が触れるような目の前から。後ろから。つま先から見上げるように。自分のつむじを見下ろすように。

あらゆる距離、角度から見られている。少なくとも、寝ているときにされて気持ちの良いものではない。

さらに、その視線を送ってくる者の姿が見えないことも彼の気持ちの悪さを加速させる。

凱はその視線へ睨み返す。くすりと笑う気配がした。

「そう警戒しないで。東里凱」

聞き覚えのない女性の声。大人びた少女にも子供っぽい妙齡のそれにも聞こえる、柔らかな声だった。

「誰だ。おれの夢に入ってくるな」

「イヴォルスの子供たちは私をウテルス。もしくはママ、と呼ぶわ。ここを夢と表現するのは適切でないかもしれないけれど」

イヴォルスの子供たち。また分からない言葉が増えた。その疑問を呼んだかのようにウテルスが答える。

「やだ、ついさっき会ったじゃない」

凱は二人の男、それからローブを羽織った人間を思い出した。

「あの子たちの乱暴は謝るわ。でも、あなたもイヴォルス、新しい人類に」

「新しい人類……」

「気付いているはずよ。なにせ、自分のことなのだから」

凱が息を呑んだ。クロイとの、どこにでもいるような犬との意思疎通を思い出した。自称理解者の二人の言葉を思い出した。《情報通り。精神感応持ちのサインズだ》

凱の動揺を感じ取ったことを見計らったようにして、凱の目の前に一人の女性の像が浮かび上がった。

艶やかで豊かな長い髪に、喪服を思わせる衣に包まれた女性らしい起伏に富んだ体つき。穏やかな笑みを浮かべる顔。そのヒスイ色の瞳と赤い唇が凱の眼に焼き付いた。

「サインズはホモ・サピエンスの持たない力を持つ人。その才能はこれまでの世界を変えることだって不可能じゃない」

凱が一步下がる。ウテルスがその間を詰めた。

「でも、それは空くまで萌芽でしかない。それを摘まれないよう守ること。それが私の使命。イヴォルブド・サピエンス。新たなヒトを育てること。そして、あなた達のための、新しい世界を作ること」

「わけの分からないことを。おれは……普通に過ごせるなら、それで十分だ。新しい世界だとかには興味がない」

噛んで含むように凱が言う。新しい世界。その言葉に心が一瞬揺らいだことを隠すために。

「嘘。ママに隠し事は出来ないわ」

「隠してなんかいない。おれは、普通に生きて、普通に死んでいきたい。サインズがなんだ。おれの知ったことじゃない！」

凱がウテルスに背を向けて走り出した。淡い色の世界が突然極彩色の赤や黄色に変わる。

距離も何も掴めないがとにかく凱は彼女から離れたかった。

「どこにも行けないわ、凱。ママにとって子供はいつまでも子供。それこそ、命を絶ったとしても」

逃げ出した凱の目の前にウテルスが姿を現す。ヒスイ色の射抜くような視線に凱が怯んだ。

凱が再び方向を変えて走り出した。極彩色の世界が再び変化していく。幾何学の模様を描く世界が一つの世界を作った。

凱が着いたのは広い公園だった。滑り台があり、ブランコがある。錆が目立つジャングルジムや木が腐りかけたシーソーがあった。

広いのではない。凱は気が付いた。ここはいつもの公園だ。クロイと話をしていて、寂れたあの公園。

そして広くなったのではなく、自分が小さくなっていて、小学生のころの自分の姿だった。

転んでいる凱の目の前に、ぐったりとして倒れた猫が倒れていた。凱を取り囲むようにして、たくさんの子供がいた。その顔はのっぺりとした黒に塗りつぶされていて、カットしたスイカのように大きな口と丸い目だけが真っ赤だった。

「嘘つき」

一人の子供が言った。

「猫が喋るはずないじゃん」

「おかしいじゃんか。お前だけ猫の声が聞こえたなんて」

起き上がろうとする彼を一人の子供が突き飛ばした。別の子供が棒で彼を叩いた。咄嗟に凱は頭を守ってうずくまる。

嘘つき。嘘つき。嘘つき。

そこにいる全員が敵だった。凱を叩き、殴り、蹴った。凱は耐えるしかなかった。自分も目の前の猫のようになるのではないか。そんな恐怖が彼を覆い尽くしていた。猫への乱暴を止めようとしていたことなど忘れて、彼は自分を守ろうとした。

これは今のおれじゃない。凱は自分にそう言い聞かせた。きっとこれがママのサインズだとかイヴォルスだとかの力だ。これは記憶の再現だ。昔の、おれの。思い出したくもない過去の。

それ突き破って、凱の中に押し殺していたものが湧き出た。

おれは本当のことを言っている。なんで信じてくれない。おれは凄い力を持っている。お前たちに無い力を。それが、どうしてこんな目に遭っている 再び世界がぐにやりと歪む。

そこは自分の家だった。夕日の沈みかけた薄暗い庭の隅に置かれた急ごしらえで作ったことが分かる、不格好な犬小屋の前で凱はしゃがみ込んでいた。

『ばかだな。そういうことは、ひとにいいふらしちゃいけないんだぜ』

犬小屋の奥に、黒い毛並みの小さな犬がいた。くりっとした目が、傷だらけの凱を眺めていた。

「本当のことを言って、何がいけないんだよ。おれは今もこうしてお前と話して、さっきだってそうさ。あの猫と……」

凱には、子犬の笑い声が聞こえた。

『見て見ぬふりも、おとなのせかいさ』

凱がすねたように木の枝で空っぽの餌入れをつついた。

「クロだって、子供のくせに。」

クロが欠伸をした。もともとは学校の裏に捨てられていた赤ん坊の犬だった。

『おまえくらいになれば、おれはおじいちゃんさ。ぜいたくななやみをもっているんだよ、おまえ』

凱は今の言葉をどこかで聞いた気がした。しかしそれがいつなのか分からなかった。これを現実ではないと言ひ聞かせる彼はいなかった。

その彼には納得できない話だった。凄いものを凄いと行って何が悪いのだろう。誰も満点を取れなかったテストで自分だけが百点を取ったとしたら。それを誇らしく思って、自慢して何が悪いというのだろう。

「贅沢なのかなあ。じゃあクロ、おれはどうすればいいんだ」

クロは答えなかった。くうと小さく唸った以外、凱には何の声も聞こえなかった。

「聞こえているだろう。クロ。なんとか言ってくれ」

凱がクロを揺さぶった。それでも返事は来なかった。

「なあ。クロってば」

「凱。何をしているの……その怪我はどうしたの？」

背後でドアが開く音がした。凱が振り返ると、傷だらけの彼を見て目を剥く母の姿があった。

「クラスメイトに、いじめられた」

「どうして？」

「おれ、動物と話せるのに。みんなが嘘つきだって言うんだ。今もクロと話をしていたのに」

凱の切実な物言いに母が怪訝そうな顔をした。

「本当だよ。信じてよ」

凱がクロを強く抱きしめる。母が穏やかな笑みを浮かべた。

「そうね。信じるわ」

お母さんも、信じてくれないんだ。

その笑みが単なる話を切り上げるだけのものだと分かった凱の表情に諦めや失望の色が浮かんだ。また世界が歪む。

今度は空っぽになった犬小屋の前で凱は立っていた。

「逃げ出したのかしら」

後ろに立ってそう言った母の声が、凱にはどこか空虚なものに聞こえていた。縄で繋いでいたのに、どうして逃げ出すことがあるのか。

凱がふと足元を見た。バツタの死骸を運ぶ小さなアリの群れが見えた。凱が小さな声で、唇を震わせるように、ダメ元で尋ねる。

「ここに居た犬、知らない？」

それぞれが勝手に答えた。

『いぬ？』

『けむくじらのでっかいの』

『おまえのうしろのやつ、つれていった』

『おっきいはここに置いてた』

『いっていいか。これ、じょうさまのごはん』

凱は頷いた。アリは彼の足の間をすり抜けて行った。

世界が歪む。先ほどまでと違い、テレビのダイジェストのように風景が変わり、それを追うように彼の外見が少しずつ成長していった。

「今日の遠足、休みなさい」

動物園に行くことになった遠足は。母によって欠席させられた。

それ以降、彼は動物に関わるような場所に行くことを許されなかった。そして、それに従った。そうすれば、

母はいつも通りに接してくれた。

テレビも、動物に関わる特集などが組まれれば即座にチャンネルを変えられた。彼自身も自然とその類の番組を避けるようになっていった。

学校は少し無理を言って、隣の校区に転校した。自分のことを知らないコミュニティに溶け込み、それをずっと続けていった。野良犬と話すこともあった。その時は、まるで自分が悪いことをしているかのように人目を避けていた。

そのどれもが、凱にとっては苦痛だった。

誰かに拒絶されることは嫌だった。その一方で、自分のテレパシーまがいの力を知って欲しかった。そして、それは凄いことだと認めてもらいたかった。

「あなたのことは手に取るように分かるわ。ママだもの」

気が付くと、凱はウテルスの胸に顔をうずめるように抱きしめられていた。簡単に振り払えるような抱擁を拒めなかった。

ウテルスは凱のどうしようもなく幼稚な感情を肯定し、それを受け入れていた。それを凱は知っていた。

「私のところに来ない？ 私たちには、あなたが必要なの」

凱はずるいと呟いた。散々人の心を覗いて、有無を言わずに攫っておいて、命令ではなく頼み込んでくるのか。

その思考を見透かしたようにウテルスが凱の髪を撫でた。

「私は父性を、押しつけというものを嫌悪しているの。凱、あなたが望めば普通の生活に戻れるわ。全て元通りとはいかないかもしれないけれど」

凱は一瞬だけ考えた。そして、頷いた。自分を受け入れてくれる存在を彼は求めていた。

そして、恐れていた。全てを見透かしたような彼女の存在を。自分を責める赤い目と口を。空っぽになった犬小屋を。頷けば、それに怯えることは無いだろうと信じた。

「さあ、目を閉じなさい。もう一度目覚めたとき、あなたは新しい世界に居るの」

言われるままに、凱は目を閉じた。

「起きろ。おい、新入り！」

耳こたで聞こえた野太い声に、凱は驚いて跳ね起きた。ベッドのスプリングが嫌な音を立てる。

「やっと起きたか、ボウズ。そして、ハッピーバースデー」

熊のごつ、膨れ上がった筋肉に包まれた体を持つ浅黒い肌の男が凱を眺めていた。着れるサイズが無いのか上半身は裸で、彼の腕はプロレスラーのものが鉛筆に見えるほどの太かった。

「何を言っているんですか」

少なくとも、凱には誕生日を祝ってもらえるほど親しい友人に、このようなハルクよろしい怪物はいないはずだった。

「言葉通り、生まれたのさ。イヴォルスの一員、レベル3」

そう言われて、凱は周囲を見渡した。そうしているうちに、生まれた、という表現がしっくり来るようになっていた。

以前よりも良く聞こえ、良く見えた。そして、その急激な変化に慣れることが出来た。ウテルスとの会話が全くの夢でないことを、凱は少しずつ理解していた。

男が凱を睨む。その顔が、夢の中で見た、子供たちの赤い目と口と同じように感じた。

「レベル3ってのは何ですか。ええと……」

「ジャガーノート。それが俺の名前だ。レベルってのはイヴォルスの、強化の度合いだ。俺はレベル2」

凱は軽く首を傾げた。

「強化、ですか？」

「そう、自分の能力を最大限発揮するための……まあ、なんだ。刷り込みだとか手術だとかさ」

手術、という物騒な言葉を聞いて、凱はわずかに身を震わせた。深く考えないように、と凱は話題を変える。

「それと、おれにもそういう、名前があるんですか」

「確か。ええと。エレ……何とか。忘れちゃった」

凱は横たわっていたベッドから降りた。下着だけというのも居心地が悪く、隣に畳まれていた丈の長い、病人の着るような薄い緑のガウンを羽織る。身体が少し軽いような気がした。

「よし、着いて来い、新入り」

ジャガーノートが告げて、彼にとっては狭いドアを器用に潜り抜ける。凱が後に続いた。

「どこに向かっているんです？」

病院を思わせる薄いクリーム色の廊下の幅いっぱいを使って歩くジャガーノートの背中に凱は問いかける。

「新入りの初仕事さ」

ジャガーノートが丸太のような腕を上げた。その隙間を、身を縮こめて一人の男が通って行った。

「仕事？」

「ああ。ま、その時に教える」

凱はふと、公園から逃げる時に見た男を思い出して尋ねた。

「フードを被ってる男って、ここにいたりとかしますか？」

「フード……クレイドルか。出払ってるが奴も、レベル3だ」

「それと、携帯電話、知りませんか」

「知らん」

ジャガーノートの物言いが乱暴になってくる。聞きたいことは山ほどあったが、どんな言葉が彼の気を損ねるか分かったものではないと思い、黙って目の前にある自分の倍ほどある背中を追った。

清潔そうな廊下の様子とは裏腹に、進むほど獣のような臭いと消毒液の刺激臭が凱の鼻を突く。むせ返るたびにジャガーノートが振り向き、小さく悪態をつく。

三回ほどそれを繰り返して、ジャガーノートが立ち止まった。

「ここだ。記念すべきお前の初仕事」

「研修とかは、無いんですね」

「刷り込み、つったろ。そういう知識も、しっかり入れてある。普段は気付かないだろうが、その状況ごとに詰め込まれた知識が小出しされていくのさ」

「何のためにです。一度に出す方が楽じゃないですか」

ジャガーノートがため息をついた。大きな体がのそりと動き、水密扉を思わせる扉に手をかける。

そのハンドルを軽く回し、彼が軽く扉を開ける。凱の想像通り、扉は辞書のような分厚さをしていて。

凱が通ったのを見てジャガーノートが続いて入り扉を閉める。

今までの部屋と同じように部屋に窓は無い。それどころか蛍光灯すら無く、薄暗い蛍光塗料の緑がぼんやりと部屋を照らしていた。

ごーん、と金属に何かがぶつかったような音が響いた。

「今のは？」

「お前の同僚さ。仲良くしてやれ」

そう言ったジャガーノートの声に意地の悪い含みを感じ、凱が口を真一文字に結ぶ。

笑みを無視して部屋の奥に進む。金属の格子で囲まれた檻が彼の眼に入った。その動きが止まる。彼の眼に映ったのは、その檻の中に居る”人間だったらしい何か”だった。

趣味の悪い都市伝説の化け物よろしく口が耳の裏まで裂け、開ききった顎をカスタネットのようにカチカチと鳴らす女。

肩の辺りから生えた瘤に出来た顔と理解できない言葉を交わす男。

檻に体当たりをかましている男は、緑色の頭に飛び出た目、鋭い爪とトカゲや何か、爬虫類のような姿だった。

それ以外にも、およそ人間と言うことを躊躇ってしまうような異形の姿が檻の中に散らばっていた。

「相変わらず、賑やかなことだ。こいつらの世話が、お前の仕事だ。新入り」

凱は昔のドラマにあった見世物小屋を思い出した。陰気な男が手を叩きながら祭りらしき場所で男が手を叩いて「さあさあ、お代は見てからでも結構だ」と煽りながら客を寄せる光景。

「彼らは、人間なんですよ」

「手術に耐えられなかった奴、失敗作だ」

「どうして、俺の仕事なんですか」

「こいつらは人の言葉を解さん。獣と話せるのならこいつらとも話せるだろう」

獣、という言葉に凱は嫌悪を抱いた。犬とは言え、友人のように親しい彼をけだもの呼ばわりされて、気分の良いものではない。そして、目の前の彼らとクロイを一緒にするなど考える自分にも。

ウテルスに対しても同じことを思った。彼らもサインズとやらのはずだ。ならば、どうして彼らはこんな目に遭っているのだ。彼らも必要な存在ではないのか。

「ほら、どうした。早く世間話でもしてやれよ」

ジャガーノートのニタニタと笑う声に、凱は頷いて檻の前に立った。目を閉じて少し考え込む。目の前の人間だったものたちと話す糸口を探すために、少しの間、彼らの声に意識を向ける。

クロイの時よりもはっきりとしていないが、それでも聞こえる。

『……俺を……認……』

『僕が必要だって。あの人は。気に入らない奴を見返すことだってできるって言っていたのに。なのに、なんで』

『ねえ。あたし、嘘言っただけなのに。信じてよ。ねえって。こんな姿……嫌……』

『向こうから呼んできておいて、何だよ、これ。俺を……』

なだれ込んできた声の無い言葉の波に、凱は息を呑んだ。同じだった。そこにいる全員が、彼と同じだった。生まれ持ったサインズの力で周囲から虐げられ、望んで、望まずして周囲と隔絶し、そしてイヴォルス、ウテルスに見出されてここへ来た。多少の違いはあったが、どの声も同じことを訴えていた。

誰かに認められたい、見返したい。自分を受け入れてくれる存在が欲しい。凱がこれまで抑え、隠し続けていたものと同じだった。そして、自分の今の姿への嘆きと怒り。

再び、檻にトカゲ頭の男がぶつかる音が響く。

『クソ！ なんでお前は、お前は平気なんだ。おかしいだろうが。何で俺は……』

「落ち着いてくれ。おれは……」

八つ当たりと切り捨てられない彼の言葉に凱がどうにか落ち着かせようとする。

頬に鋭い痛みを覚えて目を閉じる。ぬらぬらした温かいものが頬を伝い、ガウンの胸元を赤黒く染めた。檻の隙間から伸びたトカゲ男の爪が、血で赤く塗れていた。

数歩下がり、振り返る。凱にジャガーノートが意地の悪い笑みを浮かべていた。その顔と、公園の黒と赤の笑顔が重なる。再び凱は顔を背けた。

「ま、化けもんは化けもんってことか。そう気を落とすな」

「アンタは、何も思わないんですか」

凱のつぶやきに、ジャガーノートの笑みが消える。

「ここの奴らは、今までの暮らしに自分の居場所を見つけられないで、ようやく見つけた新しい居場所にまで、見捨てられたようなものじゃないですか」

「見つけた、じゃない。見つけてもらった、だ。鳥の雛みたいに口を開けて餌貰えるほど甘かねえや」

凱が拳を握りしめた。彼の震える背中を見て、勝ち誇るようにジャガーノートは続ける。

「自業自得さ。俺もお前も、この化けもんも。勝手に世の中ではぐれて、甘い言葉にすり寄って。俺たちと化けもんどもの違いはツキがあったかどうかだ」

「おてて繋いで仲良しこよしが出来るとでも思っていたか。新しい社会なんてお題目なら、相応にヤバいことするのは分かってたろう。エスパーみたいなやつらが署名活動をしてるように見えるか。選挙に出るように見えるか。こいつらは、そんなことにも気付かなかったバカで、俺たちと違って運も無かった。せいぜい自分じゃなくて良かった、だ。お前もそうだろ？」

ジャガーノートが再び凱の肩を軽く叩く。

言い終わると同時に凱が身体を捻り、勢いを乗せた肘をジャガーノートの顎へ突き上げる。衝撃で軽く顔が上を向き、ゆっくり戻しながら彼は凱を見下ろした。

「俺は間違っただけは言っただけぞ」

「確かにそうだ。だけど」

ジャガーノートが虫を払うように腕を振るう。咄嗟にしゃがみ込んでそれを避ける。間髪入れず、顔面に膝が刺さる。凱の身体が浮かんで檻に叩き付けられる。

「だけど……なんだ？」

振り上げた丸太のようなサイズの足を下ろし、ジャガーノートが首を鳴らしながら尋ねた。それにも関わらず、まだ凱は動くことが出来た。立ち上がって鼻と頬、口から流れる血を拭う。

「気に食わない」

整理しきれない感情を凱は一言でぶつける。

「ああ、そうかい。先に手を出したのはそっちだ。ぶっ殺されても文句を言うなよ！」

「殺されても」という言葉を聞いた瞬間、凱は全身が熱くなるのを感じた。頭の一部にかかっていたもやが、取り払われた気がした。

ジャガーノートが拳を振る。今度は顔面を狙った、体重の乗ったストレート。

再び身を屈めて避ける。今度はジャガーノートが二の行動を取るより早く、凱は伸び上ってジャンプし、勢いを乗せたアッパーで再び顎を打つ。

「いっ、てえ」

ジャガーノートがのけぞって呻く。ダメもとで放ったパンチに、先ほどの肘打ちとは明らかに違った確かな手ごたえを感じたことに凱は戸惑って、その手を見た。

「何だ、これ」

両手が、黒い鱗状のものに覆われていた。手だけでは無い。全身が、同じような物で包まれていた。

薄暗い室内が昼間の様に明るい。檻の中の人間の衣擦れさえ耳元で聞こえる。自分の身体の動きを一ミリ違わず動かせる。自分が研ぎ澄まされた刃物になった気がした。

「自衛用の緊急アンロックか。ママはお前が大層大事だったらしい。普通、お前みたいな能力の奴にそんな強化はしないぜ」

ジャガーノートが首を鳴らし、戸惑う凱を見て苛立ったようにぼやいた。

「ま、どうするかが分からないようなら、同じだ」

吠えながら、ジャガーノートが突進する。体重と勢いを乗せた体当たり。凱が跳躍する。ジャガーノートを軽

々と跳び越え、その後頭部を蹴って着地する。

蹴られた勢いと、彼自身の体当たりの破壊力が檻を飴細工のように砕いた。中の異形の姿をした人間が怯えて隅で縮こまる。

これなら戦える。そう思った凱がジャガーノートに接近。振り向いた殺気立つ顔に向けて、思い切り足を振り上げる。

「やっぱり、さっきはラッキーパンチか」

繰り出された鋭いキックを、ジャガーノートは足首を掴んで受け止めていた。凱の身体が持ち上がり、弧を描いて床に叩き付けられる。

息が止まる。続けざまにストンピング。転がって避ける。コンクリートの床にヒビが入った。あのまま踏みつけられていたら、という想像をどうにか打ち消して凱は起き上がる。

ジャガーノートが、体当たりで壊れた檻の穴を塞ぐように立つ。

「不愛想なもんで分からなかったが、喧嘩は素人だろ」

凶星だった。凱は喧嘩など一度もしたことがなかった。殴った拳がじんと痛みを訴える。口の中にごろごろとした感覚があった。奥歯がひとつ、欠けていた。

吐き出せるかどうか分からず、吐き出したとしてもそれが負けを認めるようで気に入らないので、凱はそれを飲み込んだ。

「凶星みたいだな。まだやるか。降参すりゃ、楽に殺す」

沈黙をジャガーノートは肯定とみなした。間合いを測りながら、凱は周囲を見渡した。ジャガーノートの言う失敗作が、檻の隅で様子を伺っている。

凱は意識を集中した。施された手術が生まれ持った力、それがサインズとしての力の強化であれば、その失敗作とも通じ合うことが出来ると思った。

「死にたくはないけど、死ぬなら、おれは精一杯暴れてから死ぬ。こんな体にしたお前らも道連れだ」

ぴくりと、部屋の隅で数人が動いた。ジャガーノートはそれに気付かず、鼻を鳴らしながら一步踏み出す。

「身勝手な奴だ。運よく手に入れた居場所も捨てるのか」

「身勝手はお互い様だ」

凱は頷いた。自分取り囲んだ赤い目と口の子供たちが思い浮かぶ。イヴォルスのこと、立場が変わっただけだ。

取り囲まれるのは普通の人々。そして運の無いサインズ。取り囲むのは誰か。自分やジャガーノートのような存在だ。

どちらも嫌だった。取り囲まれて誰かに虐げられることも。その能力で誰かを虐げることも。

都合の良いことを考えている自覚はあった。それでも、世界は人間とイヴォルスという区切りの居場所で終わるほどの狭いものではないと思いたかった。

そう信じることだけが今の彼を支えていた。

「居場所がないなら、探し続けるか、作るか。死ぬかだ」

「そうか。あの世で好きなだけ作ればいい」

ジャガーノートが首を掴んで持ち上げる。凱の身体が浮く。

その姿勢のまま凱を壁に押し付ける。左腕を思い切り振りかぶった。

「うおッ！」

その左腕に、口の裂けた女がその歯をジャガーノートの上腕に突き立てていた。

肩の瘤にもう一つの顔を持った男が、呻きながら執拗に殴り続けていた。檻の中にいた失敗作たちが、ジャガーノートに攻撃を仕掛けていた。

ジャガーノートが凱を放し彼ら引き離そうとする。

組み伏せようとした失敗作たちがなぎ倒される。合間を縫ってトカゲ頭の男が爪をジャガーノートの胸に突き立てる。

数ミリ刺さったところで、わき腹にジャガーノートの蹴りを受け、突き立てた爪を残してトカゲ頭の男がバラバラに吹き飛ぶ。凱の足元に、薄い笑みを浮かべた頭が転がった。

自身の傷と返り血の判別がつかないほど赤くなったジャガーノートが吠える。

姿勢を低くし、床を蹴って肉薄する。先ほどのアッパーを警戒してか、ジャガーノートが顎を引いて腕で庇う。衝撃。

ジャガーノートが目を見開く。凱の繰り出した掌底の狙いは胸に刺さっていた大きな爪。それは掌底の威力を乗せて深々とジャガーノートの胸を、心臓を貫いていた。

声も無くジャガーノートが仰向けに倒れる。それを中心に、大きな血だまりが作られ、失敗作たちの血と混じり合う。

黒い鱗が剥がれ落ち、中から元の姿が現れる。同時に、頭の中のもやが晴れ、一つの単語が頭に浮かんだ。

「エレフオーン」

変な名前だなど思ったが、不思議と嫌いにはならなかった。

気が付くと、檻の中にいたはずの彼らはいなくなっていた。分厚い扉は開かれていて、光が部屋に差し込んでくる。

遠くで悲鳴が聞こえた。失敗作たちの奇声が聞こえた。それに混じる気は無いが、それを止めようとも思わなかった。

多分、その復讐が、彼らにとっての居場所だったのだ。

《終》

あとがき

エレフオーンとはnowhereのアナグラムでイギリスの小説家が考えた理想郷を意味する造語だそうです。この奇怪な新参者の作品を読んでもくれた方はバトラーの「エレホン」や影響を受けた沖方丁の「ばいばい、アース」を本屋で探して読むと幸せになれます。以上、若輩者の一万三千八百文字でした。

華獣奏楽 (夏村晋)

華獣奏楽

夏村晋

女性の悲鳴が聞こえた気がした。

無意識に瞼が持ち上がったらしく、自分は眠りから覚めたのだと気付くまでに数秒かかった。

同時に、悲鳴は夢の出来事だったのかと脳内で結論が下される。大学生であるナイトは、ちょうど春休み期間であるため、早く起きる必要もない。今しがた眠りに落ちていた姿勢から微動だにせず、瞼だけが再び瞳を覆い隠していく。

しかし、ナイトがもう一度意識を手放すことは許されなかった。

「ナイトお兄ちゃん！ 起きて！」

カーテンの間隙から細く朝日が差し込む薄暗い部屋の静寂を、ドアを叩く音と妹の声が破った。

ノックというにはあまりに乱暴な音と、切迫したような声に、ナイトの意識は瞬時に浮上する。

声の主である妹、アプリコットが返事も聞かずにドアを開けると、ナイトが体を起こすのが同時だった。

「お兄ちゃん、起きた？」

「今起こされた」

いつも一人で起きてくるナイトを、アプリコットが起こしに来ることなど滅多にない。アプリコットの焦った表情からも何か緊急事態が発生したことは明白で、視線だけで何があったのかと問う。

切羽詰まった様子で部屋へと乗り込んできた割に、戸惑うような表情で一瞬目線を彷徨させた後、階段がある方向を指さし、言葉を探るように呟いた。

「その、リブお兄ちゃんが……」

ナイトの高校二年生の弟であるリーブラの名前が出た瞬間、ナイトはベッドを下りてドアへと向かった。

どこ、と短く問えば、すぐにナイトが自分と一緒に来てくれることを察したアプリコットが、「こち」と言って体の向きを変えて歩き出す。

心なしか速足で、二人はナイトの部屋がある二階から、一階へと降りて行った。

一階に着いて最初に目に飛び込んできたのは、開け放たれたリビングのドアと、その向こうで座り込む母親だった。

「母さん」

力なく座る母親にぎよっとして駆け寄る。ナイトに気付いた母親が小さくナイトの名前を呟いた。

その脱力しきった様子にもう一度驚いて、反射的にアプリコットを見る。

アプリコットは頭が痛くてしょうがないとでも言うような呆れと苦悩の混じった表情で、カーテンが開け放たれた大きな窓の方向を顎で指し示した。

リビングの大きな窓は庭に面していて、今は気持のいい朝日が存分に差し込んでいる。その窓から庭に出ると一部煉瓦の柄をしたタイルが道のように敷かれており、そのすぐ先にはガラス張りの家庭用屋外温室があった。

ガーデニングが趣味の母親が、自らの貯金を注ぎ込んで購入したその温室は、一般家庭用の中ではそれなりの大きさがある。母親の手によって綺麗に管理され、一年中何らかの花がその温室で大切に育て

られている。

最近は殊に薔薇を気に入っているらしく、深紅の薔薇が品よく、そして美しく、ガラスの向こう側で咲き誇っていた。

しかし今、その薔薇に紛れるように、いっそ不純物と表現するのが正しいものが存在していた。

人工的な金髪にシルバーピアス、そして着崩された高校の制服。薔薇に囲まれるにはあまりにそぐわないその人物こそ、弟、リーブラだった。

母親が我が子のように丹精込めて育てた薔薇を、何故か片手で抱える姿に、流石のナイトも一瞬絶句する。

当のリーブラといえば、ナイトと目が合うと嬉しそうに手を振ってきた。どういう訳か、その掌は赤く滲んでいる。頬に付着している赤いものは薔薇の花弁だろうか。

大急ぎで窓を開け、裸足のまま庭に出て温室に行く。

温室のドアを開けた瞬間、リーブラの呑気な声が響いた。

「はよー、兄貴」

頬に付着したものは、近くで見ると薔薇の花弁ではなく、どう見ても血だった。

右手の掌から滲むものも間違いなく血で、左手に抱える数本の薔薇の茎にさえ、少し血液が付着している。咲き乱れる薔薇の中には、いくつか手折られたように不自然に途切れた茎が見え隠れしていた。

視界が捉えた光景の全てに、一瞬、言葉に詰まる。

一体、何から聞けば。

「……お前、何やってるんだ？」

結局、質問の的も絞れず、漠然とした問いを投げかける。

返ってきたのは、腹が立つほど明るい声だった。

「何ってほら、今日ホワイトデーじゃん。エリーゼさんからバレンタインデーにチョコ貰っちゃったから、そのお返しだって、お返し。朝露つけた薔薇とかエリーゼさんにぴったりだと思って」

エリーゼとは、この弟の想い人である。

ナイトは何も言わず、握った拳をリーブラの左頬に叩きこんだ。

ただ歩いているだけで、人の視線が集中してきた。

目立つ身なりのリーブラにとってはそんなことは日常茶飯事だったが、今日に限ってはその視線に少し意味合いの違うものが混じっていた。とは言っても、昔はよく浴びせられた視線でもあり、リーブラは何となく懐かしい気持ちにもなる。

視線についてはそれほど気にせず、高校の昇降口で靴を履き替えていると、同じクラスの親友、アクエリアスに遭遇した。

リーブラとは対照的な、全く染色のされていない黒髪に、少し青が入った黒ぶち眼鏡。言葉で表現するとがり勉のようだが、実際はそんな印象は受けない。不思議とオシャレな雰囲気すらあるアクエリアスは、リーブラを見ると露骨に顔を歪めた。

「なんだお前その怪我。何、喧嘩熱でも再発したの」

「ちげーよ」

靴をしまうリーブラの右手には包帯が巻かれ、左手には絆創膏、そして左頬はガーゼで覆われていた。

心配そうにアクエリアスの眉根が寄せられる。一昔前はこの程度の傷を負っている姿なんて割と見ていただろうに、相変わらず心配してくれることに少し嬉しくなった。

「じゃ、どうしたんだよ」

「兄貴に殴られた」

「あ、そゆこと。じゃあお前が悪いわ」

「俺もそう思う」

アクエリアスの瞳から心配の色が一瞬で消し飛んだ。

一方リーブラも、アクエリアスの言葉に素直に頷く。

ナイトに殴られたということは、殴られるほどのことを自分がしてしまったということだ。

「でも、それなら何で手まで怪我してんの？」

話しながら歩いている内に教室に着き、お互い前後の席に座りながら、アクエリアスが尋ねる。

リーブラは包帯の巻かれた自分の手に視線を落としてから、今朝の出来事を初めから話した。

話を聞くにつれて目の前の表情に呆れが混じる。話し終えてからの感想は完全にため息混じりだった

。

「お前、そりゃ殴られるわ」

「でも俺、ちゃんと薔薇摘むって昨日言った気がすんだけどな」

「そんな沢山摘まれると思ってなかったんじゃないの？ そうでなくとも朝起きたら自分が愛情込めて育てた薔薇を、息子が血まみれで摘んでたら卒倒もんだっつーの」

「血まみれって言うほど血い出てねーよ。大して痛くもなかったし」

右手の包帯も、妹が説教だか文句だか区別のつかない言葉を並べながら丁寧に巻いてくれたが、こんな手当が必要な怪我だったとは思えない。それを言うと、親友からも妹と同じようにうんざりした顔で、「本当に痛覚薄いんだな」と零された。

「てか、結局エリ姉へのお返しをそれに決めたってのもまた……」

リーブラがホワイトデーのお返しに薔薇を渡そうとしていたエリーゼは、この親友の一つ年上の姉である。そのため、バレンタインの時から、お返しをずっと考えていた経緯も全て知っていた。

「でも朝露の薔薇ってエリーゼさんの美しいイメージにぴったりじゃね？ それに手摘みの方が、俺の熱烈な愛が伝わるかと」

「馬鹿か！」

アクエリアスにまで頭をはたかれた。

「朝露で手摘みとか重い！ それで血液付きとか重い通り越してただのホラーだ、阿呆！」

正直、薔薇を摘んでいる最中は、エリーゼという想い人のことを考えながら摘んでいたためかあまりに楽しすぎて、自分の手のことなど気にも留めなかった。

痛覚が薄い。

それは今までも散々周りから言われてきたことだ。

刺が皮膚を破ったことは分かっていたが、ほんのかすり傷程度のものだと思っていた。

これを受け取ったエリーゼはどんな反応をしてくれるのか。そんなことばかり考える妄想の世界に浸っていたため、自分の手など見えていない状態に等しく、まさか茎に血がつくほど流血しているとは全く気付かなかった。

確かに、自分の血が付いたものを片想いの相手にプレゼントするのは少し寒気がする。

「手摘みじゃなくて買えよなー、そこは」

「次からそうするわ」

「で、結局お返しの品はどうすんだ」

そうだった。

「どうすりゃいいんだっアクエリアス！ ヘルプ！」

「ええっ、考えてなかったのかよ」

ナイトに殴られたことで頭が飽和していたのか、代わりのお返しのことを完全に失念していた。途端に焦りで冷や汗が伝いそうになる。

「やばいやばいやばいマジでやばい」

「放課後、買いに行けばいいじゃん。今日はどうせ昼で授業終わりだし」

「その昼にちょっとだけ時間貰ってんだよ」

今日、会うことはできないかと事前にエリーゼ本人に打診したところ、放課後は用事があるが四限終了後すぐなら時間を取っても良いという回答を貰っていた。

その為、もう何かを買いに行く時間はない。買わなくてもいいような別のプレゼントを用意するのも無理だった。

アクエリアスが溜息を零し、匙を投げる。

「諦めろ」

「ふざけんな」

口から発せられた声は、自分でも予想以上に苛立ちが混じっていた。

アクエリアスの目が厳しくなり、心なしか同じように苛立ちを混ぜた声で、咎めるように言った。

「だってもうどうしたって無理だろーが。授業サボりゃ買いに行けるけど、進級の為に出席落とさないって決めたのお前だろ」

ぐっと言葉に詰まる。エリーゼも、リーブラが授業をサボって買いに行ったプレゼントでは喜んではくれないだろう。

自分の情けなさに頭が重くなる。

萎れた友人を流石に憐れに感じたのか、アクエリアスがリーブラの肩を叩くと、先ほどとは一転して明るい声を出した。

「今日は昼になったらエリ姉に謝りに行って、お返しはもうちょっと待ってもらおうように言えって。エリ姉だってお前が一生懸命お返しを用意するのは分かってるだろうからさ」

小さく小さく、語尾に「……多分」という言葉が付け加えられたが、リーブラまでは届かなかった。

「……それしかねえか」

必死に頭を回転させても、この状況を打破する解決策は思い付かない。

結局リーブラは、ひたすらに悩みながら授業を受けることになった。

為す術もなく、そのままホームルームが終了した。

帰ろうと教室を出る者、部活へ行く者、昼ご飯の時間であるためお弁当を食べ始める者。各々が動きだした教室のざわつきの中、ほんの数秒の間リーブラはそのまま座っていた。

やがて意を決して立ち上がる。アクエリアスには挨拶代わりに片手を上げ、教室の外へと出て行った。

。

教室を出てから食堂に寄り、エリーゼの教室がある階へと向かう。

「おい、お前」

その途中、前から歩いてきた人物に声を掛けられた。

リーブラは思わず心の中で舌打ちする。そこにいたのは、生徒指導の教師だった。

この高校では、各学年ごとに担当の生徒指導教諭が存在している。しかし、派手な身なりとそのお世辞にも良いとは言えない目つきから、リーブラはどの学年の生活指導教諭にも当然目をつけられていた。

ただ、自分の学年担当の生徒指導教諭とは長きに渡るぶつかり合いを経て、和解のような状態になっていた。

未だにリーブラの天敵のような存在ではあるが、心底自分を嫌っているわけではないと分かる彼の態度に、リーブラも敵意を剥きだすことはなくなっていた。

だが今、目の前にいるのはその人ではない。睨むことを憚りもしないこの教師は、エリーゼ達の学年の生徒指導教諭だった。

「何だよ」

「その怪我はなんだ」

教師の視線が、リーブラの右手と、それから頬へと走る。怪我の具合を心配しているわけで無い事だけは確かだった。

「また喧嘩か」

まだ二十代だったと思うその教師の声色には、明らかに侮蔑が含まれていた。

「ちげーよ」

「嘘をつくな。だったらその怪我はどうしたんだ」

「嘘じゃねえ！ 薔薇摘んでただけだっ」

教師の表情が分かりやすく歪む。

威圧するような声が廊下に響いた。

「意味の分からないことを言うな！ 近頃は大人しくしてると思っていたが、どうせお前のことだ。結局また問題を起こしたんだろう」

どうせ。

何だよ、どうせって。

確かにリーブラの見た目は悪い。髪もアクセサリーも目つきも態度も、教師からしたらお気に召さないだろう。

素行までもが悪かった時期も確かにあった。見た目や、相手が年上でも物怖じしない性格も相まってガラの悪い連中に目をつけられた。

先に手を上げられ、条件反射で相手を叩きのめすことも多かった。幸か不幸か喧嘩は強く、複数相手でもリーブラが負けることはほとんどなかった。

その内「恐い不良」としての地位を確立しており、自然と人が離れていくのに気付いたのはいつだったか。リーブラから手を出したことはなかったが、多くの人間にとってその事実は知る由もなく、またどうでも良い事だったのだろう。

リーブラ自身にも問題はあった。

痛覚が薄い。この体質が裏目に出たと言っても過言ではない。痛みに鈍いリーブラは、相手を傷つけることにも容赦がなかった。傷つけるというのはどういう事なのか、考えもしなかったのである。

また、喧嘩っ早い性格もあった。相手が先手を打たない限り暴力は振るわないが、口より先に手が出ていた。自分の言い分を聞きもしない教師に掴みかかったことも多い。

でも、今は、違う。

自分が何をしていたのかちゃんと気付いた。

変わりたいと願って、ここにいるのは今の自分だ。

それなのに。

「相変わらずどうしようもない奴だな。生徒指導室まで来い」

昔、教師の胸倉を掴んだ時の苛立ちの記憶に脳が侵される。

かっとなった瞬間、リーブラの左手は動いていた。

エリーゼは教室の時計を一瞥すると、バッグを肩にかけて立ち上がった。

お昼の時間になってから五分少々。リーブラはまだ現れない。

リーブラを待つこと以外、これといってする事もなくなったエリーゼの足取りは迷いなく昇降口を目指していた。

会う約束はしていたが、来るまでいつまでも持っているという約束を交わしたわけではない。リーブラのクラスのホームルームが長引いた可能性もあるが、それは単にリーブラの運がなかっただけの話だ。

茶色がかったやわらかな長髪に、くりっとした大きな瞳。色白の肌に、華奢な体。多くの異性を魅了する容姿を持つエリーゼは、誰かに呼び出されることも少なくない。

エリーゼは会う約束を求めてきた相手に、理由なく断ることは滅多にないが、待つことはしなかった。

自分と会いたいのは向こうであり、会うための努力と運は、会いたい者が持ち合わせるべきだというのがエリーゼの持論である。

しかし、自分の中では当たり前になった持論を普段なら考えることもしないのに、今日に限っては無意識に心の中でその持論をなぞっていた。

自分のそんな心中に気付いたのは、これまた無意識に、リーブラのクラスがある上階へ続く階段に目を走らせた時だ。

自分の行動に、整った顔を僅かにしかめる。

理解しがたい己の行動を振り払うように視線を戻す。

それにも関わらず、誰かが階段を降りる足音を耳が聞きつけてしまい、思わずもう一度階段の方を見やっった。

「あれ、エリ姉」

階段を降りてきた人物は、一瞬期待したその人ではなく、弟のアクエリアスだった。

アクエリアスはエリーゼと目が合った瞬間、慄いたように体を少し引いた。

「な、何でそんな機嫌悪そうなんだよ」

「はあ？」

何言ってるの？ と続けようとしたものの、言葉が止まる。

何故かアクエリアスを思いきり睨みつけていることに気付いたからだ。

「……リーブラの奴、何かやらかしたの？」

「何も？ というよりまず会いにも来なかったしねえ」

あまりに尖った自分の声に、エリーゼは自分が不機嫌であることをようやく認めた。

そう、リーブラは会いに来なかった。

彼の性格なら真っ先に来るだろうと思っていたし、それ以前に、昼まで待たず朝の時点で来るのではないかと心のどこかで予想していた。

待っていなかったのは自分だ。

外れたのも自分の勝手な予想だ。

それは頭で理解していても、不機嫌な感情は晴れなかった。

一方、階段を降りてきたアクエリアスは、その言葉に首を傾げた。

「会いに行っていないの？ ちょっと前に、エリ姉のところに行くために教室出て行ったけど」

今度はエリーゼが首を傾げた。下級生がエリーゼの教室に来るためのルートは二つあるが、近いのは

今アクエリアスが降りてきた階段を使い、エリーゼがここまで来た道筋を逆流する方法だ。

けれど、リーブラとはすれ違ってない。

「あれ、エリ姉どこ行くの？」

「ちょっと用事を思い出したから」

足が自然に、今しがた通ってきた廊下を歩きだした。

エリーゼの脳内に、自分の教室へ来るためのもう一つの道筋が描かれる。

一回。一回だけだ。リーブラが通ろうとした可能性のあるルートを逆から辿ったとしても、再び昇降口に着くまで大した時間にはならない。折角だから食堂に立ち寄って飲み物でも買っていこうか。

心の中で重ねる言葉が、ひどく言い訳めいていたことに、エリーゼは気付かないふりをした。

そうして歩いていると、不意に壁を殴りつけたような鈍い音がした。

どうやら目の前の曲がり角の先から聞こえてきたようだ。続いて、言い争いのような声も聞こえてくる。

まさかと思いつつ、エリーゼはそのまま廊下を進んで角を曲がった。

「……あっ」

声を上げたのはエリーゼではなく、彼女と目が合ったリーブラだった。

リーブラの左手は握りしめられ、すぐ隣にある壁にその拳をついていた。先ほどの音は、実際に拳が壁を殴った音だったようだ。

そのことよりも、エリーゼはリーブラの怪我に目を留め、少し驚く。

リーブラとエリーゼの間に立っていた教師が、リーブラの視線を辿って振り返り、怪訝そうな顔をした。

一瞬固まっていたリーブラが、はっとしたように息を呑んだ後、焦ったように声を荒げた。

「っだから！ とにかく俺は喧嘩して怪我したんじゃねーよっ」

ふうん、そういうことだったの。

リーブラの怪我とその言葉で、エリーゼは大体の事情を察した。

そして、再び言い争いを始めようとした二人に躊躇なく歩み寄った。

「リーブラったら、怪我した理由言わなかったの？」

「え？」

場の空気をぶち壊すような明るい声と、満面の笑顔で二人の傍に立つ。

先生もこんにちは、と言って笑いかけると、厳しい顔をした教師は虚を突かれたように「あ、ああ」とだけ返事をした。

リーブラの顔を見上げ、もう一度同じ質問を繰り返す。

「理由言わなかったの？」

「い、いや言ったは言ったんですけど……」

「薔薇がどうのとかふざけた嘘しかつかないだろう」

「だから嘘じゃねーって！」

「薔薇ってなあに？」

首を傾げると、リーブラが慌てふためきながら手を振った。

「いや、何でもないです！ 薔薇はほんとなんでもなくって」

それ見たことかという表情になる教師を、リーブラがギッと睨む。

薔薇のことは分からなかったが、エリーゼにとってはさほど関係なかった。

「もうリーブラってばあ、恥ずかしいからってそんな嘘つかなくてもいいのに」

状況が呑み込めないらしく、リーブラが戸惑ったように目を瞬かせる。

それは無視して、目の前の教師に愛らしく笑いかけながらエリーゼは言葉が続けた。

「先生見てください、痛々しいでしょう？ リーブラ、昨日の放課後に、飛んできたボールからエリーのこと守ってくれたんですよ。エリー、手当とか慣れてなくて、包帯とか大袈裟になっちゃいました」

ね？ と同意を求めると、教師はぼかんとしながら、何か言いたげではあったが言葉に詰まっていた。

その一瞬を見逃さず、エリーゼはくいつとリーブラの制服を指先で引いた。

「じゃあもう帰ろ？ エリー、待ちくたびれちゃった」

「えっあ、は、はい」

「先生もさようならあ」

笑顔の横で小さく手を振って、未だ状況に着いていけない様子の教師は置いてさっさと歩き出す。同じく状況に着いていけない顔をしたリーブラも、とにかくエリーゼを追って歩き出した。

「ほんつとうにありがとうございました！ それからすみません！」

昇降口まで来ると、リーブラはホワイトデーのお返しを用意できなかった旨も伝え、土下座せんばかりの勢いでエリーゼに頭を下げ続けた。

「別にいい」

リーブラがお返しを用意できなかったというなら、それはやむを得ない理由があったのだろうし、先ほどの一件も完全にリーブラは被害者であることは理解していた。

感謝の念も自責の念もあるだろうが、自分が大して労力を使ったわけでもないのに、さほど気にはしていない。

でも、と更にお礼と謝罪を重ねようとするのを遮って、エリーゼは問いかけた。

「それより、何でそんなの持ってるの」

右手に注がれた視線に、リーブラが思い出したように、あっと声を上げた。

リーブラの右手にはずっと、未開封の苺ミルクの紙パックが収まっていた。

そのいちごミルクが、すっとエリーゼの前に差し出される。

「これ、エリーゼさんに渡そうと思ってたんです。ホワイトデーのお返しのつもりなんてないですけど、その、お詫びの意味で」

受け取ってもらえるかどうかという不安が、揺れる瞳に分かりやすく現れていた。

自分よりも随分身長は高いはずなのに、申し訳なささと緊張から小さく見えることが少し可笑しい。

金髪にシルバーピアスに着崩した制服で、姿勢を正して苺ミルクを差し出す光景のアンバランスさに、エリーゼはふっと目を細めた。

「少し前に新しくできた、すごく可愛い喫茶店があるの」

突然、別の話をし始めたエリーゼに、目の前の不安そうに揺れていた瞳がきよとんとした。

「でも喫茶店って一人だと行きにくいんだよねえ。ホワイトデーのお返しする気があるなら、そこに連れて行ってほしいなあ」

差し出され続けていた苺ミルクを、そっと手に取る。

「これは、お返しの延滞料ね」

そのまま体を反転させ、返事を聞かずに出入り口へ向かう。

外へ踏み出すと、空気はまだ冷たかったが、暖かな日差しが体を包む。澄み渡った青天が広がっていた。

つい十数分前まで感じていた不機嫌な気持ちは、不思議なほどにどこにもなかった。
白い息を小さく吐き出したエリーゼの背中に、返答を告げる声が追いつく。
その声には答えない。振り返ることもない。
代わりに、手の中の苺ミルクにストローをさし、一口含んだ。
「……美味しい」
そう呟いた口元には、いつになく楽しそうな微笑みが浮かんでいた。
その瞳が優しく和んでいたことは、エリーゼ自身ですら知る由もない秘密である。

了

あとがき

お馴染み登場人物早見表はこちら

「四兄弟」

長女シャルロット(大学二年、ナイトと恋人)

長男イーゼス(大学一年、アプリコットと恋人)

次女エリーゼ(高校三年)

次男アクエリアス(高校二年)

「三兄弟」

長男ナイト(大学二年、シャルロットと恋人)

次男リーブラ(高校二年、エリーゼにぞっこん)

長女アプリコット(高校一年、イーゼスと恋人)

書いてて思いましたが、今回主人公であるこの二人は、外野視点で書いた方が面白くなるようです。

これでとりあえず全員分の話が終わりました。早見表で知らないのがいるぞという方は、電子書籍と部誌のバックナンバーへ。

今回も長かったですね。ここまでお付き合い下さって本当にありがとうございました。読了感謝。

勇者のアフターストーリー (幼夏)

勇者のアフターストーリー

幼夏

カラン、と酒場の扉がベルを鳴らす。賑わい盛りの店内に足を踏み入れると、ここ数日の緊張がほぐれ、背筋に通っていた芯のようなものが一度に抜ける。「英雄」を気取るのは、楽じゃない。

「遅いぞハイド、お前が最後だ」

野太い声に大きな体、うちのパーティ自慢のウォーリアであるデントだ。八人は楽に座れるテーブル席に、僕の大切な仲間たちが四人腰かけていた。デントの隣にはメイジのリリスが座っている。リリスがあまりに小柄なので、この二人が並んで座ると親子にしか見えない。デントとリリスの向かい側には、ビーストテイマーのクロベル、そして――

「僕が最後？ まだフロウが来てないじゃないか」

「あいつが遅いのはいつものことだろう、だから端から数える気はない」

デントが冗談めかして言うと、隣のリリスがくすくす笑った。

「ここ、座りなよ」

クロベルの隣に腰かけていたロゼ――アーチャーであり、僕の幼馴染みでもある――が、自分の隣の椅子を叩いて見せた。

「ああ、ありがとう、ロゼ」

今日、このメンバーで集まったのは、他にもない「魔王打倒&ヴィオレッタ姫奪還お疲れ会」を開催するためだった。ここにいる五人に、ランサーのフロウを合わせた六人が、悪しき魔王を討ち取った英雄なのである。

魔王城から、姫を連れて帰還したのが約二週間前。このたった二週間で、噂は国外にまで瞬く間に広がり、保管に困るほどの謝礼が届いた。街を歩けば「勇者ハイド様だ」と騒がれ人垣ができる。同じような経験を、パーティの全員が経験しているようだった。

「それにしても、こんなメンバーでよく魔王を倒せたわね」

ロゼが笑うのも無理はない、デント以外は皆、戦いそうにもない、何処にでもいる細身の少年少女なのだ。「『【六人の英雄、魔王を撃破】ガルディア大陸全土に明けぬ夜をもたらしていた魔王コーデインが、弱冠二十歳の青年率いる僅か六人のパーティに打ち破られた』だってよ。俺、新聞に自分の顔が載ったのは初めてだぜ」

デントが読み上げた新聞を、ロゼが取り上げた。

「わ、ほんとだ、写真載ってる。私たち有名人ね」

「ボ、ボクだけ映ってない……」

クロベルが、新聞を覗き込みながら、しょんぼりした。

「よし、全員そろったことだし、飲むか！」

「いや、フロウが」

「すいませーん、ビール大ジョッキで五つ！」

「ボク、ビールは飲めないって……」

クロベルがさらに、しょんぼりした。

「かんぱーい！」

ビールはすぐに運ばれてきた。キンキンに冷えたジョッキを打ち鳴らし、互いの勇姿を讃える。

最初の一口でジョッキを空にしたデントが、それを勢いよく、音を立ててテーブルに置いた。みんなの視線が、彼に集まる。

「俺が酔って記憶を失う前に、皆に報告したいことがあるんだ」

珍しく真面目な口調の彼に、一同は思わず息をのんだ。

「俺——いや、俺たち、結婚します」

しばらく意味が理解できず、啞然とする。デントの隣でリリスが顔を赤らめているのを見て、ようやく解した

。

「デントお前……リリスが幾つだか分かってるのか！」

「十九だろ」

「自分が幾つだか分かっているのか！」

「二十三だよ！ おかしいか？」

「いや、歳の差四つは普通だ……」

二年間も一緒に旅をしていて、全く気が付かなかった。いつの間に二人は、愛を育んでいたのだろう。クロベルが真っ白になって涙を流しているのが視界の端に映ったが、見なかったことにした。

「随分突然じゃない？ そんな大切なこと、いつ決めたの？」

ロゼがぐいっと食いつく。リリスが恥ずかしそうに口を開いた。

「魔王を倒した日の、夜です。私、ずっとデントさんが好きで……。それで、あの日の夜、デントさんに……」

そこまで言ったところで、リリスは「はうう」と両手で顔を覆ってしまった。

「あの日、俺がプロポーズしたんだ。一生俺が守るって、約束した」

僕は口笛を吹いて茶化す。視界の端に、灰となって崩れてゆくクロベルが見えたが、見なかったことにした。

「いいなあ、リリス。私もそういう旦那さんが欲しいなあ」

ロゼがうっとりとした口調で、頬杖をつきながら言った。こうして見ると、二人は本当に幸せそうだ。いつからだっただろう、どの店に入っても二人が自然と隣に座る様になったのは。もう思い出せないくらい、昔のようだった。

「お前はどうかだよ、お姫様との御結婚の話は」

心臓を鷲掴みにされたような気がした。胃がきりりと痛む。

「ああ、順調だよ。明日の午後から、式典で使うドレスを選びに行くんだ。これが大変なんだよ、お色直し用と合わせて五着は必要なんだってさ。うち二着はオーダーメイドなんだけど」

「随分とお喋りね、幸せそうでなによりだわ」

ロゼがこちらを見ずに微笑んだ。指摘されてようやく、自分が饒舌になっていたことに気付く。この多言の意味を、ここにいる誰も知らない。

言えるわけがなかった、姫様との結婚に、迷いがあるだなんて。

*

姫様を魔王城から奪還したあの日、喜び以上に強く感じたものがある。それは、違和感だった。

二年もの間、僕は常に姫様を逸早く救出することを考えていた。「姫様は冷たく薄暗い城に閉じ込められ、毎日さみしい思いをしているのだ、早く救出しなくては」と。

そもそも、ひ弱な体とちっぽけな勇気しか持ち合わせていない僕が、魔王に立ち向かおうと思えたのは、それだけ姫様に対する思い入れが強かったからだ。僕は、姫様の召使いだっただ。こんな僕にも向いている職業という

のがあったようで、従者としての成績は非常に良かった。姫様の召使いに選ばれた時の、なんとも言えない気持ちを今でも覚えている。

——遠くから眺めることしか出来なかった美しい姫が、僕のすぐ近くにいる。

そう思うだけで、毎日の仕事が楽しかった。

魔王城でいざ姫様と対面した時、自分のイメージとのギャップに啞然とした。姫様は、大陸中から集められた、各国の美しい調度品に囲まれて生活していた。天蓋付きのベッドから、シルクのベールをかき分けて出てきた姫様は、それはそれは美しかったが——想像とあまりに違う結末に、驚きを隠せなかった。

姫様が魔王城から、お気に入りの調度品を自分の城に運ばせたと聞いて、さらに違和感は膨らむ。僕らの二年間は、死と隣り合わせの恐怖に耐え、自分の限界を超えて臨んだ戦いの日々だった。すべては姫様のため、そう思っていたはずなのだが。

魔王が大陸中から選んだ、「世界で最も美しい女性」を手にしたにもかかわらず、僕の心は満たされなかった。

*

お疲れ会は、二次会もなく僅か数時間でお開きとなった。いつものことだ、皆酒に弱くてすぐ潰れてしまう。僕とロゼ以外は、寝息を立てていた。意識があるとはいえ、ロゼの顔は赤らんでおり、酔っているのが分かる。

「クロベル、今日はいつもに増しておとなしかったわね」

「ああ」

ロゼがリリスを担ぎ、僕がクロベルを担いで酒場を後にする。デントは適当に、店の外へ出してきた。

「フロウ、結局間に合わなかったわね」

「ああ」

「リリス達の結婚式、晴れるかしら？」

「ああ」

ロゼがぴたりと足を止める。

「ん、ロゼ？ どうした？」

しばしの沈黙があってから、自分が生返事をしていたことによりやく気が付いた。

「……ヴィオレッタ様のこと、考えてたの？」

「いや、その」

何と答えればよいのか分からない。分かるのは、ロゼが怒っているということだけだ。

「好きなんだね、ヴィオレッタ様のこと」

返すべき言葉を、僕は持っていなかった。

「なのにあの晩、どうしてあんなことしたの？」

「ご、ごめ——」

「ずっと前から！」

謝罪の言葉は打ち消され、ロゼの声が人気のない街路地に響く。

「ずっとずっと前から、リリスとは比べ物にならないくらい、ずっとずっと前から！ ……姫様が攫われたとき、これで諦めてくれると思ったのに。ほんとに魔王に勝っちゃうなんて、思ってなかったし」

ロゼの声がだんだん小さくなっていく。

「ロゼ——」

「私がハイドを守るって、決めてついて行ったけど。全部全部受け止めて、笑って送り出してあげられるほど、私は……私、そんなに強くなかった」

ロゼの大きな瞳から涙があふれて、頬を伝う。

「ずっと前から好きだった」

最後にそれだけ言って、ロゼは角を曲がった。リリスの泊まっている宿屋とは真逆の方向なのだが、今彼女を追いかける権利を、僕は持っていなかった。

*

酒場に財布を忘れたことに気が付いたのは、クロベルを最寄りの宿屋に送り届けたときだった。それなりの額が入っているため、取りに戻らなくては不味い。いくら謝礼金で懐が温かくなっても、冒険者時代の貧乏性は直らない。

駆け足で宿屋に戻ると、時間にルーズなランサー、フロウがカウンターで一人酒を飲んでいた。

「あ、ハイドくん。遅いよー？ みんなぜんぜん来ないから、俺様一人で酒盛り始めちゃったじゃない」

「お前の時計は何時間遅れてるんだろうな」

「んー、何のことか全くわからないなあ！　ところで、お探しの品はこれかい？」

フロウの手には、俺の財布が握られている。

「ありがとう、フロウ」

彼の手から財布を受け取ろうとすると、フロウはさっと自らの背後に財布を隠した。

「まあまあ、焦らずに。座りなよ」

にこりと笑うフロウ。彼がこんな風に笑うときは、何を言ってもうまく誤魔化されてしまい、話が通じない。仕方なく、僕は彼の隣に座った。

「ハイド君の困った顔見ると、俺様楽しくなっちゃうなあ」

「お前が今困らせてるんだろ？」

「いやいや、俺様にお財布隠されたくらいで、ハイド君はそんなに困らないはずさ。ほらほら、俺様に全部話してごらんよー」

僕は、こいつの見透かしたような物言いが好きじゃない。好きじゃないが、こいつのことは嫌いになれない僕だった。

「誰にも言わないな？」

「もちろんさ！　俺様が、ハイド君の大切な話、人に漏らしたことがあったかい？」

「いや、ないな」

人は見かけによらない。一番噂好きに見える彼の口が、一番堅いのだ。はあ、とため息をついてから、話す覚悟を決めた。

「魔王を倒した夜、僕、ロゼを抱いたんだ」

「へえ……ん？　あれれ、おかしいなあ。ハイド君、あの夜は姫様の隣で寝たんじゃなかったっけ？」

「寝付けなくて、結局ロゼの部屋に行ったんだ」

「ひゅう、夜這い？　大胆だねえ」

フロウは、ずっとにこにこしている。セパレートのカクテルをマドラーでかき回しながら、話をつづけた。

「それで、ロゼのこと傷づけた」

「そりゃそうでしょ。自分は姫様と結婚して王様になんの分かってるのに、ロゼちゃんに手を出すなんてさ。ハ

イド君さいて一、女の敵い」

「謝ることもできなかった」

「謝って許してもらえるもんじゃないでしょ。どうして姫様じゃなくて、ロゼちゃんなのさ。俺様ならどう考えても姫様だなあ、女の子の魅力、がぎゅーっと詰まってる」

グラスの中、酒場の灯りに光る赤色を、ぐいと飲み干す。

「どうしてだか、自分でもわかんないんだ。姫様のこと、自分がどう思っているのかも、分からない」

「あらら、マリッジブルー？」

「マリッジブルー、か……」

からん。ハイボールの入ったフロウのグラスの中、氷が踊って音を立てる。周りはまだ、わいわい盛り上がっているというのに、僕ら二人だけ違う次元にいるように感じた。喧噪が遠くに聞こえる。

「じゃあさ、ロゼちゃんのこと、どう思ってるわけ？」

「それは……」

何と答えていいものか、分からない。

「ハイド君、よーく聞いてね？ 選べるのは、一人だけだよ」

フロウはいつもと同じ、仮面のような笑みを浮かべた。

*

フロウのおかげで寝不足だ。あの後も、他愛のない話をしながら散々飲まされた。少し体が重い。

国一番の服飾店で、姫様と二人でドレスを選ぶ。正確には、僕ら以外に多数の護衛と二人の召使いがいた。姿勢よく立ちピクリとも動かない、伏し目勝ちな若い召使いを見ていると、昔の自分を思い出した。

「ハイド様っ」

試着部屋から出てきた姫様が、ゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。純白に包まれた姫様を目の前に、僕は一歩も動けない。

愛らしく、それでいて気高い。

美しき我が花嫁を、僕は抱き寄せることはおろか触れることさえできなかった。彼女と僕の間には、美術館に並ぶ洗練された作品とその鑑賞者のような、絶対的な距離感な存在した。

言葉に出来ないほど、思わずため息をついてしまうほど、完成された彼女を前に――僕は絶望にも似た感情を抱きながら立ち尽くす。

「とても、きれいだよ」

声の震えを抑え、なんとか言葉を紡ぐ。よく考えれば、姫にこのような言葉遣いをしたのはこれがはじめてだ。幼い頃から彼女は、僕にとってこの上ない敬意の対象だったのだから。彼女に近づき、対等な立場に立つことは、本来喜びであるはずだ。しかし僕は、あのときと同じ違和感を、痛いほどに感じていた。

これは、愛なのか？

彼女は美しい。誰にも愛される心優しい彼女は、理想の姫であり、至上の花嫁であるはずだ。そして彼女の背後には、僕の王座が見える。

もちろん、王位が欲しくて姫を助けたわけではない。それだけは断言することができるが、彼女への「愛」が僕を突き動かしたかと言われると、はっきり肯定することができない。彼女を助ける以前は、首を縦に振れたは

ずなのだが。

ふと、ロゼの顔が頭に浮かんだ。純白のドレスに包まれた姫の顔に、ロゼの微笑みが投影される。
「似合わないの、分かってるけど……その、ふふ、照れるね。うまく言えないな」
そんなロゼの声が聞こえた、ような気がした。

「ハイド様？」

姫に覗き込まれ、心臓を握られたような感覚に目を見開く。

「大丈夫ですか、お顔が真っ赤ですよ…？」

なにも知らない無垢な姫。

「姫があまりに、お美しいので…」

思わず、口調が昔に戻ってしまう。

「名前でも呼んでくださるのでは、なかったのですか？」

姫がしゅんと小さくなった。庇護欲を掻き立てられるその姿は、白い子猫か雪兎を思わせる。守ってあげられるものなら、守ってあげたいと思う。

「ヴィオレッタ姫」

「もうすぐ、姫ではなくなるのですよ？」

「…ヴィオレッタ」

これは、愛なのか？

答えはまだでない。

＊

王宮の中を歩き回ると、昔の思い出が溢れ出て、洪水のようだ。頭の中が、すこし混沌とする。客間のソファ一に腰かけ、中庭に目をやる。そこは、僕と姫様が初めて対面した場所だった。

姫様の召使いの一人になることが決まった日、僕は中庭でそわそわしていた。ランチの席で顔を合わせる手筈になっており、そこからは姫様にずっとつきっきりだ。緊張しないはずがなかった。国一番の美貌を、間近で眺められる数少ない人間の一人に、僕はなろうとしていたのだ。

しかし対面の時は思ったより早く訪れた。散歩中の姫様が、中庭に立ち寄ったのだ。姫様の美しさは、周囲の空間全てを背景にしてしまう。世界という絵画のモチーフは、常に姫様だった。

「こんなところで、なにをしていらっしゃるの？」

姫様の御顔は、日傘の下にあっても輝いて見える。突然のことに動揺して、何も答えることが出来ずにいる僕に、姫様は微笑みかけた。

「あなた、お名前は？」

はっとした。思い出の中の姫様の言葉が、別の記憶を呼び起こしたのだ。引き出された記憶は、つい最近の

もの。魔王討伐に成功した、あの夜のことだった。

「あなた様、お名前はなんとおっしゃいますの？」

「ハイド……ハイド・メルブーケと申します」

「素敵なお名前ですね」

姫様の透明な微笑みを見ても、僕の心は高鳴らない。姫様は、僕の名前を知っていると、勝手に思い込んでいた。三年間、毎日姫様に奉公していたし、名前を名乗ったこともあったのだから。二年間で忘れられてしまったのかと思うと、少し息が苦しくなった。

今冷静に考えれば、それは当然のことだ。姫様はこの二年間で僕を「忘れてしまった」のではなく、最初から「覚えていなかった」のだ。常任の召使いは、一人や二人ではない。姫様には、中流家庭から出稼ぎにきた召使いの名前を覚えておく余裕も、必要もない。彼女は、将来一国を支える王妃となるに相応しくあろうと必死だったのだから。

彼女を見ていたのは僕だけ。彼女にとって僕ら召使いは家具と同じだ。いつもそこにあり、ただ単調に役割を果たすもの。口を利くこともほとんどない——家具と一体、何が違うだろう。

家具に名前が無いのは、当たり前のことだ。なのにどうして、こんなにも嫌な感じがするのだろう。

「ハイドって、いい名前よね。私なんて名前負けしちゃって、名前変えたいくらい。薔薇なんて、全然私らしくないね。ハイドは、その名前似合ってるよ」

また、ロゼの声が出た。いつ言われたかもわからない、彼女の何気ない一言が、今は胸に染みる。

「ロゼ……」

お疲れ会の夜が鮮明に思い出され、胸の奥が狭くなる。今頃、何をしているだろうか。一度考え出すと、ロゼのことばかりが頭に浮かぶ。

——ずっと前から好きだった。

じわり、じわりと何かが体の中に染みわたって、熱い。

この気持ちは、何なのか？

この答えも、まだでない。

*

結婚式典を三日後に控えた夜のことだった。ようやく現国王・現王妃との予定が一致し、四人での会食が催された。そしてその後、姫と二人で近くの海浜公園へ散歩に向かったのだ。二人きりに見えるだけで、周囲には護衛が隠れているに違いないが。

「夜風が気持ちいいですね」

風に靡くブロンドの髪を、片手で整えるしぐささえ上品に見える。姫様ののんびりした歩調に合わせていると、睡魔が僕をからかった。

手頃なベンチに腰かけると、姫様は長い睫を持ち上げて、こちらを覗き込んできた。透き通るブルーグリーンの瞳に、吸い込まれそうだ。

姫様はそのまま、僕の手を優しく握り、黙ってこちらの目を見つめ続ける。暫くただ見つめ合っていると、姫様はゆっくり目を瞑り、顎先を少し持ち上げて唇を差し出した。夜闇ではっきりとは見えないが、なんとなく顔を赤らめているようにも見える。

これは、合図なのか？

動揺しながら、数秒間迷う。姫様の手が僅かに震えているのが分かると、彼女の緊張が僕にまで伝染し、余計に動揺してしまう。しかし、このまま待たせ続けるわけにもいかない。僕は徐に顔をよせ、優しく口づけた。

不思議なほど無感情な自分に、気付いてしまう。

頭が真っ白になったというわけではない。済ませてしまえば緊張感や動揺もなくなり、後には何も残らなかったのだ。感動も喜びもない。そこにあったのは、ただ唇を合わせたという事実だけだった。

姫様が恥ずかしそうに唇や手を僕から話す。彼女がちらりとこちらを見たのが分かったが、僕はあえて目を合わせなかった。いや、合わせられなかったのだ。僕の顔には今、人形のように無機質な表情が張り付いているに違いない。

「……風邪をひいてしまうといけない。もう帰ろう、ヴィオレッタ」

姫様にあえて背を向けて、一歩前を歩き出した。

これは、愛じゃない。

真っ白だった答案用紙に、はっきりと書き込まれた答えだった。

*

王宮の中、僕のために用意された寝室に戻り、ベッドに腰掛けた。疲労感がどっと押し寄せる。三つ夜を超えれば、式典の朝が来る。現国王は王座を退き、そこに僕が座る。隣には、ヴィオレッタ姫――

僕はきっと、にこりとも出来ない。

姫様に触れ、体温を分け合っても、僕は何のよろこびも得ることが出来ないだろう。

今この瞬間も、誰かに見張られているかもしれない。国王となれば、一生その視線から逃れられない。姫様に抱いていた思いが愛ではない事に気付いた途端、その他の事が突然気になりだして、胸がざわつく。こんなにも広い王宮が、実家の自室よりもうんと狭く感じられた。

静寂が僕を焦らせる中、何かがガラスを打ち鳴らす音が聞こえ、平静を取り戻す。コンコン、と鳴り続けるガラスに、目をやった。

「は？」

思わず声が漏れる。窓へと駆け寄り、勢いよく戸を開けた。

「何考えて――！」

大きな声を出した僕の口元に、人差し指が押し当てられる。

ロゼだ。

あれからもう半月はあっていなかった、ロゼだ。「しー」と小さな声で言うロゼは、悪戯っぽく笑っていた。彼

女を部屋に入れ、窓に鍵をかけてから、僕らは小声で話し始めた。

「ここ、二階だぞ？」

「二階の高さなんて、ヴェルゲンの樹海で超えた崖より、ずっと低いよ？」

ロゼの笑顔が、僕の不安を溶かしていった。自分の口角が、自然と上がるのを感じる。

それから、いろんな話をした。僕らの冒険の話、幼少期に馬鹿やった話、まだ見ぬ遠い国の話、海の向こうの話。

時計を見る一瞬さえも勿体ないくらい、僕らはずっと目を合わせながら、会話する。この夜がずっと明けなければいいとさえ、思った。

どれくらいの時が経っただろう、会話の切れ間、ロゼが目線を逸らした。

「今日はさ、謝りたくて来たんだ」

ロゼの口調が、深刻なものへと変わる。

「みんなで飲んだ日の夜、勢いで、その——変なこと言っちゃって。言わないって、決めてたんだけどなあ……」

ロゼの苦笑いに、胸が苦しくなる。

「迷惑かけちゃってごめん。ハイドには、幸せになってほしいって思ってる。ほんとだよ」

ロゼがこんなに小さく見えたのは、初めてかもしれない。ロゼはいつだって、僕の手を引いてくれる存在だった。そんなロゼが今、僕の手を放し、背中を押そうとしている。自分の気持ちには蓋をして。

「今日で最後にするんだ。ちゃんとお別れして、心から祝福した——ひゃっ」

僕は思わず、ロゼを抱きしめた。どうしてこんなに簡単なことに、気が付かなかったんだろう。

「ハイド……？」

楽しいことも、辛いことも、全部ロゼと共有してきた。同じ方向を向いて、歩いて来た。魔王を倒したあの夜も、抑えきれない高揚感を、他にもないロゼと分かち合いたかったんだ。

僕らの歩調は、合わせずとも揃っていた。

これが、愛だ。

ようやく見つけて、この手に掴んだ。ロゼの細い肩を抱き、その温もりを確かめる。

「ロゼ、一緒に遠くへ行こう」

ロゼは黙って聞いている。

「まだ行ったことのない国へ。いや、もっと遠く、誰も行ったことのない場所まで。ロゼと一緒になら、何処までも行ける」

数秒の沈黙に、僕は拒否されることを覚悟した。ロゼの肩が震えだしたのに気付き、僕はロゼを放して表情を伺う。

「み、見ないで……」

ロゼは笑っていた。顔を真っ赤にして、ぼろぼろ零れる涙を擦りながら、口元だけは笑っていた。

「ロゼ？」

「ふふ、大丈夫」

ロゼは涙を啜って、ごしごし袖口で顔を拭く。

「行こう。ずっとずっと遠くに」

僕は立ち上がり、ロゼの手を引いて窓際まで連れていく。

「イーストバレーを思い出すなあ」

僕がつぶやくと、ロゼが笑った。

「あの時は死んじゃうかと思ったね」

「あの高さに比べたら」

「二階の高さなんて、ずっと低い」

僕らは窓枠に足をかける。そして、小さな王宮から、大きな世界に飛び出した。

おわり

あとがき

締切当日に書き始め、そこからは精神力との戦いでした。楽しんでくれた人が一人でもいたなら、わたくしは幸せでございます。

さて、今回初めてファンタジーを書きました。え？全然ファンタジーっぽくないって？知らない☆ ハイドがどうして冒険に出たのかとか、どうやって魔王を倒したのかとか、フロウがなぜ時間にルーズなのかとか、この後二人はどうなっちゃうのかとか……書きたいことがいっぱいなのですが。そこは我慢ですね、今回のテーマは書ききったので、幕を引くのです。

今回も推敲を手伝ってくれた雛夏至くんに感謝。

読んでくれた皆様にも感謝。

次回はもっと余裕をもって書きたいと思います。いや、ほんとですよ？ 嘘じゃないでし（囁んだ）

以上、幼夏ちゃんでした！

スクランブルエッグズ （今畑鏡）

スクランブルエッグズ

今畑鏡

「おお、ジュンじゃないか。どうした、職員室まで？」

「あ、これ、できたんで」

俺は担任の相模原にプリントを渡す。

「進路志望調査だな。早くて助かるよ。少し読ませてくれ」

そう言って先生の視線はプリントに向けた。

先生は四十半ばの男性だ。少し寂しくなった頭が彼の歳と苦勞をよく物語っている。

「よく書けているよ」

当たり前だ。

「これなら親も喜んでるだろうな」

そうだな。

「公務員。とてもいい夢だ。誰かのために働きたい、特に自分の故郷に恩返し。なんていい志だ」

もうウンザリだ。さっさと家に帰りたい。

「みんなもはやく進路を考えるようになればいいのだがな。高校三年生の夏間近で決まらない生徒が多いよ
うで……」

先生の俺に対する感想がクラスへの愚痴に変わる。

愚痴を聞き続けるのは嫌だ。俺は先生の話の遮るように、

「何人ぐらい提出したんですか？」

「ああ、今のところジュンを含めて……三人だ。一番目は桜井だったよ。あいつは昨日提出した。他はいつになるのやら」

「桜井っすか……」

桜井は学年で一番の成績の持ち主で俺の友達だ。あいつは勉強が得意で努力家だ。将来は医者になって家の病院を継ぐとか言っていた。

別に羨ましいという感情は無いけど……

「桜井は……」

先生はまた話をはじめようとする。ああもう。

「先生、もう用事あるんで」

俺は先生の話の切ってそそくさと職員室を出た。

廊下の窓から桜の木が顔を出していた。旬の季節が過ぎて葉っぱだらけになって人から見向きもされなくなつたお前。

造花なら一生花をつけていられるのにな。

でも俺はお前のこと、嫌いじゃない。

インハイ予選も終わって、さあ受験生だと意気込むこの時期。放課後の教室は祭りが終わった後のように静

かだった。

静寂の中でカリカリとシャーペンの音がした。

主は俺の教室にいた。

「あ、ジュン君」

俺の名前が呼ばれた。

おしひき

「押引さん？」

押引扉。彼女は俺のクラスの女子。ショートヘアがよく似合っている。その髪型から体育会系にもみえるが書道部だ。彼女とは顔見知り程度だけの関係だ。

「何やってんの？ みんな帰ったぞ」

教室には彼女一人だ。

「やり直しを食らっちゃってさ……」

そう言って彼女が振り回して見せたのは進路志望調査のプリントだった。

「先生ってばヒドイんだよ。私の進路を子供っぽいや現実を見ろとか言ってさ」

進路志望をつっかえされたのか。締め切りギリギリで提出した奴ならテキトーに書いて再提出はありえそうだが、締め切りは来週末だ。

子供っぽい進路ってなんだ？ かなり気になる。

「押引さんの進路って何なの？」

「笑わない？」

「笑わないよ」

「私の夢はね…… お嫁さんになること」

「お、お嫁さん？」

彼女は少し恥ずかしそうに、けれど意思のある声で答えた

俺は笑うどころかびっくりして目を大きくした。なんとも現実味のない夢だと思った。

「そう、お嫁さん。ジュン君は笑わないんだね」

「ま、まあ。その夢っていつから？」

彼女が不思議ちゃんという事実には驚きつつ尋ねた。ほら、幼稚園からの夢とかけっこうかわいいじゃん。

「うーんと、確か高校入ってからだね」

割と最近の夢だった！ なんていう頭してるんだ。

「えっと、その前の夢は？」

「その前？ 小学生の頃は小学校の先生になりたかったよ」

幼い時の方が真面目な夢を見てる！ 頭でも打って狂ったのか？

「なんか不思議がってるようだけど、私にとってお嫁さんになるのは大切な夢なんだから」

「でもさ、お嫁さんって誰でもなれるもんじゃないか」

「それは違うの。今って結婚率も下がるし、結婚しても離婚したりしてる人が多いじゃない。お嫁さんになるのもなり続けるのも難しいんだからね！」

彼女は真面目な顔で俺に話す。彼女なりに真剣なのは伝わった。

「けどさ、具体的に何してるんだよ」

「私は、日々花嫁修業してる」

「でもさ、お嫁さんは結婚しなとなれないだろ。相手は？」

彼女はギロツと俺を睨んだ。

「ば、ばっかじゃないの！ 二十八歳までには結婚するって決めてるんだから。その時までには決まってるわ」

扉は荷物をまとめて俺から逃げるように教室を出た。

キツイことを言ったのかもしれない。そこで俺は気づく。

俺、彼女に嫉妬してるのかも……



夢ってというのは風船みたいなものだと俺は思う。

幼いころはみんな大きな夢とか書くんだ。野球選手とかお花屋とかケーキ屋とか総理大臣とか。

だけど、中学生にもなったら野球選手になるには有名チームに所属しないと成れない、自分には才能がないとか、お花屋で安定した生活ができるのとか思って風船は段々しぼんでいく。そして、どっかに不時着するのだ。

。そういえば、ビーストウォーズになりたいって言ってた奴は何になったんだろ？ あんなの絶対なれるわけないのに。

「晩御飯できたよー」

一階から母さんの声がした。

「わかったー」

晩御飯を食べつつ母さんが

「そういえば、先週の模試はどうだったの？」

「まあ、学年で真ん中ちよい上ぐらい。志望校にはたぶん受かるよ」

「そう」

子供には旅をさせろという諺があるが、現実ではどうもそうはいかないらしい。小舟で旅をさせるより新幹線を使って最速最短で安全に旅をした方がいいのだ。

その方が安心だと俺は思う。

「お母さんはね、ジュンにはジュンが満足できるような人生を送ってほしいと思ってるの。だからね」

だからどうなんだ？ 満足って？

「そういえば、ジュンの友達の桜井君は？」

「桜井？ あいつはいつも通りの学年一位だよ」

「すごいわね、確かあの子の将来は……」

「医者」

「そう、お医者さん。すごい夢よね。今お医者さんの数が減ってるらしいからとっても人のためになる」

夢に優劣なんてあるのだろうか。仕事の種類で優劣が決まるのか。俺の脳裏で扉の顔が浮かんだ。

「そういえばさ母さん、今日将来の夢がお嫁さんっていう女子がいたんだ」

「えー、お嫁さん？ なんか子供っぽいねー」

母さんはおかしいのか声を出して笑った。

「おかしいの？」

「おかしいというか、かわいらしい夢だよ思った。でも、一度きりの人生でお嫁さんはなんかね」

どうやら母さんにとって、お嫁さんっていうのは程度の知れた夢らしい。

母さんだって今はお嫁さんやってるくせに、俺は心内で毒づいた。



俺は子供っぽい子供だったと思う。

夢を聞かれたら「公務員」と答え、理由は「人の役に立ちたい」と言う。

この魔法の呪文を唱えれば大人はにっこりと喜ぶ。そして良い夢だと俺を褒めた。

でも、俺にとっては毒でしかなかった。俺自身が楽しくなきや人の役に立っても全然うれしくない。だって、俺はつまらないから。

そう思っても十三歳のハローワークを見ると、どうしても最初に平均収入欄を見る俺がいた。安定を求める俺がいた。

そんな俺が嫌だった。現実しか見ることができない自分が大嫌いだ。

翌日、空模様は夏間近だというのに梅雨から抜け出せないのか曇っていた。じめじめして夏服ににじんだ汗が気持ち悪い。

教室では進路志望調査のことなど話題に上がっていなかった。

嫌なことはゴミ箱へポイした方が楽なのだ。見て見ぬフリした方が幸せなのかもしれない。

俺は教室で机に顔を伏せて頭を冷やしていた。すると、

「おう、ジュン」

と、話しかけられた。声で相手がわかる。桜井だ。

「おう、桜井。ってお前？」

桜井の左頬は腫れて青紫色になっていた。

「ああ、これか。親父に殴られたよ」

「喧嘩でもしたのか」

「そうだな。大ゲンカさ。皿とか何枚割れたのか分からないくらいだ」

桜井がケンカ？ 優等生で将来有望なあいつが？

「何が原因なんだ？」

「俺が親父の跡を継がないって言ったことが発端だな」

「継がないって？」

「俺、医者になるのは止めたんだ」

止めた？ 俺は桜井が何を言ってるのか分からない。

「俺、お笑い芸人になりたいんだよね」

「は？」

「養成学校に行ってお笑いを学びたいんだよ。だからさ、医学部とかやってられない」

桜井の口からお笑い芸人になりたいなんて初めて聞いた。確かに、お笑い番組は好きだと言っていたがなりたいたいものだとは思わなかった。

「なんで、お笑い芸人なんだ？ 医者は嫌いなのか？」

「医者って職業は嫌いじゃないよ。でも、お笑い芸人になるってことは俺の夢なんだ」

「それじゃあ、大学はいかないのか」

「たぶん、医学部以外の大学に行くよ。そうしないと親父に殺されそうだし、大学で文化学とかやってみたいし」

「お前の親は納得してくれるのか」

「昨日は親父に誰の金で学校に行けてるんだ！ って怒鳴られたよ。だから言い返したさ。誰のせいで俺は生まれてきたんだ！ ってね」

桜井はせせら笑いしながら言っていた。

「俺は親父を説得してみせるさ。まあ、いつになるのか分からないけど」

桜井はきっと立派な医者になって大勢の患者を救うと思う。それができるくらいの資質と環境を持っている。

でも。あいつはお笑い芸人になりたいといった。俺にはあいつが自分の未来をドブに捨てているように思えた。

だから、

「お前は医者になるべきだろ。お笑い芸人には向いていない」

って、口から溢れた。

「まあ、だれだってそういうだろうな」

桜井は腫れた左頬を指先で触りながら怒っているのか悲しんでいるのか分からない表情を浮かべた。

「ジュンはさ、夢とかあるの？」

「夢？ 特にないけど」

「そうだろうな。もしさ、ある限定品が明日の早朝から販売開始だとして。それがずっと前から欲しかった人は徹夜で並ぶだろう。もしかしたら遠征して並ぶ奴もいるかもしれない。でも、そいつらが確実に限定品を手にするとは限らない。逆にたまたま通りかかった人が偶然にも手に入れるかもしれないし、他人の伝手で手に入れる奴もいるだろう。だが本当に欲しい人なら徹夜でもなんでもして手に入れるだろうね」

「何が言いたいんだ」

「まあ、いいさ。おっと授業が始まる。じゃ」

桜井が何を言いたいかわからなかった。わかりたくもなかった。



世の中では高校を卒業すれば就職か進学のどちらかと戦わないといけならしい。だから戦いの準備をしなければいけないのだが、俺は相変わらず気乗りしない。

放課後も空は曇っていて淀んだ空気が重い。気乗りしない理由もそれなのか。

教室では何人かが残って勉強している。その中で押引はまた紙面と葛藤していた。ペン回しをしようとしてぼてぼてとシャーペンを落とす。

ついには力を入れすぎてこちらにまで飛んできた。教室の後ろから前までの距離はある。

落ちてるシャーペンを拾って彼女に手渡す。

「あ、ジュン君いたんだ。勉強？」

「ああ、勉強してた」

ああ、また嘘をついた。勉強なんかしていないのに。勉強のフリしかしていないのに。

「そっか。勉強してたのね。勉強」

彼女はうーっとひと伸びして

「じゃあ、少し私に付き合ってよ」

「付き合う？」

彼女はストーンを切ったように急に話を切り出した。

「そうね、とりあえず付いてきてよ」

「お、おう……」

断る理由なんてなかった。とってつけたような嘘をつくことぐらいできそうだったが、なんだか彼女にはすぐに看破されそうな気がした。

彼女は俺の顔を見てわかったかのように

「じゃあ私の後についてきて」

って微笑みながら言った。

俺と扉は自転車に乗って移動を始めた。

放課後になっても空はまだ薄暗い。

雨が降りそうで降らない天気は何日続いたのだろうか。そんな天気やきもきした学生は「雨が降ったら歩いて帰るか、傘差して帰ればいいだろう」と言って自転車に跨るのだ。

曇った空の先に何かあるのだろうか。自転車に乗ってもその先は見えない。

見えないといたら、扉は俺をどこに連れて行こうとしているのだろうか。

この道の先には、ミスドとかケーキ屋とかあるが……もしかしたらどこかでスイーツでも食べるのか？ だけど、今の俺は甘いものなんて全然欲していない。

「もうすぐだよー」

風によって彼女の声が俺に届く。どうやら彼女の目的地はすぐそのようだ。

彼女はキッとブレーキをかけて俺に問いかけた。

「ねえ、ジュン君って格ゲー得意？」

そこは古びたゲームセンターだった。

入った瞬間に分かる煙草の香り、取れそうにない景品ばかりのU F Oキャッチャー、ジャラジャと鳴るBGM

。その中を扉はぐいぐいと進んでいく。煙草の煙は段々と濃くなっていく。

「よかった、空いてる。ジュン君、向こうに座って」

目の前には格闘ゲーム機の筐体があった。俺も知ってる有名なタイトルで中学のころはよく遊んでいたものだ

。「対戦でもするのか？」

「そうよ」

「わかった」

お互い100円硬貨を投入して対戦モードに設定。使用キャラクターを選択する。

選択画面では俺の知らないキャラクターが増えていた。

この種のゲームでは新キャラの追加なんてよくあることだ。

定期的にアップデートを重ねて世界に新要素を加えている。

俺は昔から使っているキャラを選んだ。というか、しばらくぶりで操作もうろ覚えになっていて使えるのはこれぐらいなのだ。

扉もすぐにキャラを選んだようで、すぐに対戦が始まった。

扉の使うキャラは見たことのない女戦士でかなり動きが速い。

彼女の攻撃に翻弄されて俺は防戦一方だ。

攻撃しなければ、攻撃しなければとするが、苦し紛れの攻撃は当たらない。どうして避けられたのかもわからない。俺の動きは逆に攻め込まれる起点となってしまう。

瞬殺だった。秒殺だった。

何もできなかった。一回も相手にダメージを与えることはできなかった。

「もう一戦いくよ！」

向こうから軽やかな扉の声が聞こえた。

「嫌。もうやらないよ。勝てないし」

もう、勝負の結果は見えている。どうやら彼女はやり慣れているようだし、ブランクのある俺に勝算はない。

「そっか。じゃあ」

彼女は俺の方に来て何やらスマホをいじって一言

「このサイト。ここにキャラのごとの弱点とかコンボ例があるから。これで何とかできるでしょ」

扉からスマホを受け取りサイトを確認する。キャラは以前に比べて八人も増えていた。

それだけじゃない。ゲームシステムもよくよく見れば変わっていて、戦闘スタイルも大きく異なっていた。（だから分からないことが多いわけだ）

数年でここまで変化するものなのか。ぼんやりしているうちに、知ってると思い込んでいるうちに多くの物を右から左に流すように見過ごしていた。

自分に合ったキャラクターを最新の情報を基に調べる。

俺はリーチの長いキャラクターが好きだから、現在のリーチの長さ第一位のインド人キャラを選択した。どうやらこいつは火を吹くことができるらしい。

結局のところ、俺は扉に勝つことができなかった。

いいところまで追い詰めることができたのだが、経験の差にはかなわない。付け焼刃の知識ではここまでが限界のようだ。

逆に考えれば、付け焼刃でもここまでできるようになるのだ。

「まいったよ。扉さんにはかなわないよ」

「そんなことないよ。あの短時間でかなり成長してたし。次やった時は負けているかもしれない」
ゲームセンターからの帰り道。自転車を押しながら二人で歩いていた。

「次は勝ちたいな」

自然にそんな言葉が口から出た。

「なあ、扉はどうして俺をこんなところまで連れてきたんだ？」

扉は足を止め、首を傾げて少し恥ずかしげに

「気晴らしかな？」

「気晴らし？」

「そう、気晴らし。それより、ほら、見て」

彼女の視線の先には真っ赤な夕日があった。雲に紛れて小さくしか見えないが、確かにそこには雲を血のような赤で染める夕日があった。

「遅すぎる。こんな時間に出てきてもすぐ夜になるだろ」

俺は吐き捨てた。この光に意味なんてない。風前の灯火

「でも、やっぱりあったんだよ。見えていなくても、輝いてたんだよ」

「この夕日に価値はあるのか？」

「価値はあるよ。だって私、感動してるもの」

彼女はきらきら微笑んだ。

俺は彼女の顔を見入ってしまった。

それだけでいいのか。ホントにそれだけでいいのか……

それだけでいいんだ。

それでいいんだ。



昨日までのじめじめとした梅雨はどこにいったのかと思うほど雲一つない快晴だ。教室にもギラギラと日光が差し込んでいる。ニュースでも梅雨明けとかなんとか言っていた。

つくづく、天気予報っていうのは参考程度のものだと思う。

先人の創り出した技術に支えられている人類なんだろうけど。その技術で多くの人々が助けられているけど。

当日になってからしか本当のことは分からない。

「夏本番だな、ジュン」

声の主は桜井だ。

「そうだな。夏だ」

「桜井、俺、お前のこと応援してるぞ」

桜井はハッと驚いてこちらを見た。

「ん？ どういった風の吹き回しだ？」

「いや、応援したくなっただけだ」

光が見えている桜井は進むだけなのだ。それ以外何もないじゃないか。

「そうか。応援されて悪い気分になる奴なんていない。まあ見てろ。今にテレビに出るからさ」

桜井はどこか上機嫌な雰囲気ですぐ答えた。

空元気なのかもしれない。まだ頬にはあざが残っている。それもいつか勲章になるのだろうか。

俺も肩の荷が軽くなった気がした。

そうだな……。

「ねえ、ジュン君？」

次に話しかけてきたのは扉だ。時間的には二時間目が終わってお昼ごろだ。

扉の手に持っているものはお弁当箱だろう。青色の包みを持っている。

「なんだよそれ」

「いいからいいから」

扉は俺に見せつける形で包みを開けた。

中には黄色く光る卵焼きが箱一杯に敷き詰められていた。この量は多すぎるようにも見えるが、上手に巻かれた卵焼きはとてもおいしそうに見える。

「どう？」

「うん、うまそうだ」

「じゃあ、一個あげるよ」

「おっ、ありがと」

俺は自分の弁当箱から箸を取り出すと右端の一つをつまんで、口に運んだ。

ほんのり甘くて、食感も良い。美味しい卵焼きだ。

「旨いな」

「ありがと、自信作よ」

うん、かなり美味しい。正直、一切れだけでは物足りない。

「もう一個いいかな」

「いいよ。どんどん食べて」

「じゃあ……」

俺は左端の一つを箸でつまんで口に運ぶ。

うわっ！　なんだこれ。すごくしょっぱいし固い。塩のかけらを海水で流し込むくらい塩辛い。

俺の歪んだ表情で分かったのか、扉は焦った顔で

「あれ？　あれ？」

彼女は今俺がつまんだ付近の卵焼きを手でつまんで一口ぱくり。

表情で分かる。あれはしょっぱい顔だ。

「あっ、これ、これは……」

「こっち！　こっちだけ食べて！」

「お、おう」

彼女は顔を真っ赤にして言った。

そんな彼女はなんだかとてもほほえましく思えた。

だから、俺もやらなくちゃならないことがある。多分わけが分からないんだろうけど。不毛なことと言われることだろうけど。いつ死ぬかもわからない世の中なんだし。

それでもやりたい自分がいる。

やりたい俺がいるんだから。

やって無意味なことはない。

「と、扉さん」

「何？」

慣れないことをする前だからか、緊張して名前と呼んでしまった。

「放課後に習字道具貸してくれない？」



墨を磨るのは何年振りだろうか。

硯の深い部分に水を入れ、浅い部分で大きく円を描くように力を入れ過ぎずに磨る。

全部扉からの受け売りなのだが。

さて、下敷きを敷いてその上に置いたのは俺の進路志望調査。

ついさっき担任の相模原から受け取ってきた。

その上に筆でゆっくりと塗りつぶしていく。破れないように慎重に慎重に黒く染め上げていく。

真っ黒に染まった紙に炭素がまばらにキラキラと輝く。

「うわっ、真っ黒だね」

扉は黒い用紙を見つめてそのままの感想を述べた。

「やめた方がいいとか言わないんだな」

「うーん。やめた方がいいのかもしれないけど……」

「ジュン君は悪じゃない」

彼女は教室の窓際に行って快晴の空を眺めて

「晴れるといいね」

と言うのだった。俺もそれに対し、

「晴れるよ。晴らしてみせるさ」

と答えた。

「そういえば、扉はもう進路志望調査を提出した？」

「もう提出したよ」

「ついでに言うと、私は二番目に提出したよ」

「え」

俺は扉の言動が読めない。あの時持っていた進路志望調査の紙は何なんだ？

「じゃあ、お嫁さんっていうのは……」

「嘘じゃないよ」

「はい？」

扉は俺の近くに寄ってきてもう一度、

「嘘じゃないもん」

ってにこやかに言うのだった。



「母さん、フライパン借りるよ」

俺はコンロに火を点け、フライパンを温める。

そこに卵三個、砂糖、醤油、だしを混ぜた卵液を加える。

フライパンの上でふつふつと卵液が躍るタイミングで卵を……

失敗。卵はばらっと崩れてしまった。火加減の調節を誤ったのだろうか。

もうしょうがないからと俺は卵をぐじゃぐじゃに混ぜる。ついでにベーコンも加えてしまおうか。

どうやら俺はまだまだスクランブルエッグのようだ。

背徳者—chaos(前編)—

山吹 弓穂

「このところご苦労様です」

「いえ、これが私の務めですから」

「ここは危険な被疑者たちばかり収容しているだけに、あなたのような方が必要なんです」

よろしくお願いしますね、と笑顔で言う看守をあしらうように頷くと、神父は聖書を開いて淡々と語り始めた。

光の届かない、闇に潜む特殊房。ヒヒヒと下劣な薄笑いが小波となって漏れ、腐臭の混じった視線がぞわぞわと身体を舐める。均衡を保って漂う静けさは、生への絶望と憎悪に侵された一種の狂気となって渦巻く。それぞれの双眸が、こうもりのように赤く光っていた。

抑揚のない声で説教がなされる中、神父はカツンと足を止めた。彼の瞳の向ける先。凶暴な犯罪者と思えない、一切を悟った穏やかな顔つきの囚人が、独房の隅で瞑想に耽っていた。

神父が一步前へ踏み出る。囚人がそれに気づき、静かに瞼を開けた。

——汝は神を信じますか。

ざああと礫をこぼしたような雨音。蛍光灯の黄ばんだ光が、薄暗さに沈んだ校舎を灯す。つんとアスファルトの湿った匂いが漂い、鉛色の厚い雲が窓を覆う。野外での授業の場を奪われたどこかのクラスの、どたどた荒々しい足音と床を擦る上履きの音が体育館から漏れ、絶えず廊下を揺らしていた。

そんな中、今日も学内喫茶は甘い香りに包まれる。すっかり冷え切った身体に、温かい紅茶がよく染みる。人の気配もなくがらんとしているのをいいことに、ケイは四肢の力をだらりと抜き、一人の時間をまったりとくつろいでいた。

「また聖書科をサボってるの？」

不意にそんな声が聞こえ、ケイはギッと反射的に振り返った。だが近づいてくる人物を見てすぐに剥き出した警戒を解き、口元を綻ばせた。

「何だ、純香」

「おはよう、ケイさん」

緩いウェーブのかかった長髪に縁なし眼鏡をかけた女生徒、藤原純香がふわりと微笑んだ。ケイはべっと舌を出し、

「サボりじゃないよ。信教の自由に基づく自主休講で一す」

「人はそれをサボリと呼ぶのだそうよ」

「……純香って優しい顔の割りに言うこときついよね。というかそっちもこんなところにいて大丈夫？」

「ええ。もう二回は出席したし、今日はこれを仕上げたくて」

カタンと向かいに腰を下ろしながら、純香が脇に抱えていたノートパソコンを見遣る。さすが作家先生、と口笛交じりにケイが囁すと、彼女はやめてよと苦笑しつつも頬を赤らめた。

毎週木曜日の一時間目にはキリスト教についての授業「聖書科」があり、最低二回は出席してレポートを提出することになっている。だがそんなものにケイが真面目に出席するはずもないことなど火を見るより明らかだ。ある日彼女がいつもの如く聖書科をすっぽかしたところに、純香と偶然出会ったのだった。

——その文芸誌、読まれるんですか？

――は？ あ、まあ。

――凄いですね、マイナーなのに。私、実はこのコラムを執筆してるんですけど、嬉しくてつい声をかけちゃいました。

――え、ホントに？

純香は高校生にして大手会社の賞を受賞した作家だ。まだ学生であるがゆえに執筆活動は小規模で、こうして時々マイナーな文芸誌に投稿している程度だが。ケイは、偶然にもその文芸誌のコラムのファンだった。

《勝てば官軍負ければ賊軍、という世界を二分化する諺。勝負自体は社会活性化の重要な要素だが、こんな歪んだ正義のあり方は果たして真実なのか。そもそもこの世に「本当の正義」は存在するのか。社会契約における国家など存在しないように、全ては強者の『理想』に支配される。強者はその理想による正義を保持するべく、必死に威厳付けようとするのだ――》

初めてコラムを見たとき、まさに目から鱗といった衝撃に襲われた。この筆者は、自分の中で燻る思いを代弁している。卑屈さに身を縮めるしかないという諦念をいとも簡単に吹き飛ばす。その清々しいまでの反逆児的姿勢は、とても痛快だった。

これがきっかけで二人は意気投合し、友達の仲へと発展したのである。

「それで、今度は何書くの？」

「それだとネタバレだわ。せっかく楽しみにしてくれてるのに」

「いいじゃないの、それこそ楽しみにしてるんだから」

「じゃあ、ちょっとだけ」

純香はふと目を閉じると一呼吸し、ゆっくりと宙を仰いだ。

「この世界は歪だわ……もうすぐ均衡が崩れ始める。正義が悪に、悪が正義になるとき、ガイアの名の元に混沌と化するの」

歌うようなハスキーボイスが、独特の抑揚をつけて言葉を紡ぐ。どこかうっとり夢見心地な彼女を眺め、ケイはやれやれと苦笑いを漏らした。純香は時々こうしてよく分からないことを言う。

ぱちりと目を開き、純香は何やらじっとケイを見据えた。彼女の小鹿のように澄んだ瞳は妙な力強さがあり、思わずたじろいでしまう。

「な、何？」

「いいえ。ちょっと気になったの。聖書科はレポートさえ出せば出席なんて実質的に関係ないでしょ。でもあなたは去年一回も出席してないって言ってたのに単位を貰えてるから、なぜレポートを自力で書ける程キリスト教に通じてるのかなって」

「……え」

ケイはぎくっとなった。

「誰かに手伝ってもらったとか？ それとも、本当はクリスチャン？」

変化球の問いを受け止めきれず、ケイは動揺のあまり硬直した。純香は悪戯っぽく微笑んでいるが、無言の追及は手を緩めない。内心焦って目を泳がせ、返事に詰まっているとき。

「こらーっ、来栖恵！」

突然甲高い叫びが、この空気を切り裂いた。飛び上がって振り向くと、ケイのクラスの規律委員が般若の顔でこちらに向かっているところだった。給仕のおばさんがぎょっと目を丸くし、ケイはげっと苦虫を噛み潰した表情になった。相変わらず素行の改善が見られないケイは、よくこうして規律委員に追い掛け回されていた。

「うっわヤバ！」

「ケイさん、私は大丈夫だから逃げて」

「え、純香は平気？」

「私はもう二回出席したことを伝えれば見逃してもらえと思うから」

「それ助けてるようで見捨ててるよね？」

「こらーっ、今度という今度は許さないわよ来栖恵！」

「うわマジで逃げなきゃ！」

昼夜の境もつかぬ世界。今日も放課後の礼拝堂は白い美しさを枯らすことなく、天を見据えて厳かに佇む。中では相変わらず釈然としない表情で、ケイがせっせと床拭きをしていた。どういう訳かこの頃神父は留守にしている、今は他に誰一人いない。全ての音が大理石の壁によって遮断され、異質の次元に取り残されたような錯覚に陥りそうだ。

『今日も神父さんいないの？』

『ええ、あなたにこれを渡すように頼まれました』

昼休み、困り顔のシスターがそう伝えにきたのを思い出す。渡されたメモには今日の掃除場所が記されていた。最後に「サボったら痛い目に合やす」と几帳面な字で書かれているのを見て、ぐしゃっとメモを握りつぶした自分は悪くない。いっそ時給に直して賃金よこせ。

伝言をシスターにさせるくらいなら彼女達に掃除をさせろと思わないでもない。以前それについて抗議したが、神父は涼しい顔でかわしてばかりでまともに取り合ってくれなかった。

――どうだ、一緒に来ないか。『背徳者』の世界へ。

恐らく、ケイに掃除をさせる一番の理由はこれだ。時に試すように、時に謀るように、神父は幾度も背徳者の世界へ誘ってきた。クククとあの独特の笑いを浮かべ、腕を広げてケイを待ち望む。日々、攻防戦の繰り返しだ。

――本当はクリスチャン？

純香の問いが蘇る。モップを動かす手を止めると、柄の先に顎を乗せて深くため息をついた。

「何だ、もう終わったのか」

「わっ」

突然意識に割り込んできた低い声に驚き、バケツを蹴飛ばしてしまった。ばしゃっと濁水がひっくり返り、だらだらと床に広がっていく。思わぬ大失態にケイは悲鳴をあげた。

「……何してるんだ」

「あんたが脅かすからよ！」

「人のせいにするな」

喚きながら振り返ると、ぐっしょり濡れた傘を畳んで神父が中に入ってくるころだった。呆れ顔の彼の肩越し、扉の隙間からちらりと初老の男が見えた。誰だと思っていると神父が彼と二言三言交わし、実にそっけなく扉を閉めてしまった。

「神父さん、今の人はい？」

「ああ、一緒に刑務所に行った神父だ。たまの付き合いでな」

「え、刑務所？　神父さん何したの！」

凶悪面の彼のことだ、きっと聖職者を騙った詐欺師と思われて誤認逮捕されたに違いない。失礼なことを考えるケイの頭に、ごちんと鉄拳が落とされた。

「馬鹿者、ただの教誨だ」

「あ、教誨……（囚人の更正教育の一環）」

「いいから床をどうにかしろ」

横柄な神父の命令に、ケイはぶつくさこぼしながら渋々従う。馬の尻を叩くようにせかされて、ようやく床拭きを終わると、

「この頃留守だったのってそういうことだったんだ」

「ああ。時々そういう依頼がくるんだ」

「うわあ似合わなっ」

漫画に出てくるような下卑たギャング達に向かい、神父が説教する――影のかかった三白眼の凶相が。あくまでも想像のはずが、あまりのシュールな絵に頭を抱えなくなった。

「聞くか？」

不意にそう訊く声は、ほんの一瞬だがいつもの禍々しさが失せ、逃がす余地さえ感じられた。ただ真っ直ぐ見つめる濁った瞳に、ケイはごくっ喉を鳴らす。だが違和感を抱きつつも好奇心に負け、問いの意味を深く考えないまま頷いてしまった。珍しくためらいがちだった神父だが、短く息を吐くといいだろうと背筋を伸ばした。

「君は若者集団テロ事件を知ってるか」

「ん？」

「ヤングガンテロリズム、と言った方が通じるかな」

もともと時事問題に弱いケイは首を傾げ、

「……確かテレビで大騒ぎの奴でしょ。詳しく知らないけど」

「歪みないな君も。ちょっとは周りのことに関心を持て」

「今の私の問題は今日の雨で、傘がないことの方が重要で一す」

「何を。今すぐ逢いに行くような相手もない癖に。いいからこれを見ろ」

鼻を鳴らしながら差し出されたスマホを受け取り、ケイは慣れない手つきでタッチしながら新聞画面を目で追った。

①××空港手荷物爆発事件――××空港の手荷物センターで空港貨物が爆発。同時刻に運転中の飛行機の貨物室で爆発が起き、墜落。多大な犠牲者を生んだ。

②夜叉の鳴く唄事件――米小説「夜叉の鳴く唄」の翻訳者である〇〇大学教授△△が、マンションのエレベーターで刺殺。

③県庁小包爆発事件――県知事宛に送られた小鼓爆弾が県庁舎で爆発し、職員が重傷を負った殺人未遂事件。

④◇◇駅毒ガス事件――三回に渡り、◇◇駅の地下トイレに毒ガス発生装置を仕掛けられたテロ未遂事件。

これら四つの事件の実行犯がいずれも若者の集団であることから、メディアでは通称「ヤングガンテロリズム」と呼ばれ、評論家たちが連日と深刻そうに何かを論じていた。

「俺は奴らの収容する特殊房で教誨している訳だ」

「え、う、うーん……」

一通り読み終え、どう反応したものか分からずに歯切れの悪い声を上げた。実際に凶悪犯に会ったという神父の言葉が衝撃的で、生々しくも現実味のないそれにいささか困惑してしまう。

「最初は気乗りしなかったが、奴らに説教する際にある興味を抱いた」

「時々思うけど神父さんの嗜好ってよく分かんないよね」

「俺じゃなくても誰だって思うところがあるだろう。奴らの裏にはカルトが控えているんだよ」

「か、カルト？」

物騒な単語に思わずケイは目を剥いたが、それをいなすように神父がずっと人差し指を立てた。

「驚くな。テロにはカルトなんてつきもの……といえれば偏見になるが。といっても思想集団の意味も兼ねてるから魔術的なものばかりじゃない」

「……マジ？」

「その証拠に、教誨で見た奴らの様子を聞くか？」

看守に見守られながら足を踏み込む、危険な被疑者たちを収容する特殊房。ついこの間まで下劣な笑いや罵声が飛び、虫唾が走るような視線が身体を這っていたのが、数日の説教でだいぶ波を引いていた。だが狂気の孕んだ彼らの瞳はららんと輝きを増し、しゅううと唸り声が微かに漏れる。感情のない説教を淡々と行いながら、

神父はあるところで足を止めた。独房に収められた、ある囚人。抑圧された静けさの中、その囚人は一切の煩悩が消え失せ、凶悪犯とは思えないとても清らかな表情で瞑想に耽っていた。

囚人は神父の説教に対して顔を上げると、

――我らが信じるのはあの方。あの方と、あの方の導く未来。

――あの方、とは。

――この世の矛盾した法理はいつか必ず世界の均衡を崩します。我らはこの歪な支配の進行を、あの方に続く聖なる使徒として阻止するのです。

そう微笑む彼、彼女から醸し出される雰囲気は、どろりと爛れた空気を浄化する程に澄んでいた。あれほど残酷な殺戮を繰り返してきた凶悪犯とは到底思えない。だが、神聖不可侵を貫く絶対的な囚人の瞳からハイライトが失せ、麻薬に似た恍惚さえ浮かんでいた。このとき柄にもなくぞっとした、と神父は苦々しく語ってみせた。

ケイはふと既視感を抱いた。囚人の言ったことを、どこかで聞いたような。

「……こういうの、電波って言うんだっけ？」

「君はお気楽なもんだな……ああいう連中が一番厄介なんだぞ」

「何で、って犠牲者も出てるんだし当然か」

「犠牲者は結果論だ。奴らは己の神、信念を無条件に慕う。その執着は蛇よりも凄まじく、熊よりも獰猛だ。それ故に神の名の下に何でもできてしまう人種だぞ」

「……それは、宗教信仰の本当の姿じゃないの？」

「そう思うか？」

神父は鼻を鳴らし、皮肉げに口元を歪めた。

「君の言ってるのは、イスラム教の聖戦みたいなものかな。神や、ある思想を慕うのはいい。それで宗教戦争が起きてしまあ仕方がないし、否定はしない。宗教戦争は時に革命として時代に貢献することもあるからな」

「じゃあ、テロと革命はどう違うの？」

「そもそもこの二つをどう定義するのが難しい。一つの信念に基づいて何かを主張し、覆そうとする点は同じかもしれない。だが……主張の先に何を見ているのかな。今の世界を覆した先に、何を求めているのかな」

感慨深げに目を閉じ、神父は鼻から長く息を吐いた。ケイは眉を寄せて少しの間考え込み、

「例えば爆弾をバーンてして？」

「爆発して今の世界が崩壊した後、どんな世界をどのような手段でどんな風に築くか、それが具体的に見えて民衆が成し得ようと動くのが革命。爆発させても混乱を招くだけで、具体的に何がしたいのかさえ見えなければテロ……と、俺は思っている。例えばオウム真理教のテロが革命に成りえなかった一因がこれに当たるんじゃないか」

「オ、オウム……」

「何にしるだ。テロも表現の手段として肯定する奴もいるが、俺は神について知ったかぶり、神の名の下に何をしてもいいと思うような冒涇者を好きになれない」

反吐が出る、と今にも喉を搔き切らんばかりに神父が忌々しく吐き捨てた。めらめらと暗い陽炎が彼から滲み出、ぎらりと強烈な光が瞳に閃く。神を凄烈なまでに拒絶しながらも冒涇を赦すまじとする彼の愛憎は、時として不器用であり哀れであると、ケイは乾いた心地で思った。

「話を戻すけど、カルトの仕業だって分かってるなら何で新聞に書いてない訳？」

スマホをおもちゃ感覚で弄りながら、ケイは首を傾げた。画面を何度か見返すも、それらしき記述が見当たらない。彼女の手からスマホを取り上げ、神父は肩を竦めた。

「証拠がないからな。奴らがゲリラ的犯行と自白してる以上は仕方がないし、首謀者の影が全く浮かばないとなればメディアもその点は自粛するしかないだろう」

「へー、ゴシップ感覚でバンバン流しそうなのに」

「ただでさえ犠牲者が少なくない。混乱してる中ででたらめな報道をしてみろ、出なくていい犠牲が出る。だから嚴重な緘口令が敷かれたんだろう」

ならばお前がここで軽々しく話してはまずいんじゃないか、と今更ながら突っ込みたくなった。そう思ったケイの唇に、すっと滑らかな指が当てられる。びっくりして顔を上げると、神父が悪戯っぽく目を細めた。

「だから、秘密だ。君と俺の」

他言するなよと念を押され、ケイはドキッとなった。と同時に、してやられた！とも思った。また変な世界に片足を突っ込んだ気がして、彼のささやかな畏に齒軋りしたくなった。

さて。これはデジャヴという奴だろうか。

「あんた、最近何なのさ」

朝の廊下を歩いていると、突然例のお姉様方に行く先を塞がれた。大欠伸をしている最中だったケイは、口をぽかりと間抜けに開けたまま、キョトンとなって足をとめた。

「……えっと、はい？」

「あんた最近何なのって言ってんだよ！」

訳も分からず聞き返すも逆に怒鳴り返され、さすがのケイもむっとなった。両者の間で火花が盛大に飛び散り、たちまち剣呑な空気に包まれる。行き交う生徒たちはそんな彼女達のただならぬ様子に気づくも、嫌そうに眉を寄せると露骨に避けて通り過ぎた。無視されているようで晒されているという事実に、ケイはうんざりした。

「そっちこそ何なのよ、理由もなく罵られる筋合いなんてないわよ」

「裏切り者の癖に大口叩く気っ？」

「……は？ 裏切り者？」

まさにいわれのない言葉に、ケイが首を傾げる。そんな彼女に苛立ちを隠すことなく、一人が顔を歪めて吐き捨てた。

「最近やけに礼拝堂に通ってるだろ、神父にべたべたまわりつきやがって」

「はっ？」

更にケイは呆気にとられた。いや待ってべたべたまわりつくとか気色悪いし冗談じゃないんですけど、と本気になって否定しようとする前に、一人を皮切りに残りの奴らも次々となじり始めた。

「今更改心でもしたっての？ 図々しいにも程があんだよ」

「それとも点数稼ぎでもしようって訳？ あの得体の知れない顔した神父に？ マジありえねー、引くわ！」

なんじゃそらこっちが引くわ。詰め寄られて散々に罵声を浴び、目を白黒させながらケイは殴りたい衝動に駆られた――が、辛うじてグッと拳を握ると耐え忍ぶ。自分はもう、激情に振り回されないで無暗にならないと決めたはずだ。落ち着け私、と自分に言い聞かせ、少しずつ息を吐いてから、

「ちょっと待ってよ、私が何をどうしようとあんたらには関係ないでしょ」

「関係なくないんだよ！」

何がよ！ と間髪いれずに鋭く返せば、彼女達は突如ぐっと黙り込んだ。その間もギラギラと剥き出しの敵意に満ちた視線が、絶えずケイの肉を抉る。その瞳によぎっては消える『必死さ』に、ケイはああそうか、とようやく合点がいった。

彼女達は怖いのだ。形がどうであれ、ケイが何かを見出して確固たる道を歩もうとしていることに。それは、同じ社会の底辺を這いずり回るムジナとして、彼女に深く自己を投影していることの裏返し。それを哀れんだり軽蔑したりする程、ケイは己を立派な人間とっていない。一緒にするなという猛烈な反発は腹の底で暴れているが、それを主張したところで聞き入れてくれるとは到底思えなかった。

いつまでも付き合っていられない。ケイは軽く肩を竦め、

「もういいでしょ、私も暇じゃないんだからそごいてくれない？」

「何だよ逃げる気？」

「このままどうせ神父のところにでも行こうってんでしょ」

だからその神父とどうのとかいつまで屈辱的な誤解を聞いてなきゃならんのだ。いっそ殺意さえ抱きながら、構わず彼女達の横を通り過ぎようとしたとき。

「それとも何、あんた神様にすがらないと何もできない訳？」

どくん、と視界が揺れた。

神サマ助けてくだちゃーい。ギャハハと下品な笑い声を背で受けながら、ケイはその場に立ち尽くした。内臓が音を立てて凍りつき、ひゅーと気管支が鳴る。四肢が冷えていくのと反対に、ぶくぶくとマグマに似た感情が身体の底で煮えたぎった。

どくどくと耳元で脈の音が最高潮に達したとき、ざわりと心の煤が一気に増幅し、理性を覆った。

「……ふざけんなあ！」

があっと喚いてから、ケイは拳を振り上げた。彼女達もすかさずケイに飛びかかり、そのまま取っ組み合いが始まった。周りで悲鳴が上がる。生徒の逃げる足音や助けを求める声が交差し、誰もが混乱に陥ってなす術もない――はずだった。

「その辺りでやめにしましょう」

凜としたハスキーボイスが辺りに響き渡る。ざわりと波立った後に一瞬で静寂が訪れた。誰だと驚愕して皆が恐る恐る振り返ると、

「じゅ、じゅんか……！」

ケイが枯れた喉で叫んだ。学生鞆を肩にかけた純香が、背筋をぴんと伸ばして向こうから歩いてきた。

「んだよ藤原！」

ケイの髪を掴んでいた一人が、牙を剥いて凄む。

「作家先生が何の用だよ！」

「作家は作家らしく、大人しく家に籠ってりゃいいんだよ！」

ケイはまずいと焦った。彼女達の殺気の矛先が純香に向き始めている。自分のせいで彼女が大変な目にあってはいけない。

だが、焦燥に駆られてケイが首を振るのも、純香は気に留めなかった。

「いいから、彼女を離しなさい」

怒りもせず怯みもせず。波一つ立たぬ湖面のように、飾らない毅然な態度が、今度こそ彼女たちを黙らせた。

「大丈夫、ケイさん」

「純香……」

ケイが、呆然と呟いた。純香は顔色一つ変えずに躊躇なく手を差し伸べる。ケイが困惑しているうちにさっさとその腕をとって肩にかけると、徐に足を踏み出した。

皆、何も言わない。気高き彼女の姿が周囲を圧倒し、純香が一步踏み出す度に、気圧された者達が恐れおののいて道をあける。ケイは信じられない思いで、自分よりずっとひ弱なはずの純香の横顔を見ながら引きずられた。

そのまま保健室に向かうと、保健医がまだ来ていないのか姿が見当たらなかった。純香は座るように促すと、勝手に棚を漁ってガーゼやオキシドールなどを取り出した。

「いや、いいってそこまでなくて」

「何言ってるの、あなた今とても酷い有様よ」

ずいっと携帯式の手鏡を突き出され、仕方なく覗き込めば顔のあちこちを腫らした自分の姿が。ああ、きっと明日になれば青タンだわと妙に納得させられた。

「少し染みるけど」

「……いっつ！」

じゅう、と綿を傷口に強く押し当てられ、ケイは小さく悲鳴を上げた。びーんと悔しさやら何やらが染みて、身体中に痺れが伝う。その間も純香は淡々と処置を続け、最後に絆創膏を貼り付けると、

「はい、終わり」

「ど、どうも……」

なぜか目を合わせられず、頬を搔きながらケイは俯き加減にボソッと礼を口にした。ここまで丁寧に手当てをされたのは本当に久しぶりで、妙に照れ臭かった。と同時にひどく情けなさが込み上げてきて、思わず長いため息が漏れた。

——神サマにすがらないと何もできない訳？

こんなもの、たかが安い挑発のはずだ。しかし言われて湧き上がったのは、明確な嫌悪。おぞましい異界の化け物に聖域を荒らされたような生理的な嫌悪。お前らに何が分かる。自分には、神だけにはすがるまいという譲れない意地があるのに。

熱を持った瞼の裏に浮かぶのは、幼き日に全てを捧げた聖母マリアの像。それが、下品な笑い声で浮き彫りになり、腸に熱した鉄を押し付けられたような灼熱の痛みが走った。

「何だかね、ホント馬鹿みたいだね」

紛らわそうとわざと茶化した風に言っても、やはり自嘲がどうしても滲む。

「いつまでもこんなことやってるから厄介がられるのよ。分かってはいるけど、大人しくしとけば楽なもんだわ」

大人しくする気などない癖に、ふっと鼻を鳴らした。

「……私は、不良でいること自体が悪いことだとは思わない」

道具を片付けながら、純香は至極真面目にそう言い切った。

「健全な生き方をしたからといって、正しい道徳を身につけ、真っ直ぐな価値観を培えるとは限らない。だって、この世は『虚構』なんだから」

何やらまたわけの分からない電波トークでも始まったか、と到底茶化すことのできる空気ではなかった。純香の瞳からすうっと光が失せていき、能面の如き無表情に浸食されていく。ケイはドキッとなって彼女を見返した。

。

「この世は虚構だわ。何が『善』で何が『悪』か、どうしてはっきり筆界を定められるというの？ 『善』は皆が正しいと思い、『悪』は間違いと思うからそう在る。客観ていうのは所詮、主観の集合体に過ぎないんだわ。だから確固たるものと信じていた価値観が、いつこの息を抑圧するか分からない……いつしか秩序が崩れて、混沌と化するよ」

太陽と仰いだものがいつの間にか道端の石となり、踏みしめていたはずの大地が空として嘲りの色を纏う。頭が割れそうに痛む程の、まさにカオスの狂気。全てが錯綜したぐちゃぐちゃの世界では、鏡に映る己の姿さえもひどく歪んで見えて――。

静かに語る純香は、どちらかといえばただ一人の世界で自分に言い聞かせている風にも見えた。眼鏡の奥から一点を凝視する瞳が、異様な仄暗さを醸し出す。それは、神父が時折浮かべるあの執念とあまりにも似通っていた。ケイはごくりと喉を鳴らすと共に、ようやく純香の人間らしさを見ることができたという気がした。普段から彼女は作家として他人より一步深い視点に身を置きながら、どこか俗世離れの仙人のようなよそよそしさが抜け切れなかった。だがこうして今話す彼女は、まさに等身大の人間として巨大な化け物の前に立ち、真正面から見据えている。このとき初めて、ああ彼女もまた世の理に苦悩しているのだと共鳴を感じたのだった。

しかし、だからこそその共鳴も一瞬でずれが生じる。

「見極めていくしかないんじゃない？」

足を投げ出し、天井を仰いで短く息を吐いた。

「何が正しくて何が間違っているか。たとえ客観がガラクタミたく使い物にならなくても、主観がそこに確かにあるなら、混沌に埋まる『善』と『悪』を見極めていけばいいと思う。混沌なんかには呑まれる程ね、私だって柔じゃないわ」

純香は目を見開いた後、すぐにまた表情を失くすと顔を背けた。チク、と心の端に切ない痛みが走る。苦悩に共鳴はしても、共有となると話は別だ。良くも悪くも自分の中で『神』の存在が大きすぎるケイにとって、『混沌』の概念など深く理解できないものだった。

初めて、二人の間に溝が生まれる。気まずい沈黙に、心なしか怯えが滲む。だがそれも束の間のことで、純香が陰気を振り払うように口を開いた。

「さあ、この後は聖書科よね。調度いいからこのまま喫茶店にでも行きましょうか」

ふわりと浮かべる優しい微笑に救われて、一気に気持ちが軽くなった。うんと勢いよく頷いて、ケイは腰を上げた。やはり純香は大人でいい人だ、と改めて思った。

純香も立ち上がって鞆を持とうとした。が、何の拍子か手を滑らせて床に倒してしまい、ホックが外れてばさばさと中身をぶちまけてしまった。

「あーらら、何して……」

言いかけて、ケイは思わず目を点にした。

勢いよく散らばるのは、溢れんばかりのスクラップ記事。

「ヤングガンテロリズム……」

しゃがんでそれらをまじまじと見つめ、ケイは神妙になって呟いた。先日神父から聞かされたことを思い出し、何やら運命めいたものを覚えた。だがそれにしてもこの量は少し異常さを感じさせはしないだろうか。口元を引きつらせていると、それを悟ったのか隣にしゃがんで丁寧に拾いながら、純香が苦笑交じりに答えた。

「次に書く小説の題材にしようかと思って、ちょっとね」

「あ、ああ。なるほどね」

小説を書くともなれば、ひとつのことにもこれだけの知識を必要とするものなのか。納得したのか否か微妙な表情で集めるのを手伝っていると、何かが紛れ込んでいるのに気づいた。

(写真……?)

好奇心に駆られて、それを手にする。

「……え？」

そこに映るものが何なのか、理解できなかった。

だがあまりにも凄烈な衝撃に胸を抉られ、苦しさで呼吸が止まる。徐々に指先から震えが走り、ぱさりと写真が無機質な音を立てて落ちた。大量に冷や汗が吹き出、だらだらと額から頬を伝う。あ、あ、あ、と声にならない悲鳴を上げ、全身におびただしい程の粟が立つ。

だがその視線は決して写真から背けられず、むしろ何かの力が働いているかの如く凝視してしまっていた。

(どうして……)

トントンと拾い集めた記事を整え、鞆にしまう音が聞こえる。それさえも、死神の足音に思えてならなかった。

。

(どうして……?)

もう何がなんだか分からない。脳を手で鷲掴みにされて、握り潰されるかのような混乱が意識を蝕み、自分が自分でなくなっていく感覚にさえ陥る。視界が大きく揺れ、世界が足元から大きく崩れていく音をどこか遠くで聞いていた。

(どうして……!)

ケイの瞳に映る写真――二人の成人が無造作に横たわり、辺り一面が鮮赤にまみれていた。その中で火掻きを手、血みどろでただ立ち尽くしている……十歳前後の、銀色の髪の少女。

(そんな、そんなはずは……でも、でもどうして)

どうして、こんなものが。

そのとき、背筋に冷たい何かが当てられた。

「動かないで——……」

続く

参考曲

今回も参考曲で色々遊びました（脱兎）

- ・「F.D.D」 　いとうかなこ
- ・「ほんとントコ」 　T O K I O
- ・「1 / 2 神話」 「TANGO NOIR」 「AL-MAUJ」 中森明菜

《あしがき？》

Q・例えば恋人との会話で「お前は俺のものだ」といわれたら？

A・① トウク……とそのままひしと抱き合う

② 「ないわこの勘違い野郎」とドン引き

③ 「人間というのは権利の主体であって客体になるのは不可能。よって私はあなたの所有権に属することは
ない」

なんてくだらないことを考えているんだろう。それも授業中に。どうも、山吹弓穂です。

今回も「背徳者」シリーズを書かせていただきました。長かったです。輪読会の終わったその日の夜から考えに考え抜いてえーっと、半年はかかったと思います。半年も考え続けて結局これかよ、なんて言った奴出て来い。握手をしようじゃないか。とりあえずここまで来れたのも西部警察が心の支えになってくれたおかげです。松田刑事に感謝。アコちゃんマジ天使。ゼミの食事会で寺尾聰と聞いて絶叫したのは私ですすいません。

最後に。U先輩のご意見を参考にさせて頂きました。ありがとうございました。

山吹 弓穂

ヤンデレ少女と・・・（遇新来三）

ヤンデレ少女と・・・

遇新来三

午後十一時三十分。

俺が寮に帰り部屋に入ると、謎の少女がキヨシの腹に跨り、キヨシとキスをしていた。

「え？」

とりあえず状況を確認しよう。ここは俺等の部屋、ベッドで熟睡しているのはキヨシ。その腹に跨る謎の少女。一方的なキス、キス、キス。……ダメだ、分からん。

「んふ、……愛してます、キヨシ君」

俺の理解より早く、事が終わったようだ。白く細い腕を使い、少女は弱々しく上半身を起こす。全力で走った後のように顔が赤い。服は着ているのに、何だか色っぽく感じる。

ふと少女がこちらを見た。俺の事に気付いたようだ。

「おいお前、何してんだ？」

「……貴方は……」

黒真珠のような目は虚ろなまま、彼女は言葉を選んでいる。

「キヨシ君と同じ部活の……いや、ルームメイトの……^{あいだ}間 カブトさんですね」

俺は今日初めて彼女と会った。なのに彼女は俺の名を知っている。ちょっと怖い。

そんな俺を尻目に、少女は何か思いついたかのように手を叩くと、とびっきりの笑顔で尋ねてくる。

「そうだ、せっかくですから、神父さんの代わりにお願いできますか？」

神父？ 何の事だ？ まるで意味が分からんぞ。

「ダメですか、仕方ありませんね」

残念そうに言うと、彼女は腰のポーチを探り始めた。そしてポーチから銀色に輝く包丁を取り出し……は？

「お前……何をする気だ？」

「何って、結婚式ですよ」

さも当然、という風に彼女は答えた。包丁を両手で逆手に持ち、ゆっくりと掲げる。とりあえず一つ分かった

。

「待て！ 止めろ！」

「時間と愛は止まりませんよ！」

俺は大声で彼女を止めようとしたが、彼女は華麗に無視、包丁をキヨシの胸に突き刺した。肉を切る音と共に、包丁は深々と刺さる。キヨシの身体は小さく跳ねた。

「もう少し、待っててね」

そう言って彼女は、胸に刺さる包丁を引っ張った。包丁は抜け、傷の周りが赤く染まっていく。彼女は舌先で包丁の血を舐めると、甘いため息を吐いた。

逃げたい。そんな衝動に駆られた俺は、向きを変えずに後ろ歩きで部屋の外に出ようとした。だが頭の中で、俺はある事に気付いてしまった。

結婚式。^{少女}花嫁と^{キヨシ}花婿。刺された花婿……。

「待て！ 早まるな！」

こいつ……心中するつもりだ！

彼女の考えを見抜いた俺は、彼女に向かって駆け出した。彼女は血の余韻に浸っているようで、俺に全く気付いてない。少し強引に引っ張れば、包丁を簡単に奪う事ができた。

「うっしやあ！」

「ちょっ、返して下さいよ！」

少女は包丁を奪い返そうと手を伸ばしてくる。俺は包丁を出来るだけ彼女から離し、彼女の頭を押さえつけた。これで彼女の手は包丁に届かない。

「なんで邪魔するんですか！」

「そりゃするだろ！ 目の前の自殺なんて！」

「自殺じゃないです！ 結婚です！」

「結果は同じ、ってうわっ！」

「きゃ！」

口論中に俺ら二人は倒れてしまった。原因は彼女が無理に体重をかけ、俺はバランスを失なったからだ。

「イッテー、腰撃った」

多少痛かったが大怪我はないようだ。彼女の方も大丈夫だろう。俺に覆いかぶさるように倒れたせいで、俺がクッションになったのだから。問題はブラウス越しのふくらみ。

「あー、ビックリした……あ！」

彼女は身体を起こすと、すぐに右の方へ四つん這いで向かった。俺も右を見ると、彼女の向かう先に銀色に光るものが。

「させるか！」

俺は後ろから彼女に覆いかぶさる。さすがに支えきれずに、彼女は押し潰れた。包丁までわずか十センチ。

「邪魔しないで下さいよ！」

それでももがき続ける少女。虫のように手足を這わせて、残り十センチの隙間を埋めようとする。俺は包丁を掴めさせないよう、必死に彼女を取りさえる。

「もうちょっと、あともうちょっとで……」

彼女が涙声になっているのは、俺のせいかな？ 確かに包丁を抜きに考えれば、俺は犯罪者以外の何者でもないが。

そう悩んだのがいけなかった。そのせいで拘束が少し緩まり、彼女の手が包丁が渡ってしまった。彼女はその包丁を振り回す。

「ちょ、危ね！」

迫りくる死を俺は身体を仰け反らせて避けた。しかし勢いよく回避したため尻餅をついてしまう。その結果彼女の拘束は解けてしまった。

「お待たせ、キヨシ君」

気付いたら彼女は、俺から離れた位置で立っていた。息を切らせながらも、恍惚の表情を浮かべている。もはや俺の事は眼中にないようだ。

「さあ、キヨシ君。一緒に、幸せに、なりましょ」

彼女は包丁を目の前に持っていき、その刃先を自分の胸へと向けた。目を閉じ、息を吸って、

「……うう……天ぷら、食べ過ぎた……」

キヨシは呟いた。多分寝言だ。胸焼けに苦しんでいる夢でも見てんだろう。

「……へ？」

先程とは一変、可愛らしい声を上げながら、彼女は目を見開いてキヨシの方を見た。どうやら彼女は目の前の異常に気付いたようだ。あまりの事実に包丁を落した。

「うそ……へん……ありえない……」

この様子だと自分自殺は考えないだろう。俺は立ち上がると、彼女の方へと近づいていった。

「とりあえず危ない包丁は没収な」

すっかり普通の女の子になっている彼女の足元から、俺は包丁を回収する。そんな俺を気にも留めないほど、彼女は動揺しているようだ。

こうして俺は自殺を未然に防ぐことに成功した。

「落ち着いたか？」

「はい……」

二つのベッドの間にある四角い、和室に似合いそうな足の低いテーブルに、俺と彼女は向い合って座っていた。俺は胡坐で彼女は正座。そして彼女はさっきから、申し訳なさそうに俯いている。

改めて彼女を良く見ると、結構可愛い。黒真珠のような目に、瑞々しい桜色の唇、さっぱりとした黒のショートカット。清楚な半袖ブラウスも相まって、正直言うと俺の好みだ。

「……そういや名前聞いてなかったな」

「……湖紅アイナです」

「そう……」

一秒ごとに針の動く小さな音が、後ろからのかすかな寝息が良く聞こえる。この沈黙は、ツライ。何もしないよりましだろう、俺は飲み物をお出しすることにした。

「……何か飲むか？」

「あ、あの！」

俺が立ち上がろうとすると同時に、湖紅が話しかけてきた。口調から戸惑っているのがなんとなく分かる。

「どうした？」

俺は途中まで上げていた腰を下ろした。彼女の視線はこっちを向いたり目を逸らしたり、活発に泳いでいる。そこまで鈍くない俺は、何を言いたいのか分かった。

彼女は恐る恐る腕を上げ、人差し指を伸ばした。指の先は俺の後ろ、気持ちよく寝ているキヨシへと向けられている。

「どうして死なないんですか？」

答えは単純だ。。

「それはねえ、君の刺した位置が良かったんだよ。だから運よく死ななかった」

「誤魔化さないで下さい！」

俺のともども理論が彼女の声でかき消された。彼女は必至そうな目でこちらを見つめている。

「いくらなんでも胸を刺されて死なないのはおかしいです！ それに絶対心臓まで届いてました！」

彼女は身を乗り出して力説している。全力だからか、顔が赤くなっている。

「とりあえず落ち着こうか。それに今更だけど夜だ、誰か来ちゃう」

俺は彼女の肩に手を当てながら、彼女を落ち着かせた。力いっぱい大声を出したからだろう、彼女は肩を激しく上下に動かしていた。

「……すみません。でも大丈夫ですよ。この寮、防音いいんで」

彼女は謝りながら足を正した。なぜ防音の事を知っているか気になったが、今はいいとしよう。

「教えないとダメか？」

「ダメです」

即答。俺はため息をついてから、俺は身を前に屈める。顔の距離が少し近くなった。

「誰にも言わないと約束するか？」

俺は声を下げて尋ねた。湖紅は戸惑いを顔に見せながらもしっかりと頷く。真実を知る覚悟はできたようだ。俺は姿勢を正すと息を吐いた。

「キヨシの一族は死なないんだ」

……俺は何か変な事でも言っただろうか？ 湖紅は困った顔で首を傾げている。

「……それだけですか？」

俺は頷いた。俺が頷いて数秒間、彼女は黙ったまま俺の顔を見てた。しかし、いきなり前触れもなくちゃぶ台に身を乗り出すと、大声で叫んだ。

「何ですかそれ！ 説明になってないじゃないですか！」

「お、落ち着いて落ち着いて！」

彼女の威圧に押され、俺は後ろのめりに。それでも俺は必死に彼女を宥める。

「悪い！ 実は俺もよく知らねーんだ！」

彼女は俺を間近で睨んでいたが、俺の弁明を信じてくれたのか、身を引いてくれた。それでも眼つきは厳しい物だ。俺は何回か咳払いした後、俺は改めて説明を始める。彼女は受験生並みの真剣な目で理解しようとしている。

「俺の知ってることを話すぞ。世界には人間とは別に、絶対に死なない種族がいるんだ。俺はそれをアンデッドと呼んでる」

彼女は理解できない、といった顔をしている。仕方ない、強行突破だ。俺は両手を口の前で組み、彼女にこう言った。

「いいか？ 現実を見ろ」

明らかに非現実な事を言っているのは俺なのに、その口からこの言葉が出るとは。でも仕方ない、彼女の中でパラダイムシフトを起こさないと説明できない。

「は、はい？」

うん、彼女は明らかに混乱中。でもそんな事情は無視だ。俺は後ろのキヨシを指差して説明(?)の続きを始める。

「キヨシは生きてた。寝言言ってたし。今だって……」

静かだ。時計の針の音しか聞こえない。彼女が固唾を飲む音が聞こえた。でも、キヨシの寝息は聞こえない。まさか不死の力が亡くなったのか？

という頭の中での冗談はここまでにして。

「心臓だって動いてるはずだ。聞いてみればすぐわ——」

俺が喋った瞬間、彼女は急に立ち上がった。ように見えただけの正座からの膝立ちへのシフトチェンジだが、俺を脅かすには十分だ。

「……聞いてみていいんですね？」

彼女はそう言うと返事を待たずに俺の後ろに移動、そしてキヨシの胸に耳を当て、心臓の音を聞き始めた。

「……かると……思う」

その間、ほんの一瞬だった。

「あっ……」

漫画や小説だったらハートマークが付きそうな声を出しながら、湖紅は常人には理解できないものを満喫しているようだ。まあ、キヨシに直接被害が出ているわけでもないし、放っておいても平気だろう。

客人には何か飲み物、と思い俺は冷蔵庫の方へ向かった。冷蔵庫を開けたら、なんてことだ、飲み物が牛乳しかない(しかもビン)。なぜこのチョイスなのか俺にも分からない。

「可愛いいい」

後ろからぬいぐるみを愛でるような声が聞こえてきた。心臓の音が可愛いのだろうか？ 俺は牛乳ビン二個を取り出した。

「きゃ！」

「どうした！」

突然甲高い、驚いた声が響いた。俺はそれに反応し、すぐに振り返った。そして言葉を失う。

どうして湖紅の奴は、血まみれなんだ！

あまりの光景に、俺は持っていた物を落してしまう。牛乳ビンで良かった。さもないとグラスは割れ、牛乳はこぼれていた。

「イタタ……。すいません、水道貸してもらえますか？」

顔の右半分が赤く染まっている。髪の毛にも少し。右目を押さえている両手も赤かった。幸い服に被害はないようだ。

「って待て！ 事情を説明しろ！」

俺は大声で叫びながら、洗面台へと向かう彼女を追いかける。俺が洗面台に着いた時には、彼女はすでに目を洗い始めていた。そのせいか、俺の声が聞こえてないようだ。

血の出処はだいたい想像がつく。俺は急いで、キヨシの寝るベッドへと向かった。

「うわっ！」

キヨシの胸の傷が、さっきよりひどい事に。辺りに血が飛び散ってる。見かねた俺はキヨシに毛布を掛けた。キヨシの寝顔には、苦しさが滲み出ている。

「うっ……。なんだ、この鼓動は……。これが恋か……」

「お前の性癖はどうでもいい」

だがこれで湖紅が何をしたのかなんとなく分かった。その蛮行の理由を聞くため、俺は湖紅^{こべに}のいる洗面台へ飛んでいった。

「ふー、痛かったー」

どうやら目は洗い終わったようだ。彼女はハンカチで右目の周りを拭いている。そんな彼女に向かって、俺は大声で叫んだ。

「おいお前！ なんで心臓見たんだよ！」

最初はキョトンとしていたが、やがて彼女は顔を赤く染めた（元々半分赤いが）。頬に手を当てると、俺の方をチラチラ見ながら微笑む。

「だって……。見てもいいって、言ってくれたじゃないですか」

「は？ 俺そんな事一言も……」

いや、言った！ 俺は言ってないけど、確かに言った！

「聞いてみれば、と！」

「聞いて見れば、と！」

「いや待て！ 間違ってるぞ！」

今更弁解しても後の祭りなのだが、俺はそれでも必死になっていた。だが彼女はすでに自分の世界に入っているようだ。色っぽいため息をつきながら、体をくねらせている。そして甘い声で呟いた。

「可愛かったなー。トクン、トクン、動いてて」

俺にできる事はため息とともに肩を落とし、彼女を残して部屋に戻るだけだった。

三十分が経過した。湖紅はまだ帰ってこない。俺は自分のベッドに座りながら、空の牛乳ビンをいじくっている。

「水道、ありがとうございます」

コベニック・ワールド

湖紅だけの世界（俺はこう呼ぶことにした）から彼女が帰ってきた。相変わらず顔が赤い。主に右半分が。

「顔、洗ってねーのかよ」

彼女の顔を見ながら、俺は呆れていた。

「何言っているですか」

彼女は子供の冗談を聞き流しているかのように笑っている。敢えて言わないが、お前が何言っているんだ。

彼女はすでに固まった血、つまりは自分の右頬をゆっくりと撫で始めた。最後にその指先を軽く舐めてから、艶めかしい声を出す。

「せっかくキヨシ君から貰ったんです。もうちょっと味わってもいいじゃないですかあ」

そう来たか。キヨシは出血大サービスしたのか、文字通りの。

俺が呆れている合間に、彼女は^{コベニック・ワールド}自分だけの世界へと^{すがた}意識を消そうとしている。また三十分も待つのは嫌だ。俺は彼女の肩を掴み、勢いよく頭を揺らす。

「戻って来い！」

「きゃっ、ちょっ、止めて下さい！」

^{コベニック・ワールド}湖紅だけの世界、破れたり。

「とりあえず顔洗えよ」

^{コベニック・ワールド}湖紅だけの世界を防いだ俺は、必死に彼女を説得していた。彼女の方とはいうと、もったいないと思っているからか、もの難しそうな顔をしていた。だがしばらくすると目を少し見開き、手を叩いた。

「牛乳いただきますね」

「お、おう」

唐突だな、そう思いう俺を尻目に、彼女は牛乳ビンを手に取り丸い紙の蓋を開ける。飲み口に唇をつけ、勢いよく飲み始める。盛大にこぼしながら。

彼女の顎は白く濡れている。右を血で下を牛乳で、彼女の綺麗な肌がどンドンと汚れていく。首下を見ると、城のブラウスが濡れて薄い灰色に。その下は……。

「ぶはー」

「『ぶはー』じゃねーよ『ぶはー』じゃ！」

可愛い声を上げながら空のビンをちゃぶ台に置く湖紅。俺はそんな彼女に怒鳴りながらダンスへ向かった。手拭いを取り出すと湖紅へと全力投球。

「ありがとうございます」

そう言いながら手拭いを拾うと、彼女はまず口元を、次に服を拭き始めた、だろう。俺は彼女と反対側を見ている。

「あの」

後ろから彼女の声が聞こえた。俺は恐る恐る振り向き彼女の顔を、顔を見た。右も赤いが左も赤い。

「す、すいません。ベタベタして気持ち悪いんで、シャワー借りていいですか？」

消えそうな声で湖紅は頼んできた。こういうのって気軽に貸していいのか？ 緊急時だからいいのか。

「あ……い、いいぞ。ちょっと待ってろ、バスタオル出すから」

バスタオルは二人のが交ざらないよう、それぞれのダンスに入れてある。俺は自分のダンスを開いた。

「あ、あの……」

「ん？ あ……着替えもか」

「いえ、それもそうなんですけど……」

そこで湖紅の言葉が途絶えた。後ろを振り返ると、湖紅は顔を赤くして、上目使いでこちらを見ている。そして右手を上げるとある方向を指差した。

キヨシのタンスだ。

「……そういう事」

彼女の変な行動力に、俺は呆れながらも感心した。

彼女、キヨシの服を着るために牛乳をこぼしたんだ。

「あー、湖紅さん？」

俺が呼びかけると、彼女は期待のこもった目をこちらに向ける。彼女の中で次の台詞が決まっているのだろう。だが、

「着替え、俺のジャージでもいいか？」

別に他意はない。俺に自分の期待を裏切られた彼女は、持っていたタオルを落して、そのまま固まっている。

「さすがにキヨシの許可なく勝手に使ったらさ、キヨシに悪いじゃん？ それにキヨシは寝てるし、胸刺しても起こすことできないし」

話している途中から、彼女は唇を尖らせ俺を睨んできた。何故か左頬が赤くなっていく。限界まで赤くなったと思ったら、彼女は何かを決意したように頷く。そしてブラウスのボタンを上から外していく。

「って何やってんだよ！」

彼女のいきなりの行動に驚いて、俺は反射的に後ろを振り向いた。ここには女性一人と男二人（内一人睡眠中）がいるのに、何を考えているんだ？

「キ、キヨシ君のタオルと服を貸してくれませんか、お……大声で叫びます」

「えっ！」

突然の脅しに対し、俺は反射的に後ろを振り返る。だが彼女の姿が視界に入ると、すぐに向きを戻した。

彼女は胸を両腕で隠し、真っ赤な顔と涙の溜まった目で、彼女は俺の事を睨んでいた。泣くなら何故やった？

「分かった、分かったから！」

俺はすぐさまキヨシのタンスへ向かい、その中を漁ってバスタオルとジャージを取り出した。それを俺は後ろへ投げる。

「こっ、これでいいだろ！」

「これホントにキヨシ君が着てたんですか？」

「キヨシが着てたやつだよ」

「キヨシ君の温もりが残ってません！」

「タンスに保温機能はねえ！」

「……こればかりは仕方ありませんね。ありがとうございます」

そう言って彼女は浴室へと向かって行った。この寮が完全防音なのに気付いたのは、シャワーの音が聞こえてからだった。

「ありがとうございました」

シャワーから帰ってきた彼女の右頬は、血の赤ではなく熱を帯びた肌の色だった。全身、というか首と襟の隙間から湯気が湧き出ている。鎖骨が見えるまでチャックを開け、ジャージを動かし煽っている。

「それで話を戻してもいいですか？」

テーブルに座りながら彼女は話し始める。話逸れたのお前のせいな、そんなことは言わず俺は頷く。

「えーと、どこまで行ったっけ？」

「確か、キヨシ君は死なないってどこまで話しましたよ」

「そうか。……あれ？ 話終わってね？」

「いえ、まだです」

彼女はそういうと身を乗り出してきた。

「どうすれば殺せますか？」

「話聞いてた？」

ため息をするように言葉が出てきた。どうして殺すことに執着するのだろうか？

「殺せないから諦めろ」

そう言ってから彼女の顔を見ると、ブラックホールを思わせる輝きの無い瞳で、彼女は呆然と座っていた。

「もしもーし、大丈夫かー？」

返事はない。まるで屍のようだ。

「もし……」

微かな音聞こえてきた。耳を澄ますと、彼女の消え入りそうな声が聞き取れた。

「もし、キヨシ君と結婚出来なかったら、私はどうやって生きればいいんですか？」

「それって文字通りの意味だよな？」

もし結婚＝心中なら、これは哲学だ。とりあえず結婚＝結婚の公式で考えてみよう。

「無駄に引きずるのも良くないし、ここは気持ちを入れ替えなきゃ。他にもいい男性はいるんだし」

「……ナンパですか？」

「ちげえよ！」

「言っときますけど、私がキヨシ君以外に惚れる事なんてないですよ」

その言葉の最中で、彼女の目の輝きが戻り、頬も赤みをおびてきた。

「だってキヨシ君は私に優しくしてくれたんですもん。……キヨシ君と出会ったのは二日前、」

なんか語り始めたぞ。

「私が公園で泣いているところを、キヨシ君が声をかけてくれたんです。『どうしたんだい？』って」

あれ？ 思ったより普通かな？

「私は黙ってたんですけど、キヨシ君が『僕で良ければ話を聞くよ』って言って、コーヒーをくれたんです。それから私が喋るまで、何も言わず横で座って待ってくれました」

それがキヨシ・クオリティキヨシの性格、困った人は放っとけないのだ。全く、どこのラノベ主人公だよ。

「……どうしてか私が好きになった人は、皆が皆不幸になっちゃうんです。そのせいで疫病神って呼ばれる始末で」

疫病神云々の話は別にして、今キヨシはひどい事になっているぞ、君のせいで。

「でもこの事話しても、キヨシ君は『君のせいじゃないよ』って言ってくれたんです」

そこまで明るい口調で言い終えると、急に彼女の表情が暗くなった。目に涙を浮かべている。

「だから私、告白したんです。『付き合ってください』と」

早い！ もう少しゆっくりだったら分かんない気もしないが、いくらなんでも唐突過ぎだ。でも「時間と愛は止まらない」らしい。彼女は待たずに話を続ける。

「でも……『まずは友達から』ってフラれて……」

そして湖紅はテーブルを叩いて叫んだ。

「だったら死ぬしかないじゃないですか！」

「なんでだよ！ そこは友達から頑張れよ！」

俺も同じようにテーブルを叩き叫ぶ。なんで最も重要な部分がこんなにも非理論的なのだろうか。

「私の愛は本物です！ 私、あれから寝ずにキヨシ君の事探し回ったんです！ 私の愛を届けるために！」

「会話が成立しねえ！」

もう我慢ならん。せつかく完全防音な寮だし、気の済むまで叫んでやる！

「いいよ！ 誰を好きになるかは君の自由だ！ 君の変な性癖も、俺には他人の空似だし許すよ！ でもさ、こ

「なんで私の邪魔ばかりするの！」

「邪魔してる訳ではない。お前にたかるハエを……」

父親は慈しむような笑顔を浮かべたまま、静かに鞘から日本刀を抜き、天を穿つがごとくそれを構え……え？
「排除しているだけだ！」

回避の直後、風を切る音、そして何か壊れる音が聞こえた。俺はそのまま転がり、父親から離れたところで態勢を立て直す。

「おい！ 俺を殺す気か！」

見ると俺の頭があったところに、刀が叩き付けられていた。避けなかったらどうなっていたか。父親は刀を床から抜くと、獣を狩る目で睨んできた。

「どうせ死なないのだろう？」

それ俺じゃない！ つうかなんで知ってんの？

父親はまた同じ攻撃。同じく横に逃げた。今度は壁が斬れた。俺はそのまま、ベッドを挟んで父親の反対側に駆け込んだ。

父親の顔は俺等を殺さんとするそれだ。とりあえず奪ったままのスタンガンで牽制するが、リーチに差がありすぎる。逃げれば追いかけて来るだろうか？ 来ないんならそうしたいが、子供の様に怯えている湖紅を置いてくのもなんか忍びない。

「よいか小僧。よく聞け」

いろいろ思考していると、父親がなんか語りかけてきた。

「私はアイナを大切に育ててきた、愛してきたんだ。だからこそ、アイナも私を愛しているはずだ。私だけを愛しているはずなんだ。だからもし、アイナが他の奴を好きになるとしたら、」

親父は構えながら言い続けた。今度の構えは上段でなく、柄を引いた突きの構え。刃先は俺を向いている。だが大丈夫だ。距離があるから避けるのは余裕だ。

……なんでバトル展開に入ってんだ？

「それは貴様らが娘を汚したという事だ！」

刀を持つ拳に力が入る。それに合わせて俺も避ける。

だが直後、剣先は勢いよく下を向いた。そしてそのまま、ベッドを、ベッドに眠るキヨシの胸を貫いた。

肉の裂ける音が響く。甲高い悲鳴がこだまする。シーツは赤く染まり、鉄の臭いが鼻をつく。やがて訪れる静寂が、この惨劇を表していた。

信じられるか？ キヨシの奴この瞬間、笑ってんだぜ。一体どんな夢見てるってんだ？

「……ひどすぎるよ」

静寂を破ったのは、さっきまで震えて声も出せずにいた湖紅だった。

「ひどすぎる。何も関係ないキヨシ君をこんな目に合わせるなんて……。なんで……」

震えながらも、涙を流しながらも、必死に言葉を紡いでいく。弱々しくも立ち上がり、反抗の狼煙を上げる。

その狼煙を掻き消すかのように、一言。

「アイナ。お前は私だけ愛していればいいのだ」

その瞬間、湖紅の全身から力が抜けた。まるで操り人形の糸が切れたかのように。だが人形は倒れることなく、むしろある種のオーラを纏って佇んでいた。

「—————じゃない」

殺気。

さっきまでの、愛する為に殺すのではなく、殺す為に殺そうとする意志。

そこからの動きは早かった。テーブルの上に転がっている黒い棒を手にとると、素早くそれを振りかぶった。遠心力に従い、その棒が伸びる。

特殊警棒。

細い見た目からは想像もつかない威力を持つ、護身用の武器。

「私は貴方のおもちゃじゃない！」

湖紅はそのまま、特殊警棒を勢いよく振り下ろした。風の切る音を連れて、警棒が父親の頭部に迫る。

だが父親の方が一步早かった。彼のピンタが打撃ごと、湖紅の体ごと、その頭をベッドへと叩き付けた。

「ダメじゃないか」

父親は片手で警棒を持つ腕を、もう片方の手で湖紅の首を握りしめる。湖紅は足掻こうとするも、息ができずに力が入らない。

「私に逆らっては」

最初は憎しみを込めて睨んでいた湖紅の目も、どんどん輝きが失われていく。空いてる手で父親の首をひっかこうとするも、ただ撫でるだけで終わる。

「私に逆らうアイナには、」

狂気を含んだ笑い声で、父親はゆっくりを語った。

「おしおきだよ」

「茶番はそこまでだ」

スタンガンを首につけると、一瞬父親の体は痙攣し、重力に従って倒れていった。それと同時に、首を絞められていた湖紅も解放される。

「大丈夫か？」

俺がそう尋ねると、彼女は咳き込みながらも首を縦に振った。

良かった、とりあえず死人は出ずに済んだようだ。

「き……さま……なに、を……し、た……」

足元の父親は拙いながらも言葉を紡いでいる。スタンガンはすぐ気絶する物ではないらしい。

「あんたさあ、娘の事考えたことあんのか？」

倒れたまま、父親は俺を見上げている。

「愛ってのは、相手を労わる事じゃねえのか」

睨んでくる相手を見下ろしながら、俺は思いの丈をぶつけた。

「独りよがりな愛じゃ、伝わるはずねえだろ！」

なんだろう。自分で言って、なんか恥ずかしく感じる。

「だ、まれ……お、前……に……な、にが……」

「お前が黙れ！」

そう言って俺は、父親の首にもう一度、スタンガンを突きつけた。はっきり言ってお前らへの鬱憤を晴らしたくて、説教してやったんだ。お前に^{ターン}台詞は回さねえよ。

「とりあえずあんたは警察に突き出すから、それまで外で待ってろ」

父親の脇に腕を通し、俺は外まで引っ張った。そして通路のフェンスと腕を縛る。

こうして暴漢襲撃事件は幕を閉じた。

血痕消せば、ルミノール反応はどうにかなるっしょ。

「すいません。父がこんなひどい事をして……」

俺が部屋に戻ると、湖紅が謝ってきた。それ以前に謝る事があるでしょうに。

「それもそうだけどさあ、」

俺はため息交じりに言った。今までの感想を。

「さっきお前の父親に言った事だけど、お前にも当てはまるからな。あんた、自分の父親と同じ事してたんだぞ」

「……すいませんでした」

どうやら娘の方は父親と違い素直なようだ。スタンガンでストレスも発散できたし、可愛いし、湖紅の事は許すでしょう。

「キヨシとはきちんと話し合って、少しずつ仲良くなっていけばいいじゃん？」

「え？」

驚いた顔で俺の事を見つめる湖紅。どこに驚くことがあったのだろうか。

「いいんですか？ キヨシ君を好きになっても……」

「誰が誰を好きになろうが、その人の勝手だろ？ 別にそこまで止める気はねえよ」

そう言いながら、俺は日本刀を抜いた。ドバドバと血が出て、シーツやら掛布団やらが赤く染まる。これキヨシが起きたらショック受けるだろうな。

「ありがとうございます」

「お礼を言われるような事はしてねえよ」

俺は自分のベッドに腰掛けた。その瞬間今日一日の、というか湖紅が来てからの疲れがドツと襲ってきた。

「あの……キヨシ君はそのままでいいんですか？」

「余計な事をしなけりゃ四時間ぐらいで傷口は塞がる」

湖紅は心配そうに胸の傷口を見ながらも、キヨシの寝顔を見ては頬を綻ばせている。体の惨劇と比べてみると、なんだかただならぬ恐怖を感じる。

「そうだ、風呂まだなんだ。おい。傷口には触んじゃねえぞ」

そう言って俺はシャワーを浴びた。爪の間に入り込んだ血が、なかなかの強敵だった。

風呂から上がると、湖紅はベッドに突っ伏して寝ていた。寝顔を堪能している間に寝落ちしてしまったのだろう。そう言えばここ二日寝てないと言っていたなあ。俺は血で染まってない毛布を掛けてあげた。

二人の寝顔を見てると、こっちも眠たくなってきた。電気を消して布団に潜り込む。それと同時に、キヨシが起き上がった。

「……おはよ、カブト」

「おう、お休み」

「……なんで俺の服、こんな濡れてんの？」

「自分の胸に聞いてくれ」

そうして俺は眠りについた。

次回予告——Afterword——

「思い出させてやろう。アンデッドの恐怖を！」

テロ組織『グレイブ』がデパートを占拠した！ 人質となったカブトとキヨシを助けるため、湖紅は一人『グレイブ』に立ち向かう。しかし彼らは全員アンデッドだった。

キヨシが語る、アンデッドの忌まわしき過去。それを聞いたカブトのとった行動とは？

第二話『不死者の亡骸』。

———知ってる？ アンデッドの殺し方。

春は別れ、空高く橋かかる日に（遠瀬瑠依歌）

春は別れ、空高く橋かかる日に

遠瀬 瑠依歌

ベッドと机を分解して、そこで一息ついた。

「ありがとね」

「気にしなさんな。俺がやりたくてやってるんだから」

ユウナはこの春で大学を卒業する。四月から実家暮らしに戻る彼女の為、俺はアパートを引き払う手伝いを買って出た。

「あ、食器棚を忘れるところだった」

「あれも分解できるんだっけ」

「うん」

「オッケー、やっつくよ」

まず中身をすべて取り出して新聞紙で包み、それから六角レンチで棚のネジをひとつひとつ外す。箱だったものが十枚ばかりの板に姿を変え、台所が二割ほど広くなった。

「終わったよ。食器も包んどいた」

「あ、ごめんね。ありがとう」

ユウナはパンパンに膨れ上がった段ボールに囲まれて、押し入れの中をかき回していた。

「すごい事になってるね」

「服が思いのほか詰まっててさ」

「ふうん」

手伝おうと思って押し入れに近寄ると手で制された。

「大丈夫、一人でできるから」

「二人の方が捗るでしょ」

「ごめんね、散らかってて汚いからあまり見せたくないんだ」

「……あ、うん。じゃあ何か用事が出来たら言って」

「わかった」

何もやることがなくなった。何かいい暇つぶしはないものかと歩き回っていると、ラックに一枚の色紙が立てかけてあるのを見つけた。

「何これ」

「ああ、寄せ書きだね。ゼミの三年生がくれた」

「ふうん、仲いいんだね」

「うん」

真ん中の写真、彼女は右端でピースサインをしていた。

「この写真は何時撮ったの」

「十月にゼミで旅行に行った時のだよ。同期だけで撮った」

「ああなるほど」

写真、か。そう思い立って、俺はおもむろに携帯のカメラを部屋のあちこちに向けた。

「え、ちょっと」

「いいからいいから。ほら、作業続けて」

「こんなの撮っても面白くないよ」

「思い出にね。もう少しでいなくなっちゃうから」

「そういうこと言わないでよ。寂しくなっちゃうじゃん」

「ごめんごめん」

頬を膨らませて上目づかいに睨んでくるのをパチリ。

「誠意がこもってないんですけど」

「可愛いよ、ユウナ」

「そんなことない」

「照れてるのバレバレだよ」

「……むう」

カーテンがゆっくり、小さく膨らんでしぼむ。

「ところで午後、どうするの」

「あー……自分の家に避難するよ」

午後にユウナの両親が来て、大きな家具を父親の運転するトラックで運ぶ手筈になっていた。

「会っておかなくていいの」

「遠慮しとく」

「そっか。やっぱり気まずいよね」

「まだ四ヶ月だし」

「じゃあまた次の機会に」

「ああ。そうする」

ユウナがすり寄ってきて、膝に頭を乗せてきた。

「にゃあ」

「猫ですか」

「にゃあにゃあ」

「猫ですね」

「うにゃ」

春の陽に暖められた空気が南向きの窓から流れ込んできて、とろりと部屋の中を満たしていた。

午後は家に帰ってから風呂に入って、それから撮り溜めていたアニメを見て、彼女から連絡が来たのは七時
を回った頃だった。

「ただいま」

「おかえり」

テーブルの上にノートパソコン、広げられたままの布団、窓にカーテン、それと運びきれなかったのだろうか
段ボールが三箱。部屋にはこれだけだった。

「スッキリしたね、かなり」

「うん」

布団に座り込んで、閉じられたパソコンを眺めたままユウナは曖昧に返した。

「とりあえず、ご飯にしますか」

「……うん」

冷蔵庫の中に残っていたものを炒めている間、彼女はずっと俺の背中にくっついて離れなかった。

「邪魔だったら言って」

「うん」

ご飯をよそう時もシャツの裾を掴まれ、テーブルについたときもぴったりと体を寄せてきた。

「今日はやけに甘えてくるね」

「ん……」

すっと引く。恥ずかしかったのかな、と一瞬だけ考えを巡らせた。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「さて、洗いますか」

不意に足を掴まれ、尻餅を付いた。

「……頭、撫でて」

俺の耳元へ、それでもやっと聞こえるような声でユウナは囁いた。

「……うん、わかった」

彼女を背後から抱き寄せ、手のひらで髪に触れる。うっとりした横顔が見える。

「ユウナ、撫でられるの本当に好きだね」

口で答える代わりに首を縦に振り、それから俺の手に頬ずりしてきた。

「あなたに触られるの、好き」

「嬉しいよ」

ユウナが寄りかかってきたのを合図に、二人で後ろの布団に倒れこんだ。それから細い首筋にキスをして顔を上げた時、彼女は今にも泣き出しそうに口元を歪ませていた。

「……どうしたの、ユウナ。俺、何か悪いことしたかな」

何も言わず、胸元に顔をうずめてくる。

「この部屋でこうするのも、今日が最後だと思ったらね」

「うん」

「あとで後悔しないように、今のうちにいっぱいギュッてしておかなきゃと思ったのですよ」

「……うん。そうだね」

道理であれだけくっついてきたわけだ。少し考えれば簡単にわかっただろうに、我ながら愚鈍さに腹が立つ。

「離れ離れになるの、耐えられないかも」

「……毎日メールするよ」

「うん」

「それじゃ足りなかったら電話もする」

「うん。ありがとうね」

泣いている、と懐が湿っていくので知れた。腕の中で声をこらえている彼女を、世界で一番愛おしいと思った。

「ユウナ、もう三年だけ待って」

「……どういう事」

「俺が大学を卒業して、社会人になったらさ……その、また一緒に住もう」

何も反応がなかった。それでも俺は続けた。

「また週末になったら一緒にどこか出かけたり、一緒に美味しいもの食べたり、一緒に帰ってきて一緒に寝てさ。どうかな」

ユウナは小さく頷いた。

「それで、もしも……もしも、出来ることなら」

自分でも顔がみるみる赤くなっていくのがわかる。それだけ次の一言を発するのには度胸が必要だったのだ。

「ユウナを、俺のお嫁さんにしたい」

たった四ヶ月付き合ったくらいで結婚を見据えているなんて、ひよっとしたら馬鹿馬鹿しいと思うかもしれない。『将来、絶対に結婚するんだ』と宣言して別れていったカップルだってキリがないほど間近で見てきた。

それでも、言わずにはいられなかった。彼女と添い遂げたいという願望に、一切の嘘偽りはなかったから。

「……信じていいの」

「ああ」

首の彼女の腕が巻き付く。

「……ありがとう。今、すごく幸せ」

「そう言ってくれると嬉し……」

言い切る前に口を塞がれる。それから彼女はまるで悪戯がうまくいった子供のように、にやりと笑みを浮かべてみせた。

「不意打ちだったでしょ」

「そりゃあね」

「ふふ」

俺より三つも年上なのに、彼女にはたまにとても可愛いところがある。

「ユウナ」

目が合う。

「大好きだよ」

「……うん。私も、あなたが大好き」

この人を好きになって良かったと、改めて感じた夜だった。

翌朝は十時くらいに起きて、残っていた荷物も全てユウナの車に運び終えた。もう、何もない。

「これで最後か」

空っぽの部屋は声がよく響く。それが侘しさを掻き立てた。

「……うん」

「やっぱり四年も住んだら愛着も湧くよね」

「意外とそんなこと無いよ。単に寝る為だけの場所みたいなものだったし」

「そうなんだ」

「うん」

不意に手を掴まれた。

「でも、あなたと一緒に暮らした時間は別」

「……そっか。嬉しいよ」

名残惜しいのをこらえていよいよ部屋を出、紺色のドアの前に立つ。ユウナがポケットから鍵を取り出して穴に差し込む。半回転させた後に、ガチャリと鳴った。

この鍵を不動産屋に返してしまえば、この扉を俺達が開けることはもう二度とない。

「……行きますか。鍵、返しに」

「……うん」

過去を振り返ることはできても、そこまで戻ることはできない。これから離れ離れになってしまう今だからこそ、その残酷さが身に染みてよく分かるのだろう。

それでも、前に向かって歩かなければいけない。立ち止まることを、時間は許してくれないから。

「あ、飛行機雲」

つられて見上げると、水色の画用紙を切り取るように飛行機が南へと進路を取っていた。俺にはそれが、今この瞬間とこれからの未来をつなぐ橋のように思えた。

どうも、トゥボス・ルイーカ改め遠瀬瑠依歌です。性懲りもせずに脳内お花畑でございます。

この物語は大学南に実在する或るアパートが舞台となっております。タイトルもその建物名を基に思いつきました。

この前ふと（といっても四月の頭ですが）その部屋の窓を見上げると真っ白いカーテンがかかっておりまして、もう新しい住人が入ったのかといささかセンチメンタルになりました。時間は本当に残酷です。

・今回、下敷きにしたもの（敬称略）

Superfly「愛をこめて花束を」

米津玄師「サンタマリア」

「vivi」

こ (双梳空)

こ

双梳空

昔々クラスメイトに積木という奴がいた、らしい。実は覚えていない。酒盛りの席で昔話をしていた時にどうも同じような学生生活しているなど思っていたら、実は小中高おまけに大学までずっと一緒だったらしく互いに驚いた。積木本人もこちらのことは覚えていなかったという。何度数えても同じ年に入学し卒業しているはずなのだが、まあ偶にはそんなこともあるのだろう。そういう訳で初ではないはずの対面だったが、いい加減酒が回っていたこともあり記憶は互いに曖昧だ。翌日には顔も名前も忘れていたし、別段これと言った接触は無かったことから向こうもそうだったのだろう。

「水西、良い奴だよ。多分幸せに平凡に生きられるよ、ミスしなきゃ」

「変な事を言うな」

そうして自販機の隣で並んでコーヒーを飲んでいた頃、積木は未だ随分細りとした身体をしていた。仕事も会社も部署すら同じで、なのに互いに顔見知り程度。大した関係性は築いていなかった。何故かは分からないが、兎角相性が微妙だったように記憶している。恐らく、その独特の浮いた雰囲気はどうも気に入らなかったのだろう、と今なら思う。

やがて積木が相談を持ち掛けてきた時、その頃はきっと少し位仲は良くなっていたのだろう。少なくとも無関係な人にするにはその話は奇矯に重過ぎ、こちらの態度は真剣だった。積木は言うだろう、自分と仲良くなったことこそがミスだと。

暫くして積木が一身上の都合で仕事を辞めると、この部屋からほとんど動く事無く過ごすようになった。その頃には積木の体の中のモノはかなり育っていた、らしい。少なくとも見た目ですえその姿形が異常に変形していることは分かった。

たった一度だけ、尋ねたことがある。

「ソレを殺すとかいう選択肢は無かったのか？」

「うん？ ああ、そうだね。そういう考えもあるね」

変形を見せ始めた腹に手を当て、積木はでもと首を振る。

「ずっと昔から、それこそ生まれた時から居たモノだしね。寧ろこの子が出てくるために自分は生まれたんじゃないかなって、そう思ってる」

至極当たり前のように積木はソレに自らを喰い潰させると言っただけだから、間違い様も無く本心から言っただけだから、以来尋ねてはいないが。諦めに染まり切った瞳に浮かぶ唯一の光が、積木を喰い潰すソレに向けられた愛情というのが、哀しいことだと思ったのは今でも覚えている。

「みずどり、おねがい」

「ああ」

胎児を抱くように膨れた腹を支えながら、随分やつれた体を持ち上げる。力無く揺れる足はもう機能を果たさないに違いない。それでも積木は酷く幸せそうに腹を撫で、そうしてふわりと笑って見せる。

「うふふ、みずどりもじょうずになったよね」

「コレが上手になったって使い様無えだろうが」

「そうかなあ？」

「いい加減に体揺らすの止めろ。バランス崩れる」

「ああ、そっかあ、おおきくなったものねえ。おもいかな、なんキロくらいだろう」

「……さあな」

積木は、笑う。それしか表情が残っていないのだと気付いたのはいつのことだったか。命を吸うという異形を宿した体に、ヒトとしての全てを望むのは酷ではあろうが。さりとして目の前で人形が出来上がっていくように失くしていく積木を見ていれば、哀に似た感情を抱くのは仕方なく。

「もうちょっと、かな」

「何がだ？」

「うふふ。あのね、あしたたんじょうびなの」

二十五になるんだ、なんて嬉しそうに。年齢に似合わぬ幼さで。

「だからね、おねがいがあるの」

人目に付き辛い夜、高速を走る。

「本当に大丈夫なのか積木」

「ヘーキ」

後部座席に寝かせたが、やはり振動のせいかもしれないよりも辛そうで苦しそうで。次で降りて、と指図する声に苦悶が重なり、ミラーを見れば久し振りに積木は表情を変えていた。ちょっとした驚きに。

「うごいた」

「は？」

「いま、うごいた。——なんか、いがいと、うれしい」

決して痛みではない涙が頬を伝い、否が応でも苦痛の意味を知る。

「もう、本当に少しなんだな」

「そう、もう、ちょっとなの」

狭い道を無理矢理に抜け、開けた其処は、

「海？」

「ちがうよ。みずうみ」

綺麗でしょう、と抱えた積木は笑う。

「びょういんいくとちゅうでね、まにあわなかったんだって。だから、ここであまれたの」

「積木が、か？」

「うん。このこも。このこは、ここのこなの」

そう愛しげに腹を擦る。

「どこでもべつにかえられるよって、このこのおかあさんは、いったけどね」

来たかったの。来て良かった。だってほら、凄く綺麗。

指示に従い湖の辺に座らせる間、積木は普段以上に饒舌で、真っ白になる程両手は握り締められていた。達観していたようでいてもちゃんと恐怖は有ったのだなど逆に少し安心した。

「ねえ、みずどり」

「何だ」

「ありがとう」

軽くなった体をゆっくり倒した積木を支え、その視線を辿る。ふわり、薄く羽を広げるソレは無表情に、しかしどこか悲しげに見下ろした。けれど積木は微笑んだ。

「うまれてきてくれて、ありがとう」

積木似の丸い瞳を大きくし、ソレは積木にそっと触れる。腹から噴き出した血は湖に溶かされ、淡い形を染めることは無かったけれど。口と思しき器官が幾つかの言葉を紡ぐ。何を伝えたのか、積木は小さく首を振った。

「ねえ、きみは生きて」

見つめ合う湖底色の瞳にソレは迷いつつも頷き、湖の中へ去った。見送った積木は静かに息を吐き目を閉ざす

。

「水酉」

「最期の願いくらい叶えてやるよ」

「うん、ごめんね。一応遺書は残しておいたから、何かあったら使って」

残された苦痛も無くなって、久し振りにしっかりと積木は告げる。

「さようなら」

待ち人（双梳空）

待ち人

双梳空

いつものように店を開けると、山の方から一人ふらふらと歩いてくる女性が見えた。

「逢ちゃん。どうしたの」

「あ、咲良さん。おはようございます」

山奥に居を構える彼女は身体が弱い。山を一人で降りてくるなんて初めて見る程だ。優しい生成りのワンピースと日傘が似合う手から零れ落ちる生き生きとした赤だけが、彼女の存在を明確にしていた。

「トマトがたくさん獲れたので。お裾分け、です」

「あら有難う。逢ちゃんの作るものはいつも美味しいからね」

まだ日の昇り切らない空。青い目を細めた彼女に願うように声を掛けた。

「……帰ってくるよ、絶対に。あいつらがそんなに簡単に死ぬ訳ないじゃない」

「そうです、ね」

太陽が天上を照らす頃店で服を仕立てていると、またいつものように五月蠅い近所の奴等が商売道具を取り上げようと迫ってきた。この日はそれだけで飽き足らず、机に取っておいた色鮮やかなトマトを見咎められた。声高に逢ちゃんへの文句を言い出す奴等。彼女の旦那ほどではないが、睨み付ければそそくさと逃げ帰る癖に。全く、組合も何も逢ちゃん達を追い出したのは自分達でしょうに。逢ちゃんも大変だろう。体に響かなければいいのだけど。

「いえ、意外と誰も来ないのですよ」

二人きりのお茶会の席で逢ちゃんは微笑む。暑い盛りに態々文句を言うためだけに登山……成程、そこまで暇な奴等でもなかったようだ。

「だから、咲良さんが来てくれるのがとても嬉しいのです」

「……何も出ないわよ」

手製のお茶もお菓子も、山から持ち出せばやれ贅沢品だ非国民だと騒がれるだろう。けれど、配給の回ってこない余所者の彼女にはそれしか食べるものが無い。ある意味酷く滑稽な話だと目を閉じる。

『ひゅー。咲良ちゃんてば照れちゃってー』

『和志、五月蠅いぞ。そんなに追い出されたればいくらでも追い出すが』

不意に蘇る音声にも、封をして。

「久し振りじゃねえか貴利。何だよやっと思つたら嫁さん連れとか！ 嫌味か」

「悪いな、立て込んでいた」

「あー知ってたけどよーっ痛」

「店番放ってお喋りとかいい度胸ね和志。そちらは？」

「殴ってから言うことじゃねえと思うの咲良ちゃん……。俺の親友の貴利。今度こっちに駆け落ちしてきたんだと」

数年前から働きに来ていた青年がそう紹介したのが、逢ちゃんとその旦那だった。

彼女の異国風情ある青眼は暫く皆の羨望の的で、常に纏われた優しい雰囲気は彼女を人気者にするには十分だった。人が寄り集まる度に普段から眼光鋭い旦那の方が苛々と睨みつけていたりしていたものだ。気弱且つ人見知りな彼女がどうやってこの旦那と知り合い愛し合ったのか、私にとっては永遠の謎だ。

何だかんだいろいろあって二人が街に来て二カ月経つ頃には四人でお茶会を開く程に仲が良くなっていた。自分で動けることが嬉しくて仕方ないと言って逢ちゃんは不慣れにお菓子を焼き、それをはらはらと旦那が見守っていたり、店員の青年が馬鹿話をしては踝を蹴られていたり、新作の服を試着してもらったり……。きっと私の人生の中で一番楽しい時間だったと思う。

その手紙が、届くまでは。



『……』

『貴利さん、笑顔です、笑顔』

『逢ちゃんあのな、人には出来る事と出来ない事が……痛っ』

『この馬鹿』

『写真代、和志につけておこう』

『冗談止め……え、本気？ ちょ、酷え』

『……撮りますよー？』



写真立を直す。

逢ちゃんの旦那と店員の青年が旅立つ前の日に、珍しく逢ちゃんが言ったのだ。本人は酷く恐縮していたけど、私に言わせてもらえばそんなのは我儘でも何でも無い。世界にたった四枚の写真は優しい時間の面影を残し、だからこそ私は願わずにいられない。

『……咲良ちゃん。あのさ、俺絶対ここに戻ってくるからさ、その時は俺の話に付き合ってくれない？』

『俺が居てやれない間、あいつのことを頼む』

「早く帰って来なさいよ馬鹿……私も逢ちゃんも待ってるんだから」

女しかいない街が俄かに騒がしくなった。なんでも隣町が爆撃を受けたからそろそろこの街も危ないのではとか何とか何とか。最近ではデマも多いしと聞き流し、今日も今日とて歩き慣れた道を進む。一つの箱を携えながら。

「逢ちゃん、お邪魔するよ」

……返事が無い？ まさか何かあったんじゃ！

「……なんだ」

窓際の椅子、家を囲む樹木が日差しを良い感じに遮るそこで、彼女は静かに眠っていた。起こしちゃいけないなど思ったけれど、箱を置く音に反応して小さく声が返ってきてしまった。

「寝てたのにごめんね。これだけ置いて帰るつもりだったんだ」

「いいえ、大丈夫です。……あの、もしかして」

期待と不安交ぜの言葉に私は笑みを返す。

「随分遅くなっちゃったね。御注文の品、出来たよ」

少し日に焼けた箱から、恐る恐る取り出されたのは白い服。大分シンプルな作りのそれは式を挙げる代わりにと、彼女の旦那が注文した異国の婚姻服。軽く体に当てて微笑む彼女は思わず抱き締めたくなるほど可愛くて。ああでもやっぱりもっと飾りたいな、なんて仕立て屋心が疼く。取り敢えず小物作って贈ろうかしら、式当日

には生花を髪飾りにしてあげようかしら、文句なんて出ない四人だけの結婚式だもの少し位派手にしてしまってもいいだろうし。

「十分ですよ！」

言葉が漏れていたか、遠慮がちな彼女はわたわたと片手を振って言ったけれど。

「いいの。こんなに可愛いんだもの、目一杯飾って貴利の奴驚かしてやりましょうよ」

「は、はい」

よし、まずはベールかな。

戦火はいよいよ激しく、耳障りな音が上空を行き来する頃。

「咲良さんも行っちゃうんですね」

「そうなんだ。ごめんね」

「謝らないでください。仕方のない事です」

街で最後の一人になる彼女は、いつもより悲しげに微笑んだ。

「逢ちゃんはどうするの？ 駆け落ちってことは親戚とか頼れないよね」

「……此処で、待ちます。皆が戻ってくるのを」

「でも体とか大丈夫？ 一緒に行けたら良かったんだけど」

「そんなご迷惑は掛けられないですよ。大丈夫です。また皆でお茶会しましょうね」

「うん。……それじゃあ」

○

『おまけです』と赤は笑う。

暗い天井に精一杯両手を伸ばし抱き締めた。夢と知っても求めずにはいられなかった。幸福の一欠片が埋まる感覚に微笑み、意識は宙に溶けていく。

○

くるりくるりと廻る日傘。見覚えのあるその色に私は玄関を飛び出した。

「こんにちは、咲良さん」

「逢ちゃん？ 何で此処に」

くるり、くるり。舞い廻る日傘は彼女の空間だけを薄闇に染める。

「帰ってきますよ」

「え？」

「貴利さんも、和志くんも、帰ってきます。あの街に。」

「なんでそんなことを……」

眩い日差しが照りつける中、幽かな闇に困ったように微笑んだ、予言者めいたその言葉。くるり、廻り続ける日傘だけが止まりそうな時を動かしていた。

「ううん、理由は聞かない。無事だったのならそれでいいわ」

終わった戦いに帰らぬ者は多く、親戚でもない私には通知が来ても分からないけれど。逢ちゃんは微笑む、確信を持って。

「まだ暑いでしょ、上がっていきなさいな。水くらいしか出せないけどね」

逢ちゃんは緩く首を振った。

「もう行かなくちゃいけないので」

「そっか」

背後に自分を呼ぶ声が響く。

「あちゃあ、五月蠅いのが来た。ごめんね、こっちが片付いたらまた街に戻るよ。逢ちゃんのお茶飲みたいしね」

「ありがとうございます、咲良さん」

一声だけ後ろに返事しようと振り返り――

「でも、ごめんなさい」

「え？」

戻した視線の先に、逢ちゃんは居なかった。柔らかな色の日傘が一つぼつりと、道の上に廻っているだけだった。

* ■ *

山を下りて、白く熱された道を歩く。人がいなくなってただでさえ寂れていた街はもう見る影も無い。辛うじて無事だった咲良さんのお店に立ち寄り、二人で植えた花に水をあげる。蕾は大分ふっくらとしてもうすぐ咲きそう。植木鉢の見える日陰に座り、野菜を齧った。数日前からの眩暈はまだ治まらない。くらくら揺れる世界に、見慣れない人が立っていた。

「こんにちは、逢さん」

「貴方は……？」

「忘れちゃったんですかあ？ 酷い人ですね」

目を凝らす。その人の纏う赤が、一人の記憶を呼んだ。

「ああ、獄さん」

「はい、正解です」

「そうですね、もうそろそろ期限でしたか」

胸に手を当てれば崩れ始めた鼓動が聞こえた。

「ねえ逢さん、貴女は幸せでしたか」

「はい、とても。とても幸せでした」

それは良かったと獄さんは、死神は笑う。

『悪霊になったら面倒ですから、幸せに死んで欲しいんですよ』

〈逢〉と名付けられたモノが死んだのは、もう何年も前の話。

「幸せな夢はもう終わり、ですね」

「ええ。では逝きましょうか、逢さん」

冷たい手に引かれ家へと続く道を歩く。足取りはふわふわと、今にも消えそうな魂を抱えて。

膨らんだ蕾、咲くのをとても楽しみにしていたけど。

『ごめんね』花と彼女にそう思う。

解けた〈逢〉という存在が、船上の二人の揺れを感ずる。

『ごめんね』彼と彼にそう思う。

『大好きな皆、幸せを有難う』

日の暖かさを感じ、懺悔と感謝を胸に、目を閉じた。

■

花が咲いていた。店先で育てていたあの花。きっと彼女に似合うだろうと育てていた、青と白の花。ああでもやっぱりよく似合う。真っ白なドレスとベール、腰にしか付けられなかったレース飾り。皆が帰ってきたらお披露目しようと言っていたから、実際に着ているところを見るのは私も初めて。これでも十分可愛いけれど、やっぱりもっともっと飾ってあげたかった。可愛い妹分の晴れの日、皆が忘れられない程可愛い姿を贈りたかった。そして幸せそうに笑ってほしかった。

「ねえ逢ちゃん。また、皆でお茶会しようって言ったじゃない」

青い瞳は閉ざされたまま。

◇

掻き抱くように空中に伸ばされた手は、やがてぱたりと地に落ちた。少し乱れた服を整えてあげる。柔らかな幸せそうな微笑みに目を伏せ問いかけた。

「逢さん、君は本当にこれだけで良かったんですか」

『だって、叶う筈無いじゃないですか』

〈逢〉という存在を全否定してまで願ったのは、たった一時でもいいから愛しい人と笑い合いたいということ。小さ過ぎる幸せの定義にボクは暫し悩んだけれど、澄み切った魂の色にその存在が間違いなくこの上ない幸せを感じて命を終えたのだと思い知らされる。

長い長い輪廻の果て、弱った魂は天にも帰れず風に解け消えていく。答えが欲しくて手を伸ばしても、指先に触れた温かさ以外何も知ることは出来なかった。

混合(上) (Puney Loran Seapon)

混合(上)

Puney Loran Seapon

【凜と絵里からのおしらせ】

絵里「この作品は、作者が過去に投稿した作品、『弾丸』『変態』『恋愛』『友達』がコラボした、クロスオーバー作品です。それらの作品の続編ってわけじゃないのよ」

凜「そうそう。だから、私たちが読者に向かって話しかけても、全然おかしいことじゃないんだよね！」

絵里「そうそう。あったかい目で見てももらえると、割と助かわね。作品自体は真面目に書いているわけだし。あ、これ作者の言い訳を代弁しているわけじゃないから」

凜「過去の作品を読んだことがない人は、この作品は楽しめないの？」

絵里「過去の作品を全部読んでくれると嬉しいけど、時間的に無理って人は、【あとがき】を最初に読んでくれば、作品のあらすじと、登場人物の情報くらいは分かるんじゃないかしら？ まあ読んだことなくとも、なんとかならなくもないんじゃない？」

凜「それなら大丈夫だね、おにいちゃん、おねえちゃん！」

変態(?)

呼吸の度に薄らと景色が白く曇る、今日この頃。新米刑事の^{きむらゆうき}木村勇氣は、つい最近、ようやく交際を始めた幼馴染のまゆみと一緒に、商店街で夕飯の買い物をしていた。しかし、付き合い始めた若い二人の表情は、早くも倦怠期を迎えたカップルのような、深刻なものだった。なぜこのような表情なのか、その理由は二人の間で違う。

勇氣が深刻そうな顔をしているのは、つい先日、とあるホテルで発見された高校生位と思われる女性の刺殺体が原因だ。遺体の身元が分からず、今捜査中なのだが、状況はあまり芳しくない。身元を確認出来るような物を持っておらず、今は周辺の住民等に聞き込みを行っているのだが、何の手がかりも掴めていない。ホテルには監視カメラもないため、犯人の特徴も分かっていない。現場の状況から、おそらく犯人は一人だろうということと、殺害されたのは、おそらく数ヶ月前だということが分かった程度である。事件の発覚からまだ数日しか立っていないが、既に勇氣はクタクタだった。実は今も捜査中なのだが、偶然買い物の途中だったまゆみに出会い、聞き込みと称して、こっそりサボっている。もちろん罪悪感はあるのだが。

一方、まゆみがこのような表情をしているのは、勇氣が原因だ。今、勇氣と交際していることに、まゆみは憤りを感じていた。いや、もちろんまゆみとしては、勇氣と交際している事については嬉しい。ただ、未だに交際の域を抜け出せていないことが問題なのだ。

『俺と、結婚してくれないか？』

これが、勇氣の台詞だったはずだ。しかし、まゆみはまだ勇氣と結婚していない。同居はしているが、勇氣の家にちよくちよく行っていたまゆみにしてみると、前とあまり変わりがない。

「はあ……」

視界が二人分、白くなる。

「ん？ まゆみ、なんか悩みでもあるのか？」

勇氣がまゆみの方を見た。

「……うっさい」

「……？」

不機嫌そうにそっぽを向くまゆみに、勇氣は訳が分からないというように首を傾げる。

「ところで勇氣」

少し機嫌を直したのか、勇氣の方を向くまゆみの表情は、少し柔らかい。

「後残るは夕飯の買い物だけなんだけど……」

そう言われて、勇氣は自分の持っている買い物袋の中を覗き込む。中は雑貨。おそらく絵里か凜に頼まれた物であろうと、勇氣は推測した。

「今日の夕飯、勇氣は何がいい？」

「まだ決まっていなかったのか？」

「ううん。でもせっかく勇氣と会ったんだし、何かリクエストがあれば聞くよ？」

「パツとは思いつかないな……。何が作れそう？ いくつか挙げてもらって、その中から選ぶわ」

「じゃあ、今家にある物とか考えると……肉じゃががいい？ コロッケがいい？ それとも……」

まゆみが上目づかいで自分を見る、そんな錯覚を勇氣は感じた。ぴよこぴよこと、まゆみのアホ毛が揺れた。

「わ・た・し？」

不意に、後ろから男の声が聞こえた。どこか面白がっているような、そんな声。勇氣もまゆみも、この声の主を知っている。

その声が少し大きかったせい、周りの人が何事かと勇氣達の方を見る。クスクスと笑い声も聞こえてきて、勇氣もまゆみも慌てて後ろを振り返る。白衣を着た男が、ニヤニヤしながらそこに立っていた。

「藤二、何の用だ？」

勇氣が尋ねたその男は、科捜研のふるやとうじ古谷藤二。勇氣とまゆみの、中学生時代の友達だ。科捜研と言ったが、彼は仕事をよくサボって、勇氣の邪魔……いや、手伝いに来るような奴である。

「つーか、男があんまり気持ち悪いこと言ってんじゃねーよ！ ゾクツとしたわ！」

「藤二君、久しぶり。っていうか、私そんな破廉恥なこと言わないし！」

「やだなあ、二人共。『藤二』なんて水臭いじゃないか」

ちっちちと、人差し指を横に振りながらウインクする藤二。まゆみの最後の発言はスルーするつもりらしい。

「昔みたいに『TOUJI』って呼んでくれよ」

「一度もそう呼んだことないだろ……」

溜息を吐きながら、勇氣はそう呟いた。横で、まゆみがリアクションに困っていた。

「それで、何か用か？」

「用も何も、勇氣君が仕事をサボっているのを見たから、注意しに来たんだよ。ダメじゃないか」

「サボっていたのは事実だが、お前に言われたくねーよ！ お前もさっさとおまえ科捜研の仕事戻れ！」

「いや、別にサボってはないさ」

勇氣の発言に、藤二は首を横に振る。だが、他の科捜研の方々は、既に鑑識から届けられた遺留品や証拠品の鑑定をしているはずで、当然藤二もその場にいなければならない。こんなところで油を売っている暇はないはずである。

「『天才は時として、何もしない方が良い結果につながる』っていう名言があるじゃないか。僕はサボっているように見えて、ちゃんと仕事をしているのさ」

「『名』言っていうか、『迷』言だね……」

どう反応していいかわからない、そんな表情で、まゆみは呟いた。

「と、いうのは半分冗談で、本当は勇氣君や康介君の手伝いをしに来たんだよ」

「冗談は半分だけなんだ……」

「だいたい、別に手伝ってもらわなくてもいいの！ それに、お前一人が増えたって、たいして変わらんだろう」

そう言って、勇気は溜息を吐く。藤二がいると、いつもの倍疲れるので、さっさと帰って欲しかった。

だが、

「大丈夫だって！ 新しく発明した人型ロボット、『立ち上げろ！ 君のぶんし……』

「某カードゲームアニメの、有名な台詞をパクってんじゃねーよ！ 却下だ却下！」

藤二はたまに、よく分からないものを作る。大抵は、使い道の分からないものばかりだが。勇気は溜息を吐いた。

「だいたい何なんだ、それは？」

「聞き込み捜査に必要な人員をどうしても削減したくてね。そのためのロボットを作ったんだ。まだ開発の途中だけど、簡単な聞き込み捜査なら、多分出来なくもないと思うよ？」

「そんなもの使えるか！ どうせ、また爆発とかするんだろ？」

いつかの『時計型銃』を思い出しながら、勇気は藤二に尋ねる。

「ええっと……作動させてから十分くらいすると」

「却下だ！」

藤二が全部言い終える前に、勇気はそう言った。街中で、そんな危ないものは使わせられない。藤二は衝撃を受けているが、勇気はそれを無視した。

「そんな！ 爆発するなんて言ってないじゃん！」

「ん？ じゃあ、危険はないのか？」

「危険も何も、普通のロボットだよ？ 頭の部分が、まるで本物の人間そっくりに出来ている他は、ただの鉄の塊が服を着ているだけだって！」

藤二は慌てて説明する。写真まで出す始末だ。

「じゃあ、作動させてから十分経つと、どうなるんだ？」

その写真を覗き込みながら、勇気は藤二に尋ねる。思っていたより、見た目は問題無い。服を着ていれば、遠目からならロボットに見えない気もした。もしかすると、今回は問題ないかもしれないと、勇気は思う。

「どこかの黒ひげみたいに、首から上が上に吹っ飛ぶだけだよ？」

「そんなもん使えるか！ トラウマになるわ！」

街中で首が飛び出る光景を想像した勇気は、顔を真っ青にして藤二に怒鳴る。ケラケラと、藤二はそれを笑い飛ばした。

「笑い事じゃないっつーの！」

「まあまあ、冗談だって。普通に聞き込みをしようか、勇気君」

「お前は来なくていいっての……あ、悪いまゆみ」

勇気は、そばで呆然と二人の話を聞いていたまゆみに話かける。

「俺、聞き込みに戻るわ。夕飯はなんか適当に頼む。荷物は俺が家に持ってくからさ」

「えっ……ちょっ……勇気っ？」

呆然とするまゆみを置いて、勇気と藤二は捜査に戻った。

友達(?)

呆然と、私はその場に立っていた。私は伊藤^{いとう}まゆみ。木村勇気の幼馴染で、最近交際を始めたから、今は勇気の彼女だ。

「ちょ……あいつ、ほんと何なのよ……」

せめて夕飯のリクエストくらいはして欲しかったけど、仕事だから仕方がない。仕方がないけど、私は少し

腹立たしかった。まあ腹立たしいのは、別に夕飯のリクエストをしてくれなかったことだけじゃないけど。

『大人になって、ちゃんとお金がもらえるようになったら、結婚しよう』

そう言われたのが幼稚園の頃。つい最近まで、勇氣は自分が言ったその台詞を忘れていたけど、私はずっと覚えていた。幼稚園の頃の話だから、勇氣が忘れていたのは、それは仕方ないことだと思う。流石にショックだったから、思わず引っぱたいした事もあったけど。問題は、勇氣が告白したのを思い出した、その後だった。

勇氣が言うには、結婚は慎重にしなければならないものらしい。

「最低でも五年の交際を経て、結婚はそれからだろう？」

あの勇氣の言葉。今思い出しても腹立つ。確かに結婚は慎重にする必要があると思うけど、今更交際する必要なんて、私たちにはないんじゃない？ 知り合ったばかりってわけじゃないんだしさ。

私は溜息をついて、空を仰ぐ。一面灰色で、まるで今の私の心境をそのまま写し出しているかのようだ、私は思う。少し前までは、所々に青い色が見えていたはずなのに。ふと、幼稚園児位の女の子が、私のそばを通りかかった事に気がついた。なんとなく、アルバムで見た、昔の私に似ているような気がする。頭のとっぺんから、主張するように伸びたアホ毛といい、少しつまらなさそうにして、お母さんと手をつないでいるところといい、目に入ったのは一瞬だったけど、思い出せば出すほど、ますます似ていると思った。

勇氣との出会いを、実は私はよく覚えていない。幼稚園に上がるより前には既に、私の隣には、よく勇氣がいたような気がする。はっきりとした記憶があるのは、年中組に上がった頃からだ。

あの頃の勇氣は喧嘩早くて、よく周りの子とトラブルになっていた。私はといえば、取っ組み合いの喧嘩にこそならなかったものの、あまり素直な子じゃなかったから、やっぱり勇氣と同じで、よく周りの子とトラブルになっていた。そのせいか、あの頃の私は、勇氣以外の友達がいなかったように思う。いつごろからだろう？ 私に、勇氣以外の友達が出来るようになったのは。ジャングルジムの頂辺で、勇氣に告白された頃にはすでに、他にも友達が少しいた記憶がある。

そんな幼い頃の記憶を思い出しながら、私は夕飯の買い物に行こうと、後ろを振り返る。その時だった。

「きゃっ！」

「あっ……ごめんなさい！」

私は、女性とぶつかって、相手を転倒させてしまった。清純派美人という言葉が、良く似合いそうな子で、ふと、私は目をこすった。ぶつかったのが、彼女一人じゃないような気がしたから。でもそれは気のせいで、ぶつかってしまったのは彼女一人だけだったらしい。私は慌てて、その子に手を差し伸べた。

「大丈夫？ 怪我無い？」

「だ……大丈夫です……」

彼女は私の手を掴んで、ヨロヨロと立ち上がる。

「す……すみません、私も不注意でした……」

彼女は本当に申し訳なさそうに、私に頭を下げる。自分が悪くなくても、きちんと謝るその姿は、勇氣にも見習って欲しいと、つい思ってしまった。勇氣は、自分が悪いと思わないと謝らないから。悪いと思っても、素直に謝らない時もある。

でも、ちゃんと謝る勇氣も、それはそれでどうなんだろう？

「あっ……あのっ、どうかしました？」

彼女にそう言われて、私は初めて、彼女をじっと見つめている事に気がついた。どうやら無意識のうちに、彼女を観察していたらしい。何がそうさせるのか、私には分からなかったけど、きっと彼女の目に惹かれるのだろうと思う。とろんとした目の中に、彼女のものではない何かを私は感じた。

「あ、ああっ、ごめんねっ？ 何でもないから……」

私は慌てて、彼女から目を逸らす。そうしないと、いつまでも彼女を見てしまいそうだったから。

「……？」

不思議そうな様子で、彼女はこの場を去ろうとしたその時、私は地面にハンカチが落ちている事に気が付いて、それを拾い上げた。多分、彼女のものじゃないかなと思う。可愛らしい花柄のハンカチで、裏には『天瀬響花』と書かれている。彼女の名前かな？

「あの、これ落とした？」

私が呼び止めると、彼女は振り向く。私の持っているハンカチを見て、自分が落としたことに気がついたらしい。驚いたような表情で、今度は私を見た。

「あっ……ありがとうございます」

雲と雲の隙間から、薄らと赤い光が差し込んだ。

変態(?)

「藤二のやつ、どこ行きやがった？」

あたりをキョロキョロ見回しながら、木村勇氣はそう呟いた。まゆみと別れた二人は、結局藤二も一緒に聞き込みをしていたのだが、気がつくやうと、藤二の姿はどこにも無い。聞き込みには確かに邪魔な存在だったが、いざ本当にいなくなると、存外寂しいものだと、勇氣はつい感じてしまった。

「……メールか」

ふと、内ポケットのスマートフォンが振動する。メールが届いたやうで、開くと差出人は藤二だ。

『犯人と被害者の目星が付いた。康介君と一緒に、ここに向かって欲しい』

「なんでブタと一緒に？ まあいいか」

本文を読み終えた勇氣は、思わずそう呟く。メールには地図が添付されていて、一箇所、赤い丸が付いていた。ここに向かってくれということなんだろうと、勇氣は推測する。

「あれ？ 勇氣君じゃあないか。奇遇だねwww」

突然声を掛けられ、振り向くと、そこには勇氣の同僚の^{ささき こうすけ}佐々木康介、通称ブタがいた。ダサイ丸縁メガネを掛けた太っている男で、髪のももだらしく伸びきっている。気温が低いから、メガネもいつもの二割増に白く曇っていた。

「ネット用語を現実で使うなど、何回言わせりゃ気が済むんだ？ いい加減直せ！ このブタ野郎！」

「www」というのは、ネット用語の一つである。意味は『(笑)』を略したもので、康介が最も多用するネット用語の一つだ。

「『ブタ野郎』だって？ ホント笑わせてくれる……」

「そのネタ、パツと聞いて分かる奴あんまりいないだろ……。ところで、メール見たか？」

勇氣は、さっき届いたメール画面を康介に見せる。スマートフォンの画面が、康介の息と体温で白く曇った。

「ああ、これかwww 見たね」

「んじゃ、行くか」

「うむ」

そうやって二人は、一緒に歩きだした。寒波が二人の背中を押す。目的地に記されていたのは、とある高校。あまり評判の良くない高校だった。

弾丸(?)

「らっしゃいませー」

気のない挨拶だと自分でも分かっているが、人間、どうしてもやる気が出ない日もある。今の俺が、まさにそれだ。

入ってきた母親とその娘を見ながら、俺は羨望を覚える。別に結婚願望がある訳ではないが、ああやって母親に欲しいものをねだる子供を見ていると、もっと真面目に生きていれば良かったと、つい思ってしまう。ねだら

れている母親からすれば堪ったものじゃないんだろうが、ねだってくれる相手すらいない俺からすれば、ちょっと寂しい。

殺し屋稼業なんてしていなければ、俺にも子供がいたかもしれない。

「あの、すみません」

そう呼ばれて、俺は我に返る。さっき入ってきた母親が目の前にいた。カウンターには、商品が置かれている。

「ああ、すみません。えっと、820円になります」

お金を受け取って、お釣りを渡す。

「あざしたー」

気のない挨拶をしながら、俺は時間を確認する。この後、依頼の打ち合わせがあるのだ。約束の時間が刻一刻と迫るのを見て、俺は溜息を吐いた。

「それじゃあ、こいつが今回のターゲットだ」

とあるオフィスで、俺の目の前にいる、スキンヘッドのおっさんが写真を一枚、俺に差し出す。このおっさんは、俺の上司だ。俺を殺し屋稼業に引き込んだ張本人である。

暖房のお陰で暖かく快適なオフィスとは裏腹に、俺の気持ちは冷たく不快だった。

「こいつが……次のターゲット？」

「ああ」

写真に写っているのは女性だった。それも、彼女は多分大学生、いや高校生にも見える。おっとりとした感じの子で、とても殺す必要があるようには見えない。俺は、自分の手が震えている事に気がついた。

「……まだ子供じゃないか。こんな子を殺すのか？」

「ああ、頼む」

「……理由を教えてくれ」

もう何十年も殺し屋稼業をやっているが、未だに人を殺す感覚には慣れない。慣れたくもない。とても、彼女を殺す気にはならなかった。

おっさんは、俺の事をじっと見つめていた。理由を教えるか否か、迷っているようだ。

「以前お前が殺した、アパレル会社の社長を覚えているか？ ほら、竹岡を殺す前の」

「ん？ ああ、あの社長さんか？ 覚えているけど？」

一応、俺もプロの殺し屋だ。ターゲットの顔は、全て覚えている。敬意という訳ではない。殺しておいて、綺麗さっぱりと忘れてしまうのは、相手に対して申し訳ないと俺は思っているからだ。

「実はあの時、目撃者がいた可能性があるんだ」

「なんだってっ？」

人を殺すのは嫌だ。殺すことに快感を覚えるやつの方がどうかしている。だが、サツに捕まってブタ箱に入れられるのは、もっと嫌だ。俺は自分の顔から、サツと血の気が引いた事に気がついた。

だが……。

「おかしくないか？ 一体どこからだ？」

俺があの日、狙撃のポイントに選んだのは、廃ビルの屋上だ。しかも、あの日の時間帯は深夜午前零時。目立たないような服を選んだから、よほどのことがない限り、俺の存在に気づかれるはずもない。廃ビルから出入りする時が一番可能性があったのだろうが、行動も迅速だったはずだ。

「それに、あの社長さんを殺したのは、二ヶ月以上も前の話だろう？ 目撃者がいたなら、とっくに警察が俺達に勘付いてもいいはずだと思うが？」

「そんな簡単な話じゃない。これを見て欲しい」

おっさんはそう言うと、机の脇にある新聞を俺に渡す。一昨日の夕刊だ。

「ここだ」

おっさんは、新聞の隅っこの方を指差す。都内のブティックホテルで、高校生位と思われる女性の刺殺体が発見された、という記事である。

「少し気になって調べてみたら、現場のホテルは、あの廃ビルの近くのホテルだった。そして発見されたのは先日だが、その女子高生が殺されたのは、どうやら数ヶ月前らしい。つまり、分かるな？ この女を殺した犯人が、お前の姿を目撃している可能性があるんだよ。だから……」

「ちょっと待ってくれ」

俺は、話を続けようとするおっさんを手で制す。

「確かに目撃したかもしれないが、まだ俺の姿を見たって決まったわけじゃない」

今のおっさんの話を聞いただけでは、そいつが目撃したという可能性は極めて低い。俺と彼女の犯行日時が、たまたま一緒だったとは考えづらいだろう。

「それに、なんで犯人がこの子だと断定出来る？ 警察はまだ、犯人が誰なのかまで掴んでないんだろう？ それどころか、遺体の身元すら分かってないじゃないか」

俺はターゲットの写真を指差して、そう言った。だが、おっさんの表情は硬い。

「……俺の倅が、殺害された女と同じ学校に通っててな。この間、この夕刊を倅が見て、同じクラスの女子が殺されていた事に気がついたらしい」

もっと早く気がつけよ、と、俺は思う。クラスメイトがいなくなって二ヶ月以上経っているのに、気づかないとはどういうことであろうか。

「引きこもる子や、学校サボって遊んでいる奴が多いんだよ。お陰で倅も、そいつがいなくなっても不思議に思わなかったらしい」

「……なるほど」

「それで、殺されたその女は、ひどいいじめに遭っていたようでな。まあ、うちの倅も色々やらかしたらしいんだが……。ただ一人、その女にはとても仲のいい友達がいた。それがこいつだ。そして、こいつも同じ時期に、行方をくらましている。おそらく、こいつが犯人と見て問題ないだろう。証拠は何もないが」

おっさんはそう言って、写真を指差す。

「と、いうことは、殺された彼女は、ひどいいじめに遭った挙句、友達だと思っていた奴に裏切られたって訳か」

ひどい話だなと、俺は思う。それにしても、人は見かけによらない。殺人なんてしそうにないように見えるんだが。しかも、女の子二人でブティックホテルか。確かにその手のホテルは、殺人を犯すには条件のいい場所だが。

「しかも、行方をくらましたその時期が、丁度お前が社長さんをぶち抜いた日のあたりらしいんだ。分かったか？」

「……分かったよ」

まだ彼女が俺の姿を目撃したと決まった訳ではないが、可能性は低くない。ブタ箱に入れられるくらいなら、口封じをする必要がある。俺は、腹を括った。

「はあ……」

思わず、俺の口から溜息が漏れる。おっさんと別れてから、俺は寄り道せずに、まっすぐアパートに戻った。六畳一間の狭苦しい和室。築数十年のオンボロアパートに、俺はもう何年も住んでいる。

殺し屋という職業に就いているので、年収はそこらの人達の倍は稼いでいると思う。住もうと思えば、もっといいアパートに住めるだろう。だが、人を殺して得たお金で、贅沢をするのは気が引ける。……とはいえ、耐震

性は危ういアパートだから、そろそろ引っ越してもいいかと、最近思い始めてはいるが。

殺し屋なんかやっているものの、正直なことを言えば、俺は人なんか殺したくない。そんな俺がなんで殺し屋なんてやっているのか、それには訳がある。簡単に言えば、大学で遊び呆けていたら二回も留年して、就職も出来なかった。路頭に迷いかけていた俺に声を掛けたのが、あのおっさんで、めでたく俺は殺し屋に。これが理由だ。今思い返しても、何とも間抜けな話である。ちなみにさっきのコンビニは、俺が殺し屋の仕事をしに行く時、アルバイトの振りをして入るコンビニだ。たまに本当にアルバイトをすることもあるが。あまり客はこないから、アパートから直で仕事に行くより、いろいろとごまかしやすい。

思わず愚痴ってしまったが、俺が溜息をついた理由は、今手に持っている写真だ。二枚ある。一枚は、今回のターゲットの写真。もう一枚は、殺された女子生徒の写真。

話の最後に、おっさんから、こんな話を聞かされた。

「今回のターゲットの女の名前だが、俺の俸に聞いたところ、たしか『天瀬^{あませきょうか}響花』でいいらしい。よく覚えていないらしくてな、もしかすると『須藤^{すどうきょういちろう}響一郎』という名前だったかもしれないとか何とか……。男みみたいな名前だろう？俺も訳が分からないんだが、何せ、うちのバカ息子の事だ。クラスメイトの名前など、いちいち覚えていないだろう」

クラスメイトの名前くらい、全員覚えろよ。一体どんなクラスだったんだ？

結局、その時のおっさんの話をまとめると、刺殺体と犯人の名前が『天瀬響花』と『須藤響一郎』のどちらかであるらしい。片方が男みみたいな名前だが、その点はスルーするより他ないか。

殺された女子生徒の気持ちを考えると、気分が沈む。本でも読んで、気を紛らわすか。そう思った時、チャイムが鳴った。

「……誰だ？」

おっさんとはさっき別れたばかりだし、他に訪ねてくる人に心当たりはない。警察か何かかと、俺は訝しむ。

「……げっ！」

覗き穴から外の様子を覗いた俺は、思わずそんな声を出してしまった。

友達(?)

背中がゾクツとする。私は、後ろから視線を感じた。

彼女と別れてから、私は夕飯の買い物を済ませ、まっすぐ家に帰る。勇気と交際するようになってから、私の帰るところは、勇気の家になっていた。ただ、この日は実家に取りに行くものがあったから、今日はちょっといつもと違う。私の実家は、勇気の家、ほとんど真正面に位置するところにある。この家に入るのも、久しぶりだ。

「ただいま」

私は家に入って、そう告げる。だけど、誰かが「おかえり」と返してくれることは、ほとんどない。この日もそうだった。ずっとこの家で過ごしてきたけど、そのことを気にしたことは最近ではほとんど無い。

でも今日は、なんだか少し寂しい気がした。空気も、なんかいつもと違う。自分の家じゃないみたいだ。勇気の家なら、凜ちゃんや絵里さんが「おかえり」って返してくれるからだろう。勇気の家と比べると、私の家の方が狭いはず。確か、随分前に勇気がそう自慢していたから。だけど多分、あいつの方が間違っているんじゃないかな。だって、こんなに広く感じるだもん。

早く勇気の家に戻りたくなった私は、用事を済ませて、さっさと玄関まで向かった。その時だ。

「……誰かな？」

ドアの外に、人の気配を感じて、私は首を傾げる。ドアを開けると、そこにはさっきの女の子が、今まさにチャイムのボタンを押そうとしているところだった。驚いたような表情でこちらを見ているが、多分私も同じ顔をしていると思う。

オトメユリの甘く濃厚な香りがした。

【続く】

【あとがき】

お久しぶりです。Puney Loran Seaponです。今回は前編なので、あんまり書く事はありません。詳しい話は後編で。そういえば、まだクロスオーバーをやっていなかったと思い、書きました。書く事はこれと、この後のあらすじや登場人物の紹介だけです。まあ折角クロスオーバーするなら、読んで楽しい方がいいだろうと思ひ、まえがきとあとがきはあんな感じです。クロスオーバー含め、嫌いだったらごめんなさい。あと、まえがきで二人が言っていました、四作品の完全な続編という訳ではないので、その点はご了承を。

では次からは、あらすじや登場人物の紹介です。

【あらすじ】

『弾丸』

俺は殺し屋。といっても、人を殺すのはあんまり好きじゃない。そんな俺に舞い込んできた依頼は、自殺志願者からの依頼だった。だがそこには、依頼主の思惑が潜んでいて……？

『変態』

新米刑事の木村勇氣は、変質者の捜査をしていた。同僚の佐々木康介、科捜研の古谷藤二と共に、変質者を捕まえることは出来るのか？

『恋愛』

前作『変態』からの続き。幼馴染の伊藤まゆみに、なんか引っぱたかれた勇氣は、その理由を考える。最後に勇氣が出した結論とは？

『友達』

私の名前は須藤響一郎。こんな名前ですが、私は女です。
いじめられていた私に差し伸べてくれたのは、天瀬響花という、一人の女性だった。

……ネタバレしない程度に書いたら、こうなっちゃいました。作品それぞれ読んでくれると嬉しいです。

【登場人物】

『「弾丸」の主人公』

殺し屋。文字通りただの人殺し。

「別に殺したくて殺してるわけじゃないんだがな。就職出来なかったから、仕方なく、だ」

『木村勇気』

新米刑事。刑事としては普通。彼氏としては最低。

「おい、なんだそれ！ もっと他にないのかよ！」

『佐々木康介』

ブタ。こんなんでも彼女がいるリア充。あとドM。

「ブタって……言い方に刺があるね。彼女がいるのが羨ましいのかい？ w w w」

『古谷藤二』

変人。誰も『TOUJI』って呼んでくれない。

「皆、影ではちゃんとそう呼んでくれているんだよ！」

『伊藤まゆみ』

勇気の彼女。可愛い。まあ、頑張ってください。あと、早く逃げて。

「な……何から？」

『須藤響一郎』 『天瀬響花』

どっちかはヤンデレ。

「あの……なんで私から逃げるんですか？」

以上、登場人物です。凜と絵里は割愛します。ごめんなさい、二人共。

青を吐く (日曜日憂)

青を吐く

日曜日 憂

手のひらから滑り落ちていく。そう感じたときにはもう遅かった。指の隙間を通り抜け、あっという間に海の底へと落ちていった。足元の青い砂でできた城が、波にさらわれていく。あんなに必死になって作り上げてきた砂の城が、いともたやすく崩れていく。それをただ呆然と眺めていることしかできなかった。あの波は、さっきまでは遠くで静かにさざめいているだけだったのに、いつの間にこんなところまで来るようになっていたんだろう。寄せた波が引き返していくと、もうそこに城はなかった。僕は城の跡を見るのをやめて、夜空を見上げた。ロマンチックな満月のかわりに、不気味なほど青白い肌をした蛍光灯が、僕を見下ろしていた。あんまりにも冷たい真顔で僕を見下してくるものだから、「馬鹿にするなよ」と言ってやろうかと思ったとき、またあの波が寄せてきた。ざわざわ、いやらしい音の粒をばらまきながら、僕に向かってくる。やがて、波は僕をもさらっていかうとするかのように、足を死の冷たさで濡らした。波の音の粒たちは、僕の鼓膜を通り過ぎると、小さなほこりに姿を変えて、脳みそのしわの隙間に挟まった。ふわふわ、ちくちくしたかゆみが、僕の頭を覆い尽くした。全身が粟立つ不快感にぞっとした。頭蓋をぱかっと開いて、脳みその隙間の一つ一つに指を突っ込み、むかつくほこりたちをかき出したい。そんな衝動にかられて、僕は頭をかきむしった。しかし、どれだけかきむしっても、得られるのは少しのフケとちぎれた髪の毛と虚しさだけだった。僕は疲れて、頭をかくのをやめた。それから、握りしめた携帯電話に再び目を落とした。

『別れたいです』

涙でできた悲しい結晶が、無慈悲な電子に変わって僕の目の前で光っていた。僕は携帯をベッドの上に放り投げた。

机の引き出しを開けた。中には少しの文房具たちと、いつか撮った二人の写真があった。何枚かあるそれらを僕は手に取って、一枚一枚眺めてみた。そこには、僕が馬鹿みたいな笑顔を浮かべて写っていた。何も考えていない、ただの馬鹿な笑顔。見下してきた蛍光灯の真顔よりも、ずっとタチが悪い顔だった。僕は僕から僕の隣へ視線を移した。無垢で透き通った彼女が、僕に微笑みを向けていた。美しかった。相変わらず彼女はどこまでも透明に、写真の中で佇んでいた。僕は淋しく微笑んだ。もうこれは僕のものではない。写真を引き出しにしまった。

机の上のマグカップを手を取った。真っ白なマグカップの中には、すっかりぬるくなってしまったコーヒーが入っていた。僕は一口飲んだ。コーヒーは舌の付け根を苦味でしびれさせると、食道をぬるぬる進み、汲み取り式トイレで排便したときのような音を立てて、胃袋に落ちた。その一口でマグカップを置いた。気分が悪い。僕は椅子から立ち上がって、周りを見回した。閉め切られた部屋の中で、僕を中心に澱んだ空気が渦巻いていた。湿気を大量に含んだ、重たい空気。ポウフラでも浮いているんじゃないかと思うくらいに汚い。息を吸うたびに、そのべっとりした空気が肺の内側に張りついて、僕を窒息させる。耐え切れなくなって、僕はサンダルをつっかけて部屋を飛び出した。

外の空気くらいは清浄だろう、と思った僕が馬鹿だった。湿り気を帯びたぬるい風が、僕の頬に吹きつける。風が垂らしたよだれが、僕の身体をじつりと濡らす。いつもは堅く口を一字に閉ざして黒い顔をしているアスファルトも、今夜はドブの底の黒い泥のように、水気を含んでべとべととしていた。星の瞬く夜空でも見上げながら散歩して、センチメンタルな気分になろうか、なんて思っていたのに、空は曇っていてムラのある夜色で覆われていた。星々は雲の向こう側に隠れてしまって、少しもその輝きを僕に見せてくれない。月は中途半端に欠けている姿が恥ずかしいのか、薄い雲の向こうでぼんやりとかすんでいるだけだった。平凡な夜空だった。僕はいらいらしながら、あてもなく歩き始めた。

月よりも蛍光灯よりもずっと強く輝く街灯が、道路を照らしていた。白く強いその光に惑わされた蛾たちが、一心不乱に狂っている。無我夢中でその小さな羽を振るい、鱗粉をまき散らしながら、触れることのかなわないまばゆい光を目指して、飛び、踊り、そして堕ちていく。夜の闇に生きてきた彼らが、あの美しく白い光に魅せられないはずがない。かつて彼らを照らしていたのは、星と月のささやかな光だけだった。それなのに、人間が街灯なんてものを立ててしまったから、彼らは本来知るはずのない陶醉を知ってしまった。麻薬的な快感を生み出すその光に、彼らは狂い踊ることしかできなくなってしまった。彼らは命をかけて光へと向かう。そして何度もつるつるした表面にぶつかり、やがては力尽きて堕ちてしまう。堕ちたが最後、二度と飛ぶことはできない。光を見て、またあそこで踊りたいと願いながら、死んでゆく。僕は、街灯の下で、必死に羽を震わせている蛾に、苦笑いした。僕は彼か。無様に這いつくばって、それでもまだあの残酷な光を求めてしまう。僕は虫けらか。僕は街灯から目をそらして、歩き続けた。

深夜だったので、車の往来は少ない。歩道のない道路の端を歩いていくと、交差点に差しかかった。信号機が、車なんて来るはずもないのに、一生懸命に背伸びして、顔を赤くしたり青くしたりしていた。僕は彼らの頑張りを無視して、道路を渡って右折した。一車線だけの細い道に入った。街灯もなく、真っ暗な道だった。路傍の草むらから立ち上る草いきれが、より空気を湿らせていた。もう泥の中を泳いでいるのと同じかもしれない。そのくらい、あたりはむっとしていた。

どうも今日はいけない。僕は立ちを抑えきれなかった。どうにも今日は、何もかもが僕の思い通りにならない日、ということらしい。どうして世の中はこんなに湿っているのだろうか。僕が求めているのは乾きだ。水は必要ない。呼吸が苦しくなる。僕は乾きに飢えている。しかし、乾きを望む僕ですら、水あめでできた奇妙な人形のような、そういうどろどろを持って生きてしまっている。僕以外の人間はもっとひどい。彼らは皆、ヘドロに包まれて輪郭を失っている。口からは臭気を吐き出して、ずるずると這いよってこちらへ来る。そして、べとべとに汚れ、どこが指でどこが手のひらなのかかわからないくらいにふやけてしまった手で、僕のところに触れようとしてくる。僕はそういうとき、砂漠を思い出す。小さいころ、何かの本に載っていた、砂漠の写真。雲一つない空の空色と、地平線まで何もない砂の砂色。その二色だけでできた世界。それを思い出した一瞬だけ、僕は彼らからここを守ることができる。でも、本当にその一瞬だけだ。次の瞬間には、僕は走り出さなくては、彼らから逃れることができない。

歩いていくうちに、堤防が見えてきた。どこまでも左右に伸びて、地と天とを分かたず黒い壁。そうか、僕は海を目指していたのか。僕は合点した。自分の部屋から海まではそう遠くない、気まぐれに散歩して行き着くにはうってつけの場所だ。堤防の前にたどり着くと、僕は堤防に沿って左に行った。堤防沿いには、さっきの道路よりもずっとまばらだったけれど、街灯が光っていた。白ではなく、オレンジ色の柔らかい光をしていた。僕はしばらく、街灯の光を見つめながら歩いた。見つめているうちに、だんだん街灯が大きな目玉に見えてきた。沈みゆく夕日の光を宿した目。監視されているような気分になってきた。オレンジ色の柔らかい光が、かえって不自然な圧力を感じさせる。僕は目を合わせるのをやめて、歩くのを速めた。誰が監視しているのだ？

やがて、堤防を割るようにして、小さな階段があるのを見つけた。僕はその階段を上った。なぜか、絞首台に

上る死刑囚のような心持ちがした。厳かに、一步一步、残りの寿命の重みを確かめるように、僕は上った。階段を上りきると、眼前に砂浜と海とが広がっていた。ぬるぬるした潮風が、どっと僕に向かってきた。僕を煽り、耳元で何かささやいて、それから過ぎていく。僕にはそのささやきはごうごうという音にしか聞こえなかったが、去りゆく風が、僕の後ろのほうでくすくす笑っていることはわかった。僕は堤防から跳び降りた。絞首台の落とし戸が開いたように、僕という重さが急速に落ちた。勢いよく砂浜に着地すると、サンダルの際間から砂が入ってきた。汗と湿気で濡れていた足にこびりついて、非常に不快だった。僕は乾いた砂は好きだったが、湿った砂は嫌いだった。彼らは、少しでも水気があるところに触れると、くつつくことしかできなくなってしまう。それでは汚らしくへばりつくヘドロと何も変わらない。どこまでも乾いていられることが彼らの特権なのだから、彼らは乾いていればいい。僕は軽く足を払って、歩き出す。

部屋にいたときに感じた不快によく似た、波の音が聞こえてきた。僕が歩いて海に近づけば近づくほど、音量を増やしていく。寄せては引いて、少しずつ耳を侵食して、鼓膜を腐らせ、じわじわと僕を濡らしていく。僕が波打ち際にたどり着いたとき、音たちはもっともその数を多くした。ざわざわ、幾千もの波の泡が潰れ、弾ける。その音の粒が、いくつもいくつも積み重なっていく。高い密度に音が凝縮され、複雑に絡み合う。一聴すると無秩序に重なっているようだったが、実はそうではなかった。音たちはきわめて緻密に、精巧に縫い上げられていく。そして一枚の大きな旗となって、潮風にひるがえる。その旗には、大きな文字で『死ね』とだけ書かれていた。世界が僕に死ねと言っている――。

さっき僕が死刑囚の幻覚を見たのは、これが原因だったのか。街灯の看守は、執行される死を目の前にして僕が逃げ出さないように、にらみを利かせていたのだ。堤防の階段は、まぎれもなく絞首台だった。絞首台ではあったが、そこに首をくくるための縄はなかった。自分で終われ、ということなのだろうか。彼らは死ねと言いながらも、自分たちで直接手を下すことはしない。ゆっくりと僕の周りを水没させ、僕が勝手に終わっていくのを見て、嘲笑したいだけなのだ。這いつくばって、乾きを求めてあえぐ僕を見下して、ただそれだけだ。また寄せてきた波が足を濡らす。じつりと汗ばんだ足には、心地よい冷たさだった。この冷たさに覆われて、海の底へと沈殿していく僕。それも悪くないかもしれない。波がざわざわとまた海へ帰っていく。

その場に腰を下ろした。体操座りして、ぼんやりと空を見上げた。やっぱりロマンチックとはほど遠い、雲にまみれた汚い夜空が広がっていた。このまま潮が満ちてきたら、僕は海に沈むだろうか。浅瀬で溺れる僕。無様な死は、僕にぴったりの気がした。ぬるぬるした潮風が、また僕にささやいて、くすくす笑いながら去っていく。今度は聴き取れた。「死んじゃえばいいのに」と楽しそうに言っていた。波がまた寄せてきて、僕の足と尻を濡らした。僕はジャージのポケットからタバコとライターを取り出した。タバコが波で濡れてしまったかと思っていたけれど、箱を開けてみると濡れていなかったのでほっとした。僕は一本取り出して、口にくわえた。手で風をよけながら、ライターの火打石を何度か回した。風が強かったので角度を調節しなければならなかった。五度目に炎が灯り、くわえたタバコに火をつけた。大きく息を吸い込み、そして吐き出す。肺の中で僕の一部が細切れになって煙に混ざり、少しずつ外へ出て消えていく。吐き出した煙は、潮風にあおられてすぐに流れていた。僕はタバコの前からまっすぐに立ち上る煙を眺めているのが好きなのだけれど、今夜は風が邪魔をする。こんなことですら僕の思い通りにならないことに気づいて、僕は苦笑した。それからもう一度タバコをくわえて、ゆっくりと煙を吸い込んだ。

結局僕は三十分ほど座り続けた。タバコを何本か吸った。僕は沈まなかった。潮は少しずつ満ちてきているようだったが、こんな砂浜の浅瀬では、溺れることは難しい。自分から溺れることはもっと難しい。まして、ただ座っているだけでは……。僕は終わることすらかなわなかったのだ。僕は立ち上がった。濡れて張り付いてくる下着がうっとうしかった。海に背を向けて、歩き出す。今度は潮風がブーイングしながら僕を追い抜いていた。どうでもよかった。元来た道に戻って、僕は部屋に帰った。汗と海水で濡れた服を真っ先に脱ぎ捨てて、

シャワーを浴びた。シャワーの湯に叩かれて、僕の表面のぬるぬるした水分は落ちていった。なんとなくさっぱりした。なんとなくで十分だった。それ以上のものがきれいになるとは思えなかった。寝間着に着替えて、居間に戻った。いくぶんましになっていたとはいえ、まだ部屋の空気は汚かったので、窓を開けた。扇風機のスイッチを入れて、その前にあぐらをかいた。風で髪と体を乾かしながら、僕はベッドの上に目をやった。携帯電話が投げられたときそのまま、そこに静かに横たわっていた。身を乗り出してそれを手に取り、画面をつけた。またあの一文が画面に現れた。あれから何も変化はない。僕は肯定の返信をして、机の上に置いた。すっかり冷え切ったコーヒーがまだ入っているマグカップも、変わらずに机の上で佇んでいた。しばらくぼーっと扇風機の風に当たった。この風は、濡れた潮風よりもずっと無口で律儀だった。何も言わずに、ただ僕に吹きつけるだけだった。髪が乾くと、僕はベッドに飛び込んで、静かに目を閉じた。

何の変哲もない日々が過ぎて行った。欠落を抱えて生きているのはどうやら僕だけのようで、誰も普段と変わった様子はなかった。僕自身、欠落以外には何も変わらなかった。朝、普段通りの時間に目を覚まし、粛々と支度をして、大学へ向かう。講義を受けて、帰って寝る。変化はない。たまに二人で会うために割いていた時間が僕の手元に戻ってきただけで、むしろ自由になった。自由がこんなにも虚しく感じられたのはこれが初めてだった。どろどろから解放されることもなかった。僕は相変わらず、乾燥を望んでいながらも、自分の手がぬるついていることを否定できなかった。周りの人間もやっぱり変わらずに、自分がどれだけ汚らしくふやけてどろどろしているかなんて考えもせず、僕にしゃべりかけては汚い泥を口の端からぼたぼたこぼしていた。どこもかしこも彼らの足跡で泥だらけになっていた。僕はますます乾燥と清浄に飢えた。自分の部屋の空気が重いのが苦しくて、除湿器を買ってみたりもした。物理的には軽くなった気がしたけれど、何か別の重たさが、部屋の中を漂っているように見えた。こころの除湿器はどこかに売っていないものだろうか。精神科に行けばあるのかもしれない、と精神科のある病院を調べてみたが、妙に遠いところにあつたので断念した。そもそも、こころの除湿器なんて胡散臭い名前の物体、僕だって買い取りたくない。結局、僕は日々をいつも通りに過ごしていた。いつも通りに過ごすことしかできなかった。

ある日。僕は適当な夕飯を買いに最寄のコンビニに行った。自炊をあまりしない僕は、近場で外食できるところが閉まってしまう時間になると、コンビニで済ませてしまうことが多かった。今日も弁当コーナーで冷え切った目をした弁当たちとにらめっこしながら、ぼんやりと買うものを決めようとしていた。そのとき、ドアが開く音と、やる気がないバイト少年の「いらっしやいませ」が聞こえた。特に必要はなかったのだけれど、なんとなくドアのほうにちらりと目を向けた。瞬間、時が凍りついた。

彼女がいた。

最初は別人だと思ったが、顔はまぎれもなく彼女だった。かつてとは違い、髪を明るいブラウンに染めていたから、すぐには気づけなかった。きっと部屋着なのだろう、薄手のパーカーとジャージという楽な格好をしていた。相変わらず彼女は透き通っていた。美しかった。楽しそうな笑みを浮かべている、その顔も宝石みたいに光り輝いていた。それは写真と一切変わっていなかった。ただ、彼女の隣にいる人間が僕でないことを除けば。僕の知らない男がそこで笑っていた。彼女と同じような、派手な髪色をして、耳たぶにはピアスが光っている。男も部屋着のようなラフなジャージ姿だった。悪趣味な長財布を左手に握っている。その手首にはごつごつした安っぽい腕時計。男の顔は、写真の僕とまったく同じように、馬鹿みたいな笑顔をしていた。

凍っていた時が溶けて再び動き出した。今度は僕の時が凍りつき、僕はその場から動けなかった。目玉だけが

動くことを許されていて、必死に彼女の姿を追いかけていた。彼女と男は、店内に入ってすぐに曲がったので、僕には気づかなかった。何かしら談笑しながら、飲み物を買おうとしている。ここから離れたほうがいい。そうわかっているのだけれど、足は頑としてコンビニの床に張り付いて離れようとしなかった。彼女を目で追うのもやめるべきだった。見なかったふりをして、コンビニから立ち去らなければならない。しかし、眼筋は僕の意思をまったく無視して目玉を動かし、目玉は文字通り血眼になって網膜に彼女を映し続けた。僕の拒絶に逆らって、身体感覚器官の全てが、彼女をとらえ、感じ、焼きつけることに全力を注いでいた。彼女と男は、やがて飲み物の並んだ冷蔵庫から離れると、こちらへ向かって歩いてきた。否、僕に向かってきたわけではなく、レジへ向かおうとしているのだ。僕まであと二メートル、一歩進めば手が届く距離になって、ようやく彼女は僕に気がついたようだった。「あ」と小さく驚く。僕と彼女の目が合っていることに気づいた男が、「誰？ 知り合い？」と彼女に問いかける。彼女は「うーん……友達」とそれに答えてから、僕に向かって言った。

「久しぶりい。元気にしてた？」

その声と同時に、ごぼごぼとおぞましい音がして、彼女の口から黄土色の汚泥が大量にあふれ出した。彼女の言葉は、途中から水音に遮られてよく聴こえなかった。ゲル状の汚泥がコンビニの床に落ちて、びちゃびちゃと不快きわまりない音を立てた。汚泥は口のみならず、鼻や耳、目、彼女の顔の穴という穴から滝のようにあふれ出し、あっという間に彼女の全身を覆い尽くしてしまった。発酵しているのか、絶えずごぼごぼと泡立って、下水道を思わせる臭気を含んだガスを噴き出していた。汚泥のところどころには蛆虫か何か、よくわからないものがぴちぴちとうごめいて水音を立てていた。

何も返事をしない僕に、「ほんとに友達かよ」と彼女を疑う男。その男の口の端からは、白く濁った液がほとぼしっていた。彼女ほど大量ではないにしろ、男も顔の穴という穴から白い液を漏らしていた。生臭いその液体は、ジャージの股間からも染み出し、床に垂れて白い水たまりを作っていた。

僕は強烈な吐き気を催した。「久しぶり。じゃあね」とだけ小さく言うのが精いっぱい、僕はトイレに駆け込んだ。トイレに入るなりすぐに便座を開けて、ひざまずいた。途端に、口の中がすっぱくなり、胃の奥からせり上がってきて、放水されるダムのように内容物が一気に吐き出された。便器の中に吐瀉物が落ちるときの水音が、彼女から噴き出していた汚泥が床に落ちる音を彷彿とさせて、僕はさらなる吐き気に襲われた。あとからあとから重なってくる吐き気に、たまらず嘔吐し続けた。吐いても吐いても収まらず、胃の中が空っぽになってきりきりした。もう吐くものがなくなってしまい、胃液ばかり吐いていたところに、やがて黄色い液体が混じり始めた。鋭い苦味が口の中をずたずたにしていく。気づけば僕は目からも嘔吐していた。僕からすべてが吐き出されていく。便器にしがみついて、しばらくトイレから出ることができなかった。

帰宅すると、僕はベッドに寝転がった。まだ小さな吐き気が残っていて、気分が悪かった。固く目を閉じて、しばらく気持ち悪さに耐えた。赤や緑の明滅するまぶたの裏の黒い視界に、彼女の透明な笑顔のまぼろしを見た。あの気味が悪い汚泥に包まれた彼女ではなく、写真の彼女の笑顔だ。透き通っていることは美しい。コンビニで彼女の中からあふれ出していたあのヘドロは、ひどく醜悪で、不透明だった。僕は、彼女の透き通って乾いているところが好きだった。あの軽さは、他の人間にはない彼女だけのものだ。それなのに、彼女は他の人間と同じ、汚泥にまみれて汗気をたっぷり吸いこんだ、重く臭いものに成り下がってしまっていた。ああ見えたのは僕の嫉妬が原因なのだろうか。不衛生で奇怪なヘドロに包まれているのは彼女ではなく、実は嫉妬で濁った僕の目玉のほうなのかもしれない。世の中の間人間全てが腐って見えるのは、僕の目玉が腐っているからなのか。カビの生えた網膜が、世界のすべてを汚して映してしまっているのかもしれない。だとしたら……たまったものではない。乾きが欲しくてたまらないのに、湿気がかびてしまった目玉なんて持っていたら、何が乾いていて何が湿

っているのかわからなくなってしまうではないか。

はっと起き上がって、机の前の椅子に座った。乱暴に引き出しを開けて、彼女と二人で撮った写真を全部ひつつかんだ。一枚、また一枚、彼女の顔を凝視する。これも透明、これも透明……。そうやって全部を確認してみたが、結局写真の中の彼女がヘドロを吐き出していることはなかった。どの写真にも、透き通った笑顔を僕に向けてくる彼女がいた。僕の目玉が錆びてかびて使い物にならなくなってしまうわけではないらしい。やはり、変わってしまったのは彼女だった。

ふ、となみだが一粒、右目からこぼれ落ちた。小さな羽虫が目尻から羽化して、そこから頬を下って顎に歩いていく、ちくちくしたくすぐったい感覚が走った。気味が悪い。僕はすぐにティッシュを一枚取って、羽虫を拭き取った。汚い。すぐに、今度は左目から次の羽虫が湧いて出て、また顎へと這っていった。羽化は留まることを知らず、次から次へと新たな羽虫が出てきて、次から次へと顎へと這っていき、次から次へと顎の先から飛んで行った。さながら蟻がエサを求めて行列を成すように、羽虫たちは列をつくって行進した。僕は嗚咽した。何が僕を泣かせているのかわからなかった。この羽虫たちは何だ。気持ち悪い。僕がどれだけ嫌悪したところで、止まらない。僕にできたのは、ただうつむいて、嗚咽して、写真の彼女に羽虫の雨を降らせることだけだった。

僕は、また部屋を飛び出した。今度は写真の束を握りしめて。あの夜と変わらず、むっとする重たい空気が辺りを取り巻いていて、ぬるい風がそれをかき混ぜてはどこかへ飛び去って行った。夜空もあの時と変わらない、ムラにまみれた夜色だった。月も中途半端に欠けて、雲の向こうで薄く光っていた。街灯ではまた狂った蛾による舞踏会が開かれているらしく、どいつもこいつも狂喜乱舞しては街灯にぶつかって墜落していった。僕はそれを横目に通り過ぎた。信号機が「またおまえかよ」と言わんばかりに顔を真っ赤にして僕を見下ろしていた。やっぱり車なんて通らない時間帯だったから、彼の顔芸にはやっぱり意味がなかった。僕は彼を無視して横断歩道を渡った。渡る途中、無視されて彼はよりいっそう顔を赤くしたように見えた。足早に細い道に入った。今日も草いきれで煙たいほどだった。名前も知らない虫が、小さくそこらで鳴いている。

やがて、またあの黒い堤防にたどり着いた。堤防に沿って歩いていくと、監視者がオレンジ色の眼光で僕を照らした。僕は気に留めず、どんどん歩いていく。そんな僕にうろたえることもなく、監視者は僕が過ぎ去ってからも見つめ続けているようで、肩甲骨の間に負け惜しみのような鈍い熱を感じた。堤防を割る絞首台の階段が見えてくる。また来たのか、さあ上れ。無言でそう語りかけてくる階段。彼を踏みしだいて、僕は軽やかに階段を駆け上った。階段が僕の足の下でため息をつくのが聞こえた。

階段を登りきると、潮風がたつぷりとよだれで濡れた舌で僕を舐めまわした。僕はすぐに砂浜に跳び降りた。また、サンダルの間から砂が入り込んできたけれど、僕は無視して、ずんずん歩いた。波打ち際には、あの旗が、変わらず潮風になびいていた。ふふ、と僕は微笑んで、波に濡れない程度のところにしゃがみこんだ。握りしめた写真の束から、一枚を抜き出した。残った写真をジャージの右のポケットにねじこんで、今度は左のポケットに手を突っ込み、ライターを取り出した。

すると、風が止んだ。

僕は火打石を回した。あの夜と違い、風がないので一度で灯った。僕はほのかに揺れるオレンジ色の炎に、写真を近づけた。ぼ、とすぐに写真に火がつき、焦げて黒く醜くちぢれながら、炎に包まれていった。しばらく僕は写真の隅をつまんでそれを眺めていたけれど、炎が指を舐めそうになったので、すぐに離れた。ぼとり、と落ちた写真に写っていた彼女が、オレンジ色に包まれて、黒くゆがみ、不透明な燃えかすになっていった。僕はその炎が燃え尽きてしまう前に、ポケットの写真の束を取り出して、その上にバラバラと放った。炎はゆっくりと燃え移っていった。僕はタバコを一本口にくわえて、目いっぱいかんで、写真の炎で火をつけた。ゆっくり大きく息を吸い込んで、煙を肺に取り込んだ。細く長い息で、それをゆっくり吐き出すと、ヤニの心地よい苦みが口の中に広がった。やたらうまかった。僕は体操座りして、夜空を眺めながらタバコを楽しんだ。ちらりと写真

に目をやると、もうどれも燃えつきかけていて、ほとんど黒い灰になってしまっていた。透明で美しい彼女も、馬鹿みたいに笑っている僕も、みんな黒い灰になってしまった。僕は微笑んで、夜空に目を戻す。風が戻ってきた。灰が風にさらわれて、どこかへ飛んでいった。月にかかっていた雲がゆったりと流れていき、明るい月光が僕を照らした。

終

あとがき

初めましてです。書き方わからんです。つらい。

実体験から書こうと思ったので物語性は考えてません。なんとなく終わるのはなんとなく終わったことが元になっているからです。これは言い訳です。ごめんなさい。

○執筆中お世話になったアルバムたち

「Loveless」 My Bloody Valentine

「ベートーベンが好き。特に詞が良い。」 Veni Vidi Vicious

「T.I.N.T.L.A.」 Veni Vidi Vicious

「YOU」 ART-SCHOOL

「JUNKLIFE」 長澤知之

「The Velvet Underground & Nico」 The Velvet Underground

糸を紡ぐ浪漫伝

Wega am Spinnrade

「なあ、あんたは、短冊に何て書いたん？」クラスの七夕行事に使う笹に短冊の飾りつけをしながら、ミヤコは訊ねた。

「うち？」そう言って自分の顔を指差しながら、隣でキョウがからから笑う。「知りたい？」

溜息をつきながら、ミヤコが応える。「いや……、別にええ、どうせ、あんたもそのうち出てくるやろうし」

「またまたあ」ミヤコの頬をつんつんとつつきながら、キョウが言う。「そなん言うてえ、ほんまは、知りたいんやろ？」

「うっさい！ ほっぺたをこつくな！」ミヤコはキョウの手を払う。

「まあまあ、そないに照れなくてもええやん」キョウは払われた手を口元に当てると、にやにやししながら、「隠してても、うちには丸わかりよ」

「何を……」ミヤコは興味なさげにあしらう。

「何を……、って、あんた、さいぜんから、クラスの短冊を飾る振りして、うちのやつを見つけようとしてたやろ？」

「えっ？」ミヤコは驚いてキョウの顔を振り向く。「んな、まさか……」

「うふふ……、この、うちの千里眼は誤魔化せへんよ」キョウは、素早くミヤコの胸元に滑り込むと、顔を見上げながら、自分は得意げな顔で続ける。「第一、あんた自身、目当てのうちの短冊があまりに見つかれへんもんやさかい、痺れを切らして訊いて来たやないか？」

「あれは……、ほんの……、興味やて」キョウのまん丸の瞳から眼を逸らすようにして、ミヤコは応える。

「ほおん……、興味ねえ……」それでも、キョウは相変わらずのにやにや顔だ。

「何よ」

「別にい……」

「だいたい、うちがあんたん願いごとを知ったからって、何になるん？」ミヤコが反論する。

「そないなこと、簡単やないか。七夕の夜に好き同士のすることといたら……」

するとキョウは、両手を胸元で組み合わせると、急に芝居がかかった口調で、こう続けた。

「『ねえ、〇〇くん……、今夜は、そのう……、七夕ね？』

『そうだね……、××』

『ちょっと、訊きたいんだけど、〇〇くん。〇〇くんの願いごとって……、何？』

『俺？ そうだね、俺の願いごとは……、あ、そうだ！』

『何？』

『××も、今日、短冊を書いただろ？ なあ、それを、今、お互いに見せ合いっこしない？』

『え？』

『たま偶にはいいじゃないか、こういうときどきも……』

『うん』

『それじゃあ、「せえの」で、表にしようか？』

『じゃあ、せえの……』

ほいで、そこに書いてあった二人の願いごとってのは……、

……『いつまでも、一緒にいられますように』」

そして、キョウは両腕で躰を抱いて、ひとり身悶える。「くうう！ これぞ、『ロマン』ちゅう奴やな！」
「ロマンう？」ミヤコは、そう言って鼻で笑う。「まさか、あんたん口から、そないな言葉を聞くとは……」
「何や？ ミヤコかて、それを期待しとったんやろ？」

「阿呆か」

「ほう……」すると、キョウは、意味深な含み笑い。

ミヤコは首を傾げる。「何？」

キョウは、スカートのポケットに手を入れると、「ここに、一枚の短冊があるやろ？」右手の人差し指と中指で、黄色い短冊を^{つま}抓んで見せた。「どや？ 何て書いてあるか知りたいやろ？」

「まさか……」

「それが、キョウの短冊？」と訊き返そうとしたが、ミヤコは思い止まった。手玉に取られているように感じたからだ。

そんな彼女の様子を楽しむように、キョウは、短冊をひらひらさせながら、「自分の書いた願いごとと一緒にやったら、さぞかし、嬉しいやろなあ……、それこそ、甘酸っぱい青春の味……、まさに、ロマンや、ロマン」
「別に、うちは……、そのう、ロマンとか、全っ然、興味ないわ」前髪をいじりながらミヤコはそう応えただけで、眼はさりげなく紙の裏側を透かし見ようとしている。

「だあめ」それに気づいたキョウは、短冊をひょいと背後に隠す。「見たいなら、正直に言えばええのに」

「むう」

「あ、その反応、かわええ」

「う、うっさい！」ミヤコはキョウの額に手刀をお見舞いする。

「痛ッ」

「ま、まああ……？ そのう……、キョウが、そ・こ・ま・で言うんやったら……、やってもええけどな？」ミヤコは、頬を掻きながら、小声で呟いた。「別に、うちは、ロマンとか、興味ないけどな」

キョウは忍び笑いを漏らしながら、「わかっ取るわ」

「じゃあ、ちょい待ってて」そして、ミヤコは、背後の段ボール箱の中を探し出す。「えっと、うちの短冊は……」

「何や、やっぱり、のりのりやないか」キョウは肩を竦める。

「え？」ミヤコが振り向く。「何？」

「別に……」

「あ、そう……、えっと……、あった！」そう声を上げる彼女の手にはピンク色の短冊。笑みを隠すこともすっかり忘れて、ミヤコは言う。「さてと……、それじゃあ、まずは、あんたんから見してよ」

「あれ、同時やないの？」

「だって、そうしたら、何から何まで、ぜえんぶ、あんたん思い通りやないか」

「もう遅いやろ」と思ったけれど、キョウは心の中に閉まっておく。「まあ、ええけどな、うちは……」そう言ってキョウは、にやにやししながら、黄色い短冊を裏返しそのままミヤコに手渡す。「さ、何て書いてあるんやろな？」

「どれどれ……」ミヤコは固唾を呑んで、慎重にそれを裏返す。すると、「何！」

そこに書いてあったのは、

……『七月七日が、祝日になりますように』

「阿呆か！」ミヤコは叫んだ。「何や、これは！ よくもまあ、こないなこと書いて、『ロマン』なんて言えたなあ！ これは、『好き同士云々』以前の問題やで！ こないな願いごとに、ロマンの欠片もあるか！」

「まあまあ、落ち着いて……」キョウが言う。

「落ち着いとるわ！」ミヤコは声を荒らげる。

「どこが……」

「ははあん、なあるほどなあ」キョウを無視してミヤコが言う。「あんた、うちをハメようとしたんやろ？ ロマンや何や宣うて誑かしおって……」

「うーん」ミヤコの言い分は半分以上当たっているので反論する気もないが、ここまで見事に引っかかってくると、逆に反応に困るのも確かである。なので、「じゃあ、ミヤコのも見せてもらおか？ モノホンの『ロマン』ちゅうものを教えてくれるんやろ？」

「え？」

「ちよいと失礼」呆気にとられたミヤコの手から、キョウはするりと短冊をくすねる。

「あ……、ちょっと！」ミヤコは咄嗟に手を伸ばす。

「どれどれ……」それを躲しながら、ひょいと短冊を裏返す。キョウは思わず声を漏らした。「嘘、ホンマに？」

そこに書いてあったのは、

……『キョウと一緒にの大学に行けますように／ミヤコ』

「うふふ……、あんたも大概やないか！」笑いを堪えきれず、キョウは言った。「こんなん、すぐに叶うやないか！」

「え、ホンマに？」ミヤコは顔を赧めつつも、その言葉に反応する。「この前の模試、どやった？ ボーダは超えたんか？」

「あんなあ、ミヤコ。こういうんはなあ、妥協ちゅうもんが必要なんやで」キョウは自慢げに言う。

「はあ？」

「何や、そのう……、ミヤコがあともう一個くらい、ランクを落としてくれても……」

「阿呆」ミヤコはぴしゃりと言う。「誰がするか、そないなこと」

「頼む！」キョウは両眼を瞑り、両手を合わせて、懇願のポーズ。

「駄目」

キツイ口調と睨むような視線。両手を腰に当てて仁王立ちするミヤコの威圧。それに耐えきれず、キョウは片目をうっすら開けると、「どうしても？」

「だあめ」そして、悪戯っぽい顔でミヤコは続ける。「だって、その方が、ロマンがあるやろ？」

「あっ、くそう！ 一本取られたわ！」キョウは額をぺちと叩く。

「あ、言うとかけど、冗談やないから……」

「あはは……、勘弁して」

すると、キョウが突然声を上げた。

「あ、見て！」細い人差し指で夜空を指差すようにして、「流れ星！」

「え、ホンマに？」ミヤコも空を見上げる。

そこには、満点の星空、夏の大三角を縫うようにして、流れ星が墜ちてゆく。

「さ、願いごとや、願いごと……」キョウが呟く。「ほら、眼を瞑って……」

一瞬の沈黙。クラスのざわめきも彼女たちには聞こえない。

「なあ、キョウは、何てお願いしたんや？」ミヤコが不意に訊ねる。

「何や、懲りないんやな」キョウがからから笑う。「どうせ、教えへんけどな」

「まあな……、それも、ロマンやな」呟くミヤコは、眼の前の短冊を見つめている。

「そう……、ロマンね」キョウは、そんなミヤコを横目に見ながら肩を竦める。ポケットの中で、紙切れがかさりと音を立てた。「まあ……、頑張るわ」

二人の間に立つ竹に飾られているのは、ピンク色をした、二枚の短冊。

そこに書かれているのは……、

『キョウと一緒に大学に行けますように／ミヤコ』

『ミヤコと一緒に大学に行くぞおおっ！／キョウ』

「一、当然ではあるが、上杉謙信は殺された。

二、これまた当然であるが、その犯人は先ほど渡した登場人物表の中にいる。よって東村山刑事は犯人ではない。

三、またまた当然ではあるが、小寺警部は犯人ではない。一応主役だからね。

四、これは重要だ。犯人は一人。単独犯であり、共犯者はいない。また、犯人の犯行を知る者は、犯人以外には誰もいない。事後共犯や、精神的共犯というものなしだ。

……ああ、優しい私は四つもヒントを与えてしまった」

(ノスタルジア／麻耶雄嵩)

クリスマス・イヴ
聖なる夜。

降り頻る雪は闇を覆い、光は冷たさに顫える。

そして……、

最果ての静寂の中、破滅的な死が、彼らの許に忍び寄る。

午前零時の鐘が鳴った。

部屋の隅の壁に掛けられたアンティークの振り子時計が寂しげに刻を告げる。

テーブルには食べかけのショート・ケーキ。七面鳥。吹き消された蝋燭。床には散乱したクラッカの紙屑。部屋の隅ではクリスマス・ツリーの電飾がサイケデリックに明滅している。

そんな中で、織田信長は腕と足とを縄で縛られ、黒い革張りの椅子に、まるで磔のようにされていた。もごもごと、と口から洩れるのは抵抗の声。噛まされた猿轡が、無情にもその声を押し殺す。眼から大粒の涙を流しながら、必死の形相で顔を横に振り、殺人鬼の魔の手から少しでも逃れようと、織田は無駄な足掻きを見せる

。

「嫌だ、やめて……！」

恐らく、そんな言葉を言ったのだろうか、しかし、声は声にならず、ただ空しく虚空に消えてゆくのみ。

「ひっ……」

そして、殺人鬼・明智光秀は、左手に握った銃を、彼の左側頭部に突きつける。冷たい死の感触が、彼の軀を戦慄させる。明智の冷酷な二つの瞳が、織田を射抜くように、ぎらりと光った。織田はそこに視た。「殺意」、その邪悪な光を。

今、この状況に於いて、殺す者と殺される者、両者の差はあまりにも歴然すぎた。一方的な狩り、とすら呼べない、最早、残酷な儀式、或いは、残虐な拷問……、結局のところ、人間は平等などではないという象徴。悪魔はこの世に存在するのだ。

吹き込む死の風が、織田の項を撫でる。

「お前はこれから死ぬんだ、俺の手によって」

明智光秀の血走った声が織田の鼓膜を顫わせる。

「いやだ……」

織田信長は尚も抵抗を繰り返すが、彼の運命は既に決定されている。それは「死」。決して覆ることのない。死神が彼の許に忍び寄るのが、あとほんの少しだけ、早いか、遅いか……、ただそれだけの違い。

「助けてほしいか？」明智は囁く。

こくこく、と織田は何度も頷き返す。零れた涙の粒が、ぴたりと合わされた両膝に落ち、脚を伝って靴下を濡らす。

しかし、明智光秀は、

「駄目だ」

そう言ってにやりと嗤い、

引き鉄を一度だけ引いた。

炸裂音が密室に響く。

飛び散る血飛沫。

反動。

煙。

そして、静寂。

明智光秀の拳銃から発射された弾丸は、頭蓋を貫通し、延長線上の壁にめり込んだ。

彼はその一発で絶命した。

こめかみ

顛顛からは鮮血の滝が流れ出ている。それは、頬を伝い、顎の先から、ぽつぽつと、服に染みを作ってゆく。頸はだらりと垂れ下がり、かっと見開かれた眼は、恐怖に引き攣っている。その眼に生氣は既がない。黒く濁った瞳。死の色。虚無……。

そう、明智光秀は、いつの間にかこの部屋を脱出していた。

足跡一つさえ残さずに。

そして部屋には、死体を一つだけ遺して……。

駐在所に匿名の通報が入った。

『銃声が聞こえた。場所は……、』

「全く、世間じゃクリスマスだってのに、何だって俺は、こんなことをしてるんだ？」誰に言うでもなく、豊臣秀吉は呟いた。

通報を受けたのは彼だが、正直なところ、乗り気ではなかった。しかし、銃声が聞こえたという場所が場所だけに、現場に駆けつけざるを得なかった。奥で寝ている相方のために書置きを残してから、ミニパトに独り乗り込み、エンジンをかける。

そこは市街の一角にある、古びた美容室『本能寺』。彼にとっては、行きつけの店である以上に、ここへ訪れる理由がある。

「さて、」

豊臣はパトカーを向かいの道路に停めてから、店の入口へ近づく。吹雪のせいで、東京育ちの自分にとっては非常に歩きにくい。一応、形式として、周囲に足跡がないかを確認したが、やはり、自分の足跡以外、何もない。つまり、自分が最初にこの雪を踏む、ということだ。

ドアをノックする。眼の前の木札には〈閉店〉の文言。この時間なら当然だ。

「すみません、誰か居ますか？」

乱暴に戸を叩く。しかし応答はない。

「警察の者ですが……」

辺りを支配しているのは、どこまでも冷たい沈黙。

十秒、二十秒……、意地で待ってみるが、やはり反応はない。臆^{やが}て、どうしようもない空しさが募り、豊臣はドアノブを握った。がちゃがちゃと回し、押したり引いたりしてみたが、予想通り、びくともしない。

彼は舌打ちをし、すぐ横の窓を見遣った。しかし、黒いカーテンがかけられ、中の様子は観察出来ない。それならば、裏口はどうかと思い、足跡に注意しながら裏手へ回る。だが、薄々感じていたことだが、鍵が掛かっていた。窓の中も暗い。そしてもちろん、足跡もなかった。

不意に、唸るような音。冷たく鋭い風のせいだろうか、夜を切り裂くように甲高い音が微かに聞こえる。彼の、男にしては長い髪が靡^{なび}く。そのとき、俄^{にわ}かに豊臣の眼つきが変わった。

「仕方ない」

溜息を吐くと、ホルスタに手を伸ばして拳銃を手に取り、

「鍵を壊す」

最早意地の領域だ。逆上や激昂が彼の脳内を支配している。凶暴な人格は、彼の指を操作する。安全装置^{セイフティ}を外し、引き鉄に指を掛けさせた。そして、その、左の人差し指に力を入れる。……しかし、彼の中に残された冷静な人格が、すんでのところで思い止まった。

世の中にはこんなミステリ小説がある。……

『鍵を壊そうと拳銃を撃ったら、その弾丸が、まだ生きている被害者の心臓を貫いた』

馬鹿馬鹿しいが、全くあり得ない訳ではない。同様に、

『ドアを壊そうと体当たりをしたら、その衝撃で、壁に掛けられた斧が、まだ生きている被害者の頭の上に落ちた』

というものもある。万全を期すため、冷静な彼は、安全装置を元に戻し、窓に歩み寄ると、拳銃のグリップを叩きつけて窓を割った。手袋を嵌め、腕を中に差し入れて鍵を開ける。

そして彼は、店内に侵入した。よくよく考えると不法侵入だが、彼にとってはもうどうでもよかった。店内は明かりがすべて消され、真っ暗だった。彼は懐中電灯を点け、電灯のスイッチを探す。漸く探し当てると、店内が一気に明るくなる。

そして、闇の陰から現れ出でた者に、豊臣は思わず脳天を打たれたような気がした。

刑事は殺人事件に惹き寄せられる。それが仕事であり、宿命でもある。

……果たして今夜もそうであった。

死体発見の報せを受けて応援が駆けつけたとき、既に雪は止んでいた。雪は十二月二十四日午後十時ごろに降り始め、午前零時には止んでいた。大雪だったため、夜が明けても積もったままだった。吹雪の中を歩けば、たちまち足跡は消されてしまうだろう。しかし、彼らが到着した際、店の周囲に足跡は一組しか残されていなかった。なお、死体発見時、店中の扉や窓にはすべて鍵が掛けられており、ピッキングの跡もなかった。煙突や隠し通路のようなものも無論存在しない。

店内に入るとまず眼につくのは、真っ赤な死体。

血に濡れた男の死体が、革張りの黒い理容椅子に括りつけられていた。死因は明らかに、顛顛に開けられた孔が物語っている……、「銃殺」。彼の頭を貫いた弾丸は、すぐ横の壁から発見された。また、死の弾丸を発射した拳銃も、死体の傍・隣の椅子との間に落ちていた。口径も一致したため、これが凶器だと断定された（因みにスミス・アンド・ウエツソン S & W の三十八口径リヴォルヴァだった）。同時に弾丸は一発しか発射されなかったこともわかった。

後の検死の結果、死亡推定時刻は午前零時ごろ（誤差は前後三十分）と推定された。

死体の身元は同美容院の店員らが確認したが、親類の者は訪れなかった。戸籍を見ると、彼は天涯孤独だったようだ。

織田信長には婚約者が居た（と店員たちが証言した）が、現在連絡が取れていない。殺人の動機を追及するためにも、その他の交友関係も徹底的に洗うべきだろう。

しかし……、

店の周囲に足跡が一組しか残されていなかったこと、
店内の窓や扉にはすべて鍵が掛かっていたこと、
死体の左手から硝煙反応が検出されたこと、
拳銃から織田の指紋が検出されたこと、

以上の事実から、

「この事件は自殺である」と考えられる。

「これだけですか？」

私（如月椎奈）は訝しみながら訊ねた。

「当然だよ、君」

高天美月は不気味なほどの自信を覗かせる。しかし、迂闊に信用してよいものだろうか。彼女のひねくれた性格からして、オーソドックスな作品を創って読ませるとは思えないからだ。

「本当にこれだけなんですか？」

しつこく念を押す。それもそのはずで、素直に読めば犯人は明智光秀以外にはありえないからだ。

「仕方ないなあ、それじゃあヒントをあげるよ」

施しを恵むような哀れみの表情を湛えて、彼女は言った。

「一、当然ではあるが、彼は殺された。

二、これまた当然であるが、その犯人は先ほど渡した登場人物表の中にいる。よって豊臣刑事の相方は犯人ではない。

三、またまた当然ではあるが、豊臣刑事は犯人ではない。一応刑事だからね。

四、これは重要だ。犯人は一人。単独犯であり、共犯者は居ない。また、犯人の犯行を知る者は犯人以外には誰も居ない。事後共犯や、精神的共犯というものなしだ。加えて言うが、犯人は二重人格でした、とかいうくだらないオチでもない。

……ああ、優しい私は四つもヒントを与えてしまった」

わざ

態とらしく後悔の仕種を見せる。こういうのを臭い芝居というのだ。

「それだけですか？」

これはヒントではなく、この種の遊戯に必要な暗黙の前提を明言化しただけだ。何の参考にもなりはしない。

「ええ、これで論理的に解けるはずよ。もしもこれで解けなかったら、君は……、よほどのお馬鹿さんね」

しかし、よく考えてみると、あの高天美月がまともなヒントを言うはずがなかったのだ。すると、彼女に期待した私が馬鹿だったということか。

「では君の答を期待しているよ。殺人犯人の正体と密室の謎とを、極めて論理的に解いてみなさい。一時間だけ時間をあげるわ。まあ、」

高天美月はそう言って、

「結果は見えているけどね」

と小馬鹿にしたように嗤った。

〈真相編は文芸部ブログに続く〉

地に平和を 後編 (外衛眞希)

地に平和を 後編
外衛眞希

一機のヘリが雲間を縫い、国外派遣軍司令部に併設された離発着場に到着したのは午後三時ごろの事だった。総参謀部が急に送り込んできたヘリ部隊の指揮官機だった。

メインローターの回転が止まってから、山本はその機に近づく。それは汎用ヘリではなく、スマートなデザインと猛禽を思わせる武装の禍々しさが一体となった戦闘ヘリである。

キャノピーが開き、パイロットスーツに身を包んだ細身の人間が降りてくる。ヘルメットを取ると、軍規違反間違いなしのセミロングの黒髪があふれ出た。若々しい女性だった。長距離を飛んできたためか、疲れたげな顔をしている。

「第六二戦闘ヘリ大隊の、沙藤少佐でありますね？ 自分は司令部付の山本大尉であります。石井中佐の補佐を務めさせていただいております」

山本がそう言って敬礼すると、彼女は答礼しながら訊いてきた。掠れたようなアルトの声だった。

「中佐本人はどうした？」

「は、その……」

山本は迷った。果たしてペラペラと喋ってよいものだろうか。

石井中佐は拘束された、などと。

だが彼が結論を出す前に、その様子を見た沙藤は口を開いた。

「まあ無茶をしたんだな。アイツはまったく」

彼女はそう言って溜息をつき、山本の脇を通り過ぎる。

「どうせ手は打ってあるんだろう。大隊は移動命令を受けただけで、まだ派遣軍の指揮下には入っていない。司令官への挨拶は後にさせてもらうよ。喉が渇いてさ……」

そのまま彼女は併設された休憩所へ入っていった。

また面倒臭そうな人が来たものだ、と山本は肩を落とした。

彼が沙藤の出迎えに来たのは、それが石井の残した赤い封筒にあった指示の一つだったからだ。彼はもう一つ指示を受け、実行していた。今に大騒ぎになる。そんな予感が彼にはあった。

確信と言ってもいいかもしれない。



西村が自身の部隊に復帰したのは、西村支隊が敵の偵察隊をちょうど全滅させた時だった。偵察隊が全滅して情報を得られなかった以上、敵の進撃は鈍り、少しは時間を稼ぐことができるはずだった。

「お待ちしておりました。支隊長殿」

そう言って伊藤は、汎用ヘリから降り立った西村に敬礼した。

西村は少し決まり悪そうに答礼した。

「迷惑をかけたな」

「いえ、それはこちらの台詞です」

お互いに何を考えているかは分かっていたが、それ以上言葉を重ねはしなかった。先に片付けねばならない問題が山積みだったからだ。指揮所のテントに向かいつつ、西村は話を続ける。

「状況は？」

「司令部が停止命令を出したので、我が支隊は周辺の残敵を掃討しております。ただ、隣接する一木支隊は積極的に前進して敵と接触しているようです」

「余計な事を」

「は？」

「何でもない。しばらくは各隊そのままがいい。司令部から次の命令が出されたらそれに合わせよう。……ところで、大尉」

声を潜めて西村は訊く。

「この停止命令、どう思う？」

「意味不明です」

伊藤はハッキリと言いきった。

「司令部内に意志の不統一があると思えません」

「同感だな」

そう言って指揮所に入ると、幕僚たちが慌ただしく動いていた。それは単なる忙しさだけではないようだった。

「どうした？」

西村が話しかけると、幕僚の一人が敬礼しつつ言った。

「隣接する一木支隊が敵の待ち伏せを受けて被害を蒙り、現在後退中とのことです。これに合わせて、西村支隊は一木支隊と合流せよ、と司令部が」

面倒事が増えそうだ、と西村は暗い気分になった。



自室軟禁されていた石井が司令官室に呼び出されたのは、沙藤が到着した数時間後だった。

「まさかこんなすぐ事態が動くとは思っておりませんでした」

石井を迎えに来た山本は、司令官室に向かう道中にそう言った。石井はそっけない態度で答える。

「大尉、君が私の言った通りにしてくれたからだよ」

「あの赤い封筒ですか」

石井は首肯だけをした。山本は感心したように言う。

「まるで魔法ですな」

「種も仕掛けも丸見えだがね」

着任の時となんら変わらないその部屋には、派遣軍参謀長の大佐だけが苦りきった顔をして待っていた。派遣前は総参謀部で石井の上官だった男だ。彼は石井を一目見て、睨みつけるように笑った。

「君は変わらないね。やり方が強引だ」

「褒め言葉として受け取っておきます」

参謀長は鼻を鳴らして応じた。

「総参謀部から、君の扱いについての命令が届いたよ。こちらからの問い合わせを無視する形でね」

そう言って彼は石井に一枚のファックス用紙を差し出した。

「君を総参謀長の名代にすることだ。これで君の声は、総参謀長の声と同義だ。立場だけで見れば司令官よりも上だよ」

「その司令官閣下は？」

「へそを曲げたよ。君とは会いたくないとき」

参謀長は疲れたように笑う。

「だがどうせ君には問題なからう？ いざとなれば総参謀部名義で命令を振りかざせばよいのだから」

「私が直接命じては指揮権の干犯になりますので」

「どうせ実情は変わらんじゃないか。君に逆らう奴などいないよ……それじゃあ君は、`F計画、を実施するのだね？」

石井は答えない。そのようなものは存在しない、ということになっているからだ。参謀長も答えなど期待はしていなかった。

「まあいい。石井中佐、君の拘束を解く。参謀たちを別室に集めている。ついてきたまえ」

会議室には各専門分野の責任者がすでに着席していた。参謀長が入ると同時に立ち上がる。そのまま参謀長と石井は上座に座った。司令官は相変わらずいない。

「これより総参謀長名代より今後の方針について説明する」

参謀長の声に促されて石井は再び立ち上がり、壁面に張り付けられた自由民主国の地図を背にした。

「総参謀部からの命令を伝達する」

彼女は念押しをするようにそう言い、それから説明に入る。

「我が軍は以後、本事態の`最終的妥結、を達成するため、敵を誘引し、防御戦闘を実施する。主防御線は……」

彼女は拡大された安全地帯の中の、北部湿地帯、中部資源地帯、それから南部の河川で結ばれる一線を指で示した。

「このライン。派遣軍の全力を挙げて、可能な限りこの中の地帯を確保し続ける。なお空軍は敵航空戦力に対する制空戦闘に注力し、地上支援等を行わない」

参謀の一人から手が上がる。石井は首肯して発言を促した。

「なぜ空軍を用いないのですか。先日から隣国の駐留空軍部隊は続々増強されております。戦力が遊兵になってしまいます」

石井はその意見に淡々と答える。

「敵地上部隊を攻撃しては敵の防空戦力が増強される恐れがある。それでは困る」

「航空戦力を用いて何らかの攻撃に出るのですか」

石井はそれには答えず、他に質問は、と聞いた。

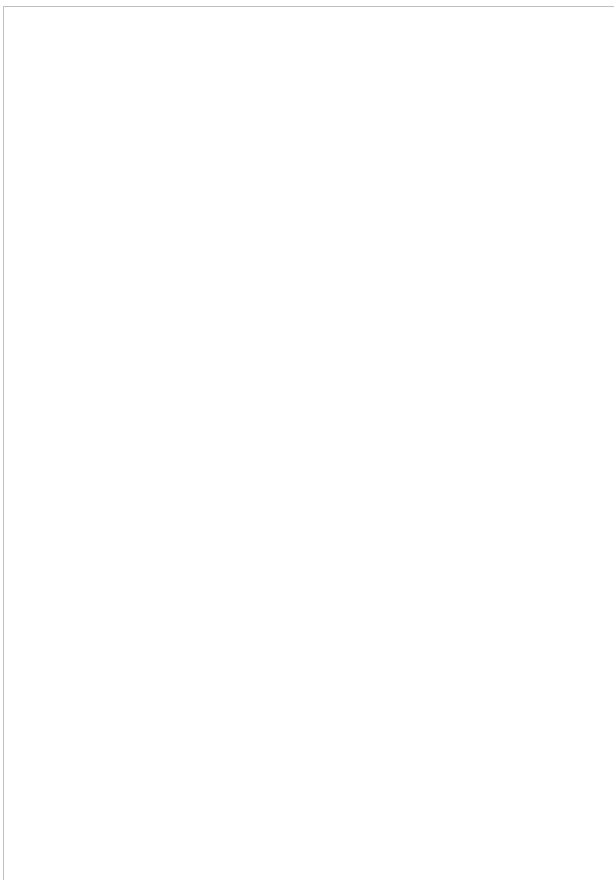
「期間はどれほどでしょうか」

その声に、石井は少し考え込んでから答える。

「最短でも、七十二時間。総参謀部の予想では、百時間以内の事態收拾を見積もっている」

それが最後の質問だった。参謀たちはひとまず何をすればいいか、ある程度理解できたらしい。石井は場を閉めた。

「では、解散」



「一木中佐は戦死、か。だが部隊の戦闘能力を失っているわけではないな」

取り付けられたドーザーで壕を掘る、一木支隊の戦車を見て、西村はそう呟いた。

北部湿地帯の、戦車が通行できる唯一の隘路の安全地帯側の出口を抑えられる要所で、西村支隊は一木支隊と合流した。それは小さな街で、街の入口から出口が見えた。住民はいない。皆逃げ出したか、殺されたからだ。

合流してすぐ、彼らは接近してくる敵に対しての防衛準備を始めていた。猶予は半日あるかないか。その間に塹壕を掘り、地雷を埋める。一通り指示を出しただけで、西村支隊はもちろん、一木支隊の各級指揮官も問題なく作業を進めていた。それだけの能力は備えていた。

なのに、不意打ちを受けたわけだ。

そう思って西村は苦い気分になった。指揮がいい加減では、どんなに下が優れていても意味がない。その極端すぎるほどの例だった。

「支隊長殿、迫撃砲中隊が試射をしますが、よろしいですか」

伊藤大尉が西村の傍らに来てそう聞く。彼女は口を開かず首肯する。伊藤はそれを見て、控えていた部下を連絡に行かせた。彼はそのまま立ち去ることなく、つぶやくように言った。

「……敵の戦車は百両以上、こちらの戦車は一木支隊を合わせても三十両以下。しかも敵には重砲もある。いったいどうやって敵を叩き返しますか」

西村は静かに答える。

「機動戦でアウトレンジ。これならこちらの戦車の性能、特に火力を最大限生かせる」

「アウトレンジとなると、肉薄されたら下がらねばなりません」

伊藤はそう言って、暗に防御線を維持できなくなる恐れがあると示した。だが西村は表情一つ変えずに答える

「だから、戦車は防御線よりも前に出す。その上で敵先鋒を叩いて時間を稼ぐ。我が部隊ならそれぐらいはでき

るだろう」

「しかし、食いつかれると面倒です」

「だから、私が陣頭に立って直接指揮を執る。ちょうど一木支隊で車長が負傷した戦車がある。休ませるわけにもいかない」

「……危険です。支隊長殿には指揮所にて全体の指揮を執ってもらわなければ。軍隊の大原則です」

「大丈夫だ。コンピュータネットワークで状況はわかる。それに、絶対に防衛線を破られるわけにはいかない。……我々の後ろには、何万という難民が控えている」

そう言って、西村は険しい表情になった。



「西村支隊は一木支隊残余と合流しました。湿地帯に挟まれた交通の要地で、迂回路もありません。……正面からの殴り合いになりますね」

日の傾いた頃。石井の執務室で山本がそう言うと、石井は手をひらひらさせながら返した。その間も目をディスプレイから離さない。彼女は少し疲れたげに頬杖を突き、ネクタイを緩めて軍服のジャケットも開け放して、だいぶらフな姿をしていた。それが彼女の、本気の仕事スタイルだった。

「彼女なら大丈夫だ。心配はしていない。他は？」

「はっ、総参謀部から送られてきた事前計画に基づいて砲兵を配分しました。既に陣地構築に入っているはずですよ」

それから彼は恐る恐るといった風に訊く。

「西村支隊には配分がありませんが、連中の手持ちだけで大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。彼女ならね」

「相当信用していますね」

「いいや、絶対的な信頼だよ。彼女はそれだけのことができる」

そこまで言って、彼女はまた黙り込んだ。そのまましばらく所在無げにディスプレイを見つめていたが、やがて突然目を見開いた。山本も何事かと思い、書類を処理していた手を止める。

「動いた」

石井はそう一言だけつぶやいて、電話をつかんだ。相手は隣国に駐留する空軍部隊の司令部だった。

「……もしもし、総参謀部作戦課の石井中佐であります。作戦指示が出ましたので口頭でお伝えします。確認符丁、丙丁〇九八八六三七四。……状況〇三の枝番八です。開封符丁、甲甲丙六八六七三三七六。以上です」

作戦指示ね、と山本は思う。要するに石井中佐個人の決断ということだな。この人はどこまで仕組んだのだろう。そこまで考えて、山本は背筋が寒くなった。

石井の電話はその一回ではなかった。次から次へと電話をかける。その相手の大半が航空部隊だった。最後に彼女は衛星電話に手をかける。繋がる先は首都、総参謀部だった。

「ああ、本庄大尉か。私だ。皆元気にしてるか？ ……そうだ、はじめのぞ。そちらの手回しを頼む。巡航ミサイルはこっちからじゃ、どうにもならないからな。開始はこちらのタイミングで。ああ、それじゃあ」

そう言って電話を切った石井に、山本は驚きの目を向けていた。石井はそれに気づき、小首をかしげて発言を促した。

「巡航ミサイルを使用されるおつもりですか」

山本の疑問に、石井はそんな事か言わんばかりに軽く答える。

「巡航ミサイルで敵の指揮系統を寸断し、その上で空軍を投入して、敵空軍を抑え込み、かつ防空システムを破壊する」

「しかし、巡航ミサイルは議会の許可が必要な戦略兵器です」

「平時は、ね」

そう言って石井は不敵に笑った。

「終戦から五年経つ。だが未だに戦時特別法の効力は失われていない。特別法で、通常弾頭の巡航ミサイルは例外扱いだ。……それでも総参謀部直轄部隊だから、ここから直接指揮はできない。だから向こうに頼んだ。隣国にはすでに地上発射タイプが五十発ほど準備されている」

「地上発射タイプ、ですか。爆撃機からの空中発射ではなく？」

「戦時特別法がなぜ廃止されないか、分かるか？」

教師が問題を出すかのように石井は訊いた。

「……共和国」

そう答えながら山本は内心毒づく。共和国、共和国。どこをつついてもこれが出てくる。自由民主国なんて、まるで最初からなかったかのようだ。

石井は山本の答えに首肯し、続ける。

「戦略爆撃機を飛ばせば共和国を嫌でも刺激する。余計な政治問題を起こして、計画が無に帰すのは避けたい。そうなったら、本当の泥沼だ」

「計画、ですか……。泥沼にならずに済むのですか？」

「底無しには、ならないと思う」

そこまで言ったところで、部屋の扉がノックされた。力強く二回。それから、少し高めの女の声がした。

「沙藤少佐、入ります」

姿を現したのは、ヘリ用ヘルメットを抱え、パイロットスーツに身を包んだ沙藤だった。不敵な笑みを湛え、踵を打ち付けて石井に向かって敬礼する。

「戦闘ヘリ大隊はこれより出撃します。……で、いいんだよね」

石井は呆れたような顔で応じた。

「誰が出撃命令なんて出した」

「空軍が出撃準備中っていうから、そろそろかと思って」

「……まあ、いいけどさ。命令書、今出すよ」

そう言って石井は机から一枚の紙を取り出す。

「どうせ、やることはわかってるんでしょ？」

石井の言葉に、沙藤は命令書を受け取りながら軽く頷いた。

「じゃ、気を付けて」

「行ってきます」

それはまるでピクニックに行くかのような気軽さだった。



夜の帳が下り、星々が微かな慈悲を哀れな地に振りまく。しかしその中でも最も哀れな生き物たちは、その慈悲を血に染めようとしている。

『こちら観測車。敵部隊確認した。こちらへ向かってくる。戦車、大隊規模以上。ほか装甲車両多数』

その報告を聞いて、西村は全車両に指示を出す。彼女は戦闘服ではなく、戦車兵ジャケットを着用していた。つなぎ状のそれは、死体として引っ張り出されることを考慮したものだった。

「観測車後退せよ。全車エンジン一斉始動。三、二、一、始動」

街から十キロほど手前の位置で待機していた、二個中隊二十八両の戦車に火が入る。ディーゼルの唸りを上げ

つつ、電源を入れた暗視モニターを西村は覗く。地平線を埋めるように、白く熱源が映し出されていた。拡大して、かろうじて車両であると判別できた。

「各隊、これより敵と交戦する。突破を許すな。距離四千で射撃開始。班単位で後退しつつ射撃を行う。射撃用意。終わり」

それから、エンジンの振動と轟音の中で、永遠にも思える時間が過ぎる。レーザー測距儀は黙々とカウントを刻む。ネットワークを通じて各隊に目標の割り当ては済んでいる。

距離四千二百。

「撃ち方用意。指定の目標、弾種徹甲、班集中正面射……」

距離四千。

「撃て！」

西村が叫ぶと同時に砲手がトリガーを引く。ヘルメットの耳あてを通してもお鼓膜を聳する轟音。さらに衝撃が五十トン近い巨体を揺らす。それと引き換えに砲口から勢いよく飛び出た一二五ミリ

APFSDS

装弾筒付翼安定徹甲弾は、飛び出すと同時に砲弾を覆っていた装弾筒が分離して矢のような細い弾体を露わにし、毎秒千七百メートルのスピードで空間を切り裂く。

西村は暗視装置を覗き続ける。数秒後、画面内でほのかに光って見えた敵の戦車が、装置の光量限界まで眩い光の球と化した。それは一瞬で消え、後には炎上する車体が残された。砲塔はどこかへ吹き飛んだらしい。装置から目を離し、キューポラから肉眼で外を見ると地平線に沿っていくつかの光が見えた。

「幸先はよさそうだ」

彼女がそう呟くと同時に次々に撃破報告が入る。そして敵の動きも変わった。

『敵戦車増速。突っ込んできます！』

「各隊、適宜移動しつつ射撃せよ」

機動戦こそ騎兵の本領。馬こそ鋼鉄の怪物に取って代わられたものの、彼女はその伝統ある兵科名の通りの戦いをしようとしていた。



戦端が開かれたのは西村支隊ではなかった。連邦帝国軍のほぼすべての戦線で敵と接触していた。石井はその様子を映したディスプレイをじっと見つめている。彼女の両脇には次から次へと届く書類やら報告書やらで山ができていた。部屋の隅のファクシミリは延々と紙を吐き出し続け、石井はそれを切り取らずに自らの膝上まで引っ張って、時折目を落としていた。

軟禁を解かれてから、現在に至るまで一度も休憩していない彼女の表情には、隠しきれない疲労の色が見えている。

私用で部屋を離れていた山本が戻り、映し出された戦況を見て口を開く。

「敵の攻撃が一番激しいのは、西村支隊ですな」

山本が話題を振ると、石井は目を向けずに応じる。

「あいつのところには一個師団丸々投入されているからだろう。しかも隘路だから戦略上重要でもあるし、迂回ができないから正面からの衝突になる。小細工のしようがないから、数で押せると踏んだんだろう。予想通りだ」

「予想通り、ですか」

「ただ、いまいち動きが鈍い」

ぼやく様に石井はそういった。

「敵の先鋒のですか？ そうは思えませんが」

「違う」

少し苛立ったように彼女は言った。自分でもそのことを自覚したのか、一呼吸おいてから言葉が続ける。

「親衛軍だ。もっと素早く動くものと思っていた。少なくとも、共和国軍であればもう戦場にだいぶ近づいているはずだ」

「その共和国の軍事顧問団が教育していたはずですがね。まあ自由民主軍はそれこそ建軍してからまだ五年ですから」

「正規軍同士の戦闘よりも、治安戦を重点に置いて教育していたのかもしれないな」

石井は皮肉たっぷりにそう言った。治安戦は住民との関係を良好に保つことが重要となる。それが今では虐殺の主役だった。

山本はそれには答えずに、一番気になっていたことを聞く。

「……中佐殿は、何を待っておられるのですか」

「機、というやつだよ」



「全車、全速後退！」

その号令をかけると同時に、西村の体に強烈なGがかかった。

砲兵レーダーが、敵の重砲の砲弾を探知したという報告を受け、西村は戦車部隊を下がらせた。いくら戦車が強靱とはいえ、上面は装甲が薄く、重砲弾が直撃すれば撃破されかねない。

彼女がちらりと時計を見ると、戦闘が始まってからすでに二時間以上経過していた。三度の、統制の全く取れていない突撃を跳ね返し、二度の猛烈な砲撃を何とかかわした。敵の突撃の間隔は回を重ねるたびに開いている。敵も相当消耗していることは明らかだった。

西村は敵の砲撃が明後日の方向に落ちているのを確認し、ハッチを開けて頭を出した。顔に微かな熱気が当たると。

熱気の方角を見ると、撃破した敵の戦車や装甲車が炎上してその骸を煌々と晒していた。何十両と破壊され、地平を埋め、空を焦がしている。辺りは昼のように明るかった。それは間違いなく、西村の指揮の的確さを示していた。

だが、同時に彼女は焦りも抱いていた。ただ下がって撃ち続けるだけでは決定打にはなりえない。流れを変える必要があると感じていた。

「支隊長より予備隊へ。機械化歩兵中隊は直ちに合流。次の敵の突撃を撃退したら、そのタイミングでこちらから肉薄、追撃をかける」



隣国の国際空港に駐留する空軍部隊の司令部作戦室では、幕僚たちが黙々と煙草を消費していた。おかげで作戦室は煙たいことこの上なく、壁面の巨大なモニターは霞んで見えた。なかなか出ないGOサインに、幕僚も、その様子を嫌でも目に入れるオペレーターたちも、誰もが苛立っていた。

「いつまでパイロットを待たせりゃいいんだ」

吸い殻の山に新たな一本をねじ込みながら、幕僚の一人が呟いた。それに対し誰も口を開かず、数人が呻いて応えた。部屋の中央に座る司令官は、ただじっと目を閉じていた。

その時だった。司令官の目の前に置かれた電話のベルが鳴る。

「……もしもし。うむ、うむ、了解した」

そうとだけ言って、彼は受話器を置いた。幕僚の誰もが、固唾を飲んで見守る。

「……作戦開始だ。全機発進」

司令官はその一言だけを口にした。それで十分だった。



敵の四度目の突撃は、三度目の突撃が失敗した一時間半後に、執拗な準備砲撃ののち開始された。西村の眼には、戦車よりも装甲車のほうが多いように見受けられた。敵の連携は稚拙で、遮蔽物も使わずにただ突進してくるばかりだった。

西村は敢えて直率する戦車部隊を下げず、敵との距離が近づくようにした。やがて距離が二千を切る。ますます砲火の応酬は激しくなる。戦車砲や対戦車ミサイルだけでなく、機関砲弾や小銃弾まで所狭しと飛び交った。西村の乗る戦車も集中砲火を浴び、弾の軽重を問わず何発も命中する。だが撃破はされない。一方で西村の戦車が砲を放つたびに、敵は引き裂かれ、弾け、炎上した。そしてついに、敵は煙幕を張って四度目の後退を始める。

彼女はその瞬間を見逃さなかった。

「全車、集合整列！」

その言葉が発されるとともにそれまで各個に機動していた戦車が、一斉に敵を向き、筒先を揃える。

「目標、正面の敵！ 襲撃！」

襲撃。連邦帝国軍においてそれは、歩兵であれば突撃を意味する用語だった。騎兵が馬に乗った時代から続く号令。抜くべきサーベルは戦車砲であり、その刃は徹甲弾へと移り変わっても、彼女らは確かに騎兵の末裔だった。

西村は一息吸い、叫ぶ。

「襲え！」

その号令一下、一斉にエンジンが唸りを上げる。鉄の重騎兵が殺戮と破壊を撒き散らしながら、猛然と突進を始めた。その後方からは、対戦車ミサイルで支援をしていた機械化歩兵中隊が続き、機関砲を乱射する。

煙幕を突き抜け、敵との距離がみるみる縮まる。敵の旧式戦車より、連邦帝国軍の戦車の方が前進も後進も速い。距離を詰めれば、敵の砲兵は撃てなくなる。

「二時、装甲車、撃て！」

西村の指示に間髪入れず砲手は反応する。轟音。命中、炎上。

「命中！ 次、十一時、戦車、撃て！」

敵は見事に食いちぎられつつあった。



それは上から見ると、菱形の下の角が欠けたような、飛行機概念からかけ離れた漆黒の姿。連邦帝国空軍が誇るステルス爆撃機は、闇の中を敵地深く進攻していた。

場所は自由民主国首都、上空一万メートル。操縦する少佐の任務は、自由民主国参謀本部地下に設置された、指揮センターの破壊だった。酸素マスクに呼吸音が響く。街の灯りが煌々と彼の目を楽しませる。世界は静寂に包まれていた。レーダーも、対空砲火も、何もない。

彼は最終爆撃航程に入り、爆弾倉を開いた。そこに詰められていたのは、二トンの炸薬が詰められたバンカー・バスター
地中貫通爆弾。投下した後はGPSで誘導され、地面であれば三十メートル、コンクリートであれば七メートル

ルの厚さを貫通、内部から破壊できる。彼が搭載していた爆弾の先端に、白いペンキで「くたばれ！」と少佐自身が書いたのは、整備員たちの公然の秘密だった。

投下までの時間がカウントされる。五、四、三、二、一。あらかじめ設定していた通り、自動で爆弾が投下される。

三分後。自由民主軍の全部隊は、中央からの情報を得られず、孤立することとなる。ほぼ同時刻、隣国から発射された巡航ミサイルは次々と戦略目標に着弾した。司令部、通信センター、発電所。さらに追い打ちをかけるように防空網制圧任務を負った空軍機が次々にレーダー施設や対空ミサイルを破壊していった。彼らは五年前も、王国軍相手に同様の活躍をしていた。



「次、三時、敵戦車、撃て！」

西村がそう叫ぶと、すぐさま砲が放たれた。しかし狙っていた敵戦車は残骸に身を隠し、見事に避けた。相当な手練れが敵にもいたらしい。

「外れ！ もう一度！」

そう言われて砲手もよく狙おうとするが、ちょっと頭を出してはすぐ隠れる、という小刻みな機動に手を焼いた。

ちょこまか動きやがって。

「敵戦車に向け全速、突進！」

エンジンの咆哮とともに鋼の軍馬は一気に駆ける。みるみるうちに敵までの距離が詰まる。千、八百、六百、四百。

あともう少し。西村がそう思ったとき、敵戦車が再び顔を覗かせた。その砲は真っ直ぐに西村に向けられている。

先手を取られた。舌打ちしながら西村が身構えると同時に、撃たれた衝撃が彼女を跳ね飛ばそうとする。だが、それだけだった。前面装甲に弾かれ、被害は無い。両腕で何とかこらえた西村は間髪入れずに叫ぶ。

「止まれ、撃て！」

再び衝撃に襲われ、額を叩き付けそうなほど前のめりになる。彼女だけではなく、戦車そのものが急ブレーキでつんのめっていた。だがその砲だけはスタビライザーのおかげでしっかりと敵を捉えている。同時に発砲。弾が当たるまでに一秒もかからない。西村は散々に揺さぶられながらも目を離すことはなく、厄介な敵がハッチというハッチから火を噴く様を見届けた。

「次、目標……」

彼女はすかさず次の敵を探し求めたが、得られなかった。周り中が鉄くずと炎と死体で埋め尽くされていた。

「各隊、状況を報告しろ」

半分気の抜けたような声で問いかけると、次々と応答が返ってきた。損傷車両はあったが、破壊されたものは皆無だった。敵は僅かな生き残りが全速力で逃走している。

完勝だった。

「全車、残敵を掃討しつつ後退。体勢を立て直す」

西村はすぐに頭を切り替えて、次の事態を考えていた。機甲戦力に大打撃を受けた敵は、歩兵主体の強攻に出るだろうか。いや、それよりも後詰の親衛軍を待つかもしれない。そうなれば、次はもっとずっと厳しい戦いになる。西村は思わず顔をしかめた。だが、彼女が予想した未来はやってこなかった。



主役は遅れてやってくるもんだよな。

内心の高揚を抑えつつ、沙藤は戦闘ヘリを極低空で飛行させていた。装備されているのは対戦車ミサイル八発とロケット弾、それから機関砲。後ろに続く部下たちも同様だった。戦闘ヘリだけで三十機近い。さらに偵察ヘリが敵影を探し求めている。

事前情報の通りならそろそろか。沙藤がそう思った時、ネットワークを通じて偵察ヘリから情報が入る。敵の親衛軍だった。

「各機、まずは敵の対空兵器を潰す。それから食事といこう」

沙藤はそう言ってヘリのスピードを落とす。それからゆっくりと上昇して、照準用望遠カメラで敵の対空兵器を探す。探し求めているものはすぐに見つかった。対空ミサイルと対空機関砲。戦車部隊に追従できるように自走式だった。部下に標的を割り当てつつ、自身も手際よく照準する。

「発射！」

その声で十機以上のヘリから一斉に対戦車ミサイルが放たれる。画面に映し出された敵と一緒に、やがてミサイルの姿も映る。それから敵が爆発するまで時間は大してかからなかった。同時に攻撃に気付いた敵は次々に煙幕を張り始め、センサー欺瞞用の赤外線フレアや電波攪乱用のチャフを発射する。

だが、沙藤のヘリのセンサーはそれを易々と看破した。次々にミサイルを発射し、混乱する敵を撃破していく。ミサイルが切れたのちは接近してロケット弾をばら撒き、高速で擦過しながら機関砲を撃つつもりだった。それで目の前の敵はほぼ全滅させられるだろう。

思ったより簡単な仕事だったな。沙藤はそう思った。



石井は、ディスプレイに映し出される戦闘の様子を無感動に見つめていた。西村支隊は敵を撃退し、敵の空軍と親衛軍は航空戦力に散々に叩かれている。

この調子で一週間も戦争すれば、自由民主軍は消滅するな。山本はそう思ったが、そうはならないだろうとも思った。画面上に新たなパズルピースが現れたからだった。共和国軍。彼らは連邦帝国とは反対側から自由民主国領内に入る構えを見せていた。

「まだ攻撃を続けるんですか」

山本の問いに石井は答えない。すっかり疲れたような顔をして、眉間を押さえている。神経をささくれ立たせる様に電話が鳴る。溜息一つついて石井は電話を取る。

「はい。……ええ、ええ、まだ攻撃を続けてください」

それだけ無愛想に言って電話を切る。山本はとりあえず自分の問いの答えが出たことを良しとして、手元の書類に目を落とした。その時だった。何か堅く、脆いものがぶつかる音がした。山本が驚いて顔を上げると、石井が机に倒れこんでいた。

「中佐殿！」

慌てて山本が駆け寄り、抱き起そうとするが、女性を抱き上げてよいものかどうか一瞬迷い、結局軍医を呼ぼうと内線電話を手にする。だが、微かに石井の口から声が聞こえて、山本は耳を寄せる。

「攻撃を、止めちゃ……だめだ……」

そんなことを俺に言われても。山本は途方に暮れた。

石井は消毒液の匂いで目を覚ました。彼女はベッドで横になっている自分に驚く。目の前には白い天井が広がっていた。

「起きられましたか」

その声に横を向くと、山本が座っていた。

「……どれくらい経った」

「二日です。過労ですな」

「……そんなにか」

石井は山本の答えに絶望した。もう遅すぎる。

「共和国からの抗議を受けて、昨日の時点で総参謀部から攻撃中止と撤退命令が出ました。我々の代わりに隣国の部隊が展開するそうです」

「親衛軍はどれほど撃破できた？」

「四十パーセントほどでしょうか」

「……足りないな。もう少し削れば……」

そう言って石井は黙り込んだ。もう少し、この身が持ちこたえられれば、と歯がゆく思った。山本はその様子を見つつ、申し訳なさそうに言った。

「中佐殿、お聞きしてもよろしいですか」

「……なんだ」

「この戦争を演出したのは、中佐殿ですね」

「……共犯も、多くいるけどね」

「しかしなぜ共和国との衝突の危険を冒してまで……」

「共和国もまた、共犯だからだよ」

その一言に山本は絶句した。石井は構わず言葉を続ける。

「利害がそれなりに一致した。それだけのことだよ。彼らはこの国に口を出す契機が欲しかったし、我々は手を引きたくかった。我々の場合は下手に兵を出して、後に引けなくなった。状況は悪化の一途なのに、軍縮ムードの中で兵力の追加投入はできない。だからまずは外務省が、隣国をより深く引き込もうとした」

石井はそう言って嘲る様に笑って見せた。

「隣国の兵力で代用しようとしたわけだけど、彼らは親衛軍が怖かった。まあ隣国の陸軍も程度はたかが知っているからね。だから今度は軍事的手段が考慮された。要人を空爆でまとめて殺害して、自由民主国の方針を変えさせようとしたわけだ。……でもどこからか、それが共和国に露呈した。向こうは秘密ルートで、それは困るといつてきたわけだ。勿論彼らもこのままでいいと思ってたわけではないよ。仲間内で虐殺国家があるだなんて体面に関わる。かといって無闇に口を出すわけにもいかなかった。何故かわかるか？」

話を振られた山本は、さも当然のように答えた。

「武器輸出の顧客だからですね」

「その通り。軍縮ムードは我々だけではない、共和国も同様だ。だからこそ余剰兵器の輸出で稼いで、外貨を稼ぐ。その筆頭である自由民主国は絶対に手放したくなかった。だから事態の打開を目指して、水面下で手を結んだのさ」

そして石井は、順序通りに説明をする。

「まず第一にこちらが大義名分を持って喧嘩を売る。なしくずしに戦線が拡大すれば、こちらの中央議会も交戦を嫌とは言えない。そして隣国を引き込むために自由民主軍を蹴散らす。そうすれば友邦を守るために共和国は堂々と軍を出せる。かつての軍事顧問団は駐留軍に名前を変えるだろう。だがその銃口は常に自由民主国にこそ向けられる。そして我が国と共和国は、多数派民族と少数派民族にそれぞれ武器を売りつける。中でも目玉

は防空システムだ。あれは大金になる」

山本はそれを押し黙って聞いていた。彼にとって、決して気分の良くなる話ではなかった。石井の話が終わったのを確認して、彼は聞いた。

「この国はその金をどこから出すのです」

「国民から収奪するさ。放っておいたって、内戦が続く。続かせる。穏やかに、だけどね」

「結局のところ、我が国は本気で助ける気はなかったのですか」

「そういうことになるのかな」

「あなたもですか」

石井はその問いに答えず、逆に山本に聞き返した。

「長々と講釈したけれど、君もある程度知ってはいるのだろう？ 山本大尉」

「……何のことでしょう」

「君が総参謀部のとある人物に定期的に連絡を入れていることは知っている。まあ、とやかく言うつもりはないよ。こんなところで派閥争いをする気はない。お互い手駒に過ぎないのだし」

山本は観念したように肩をすくめた。

「お見通しでしたか」

「でも、私は貴官に感謝しなければ。仕事をしっかりこなしてくれたし、計画を妨害したりはしなかった。……ありがとう」

山本は、それには答えなかった。

翌日、石井に総参謀部へ復帰するよう辞令が下った。

西村が無表情に石井の執務室に訪れたのは、石井がちょうど最後の書類を鞆に放り込んだ時だった。戦闘服のまま、少し薄汚れた格好の彼女は、参謀の格好をした石井とは対称的だった。

「久しぶりだね、奈葉。山本大尉、コーヒーを」

そういつて石井は人払いをして、二人は部屋に残された数少ない調度品である椅子に、向かい合って腰かけた。先に口を開いたのは、石井の方だった。

「いったいどうしたの？」

「里佳らしいやり口、とは言えなかった」

西村のそれは、重苦しい、塊のような声だった。

「そうかな。まあ今回はこうするのが注文だったから」

「それでこの国をここまで滅茶苦茶に？」

西村の口調は徐々に非難の色を帯びてくる。その裏ではどれほどの感情を押し殺しているか知れなかった。

「それでも、今までよりはましだよ」

「もっといい未来があった。私たちにはそれを作る力があつた」

「誰もがそれを望んだわけじゃないよ」

「……里佳も？」

「それは違います」

そう言って会話に割って入ってきたのは、トレーにコーヒーを二つ載せた山本だった。そんな彼を、石井は驚きの表情で見つめた。

「石井中佐殿は、ご自身のできる範囲で人々を救おうとしておられました。親衛軍を叩くことに執着していたのがその証拠です。中佐殿と総参謀部の意思が、ただ一つ食い違った点です。……中佐殿は、余力を残した親衛軍が北部に逃れた少数派民族に向けられることを危惧しておられました」

「……危惧、というほどじゃない。不都合だと思っただけだよ」

石井は少し気恥ずかしそうに俯いた。西村はそれに何も言わず、ただただ黙り込んでいたが、やがて立ち上がり、部隊の様子を見てくると言って立ち去った。

残された二人は西村を見送ると、何を言うでもなく、揃ってぬるくなったコーヒーを一口すすった。それから石井が静かに口を開いた。

「そのう、友達と喧嘩をしたのは、初めてなんだ。だから……」

「お気になさらんでください」

そう言ってまた二人はコーヒーをすすった。

同時に、扉を力強く二回ノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

石井が言うと、パイロットスーツに身を包んだ沙藤が部屋に入ってきた。彼女は頭をかきながら、可笑しそうな顔をする。

「我らが参謀殿がそんなしおらしい態度をしてるとはね」

「……聞かれてたか」

「奈菜がアンタに殴り込みをかけたって知ったら興味ないわけないじゃん。ま、丸く収まったようでよかったけどさ」

それから沙藤は石井の肩に手を置き、顔を寄せて言う。

「ま、アンタら二人はどこか歯がゆいところがあったからね。それはそれとして、どう？ 私のヘリに便乗してかない？ 定期便なんて待ってたらしばらく埒が明かないよ？」

「……お言葉に甘えますか」

連邦帝国軍と隣国軍との交代は順調に進んだ。自由民主軍はその間、再編を進めていたものの攻撃に出てくることはなかった。共和国軍は越境して自由民主国の首都にも入り、その影響力を存分に行使している。

F事変と名付けられた一連の紛争は一旦の終息を見ることとなった。しかし連邦帝国と共和国との間の溝は、少なくとも表面上は埋まることなく、次の段階へと進んでいくことになる。

西村は自らの支隊が、自由民主国と隣国の国境のゲートを越えて撤退していくのを道の脇で見守っていた。最後の戦車が国境を越えるとき、自らもそれに飛び乗り、砲塔に掴まりながら自由民主国を後にした。後方支援部隊はまだ一部残っているものの、撤退した戦闘部隊の中では一番最後だった。

Ende

地図にない村（芳野朔）

地図にない村

芳野 朔

夜の底に、静かなざわめきがたゆたっている。

人の寝息、木の葉がこすれる音、恋人同士の囁き、ぐずる赤ん坊をあやす声。どんなところにも、真の静寂はない。その静かなざわめきがひとつになった音は、小さい頃に耳慣れた音とよく似ている。竹と笹が囁く音だ。

遠くから風の音が近付いてきて、夜風がふわりと私の髪をなびかせる。私は部屋の電気を消して、張り出窓に腰かけた。床においてある間接照明が、オレンジ色の優しい光を放っている。

こんな夜は、昔のことを思い出す。心の底から落ち着くような、深い安らぎを与えてくれる祖母の声が蘇る。『なんだい、一華。眠れないのかい？』

祖母の家は、とても古い大きな日本家屋だった。竹林の中にあって、風が吹くと決まって竹や笹の音が聞こえた。小さな頃は竹と竹の間にある闇が怖くて、眠れない夜は祖母の部屋に行っていたものだ。

恐怖に耐えて縁側をぺたぺたと走り、ぼんやりと障子が明るくなっているのを見ると、泣きそうなくらいほっとした。かたりと障子を開けると、祖母は小さな背中を丸めて、行燈のそばでよく縫い物をしていた。自分の着物のほつれを直していたり、私のためにかわいいワンピースを拵えてくれていたりした。祖母はすぐに障子をのぞく私に気が付き、くしゃりと笑って迎えてくれるのだ――。

「なんだい、一華。眠れないのかい？」

一華はこくりと頷き、祖母のそばにぱたぱたと駆け寄る。艶々とした、一華の絹のような黒髪が揺れ、黒真珠のような大きな瞳は涙で潤んでいる。腰にしがみつくと一華の頭を、祖母は優しく撫でる。

「また、赤い女の子が見えたのかい？」

「うん。竹の中から、ずっと一華を見てくるの」

「おやまあ、困ったねえ。でもね、一華。あの子は悪い子じゃないんだよ。だから、そんなに怖がらないであげておくれ」

一華を慈しむように、祖母は何度も何度も頭を撫でる。

「じゃあ、なにかお話しして？」

一華は駄々をこねて、上目がちに祖母を見上げる。行燈に照らされた祖母の顔には、深いしわが刻まれている。

「そうだねえ。それじゃあ、『人形さん』の話しようかねえ」

「人形さん？」

「そう。むかあしのことだよ。前にも話したかねえ。この村の近くにね、『地図にない村』があったんだよ」

「知ってる！ 一華たちの、えっと、ご、ごせん……」

「ご先祖様？」

「そう、ごせんぞさま！ おじいちゃんが教えてくれた！」

「よく覚えてたねえ。えらいえらい。そう、そこに住む人たちはねえ、これから起きることや昔の出来事を見ることができたそうだよ。それ以外にも不思議な力を持っていてね、悪い人から隠れるために、地図にない村をつくって住んでいたんだそうよ」

祖母の語りに、一華は夢中になって聞き入った。大きな瞳は、今は好奇心できらきらと輝いている。

「いくらその村に行こうとしても、誰も行けなかったそうだ。でもね、一人だけ、その村に行った村人がいたんだ。若い男で、年は十七だったそうだよ」

「じゅうなな？」

「一華の十三歳上だね。そのお兄ちゃんはね、綺麗な池のそばで、その村を見つけたんだ。そして、その村の若い娘に恋してしまったのさ」

「好きになっちゃったの？」

一華が身を乗り出す。小さくても立派な女である。

「そう。でもね、二人の恋は許されなかったんだよ」

「どうして？」

「地図にない村には掟——守らなきゃいけないことがあったのさ。その村の人は、他の村の人と一緒にいてはいけないかったんだよ」

一華の顔が悲しそうに歪む。

「でもね、二人は諦められなかった。だから、二人で逃げてしまったんだ」

「すごーい！ 『かけおち』？」

一華が目をきらきらさせる。どこでそんな言葉を覚えてきたのかと、祖母は苦笑する。

「まあ、そうだねえ。でもね、地図にない村の神様は、二人をお許しにならなかったんだ。それで」

祖母が内緒話をするように、顔を一華に近付ける。

「それで……？」

「人形に変えられてしまったそうだよ」

一華は息をのんで、祖母にぎゅっとしがみつく。見開かれた目には、恐怖と、畏怖と、かすかな歓喜がにじんでいる。

「それが、あのオシラサマだよ」

祖母が顔を上げた先には、神棚に祀られた二体の人形があった。一本の棒にたくさんの布が重ねられたり結ばれたりしているもので、雨の日の一華の遊び相手にもなっている。着物のきれなどが使われていて、とても鮮やかな色彩を放っている。しかし、行燈に照らされた二体の人形は、今の一華の目には悲しげに映っている。

「人形になっても、二人は別々の所に置かれて、今でもお互いを想って泣くそうだよ。これでおばあちゃんの話はおしまい」

「でも、うちのオシラサマは二人いるよ？」

「そうか、そうだねえ。このオシラサマはね『二人が結ばれますように』って意味で、願いを込めて祀っているんだよ。するとね、『私たちの幸せを祈ってくれてありがとう』って、地図にない村の娘が願いを叶えてくれるんだよ」

「ふうん……。でも、その人、さびしくないかなあ」

「一華は、好きな人と離れるのは寂しいかい？」

「うん！ だって、トモ君とバイバイするの、すっごくすうっごくさびしいもん！」

力を込めて寂しさを訴える一華を、祖母は哀れむような目で見つめる。

「でもね、一華。智弘君はね、一華とはいっしょにいられないんだよ」

「どうして？」

泣きそうになる一華の頭を、祖母はこれ以上ない慈愛を込めてゆっくり撫でる。

「いつか分かる時が来るよ。それまでは、いっぱい智弘君と遊んでおいで」

「うん……うん、いっぱいあそぶ！」

一華の顔に笑顔が戻り、祖母は相好を崩す。

「いい子だね。――ほうら、段々眠くなってきたらう？」

祖母の言葉に一華はこくりと頷く。小さな口であくびをしながら目をこしこしとこする。こくりこくりと船をこぎ始めた一華を、祖母は布団に寝かせた。

「おばあちゃん、おやすみなさい……」

一華は祖母の手を握りながら、深い眠りについて――。

かたん、と何かが倒れる音がして、私は目を覚ました。どうやらうたた寝をしていたようだ。なんだか、ひどく懐かしい感じがする。昔の夢でも見ていたのだろうか。

テーブルを見ると、竹で作った彼岸花の置物が倒れていた。私は慌てて置物を手取る。とても繊細に作られているので壊れていないか肝を冷やしたが、傷ひとつなかった。私はほっと息をついて、風が来ない物陰に置き直した。

その時、本棚にある写真立てがふと目にはいった。白いワンピースを着た幼い少女と、日に焼けた腕白そうな少年が満面の笑みで写っている。切ない痛みが胸の奥に走り、私は苦笑した。

私は、探さねばならない。そのために生まれてきたのだ。私は祖母の遺志を継いで、『地図にない村』に帰らなければならない。そのためなら、きっと忘れられる。あの少年のことも、気が付けば思い出になるに違いない。

机の上に散らばる本や古文書を一瞥し、私は自分に言い聞かせる。私がやる。私が見つかるんだ。そして、祖母が私に語ってくれたように、私も伝えていくのだ。

「――頑張るんだよ、一華」

風に乗って、祖母の声が聞こえた気がした。

大丈夫。私は頑張れる。大切な人のそばにいらなくても、きっと。

「――うん。頑張る」

かすかに震えた私の声は、吹き込んだ風の音にかき消されていった。

そしてまた、偽りの静寂が訪れる。

あとがき

調子こいて「町史濃い手」に変換されます。

調子こいて出撃と遠征を繰り返した結果がこれです。時間が大破しました。マル

黄昏の巡礼者 - 零 - (七分の六)

黄昏の巡礼者 - 零 -

七分の六

この世界はきっと悪意に満ちている。

それは今までもそうだったし、これからもきっと変わらない。

だから、私にあんなものが見えるようになったからって、それはただ世界の悪意だったというだけだ。

†

夕闇が急速に濃さを増す黄昏時。徐々に輝きを増しつつある白い月が暗橙色の天井に張り付いている。影の濃い路地裏を進む二人を覗くように浮かぶそれは、ここにははけないような雰囲気醸し出していた。

数少ない街燈に映し出されるのは灰色の壁、濁った煉瓦色の道と散かされたごみ、生活の断片——汚らしい暗い路地裏。無意味な都市開発を幾度となく繰り返したこの街の路地裏は暗く複雑で初めてのものが迷い込むと簡単には出てこれない。

そこを、二人の少女が何かに追われるかのように歩を進めていた。

「一体、どうしたの、セレン」

紺を基調とした学園の制服に、腰まで伸びた長い三つ編み。澄んだ青紫色の瞳に眼鏡をかけた少女、リリィが息を切らしながら呼びかけてくる。

「……………」

そんな彼女の言葉に対して何も答えることがないまま、セレンは先へ進んでいく。

同じ学園の制服に銀髪のショートヘア、さめるようなワインレッドの瞳。虚ろなその目は、かっこいいとリリィには言われたが、怖いという印象が大きいとセレンにはわかっている。

今は彼女を気遣うほどの余裕はなかった。揺れる明かりを呑み込むように迫る闇。鼻をさす、肺を侵すような腐臭。歩みを止めるたびに後ろからそれが迫り、早く逃げろと心が叫ぶ。怖気が背筋を撫で、嫌な汗が出てくる。

彼女にはわからないのだ、これが。

背後から迫りくる何かが。

セレンにとって、この不快感そのものは初めてではなかった。今までも何度かこの、何とも言えない嫌なもの、の存在を感じ、そこから逃げ出したことがある。だが、このような暗澹たる影を纏う路地裏で、ここまではっきりとした不快感に全身を支配されたのは初めての経験であった。

不安が、恐怖が、そして緊張が、大きな顎で心の中を食い散らかしていく。

それを無理やり打ち消すかのように、リリィに顔を向ける、ぎくしゃくとした笑顔で。

それが今のセレンにできる、精一杯の強がりであった。

「セレン、今日帰りに街の方によっていかない？」

そうリリィに言われたのは苦手な数学のテストを終えた直後であった。今日のテストはこれで終わり。明日は

休みだから、一時的にはあるがテストから解放されることになる。ちょっと寄り道して帰るくらい問題ないだろう。

「いいよ、何か買い物？」

「うん、ちょっと行ってみたいところがあって」

リリィは嬉しそうに微笑んだ。

気づいた時にはもう遅かった。今、自分たちがいる場所がどこかわからない。不快感から逃れるために入った、勝手知ったる裏道はどうに過ぎ、そこと似通ってはいながらも明らかに別とわかる路地裏に迷い込んでいた。そして今、奥には袋小路が見えている。すでに日は落ち、異常なほど白い月はまるで、自分たちを嘲笑っているかのようであった。

路地裏には黒い霧が広がり、獲物を狙う猛禽類のように二人を取り囲む。

心の中に、どろっとした黒いものが広がった。それに比例するかのようになくなっていく、周りの黒い霧。徐々にきつくなる腐臭、不快感。背筋を撫でていた怖気は、次第に強くなり、今や殺気と言っても差し支えない。

背後から突然、がりっ、という煉瓦を鋭い何かでひっかいたような音が響いた。その音に驚き、振り返る。

大きな丸い物体が二つ重なったかのような胴体と、そこから生えた巨大な四対の脚、一对の触肢。一見して顔とわかるそこからは鎌状の鋏角が生え、赤い八つの目が二列に並んでいる。

黒い霧に包まれた、巨大な蜘蛛がそこにいた。

「どうしたの？ セレン」

現実とは思えないものを目にし、動くこともかなわないセレンにリリィが話しかけてきた。

あまりのことに、口を開いても言葉が出てこない。

「大丈夫？ 左目、何か変だよ」

彼女の言葉に耳を傾けている余裕など、ない。

やはり彼女には見えていないのだ、この巨大な蜘蛛が。

彼女にはわからないのだ、今の状況が。

どろっとした黒いものが、さらに心の中に溜まっていく。

それとともに込み上げてくる嘔吐感。

前には巨大な蜘蛛、後ろには袋小路。

自分以外には頼れるものなど存在せず、逃げ場はない。

巨大な蜘蛛は、がりがりとして巨大な足を壁にぶつけながらこちらへと歩き出した。

一歩歩みを進めるごとに、霧に包まれていた脚が、触肢が、鋏角が、胴体が、よりくっつきりと形作られていく

。

全身は細かな体毛で覆われ、脚の先端に大きな三本の爪が生えている。

鋏角は先端が鋭く、そこからは暗紫色の液体が滴っていた。

路地の壁に傷を付けながら、道に爪痕を残しながら、巨大な蜘蛛は二人の方へと迫る。

「どうしたの、セレン。黙ってちゃわからないよ。それにここ、何か変だよ」

声を震わせながらさらに語りかけてくるリリィ。その声の震えはセレンの様子からなのか。それとも、見えないながらも何か感じているからなのか。

「さっきから何もないのに、がりがりって音するし、一体何がおき」

リリィがそれ以上言葉を発することはなかった。

巨大な蜘蛛がその触肢でもってリリィの首元を掴んだからだ。

「っ……。」

苦しい。息ができない。

リリィは、さまざまな感情が混在する目で、セレンを見た。

だが、セレンにはどうすることもできなかった。

化け物、としか言いようがないその巨大な蜘蛛に対し、あまりにもセレンは無力だった。

脚をバタつかせ、首を掴んでいる見えない何かから逃れようと必死になっている友達を、ただ見ていることしかできない。

そんなセレンの前で、蜘蛛はもう一方の触肢を振り上げる。

死にたくない。助けて。

蜘蛛の触肢が、リリィを引き裂いた。

柔らかな少女の腹部を。無慈悲に、人が蚊を潰す時のような容易さで。

鮮血がセレンの顔にかかり、視界の左半分を赤く染める。

一目でわかった。即死だと。

リリィから、いや、リリィであったものから、かつて体内にあったはずの肉塊が、血液が、零れ落ちていく。

蜘蛛は、動きを止めた肉体に興味を失ったのか、子どもが玩具を投げるような気楽さで、それを道端に投げ捨てた。

もう、セレンに動く気力などなかった。全身の力が抜け、膝から地面に崩れ落ちる。

そんなセレンに向かって、蜘蛛は再び歩き出した。

進むにつれ、脚は太く、鋏角は鋭くなっていく。

あれだけ巨大なのだ。足を延ばせばもうセレンにとどく。

切れかけの街燈に照らされ、太く鋭い爪が煌く。

恐怖はもう、感じなかった。

そうか。私はあれに潰され、引き裂かれ、死ぬのか。

ものを映し出すだけのカメラのように、周りの様子がくつきりと目に飛び込んでくる。

蜘蛛は右前脚を振り上げた。

これから起こるであろうことを、冷静に、無感情に想像する。

心の中に溜まった、黒いどろっとしたものがあふれ出した。

『悪意が満ちて、』 『仕方がない』

だからこの世界は悪意に満ちていると聞いたんだ。

『混じって』 『ごめんなさい』

私はいつも、ひたすらに無力で。

『見ないでよ』 『あの人怖い』

世界はいつも、私から大切なものを奪う。

『嘘つき』 『セレン、』

世界はいつも、私の日常を壊す。

『助けて』

「巨人の斬首剣〈ツヴァイヘンダー〉——幻造」

どこからか、声が聞こえた。

燐光が煌き、視界が蒼に染まる。

蜘蛛の右前脚がセレンに振り下ろされることはなかった。

厚く鋭い大刃が、蜘蛛の胸部を貫いたからだ。

胸部を貫かれた蜘蛛は、貫かれたその箇所から、霧となって消えていく。

冷たそうでありながらもやさしい光、大剣からこぼれた燐光はセレンを包みこんだ。まるでセレンを黒い霧から守るように。

「危ないところだったね」

先ほどと同じ声が、黒い霧の向こう側から聞こえた。

霧が晴れていくにつれ、電燈の上に、それを吊るすアーチ状の金属パイプをわずかにゆがませながら、一人の少女が立っているのが見えてきた。

蒼い光が彼女を照らす。

黒を基調としたどこかの学園の制服。腰まで伸ばした赤い髪。澄んだ碧眼。

「私の名前はジークリンデ。これからよろしく」

悪戯っぽく笑うジークリンデ。その笑顔は、なぜだかとても魅力的で、安心できて。

セレンは意識を失った。

あとがき：「SAN値チェックお願いします。」

RPG. Until the day I die. (松本惇暉)

RPG. Until the day I die.

松本 惇暉

「失礼いたします。ヴァレリー ^{せんせい} 師」

「おお、メルメか！ 呼びつけて済まないな」

「いえ……私のほうこそ、ずいぶんご無沙汰してしまって……」

「なあに、気にしないでいい。神父というものは、おまえの年の頃が一番忙しいものだ。かくいう私もそうだった」

「元気そうですね……入院されたと聞いて、心配していたのですが」

「ハハ。さすがに子供たちと鬼ごっこをするのは、当分やめにしておくでしょう」

「師は本当にお若いですね。私がまだ修道士だったときと、ほとんど変わらない」

「そんなこと言うものじゃないな。メリメ。おまえは私より二十も年下なのだぞ？」

「……私は師のような強靱な意志と信仰を持ち合わせておりませんから」

「そんな弱音を吐いてはいけない！ おまえがマルセイユでもっとも由緒正しい教会を任せられているのを、私は知っているのだ！」

「それは過大評価というものです」

「おまえは昔から少々卑屈すぎる……謙遜は美徳ではないのだぞ？ メリメ」

「……」

「まあ、程々にとのことだ。せつかく久しぶりに会ったんだ。これ以上説教臭くなくてもいいかん」

「申し訳ありません」

「そう謝るな。ええと、いい加減本題に入らなくては」

「はい。今日はなにか頼みたいことがあると聞いております」

「うむ。おまえが日本へ行くと聞いてな。ついでに、この手紙を届けてほしいのだ」

「承知しました」

「おまえがカルマンの代理に決まって安心したぞ。やつより、よっぽど優秀だからの」

「……正直言って、日本へ行きたくありませんでした」

「まあ、おまえにとっては嫌な思い出しかない土地だろう」

「日本のすべてがダメだ、というものではないのです。ただ……女性が」

「それがおまえの罪の原点だからな、当然というものだ」

「……はい」

「いっそのことこの機会を利用して、きれいさっぱり償ってきたらどうだ？」

「どうやって償えばいいのか、分かりません」

「やりようはいくらでもある！ 例えば――」

×××

燃えるような暑さの、八月のある日のこと。東京の郊外にある、とあるJRの駅に一人の男が立っていた。その男は炎天下にも関わらず、黒いマントのようなものを羽織っていた。もちろん長袖である。彼がおとぎ話に出てくる魔法使いのような服装をしているのには、れっきとした理由があった。彼はカトリック教会に属する、神父だった。そもそも、彼の服にはキャソックという立派な名前があった。しかし、現代日本においてこの名前を知っている人がどれだけいるだろうか？ そして、彼がカトリック教会の神父であることを理解する人は……

彼はところどころ傷がついた旅行鞆を持っていた。いかにも使い込んでいる、といった風情である。

彼は改札口の前で立ち尽くしたまま、歩いている通行人をぼんやりと眺めていた。

——日本人はやはり「見ないように」するのがうまい。

彼は自分が初めて来日したときのことを思い返した。そのときもここに立って、駅のロータリーを見ていた。

通行人たちは彼へ流し目を送ることもなく、ゆっくり行き違っていく。彼にはこの人間の流動ともいべき現象が、偽善の塊のように思えて仕方がない。

彼はゆるゆると首を振って歩き出した。日本という国ほど、自分の民族というものを意識させられる国はない。これは常々彼が考えていることだ。

彼はそこにもこの国の特殊さを感じている。

日本の新聞やテレビを見ていたときに、ふと気づいたことがあった。それは移民や難民関係のニュースが驚くほど少ないということだった。平たく言えば、あたかも民族の問題は初めから存在していないようだ、ということだ。

彼はバス乗り場を通り過ぎ、横断歩道を渡った。

当時彼は気になって、友人に（もちろん日本人の）尋ねたことがあった。

日本に日本人以外の民族はいないのか？

これに対して、彼の友人は困った顔——むしろ自信のない顔をした。実際、件の友人はそういう方面へ詳しくなかった。

だから彼は自分で調べてみたのである。その結果、アイヌや沖縄の問題を知ることができた。

彼はフランス人だからこそ、もっと知りたいと思った。

どうして日本人はこんなにも「民族」というものに無自覚なのだろう。必然的に、彼は彼女へ相談して——彼はピクリと身体を震わせた。

彼女？ あまりにも彼女との議論が鮮明に思い出されて、彼は恐怖を覚えた。

日本人が民族というものに疎いのは良くも悪くも他の民族によって、体制が脅かされなかったからだ。いまだに日本人は自分の国が単一民族国家だという幻想を抱いている。それが彼は彼女と一緒に出した結論だった。

結論まで憶えているとは、我ながら愚かなことだ。と、彼は思った。

彼は駅からまっすぐ伸びている大通りの途中で、ピタリと立ち止まった。彼は忘れていたのだ。今から行く場所には、前もって電話を入れておかななくてはならないことを。

彼はキャソックのポケットから携帯電話を取り出した。

夏を過ごすにふさわしい恰好をした人々が、彼の前を通り過ぎていった。

神父が携帯電話を使う姿には、どこか滑稽なところがあった。

彼は無自覚ということがいかに恐ろしいことか、よく知っていた。無自覚ということが……

×××

神父は石段の前で立ち尽くしていた。この暑さの中でじっとしているのは、苦痛でしかない。それなのに石段を登ろうとするどころか、身動き一つしなかった。

石段の周りは林になっているため、蟬の声がよく響く。彼の耳にもその音は届いていた。ミーンミーンという音は、まるで頭痛のように彼を苛んだ。

彼はとりあえずハンカチを取り出して、額に滲んだ汗を拭った。服の下では暑さのためだけではない汗も吹き出して、身体中が湿っていた。

受難という言葉が一番しっくりくるだろう。

彼は首から下げたロザリオを強く握りしめた。

——神よ。私に勇気を……

宗教者の黙考というものは、周りの一切の音も、光も感じられなくなるものだ。ある意味で、自己以外のもの

を切り捨ててしまうのだ。

蝉の鳴き声が彼にはじょじょに讚美歌めいて聞こえてきた。

荘厳なオルガン。修道女たちの澄んだ歌声——願わくば、このまま恍惚の状態でいたい、と彼が考えたのも無理はない。

しかし、唐突に神への祈りは中断させられた。

「あの一」

彼は自分のものではない声を聞いて、我に返った。身体が勝手に声のしたほうへ向いた。

「どうしましたかー？」

彼はいつの間にか、後ろに立っていた人物を見つめた。

半袖の黒いセーラー服を着て、学生鞆を持った女の子だった。彼女は神父の顔を見た途端、しまったという表情を浮かべた。

「あ……キャンユースピークジャパニーズ？」

彼女はいかにも英語ができないなりに努力した、というイントネーションでしゃべった。

神父は苦笑した。仕方のないことだが、あまりに型通りの反応をされるとこちらも笑ってしまう。

「日本語で話していただいて構いませんよ。お嬢さん」

彼がそう言うと、女の子は目を見開いた。当然のことながら、彼が流暢な日本語でしゃべったことに驚いたのである。

「あっ……はい……」

「なにか御用ですか？」

「えーっと、こんなところでずっと立ってるから、気分でも悪くなったのかなーと思って」

女の子はバツが悪そうに頬を掻いた。そのしぐさを見て、彼は顔をしかめざるを得なかった。

また、日本人は申し訳なさそうな顔をする。

「いえ、体調が優れないとか、そういう訳ではないのです」

「じゃあ、どうして？」

神父は言葉に詰まった。彼にとっては、理由なんて自明のことだ。だが、それが他人へ話せるものかどうかというのは別問題である。

「……少々道に迷いまして」

「なるほどお！ それは大変でしたね。どこへ行こうとしてたんですか？」

女の子は目をぱちくりさせて、神父を見つめた。まだ子供であることを示す純粋な瞳が、彼にはまぶしく映った。

「桜権神社というところなんです」

彼は女の子の勢いに押し切られるような形で、目的地をしゃべってしまった。

それを聞いて、彼女はカラカラと笑い出した。

「なーんだ。お客さんだったんだ」

「お客さん？」

「実はあたし、神社に住んでるんです！」

女の子は誇らしげに胸を反らした。それは見る人によっては、少女らしい可愛らしさが現れたとみる人もいるだろう。

残念ながら、神父はそんなことを考える余裕はなかった。

彼の心の中を支配したのは、身を切るような恐怖だった。また、自分のうかつさを罵りもした。

——こんなことは、たやすく予想できたことじゃないか！

彼は改めて目の前の女の子を眺めた。

彼女は人差し指で石段の上のほうを示した。

「神社はこの上なんです。あたしの後についてきてください！」

彼女は元気よく、石段を登り始めた。彼は一秒か、二秒か、陽炎のようにゆらゆら揺れる彼女の背中を見つめた。

神父は女の子の顔を思い出しては消し、消しては思い出した。その度に呼吸が弾み、乱れた。

——面影はない。

彼は何度も自分にそう言い聞かせた。

彼女はもう石段を半分以上登っている。蟬が相変わらず、彼を急き立てるように鳴いていた。

神父はようやく足を動かした。彼の石段の登り方は、まるで足首に鉄球をつけているかの如く、緩慢だった。

もし、多少なりとも詩的な表現ができる人間ならば、彼の姿をこう評したに違いない。

まるで囚人のようだ、と。

×××

肉体的な圧迫と精神的な圧迫は、どちらがより強い影響を人間へ与えるだろうか？

答えは後者である。

額に水滴を垂らし続けると、人間は発狂するという。それが物語っているように、問題はあくまで心理にまつわるところにある。

神父は本棚に囲まれた居間に一人で座っていた。障子は開け放たれ、太陽光に照らされた庭木がよく見えた。

部屋に籠った熱気は容易に消えそうもなかった。彼の傍で、扇風機が空しく回っている……。

彼は座布団の上で正座をしながら、戦々恐々としていた。これから起こるであろうことが、自分にもたらす責苦になるはずだ。彼にはそう思えて仕方がなかった。

こつこつと、廊下を歩く足音がした。

——どうか、面影がありませんように。

彼はこう願うしかなかった。

ずっと、襖が開いた。彼は部屋に入ってきた人物を凝視した。

そして、打ちのめされた。それは彼が修道士になり、ヴァレリー師の教えから、啓示を引き出すことに成功したときによく似ていた。

彼女はお盆に麦茶が入ったコップを載せていた。そして、座卓へ置いた。

ああ、なんて残酷なのだ。彼はそう嘆息した。

「申し訳ありません。お待たせしてしまって」

艶やかな黒髪、端正な顔の輪郭、日本人としては比較的高い鼻。それに加えて、知性を感じさせる灰色の瞳。

「蔵を整理していたもので。どうぞ、冷たいものです」

彼女は神父の前へコップを置いた。彼は言葉を失ってしまった。ただ、目の前にいる人間を見ることしかできなかった。

白衣、緋袴、長い黒髪の中ほどにある水引。よりもよって、巫女の恰好で出てくるとは。

彼の中の時間は止まった。

「あの……どうかされましたか？」

そう言われて、神父は震える唇を動かして、ようやく言葉を発することができた。

「ああ……少しぼーっとしていました」

彼女は微笑んだ。

「この暑さですものね。私もついつい意識が飛んでしまうことがあります」

彼女は手でさっき置いたコップを指した。もう大きな水滴がコップにへばり付いていた。

「どうぞ、遠慮せずに飲んでください」

「ありがとうございます」

彼はコップへ手を伸ばして、麦茶を口に含んだ。

——こんな日は、彼女がよく麦茶やカルピスを出してくれた。

神父はそんなことを思い出して、自己嫌悪に陥った。彼が飲み終わるのを見計らって、彼女がしゃべり出した。

「今日は遠いところからわざわざお越しくださり、本当にありがとうございます」

彼女は礼儀正しく、お辞儀をした。

「いえ、あなたのお母さんには、大変お世話になりましたから……本来なら、真っ先にうかがうべきでした」

「母は喜んでいてと思いますよ。なにせ、わざわざフランスから来てくださったのですから」

ここまで言って、彼女はパチンと手を叩いた。そのしぐさは、神父を責めたてるのに十分だった。

これは彼女のよくやっていた癖だった。ゆえに、ほとんど無意識に反応してしまうのだ。

「そういえば、自己紹介をすっかり忘れていました。改めまして、私は桜椀 ^{ひびき} 響の娘で、^{みどり} 碧と申します」

神父はぎこちなく、会釈をした。

×××

縁側に吊るされた風鈴が、りと涼しげな音を出した。扇風機が碧の黒髪を揺らした。

「メリメさんは、母とどんなふう知り合ったんですか？」

「日本に留学していたとき、あなたのお母さんが私のチューターをしてくれたんです。それで——」

「なるほど。母はどんな学生でした？」

「当時の学生には珍しく、マルクス主義を研究していました」

「……そうですか」

碧は苦笑した。あまりにも母らしい研究テーマだった。神父もつられて、唇の端をちよっとだけ歪ませた。

「でも、あまり面白くなかったらしくて、経済学部から文学部へ転部したと私は聞きました」

「母はそこでプロレタリア文学を専攻したんです。だから、その本棚にあんなものがある訳で」

碧は自分の身体をずらして、後ろの本棚がよく見えるようにした。メリメは本棚の真ん中を占めている分厚い全集本を見て、目を細めた。

「中野重治、小林多喜二、宮本百合子……よく響さんが口にしていた作家だ」

「不思議な人でした」

碧は顎に手を当てて考え込んだ。記憶の底をほじくり返すようなポーズだった。

メリメは懐かしくも厭わしい気持ちを押しえられなかった。

「今思い返すと、母は先鋭的というか、前衛的というか——」

「過激なところがありました」

メリメは碧の後を引き取って、こう言った。彼女はこくりと肯いた。

「そう、今思い返すと、^{アナー} ^{キスト} 無政府主義者めいた言動をとることもありましたね」

「響さんらしい……」

「そういえば、過激であったために、変な先見性を持っていました。母は」

碧は本棚から一冊本を抜き出した。彼女はそれを愛おしそうに撫でた。

メリメの記憶に、その本の表紙が残っていた。彼は眩暈を起こしそうな感覚に陥った。

碧が遠い目をした。

「二十世紀の日本文学の旗手、小林多喜二はきっと蘇る、って」

「それはどういうことですか？」

なんて白々しい質問だろうか。メリメは心の中で自分を嘲笑った。もう意味なんて分かっているのに。

碧は恥ずかしそうな顔をした。

「要するに、今はあまり読まれなくても、きっと後から再評価されるだろう、ということなんですけど……とんでもなく大げさな言い方ですね」

メリメは首を振った。それには、否定の意味が込められていた。しかし、碧はそのしぐさを感じたものだと捉えた。

だから、彼女はなるべく冗談に聞こえるように言った。

「でも、二三年前に小林多喜二の『蟹工船』が全国の書店に並んだことがありました」

「的中したんですね」

「たまたまですよ」

碧は手に持った本を開いて、パラパラと頁をめくった。メリメは話すことがなくなり、二人の間に沈黙が訪れた。

彼はある問を——とても自分にとっては重い——彼女へぶつけるかどうか、迷っていた。

一歩間違えば、彼女のトラウマになっているかもしれないものを、抉るかもしれない。

彼はロザリオを握りしめた。そして、彼は決心した。

ふいに、碧が顔を上げた。メリメと目が合った。

「母が読んでいた本には、例外なく書き込みがされているんですが——ところどころ、母の筆跡とは違うものがあるんです」

彼女は無邪気に笑った。彼は、それが悪魔の浮かべる笑みによく似ていると思った。

——彼女も、小悪魔のように見えるときがあった。

「ひょっとして、メリメさんが書いたものですか？」

彼は息が止まるかと思った。

「……そうかもしれません」

彼はしどろもどろになった。

「じゃあ、とても勉強熱心だったんですね。私、こんなに深く考察できません」

「そんな……」

あなたのお母さんのほうが、私よりずっと優秀でしたよ、という文句をメリメは飲み込んだ。

彼はさっき考えた問いを発する機会を失った。

碧はもう一度幸せそうな微笑みを浮かべた。それはメリメの口を封じるには、十分だった。

「ずいぶん長話をしてしまいましたね。そろそろ母が眠っている場所へ、行きましょうか。もっと暑くならないうちに」

彼女はそう言って立ち上がった。

彼は自分の意志の弱さに憤慨しながら、腰を上げた。

×××

メリメは響の墓を見て、驚いた。いや、墓というのは正確な表現ではないだろう。

視覚的に正しくあろうとするならば、塚と言うしかない。

楕円形の石が地面の上にあるだけだった。道祖神に近いかもしれない。

石には、なにも彫り込まれていなかった。彼女の名前も、没年も、なにもなかった。

ただの、石だ。

「驚きましたか？」

メリメの茫然とした表情に気付いたのだろう。碧が話しかけてきた。

「これは、一体？」

「母の遺言なんです。墓は絶対にこうしなさい、と」

碧はメリメの前へ出た。彼女はしゃがみこんで、黒ずんだ石をじっと見つめた。

彼はハンカチを取り出して、何度も頬に吹き出した汗を拭った。なにに対してか分からないが、ごまかしていた。

「母は死者として、崇められることを嫌ったんです。そもそも、伝統や権威に媚び諂うことを、潔しとしない人でしたし」

メリメの頭の中で、響と決別しようとした日のことが、鮮明に思い出された。

落葉が遊歩道を埋め尽くしていた、十一月のことだった。

メリメは響きを呼び出して、別れを告げた。お腹を撫でていた彼女は、彼の話が終わると、ベンチから立ち上がった。

響はベンチに座っている彼へ向かって、最後にこう言った。

——私は卑怯者になりたくないから。

あれから、何年経っただろう。メリメは自分自身を強烈に批判した。

なにも変わらず、卑怯者のままだった。

響は徹頭徹尾、革命家だった。その証拠が、彼の足元に存在していた。

碧がしゃがんだまま、メリメのほうを振り返った。

「母は葬式を神道式で行うよう、遺言状に書いていました。でも、それってとてもおかしいんですよ」

「どうしてですか？ 彼女は巫女だったのでは——」

「母は神を信じていませんでした」

メリメは碧と同じようにしゃがみ込んだ。それは、力なく座り込んだようにも見えた。

彼は響が神を信じていなかったことを、よく知っていた。彼女にとって、神は犬の糞と同じものだった。

「プロレタリア文学を専攻した人間が、神の存在を信じられると思いますか？」

メリメは俯いた。彼はこれが時間を越えた、響からの復讐なのだと確信した。

——なんて彼女らしい復讐なんだ。

彼は呻くように、碧へ尋ねた。

「あなたは、神を信じていますか？」

碧は石の表面を指先でなぞっていた。彼女は目を閉じて、囁くようにこう言った。

「私も、厳密には——」

メリメは目蓋の後ろで、涙があふれ出すのが分かった。

×××

メリメは神社を去るときに、あるものを渡された。それはびっしりと書き込みがなされた、詩集だった。

ボードレール『悪の華』。

遅くなってしまいましたが、形見分けです。と、碧は言った。

彼は帰りの飛行機の中で、『悪の華』を開いた。そして、自分のでも彼女のでもない筆跡で書かれた文章を発見した。

それは英語で、三十一番目の、「吸血鬼」という詩に書き込まれていた。

RPG. Until the day I die.

メリメはそれを読んで一粒だけ、涙を流した。

それが彼にとっての慟哭だった。

×××

「こんにちはー碧さーん、いますか？」

「はい。ちょっと待ってくださいね」

「いや一本当に今日は暑いですね。身体が溶けちゃいそうだ」

「おまたせしました。あら、西宮さん汗びっしょりですよ」

「今日は多摩のほうまで聞き込みに行ってきたんですよ。金曜日の事件の関係ですね」

「銀行強盗でしたっけ？ ずいぶん鮮やかな犯行手口だと、マスコミが騒いでましたけど」

「まあ、犯人は素人ではないですよ。絶対にプロの前科者ですね。あれは」

「まあ、とりあえずこれでも飲んで休んでくださいな」

「いただきます。ん？ 今日はカルピスなんですね。いつもは麦茶なのに」

「ええ、今日はちょっと特別なんですよ」

「へえ、なにかいいことでもあったんですか？」

「さっきまで、うれしいお客さんが来てたんです。普段なら、きっと神社に行かない人ですね」

「……どんな人だったんですか？」

「どんな人だと思えますか？」

「うーん。神社に来ないから……外国人かな」

「さすがですね！ やっぱ西宮さんは勘が鋭いですね」

「いやあ、それほどでも」

「実は、母の墓参りに、カトリックの神父さんがいらしたんです。わざわざフランスから」

「神父！ それは珍しいですね。ん？ まてよ……石段のところですれ違った人は、じゃあ——」

「黒い服を着て、ロザリオを首からさげていたら、その人です」

「間違いなくその人ですね……でも、ちょっと心配になったんですよ。その神父さんを見て」

「彼がどうかしましたか？」

「顔色がものすごく悪かったんです。今にも倒れてしまいそうなほど、真っ青でしたよ」

「……」

「あの一碧さん。なにか気にかかることでも？」

「いえ、当然のことかもしれないんです。彼がそんな顔色をしたのは」

「その神父さんは、碧さんのお母さんと、とても仲がよかった？」

「それもあってでしょう。でも——」

「でも？」

「彼は母の亡霊を見たんでしょう」

「亡霊？ それはどういう意味ですか？」

「私と母は、いろいろなところがそっくりなんですよ。まるで、母が私に乗り移ったみたいに」

さくらのよいがさめるまで （浦木英智）

さくらのよいがさめるまで

浦木 英智

「先輩、最近ちょっと調子悪いですか？」

「……そうかな、どうして？」

「私のよく知る人に、とってもお酒に弱い人がいるんですよ」

「それ、言ってる本人だってパターンかな？」

「ご想像にお任せしますが、とにかく、その人が無理してお酒を飲んだ翌日に、よく似てるんですよ。今の先輩が」

「それなら、佐倉ちゃんだって、万全の調子ではなさそうに見えるけど」

「私は課題が忙しいんです」

「そっか、無理はしないようにね」

そして青年は考える。もうすぐ締め切りの課題のこと。締め切りの過ぎた課題のこと。卒論のこと。就職活動のこと。自分と同じ読みの苗字を持つ、不思議な縁がある、かもしれない女の子のこと。その上、自分を慕ってくれる女の子のこと。おまけに、体調の心配をしてくれる女の子のこと。

そして、「桜の宵」のこと。

桜青年は知っていた。それが単なる噂話でないことを。

「そこはいつでも桜が咲いている」

「めっぼう酒に強い美女がいて、酒を飲もうと誘ってくる」

「まるで季節外れの花見をしているようだ」

「なにを醸造したのか分からない謎の酒が飲める」

「至高の多幸福感が味わえる」

「夢のような場所だ」

それは「桜の宵」と呼ばれ、出所不明真否不明の情報が錯綜し、やがて学校の中で、まことしやかにささやかれる噂話となっていく。

どうしてそれに惹かれるのか、青年には理由が分かっていた。

「桜の宵」を経験している。深い深い酔いと多幸福感を覚えている。桜の色も、酒の味も、美女の顔も覚えていないが、確かにあの感覚だけは、覚えている。ここにあったことを、知っている。

「たとえばの話」

青年は、後輩の少女にそう切り出す。

「はい？」

佐倉は文庫本から顔を上げる。

「……なんだかんだで、佐倉ちゃんはきちんと話を聞いてくれるよね」

「いいから早くして下さいよ。そのくっだらな話」

きわめて迷惑そうに、佐倉が言う。

「話す気にさせたいのか、話す気なくさせたいのか、分からないなあ」

青年は、「たとえば」と前置きして、話し始める。

「どこかで会ったことがあるような気がするんだけど、名前も顔も思い出せなくて、大まかな雰囲気だけ覚えているような人がいて、その人のことを思い出したくて、でもどうしても思い出すことができなくて、モヤモヤし

て気持ち悪いこの感じを、どうしたらいいと思う？」

「先輩ってよく、たとえ話が下手だって言われませんか？」

「そもそもたとえ話はあまりしない方かな」

少女はすこし考えたあとで、口を開く。

「その人に会いたいと思いますか？」

「できれば、会ってみたいね」

「その人のことを知りたいと思いますか？」

「できれば、知りたいね」

「どうしても、ですか？」

「……できれば」

佐倉は、青年に顔をぐいっと近付ける。

「先輩」

「うん」

「それは」

「うん」

「恋です」

「うん？」

「まず間違いなく、恋ですね」

「……そうかな？」

「恋ですね。まず間違いないです」

「なんで二回言ったんだろう」

「先輩の恋色沙汰なんて、毛ほどの興味もありませんが、もし運命の相手なら、焦らなくても会えると思いますよ」

そう言って佐倉は、姿勢を正してもう一度文庫本に視線を落とした。

「……そうかな？」

「先輩の恋色沙汰なんて、毛ほどの興味もないですけど」

「なんで二回言ったんだろう」

そのとき青年は少なからず酔っていたし、思えばこれまで「桜の宵」に招かれたときも、それなりに飲んでいた気がする。もしかすると、したたかに酔うことが、「桜の宵」に招かれるためのひとつの条件なのかもしれない。しかしそのこともきっと忘れてしまうのだろう、と青年は思う。

「やあ、また君か」

深い闇と、月と、星と、桜。桜の木の下には、ひとりの女性。

「と言っても、君は覚えてないんだろうけど」

風が吹いて、桜の花を散らす。女性の髪が揺れる。

「だから、初めまして、の方がいいかな？」

そのひとは、幻想的で、蠱惑的で、夢か現か定かでないほど妖艶で……。

「私は、さくら。『桜の宵』主催者だ」

いや、そのひとの魅力を、言葉、なんて安っぽい手段で表現しようなんて、かえって価値をおとしめる行為でしかない。もうすこし単純に言えば、「言い表せないほどに」。

「歓迎するよ。楽しくお酒を飲んで、楽しくお話ししよう」

酒瓶を振る、その仕草が何故だかとてもいとおしく、綺麗で、神聖にさえ見える。

「最近は、訪れる人が少なくてね。君と二人だけで飲むのも、何回目かな」

「さくらさんは、大勢で飲む方が好きなんだ？」

青年は初対面の、それも女性に、気軽に話しかけられるような人間ではなかった。だからこんなにも簡単に、気が置けない言葉が飛び出したことに、青年自身驚いていた。

「私は楽しくお酒が飲めればそれでいいんだよ」

それから、さくらはふふっと笑った。

「敬語をつかわなくなったね」

「……敬語？」

「以前の君は、こちらがいくら言っても、直してくれなかった。記憶が残らないなかで、君も成長しているということかな？ 不思議な話だけど」

青年は、思う。「桜の宵」を経験したことを、深層で覚えていたように、さくらという女性の記憶も、どこかにあったのだ。

「そうだった……ん、ですか」

さくらはすこしむっとしたあとで、すぐに表情を崩した。

「美味しいお酒の前に、遠慮も謙譲もいらないんだ。私たちは単に、等しく人なんだよ」

青年は、なみなみと注がれたそれに口をつける。喉の奥に吸い込まれるように、消えていく。舌の先にぴりぴりとした刺激と、幸せな甘みを残して。

「どうして、覚えていられないんだろう」

青年がぼつりと口にする。

「ここは、夢、みたいな場所だからね」

さくらは、悟ったように、諦めたように、そう言った。

「こんなにも楽しくて、美味しくお酒を飲んだ記憶がなくなってしまうなんて、悔しいなあ」

「この世界が、そういうふうになってるからね」

もう一口、ゆっくりと味わうように、飲み込む。食道を通っていく感覚を覚えるほどに、胸の奥に確かな熱さがあった。

「夢の中身を忘れてしまうのは、世界の決まり。そうでしょう？」

世界、と呟いて、青年は思う。とたんに話が大きくなって、現実味が消失してしまった。ついさっき口にした酒も、手に持っているはずのコップも、さくらさんの言葉も、どこかふわふわとして、ひどく脆い不安定なものに思えた。

空を見上げる。ほとんど反射的に、本能的に、カシオペア座と北斗七星を探す。北極星が天頂に見える。ということは、ここは北極点にほど近い地点なのだろうか。夢の世界に、そこまで厳密な舞台設定を要求するのも酷な話ではないか。そういえば、天の北極というのは天球上で時と共に移り変わり、二千年もすれば、現在の北極星は北極星でなくなっているとか。大昔の天文学者が見ていた北極星と、私たちの見ている北極星は、別の星ということだ。

「アルコール、という星を知っているかい？ 少年」

顔が上気している感覚がある。酩酊、と言って差し支えないほどに、酔っている。青年は、しかしそれでも飲み続けた。体の底に、流し込むように。そうしている間は、この夢を見続けていられるような気がした。

「好きなんだ。名前が」

青年は、白い天井を見上げていた。どうして自分が自室の布団の上に寝ているのか、思い出そうとしてみる。

してみるが、思い出せない。体が重い。極度の倦怠感が布団に縛りつけて離してくれない。思い切って体を起こすと、頭を金属で殴打されたような激痛が襲う。冷たいものを食べて起こる頭痛には、「アイスクリーム頭痛」という名前がついているとか、等とどうでもいいことを思う。ふらふらとトイレに向かい、激しく嘔吐する。そうした感覚に満たされる一方で、同時に喪失感があった。

青年は確信する。自分は、失ったのだ。失ってはならない、ならなかったはずのなにかを、失ったのだ。

青年は、表情筋を動かすのさえおっくう、といった様子でぎこちなく笑う。佐倉は、呆れたような顔でそれにこたえる。

「また、飲んだんですね？」

「恥ずかしながら」

「しっかりして下さい。お酒に強いわけじゃないし、体もそんなに強くないじゃないですか」

「恥ずかしながら」

「頭も良いわけじゃないし、見た目もそんなに良くないじゃないですか」

「恥ずかしながら？」

「そこそこの清潔感と、不安になるくらいのお人よしぐらいしか、とりえがないじゃないですか」

「そこまで言われるとさすがにへこむなあ」

佐倉は、「しょうがないですね」と言うと、鞆から財布を取り出して立ち上がった。

「なにか、二日酔いによさそうなもの、買ってきます。ごはんもきちんと食べてないなら、食べられそうなもの、適当に買ってきますけど」

「ああ、うん。ありがとう、お願いしようかな」

「先輩」

佐倉は青年を見つめる。厳しく、しつけるような目で。

「これは、ダメ男に母性本能刺激されちゃって、『もう、私がいないとだめなんだから、はいこれ今月のお小遣い、大切に使ってね』的に、依存されて自らつくすことで、自分の存在意義を満たすたぐいのものじゃないですから」

「はあ」

「『か、勘違いしないでよね！』ってやつです。『飼い犬に餌をあげるのは、主人の義務なんだから！』ってやつです」

「佐倉ちゃんは……なんていうか、演技派だね」

青年は、それ以外になんと言って良いのか、分からなかった。

「え？ 誰が無条件であげるって言いました？」

佐倉は驚きに目を見開く。

「飼い犬が主人に媚びるときは、なにか芸をして私を喜ばせるのが普通ですよ？」

「先輩を飼い犬扱いするのは普通じゃないよね？」

「違うんですか！」

「そんなに意外そうな反応をされると、こっちの常識が間違ってる錯覚に陥るなあ」

佐倉は「冗談ですよ」と言って笑う。

「これでも私、先輩のこと尊敬してるんですから。それに、何も無い先輩からこの上お金まで巻き上げようなんて、ちょっと前までは思いもしませんでしたから」

「……なんか腑に落ちないけど、まあいいか」

「はい、それじゃあ、この生協のビニール袋から、なにが飛び出してくるのかなー？ どきどきいーわく

わくうー！ ほら、先輩も盛り上げて、さあ！」

「わー、ゼリーとかヨーグルトだといいなあー、わー」

「ちゃらららっちゃらん」

しっとりと湿気に濡れたビニール袋から、佐倉が取り出したのは、表面に霜の降りた、灰色とも茶色ともつかない、箱のような……。

「鈍器かな？」

「あずきバーです」

「佐倉ちゃんは……うん、なんだろう、ちょっと足りない子なのかな？」

「大丈夫です。二本買ってきましたから」

「どういう事態を想定しての『大丈夫』なのかな？」

「一本では折れないかもしれないけど、二本なら折れるかもしれませんよ」

「先輩は、何も無いのにこの上前歯まで折られなきゃいけないのかー。悲しいなあ」

青年は、コップの水面に浮いた桜の花びらを見ながら、そのときのことを思い返す。

「……それでも、そのあとちゃんと、隠してたヨーグルトとスポーツドリンクをくれたから、やっぱり佐倉ちゃんは優しい子なんだと思う」

「あずきバーは、どうしたの？」

「一本ずつ分け合って食べたよ。佐倉ちゃんの分もお金を払わされたけど。『誰のせいで買って来たと思ってるんですか』って言われたよ」

さくらは、笑う。

「愉快的子だね。それに、その子のお話をする君は、なんだかとても楽しそうだ」

「『愉快的子』……。そうか、佐倉ちゃんは、そう見えるのか」

「君の話の限りでは、そう聞こえるけど」

青年は、もう一口飲んで、目を伏せる。

「繊細な子。真面目な子。とても頭のいい子。触れたら壊れそうな、あやうさを持った子。でもそんな子が、僕なんかのために……僕で楽しむために、いろんなことを考えて、いろんなことを仕込むんだ。追い付くのが精一杯くらいに。それが僕にとっても楽しいし、誇らしいんだ」

青年は、顔を上げてさくらの方を見る。

目の前にさくらの顔があった。青年は、驚きに小さく声を上げていた。

「少年」

さくらは、染まった頬を歪めて嬉しそうに笑う。

「それは」

両手で青年の頬に触れる。

「恋だよ」

なにごとかを言おうとした青年の口を、さくらの唇が塞いだ。

「ん」

もう一度、吐息が触れるほど近くで見たさくらの顔は、さっき見たときよりいっぴり熱くなっているように感じた。青年には、そう見えた。

「どうして」

その声は、発した青年本人が驚くほどかすれていて、頼りないものを感じた。

「どうしてかな。わからない」

さくらは青年から指を離す。

「けれど、今日の私はとても気分がいい」

それからすこしの間、青年とさくらは見つめ合っていた。

さくらは、目を潤ませて、ただ笑っていた。青年は、どうしていいかわからず、ただ硬直していた。

突風が吹いて、地面がぐらりと揺れた。桜の花が一斉に散って、辺りを白く染める。驚いて言葉を失う青年に、ただ「ごめんね」とさくらは言った。

「今日は、ここまでみたいだ。きっとね」

「どういう、こと？」

「ここは夢みたいな場所。それが気に入る君みたいなものずきもいるし、気に入らない人も、もちろんいるんだよ」

「わからないよ、全然、なにも」

さくらは「わからなくていい」と言って笑う。

それから青年は、さくらの足が地面に着いていないことに気付く。足だけじゃなく、体がふわりと宙に浮いている。

「大丈夫。君の安全だけは保障するよ」

さくらの体は、重力を無視したように夜空を駆けあがる。

「君は、私の大事な人だから」

地震はまだやまない。風が花びらを舞い上げて、さくらを覆い隠す。地面が隆起して桜の木が倒れる。

地球がぐるりと回転し、星々が尾を引いてそれぞれ四方八方に散る。星空が、落ちてくる。

さくらは、息を切らしながら、空からゆっくりと降りる。

「頑張ったんだけどね、格好悪いとこ見せちゃったね」

ぎこちなく笑みをつくる。数歩だけ地面に足を着けたあと、バランスを崩したように、今度は膝を着く。

「なにを言ってるんだ。ほら、僕は、なにも怪我してない」

青年はさくらに駆け寄って、そう言う。

「それは、とっても、よかった」

さくらがこたえる。青年が顔を覗き込むと、さくらは青年の肩に手をおく。空いた方の手で青年の頬に触れて、「もうすこし、勇気をくれないか」と言って、もう一度、今度はゆっくりと、唇を重ねる。

月も星も桜もない「桜の宵」に、世界に、二人だけがいた。

突如として、世界は崩壊する。さくらも、世界も、記憶も、全てが泡のように消えていく。青年は恐怖した。視界にうつる全てと、その記憶が奪われてしまうように感じた。青年は、手を伸ばしてなにごとかを叫ぶ。しかし叫んだ言葉も、どうして手を伸ばしているのかも、次の瞬間には忘れてしまっている。夢が覚める。

「このところ、ほとんど連日じゃないですか」

「うん、そうかもね」

青年はしかし、佐倉に心配をかけまいと、無理矢理にひきつった笑みをつくる。

「『かも』、じゃないですよ。自己管理とか、できないんですか？」

「できなくはない、と自分では思ってるんだけどなあ」

「そんなに」

佐倉は、そこまで言って言葉を詰まらせる。

「うん？」

「そんなに、『桜の宵』が大事ですか？」

今度は、青年が言葉を詰まらせる番だった。

「そんなに、『桜の宵』はいいものですか？ 先輩の体調と引き換えにするほどに、価値のあるものですか？」

「……うん、そうかもね」

青年は、佐倉が自分の体調を気遣っている、わけではないと思った。「そんなにいいものなら、私も是非いつてみたいものですね」等と言われると思った。

「私は、先輩が、その……心配なんですよ」

だからその台詞は、青年の思考を停止させた。「予想外だ！」と叫びたいのを堪える。一瞬の後、これは油断させておいて最後に「冗談です」というオチをつけるパターンだと分かった。

「だから、今日は先輩のところに行って、お世話をします。感謝して下さい」

「冗談だよ？」

「冗談じゃないです」

「……」

「……」

「冗談だよ？」

「冗談じゃないです」

コップを傾けて、中身を飲み干す。それが何杯目か、もう数えていない。

「おいしいですね。このくらいのアルコール度数なら、ジュースみたいなもんです」

佐倉は、頬を薄く染める程度には、酔っている様子だった。しかし言動には普段とそう違いは見られない。すこしだけ饒舌になっているかもしれない、と青年は思う。

「ええと、なんのために飲んでるんだっけ？ 自己管理がどうか、言ってたような気がするんだけどな」

「だから、こうして全て飲んでしまえば、先輩がお酒に溺れることもなくなるじゃないですか。実に合理的です」

青年は、体の軸がぶれる程度には酔っていた。

「佐倉ちゃんは、結構お酒に強いんだね」

またひとつ佐倉の手によって、青年が保管していた缶が開けられる。

「家系、ですかね。それと、私自身が顔に出にくい体質なんだと思います」

佐倉は、開けた缶を差し出して、青年にコップを空けるように催促する。

「それに先輩だって、結構飲んでるじゃないですか。十分強いですよ」

コップの中身を一気に飲み干して、青年は言う。

「僕が潰れたら、誰が佐倉ちゃんの面倒を見るのさ」

缶の中身を飲み干して、佐倉がそれにこたえる。

「こっちの台詞です」

「ワイン、梅酒、杏酒、日本酒、ウイスキー。あと缶が多数」

空き瓶と缶をひとつずつ並べて整頓しながら、佐倉が言う。

「飲みかけのやつもあったけど、飲めるもんだねえ。二人で」

青年はテーブルに顔をつけて、冷たさを楽しんでいた。

「これで、全部ですか？」

「……うん。そう……そうだね」

「そうですか」

佐倉は、青年の横に移動した。青年は、顔を上げて不思議そうにそれを眺める。

「私、先輩のことが、心配なんです」

その場に座って、青年の服の袖をぎゅっと掴む。

「先輩のこと、信じてますから。だから、私に嘘はつかないで下さい。絶対に」

その思い詰めたような表情に、有無を言わせない強い力を持った目に、青年はあっさりと屈した。

「ごめん」

そう言って立ち上がると、台所に向かい、床下から瓶を取り出した。

「これは、僕が一年生の時に漬けた、秘蔵のものだ。特別なときに飲もうと思ってたけど、きっと今日が、そのときなんだ」

梅の実が沈んだ瓶をテーブルの上に置いて、「嘘ついてごめん。でもこれで本当に、全部だよ」と青年は言った。

「ああ、だと思いました。じゃあそれ、飲んじゃいましょう」

佐倉はコップを二つ並べて、そう言った。

「あれ？ うん？」

てきぱきと瓶の中身をコップに注ぐ。

「ええと、最初から疑っていたってこと？ 『信じてる』って言ってたのは？」

「先輩はまだなにか隠し持ってる、って信じてました。あと、甘えた様子でなにかそれっぽい台詞を言えば、簡単に白状するだろう、って信じてました。今でもまだ信じてますよ」

「ああ、そう……」

佐倉は「はい、乾杯」と言って、有無を言わずコップのふちを鳴らす。

「……先輩！ これ、甘くてとってもおいしいです！」

「こっちはなんだかしよっぱいなあ」

そこは確かに、「桜の宵」だった。確証は無かったが、青年はそう思った。ただ、想像していたそれと違っていたのは、桜の木の下にいる女性だった。

「『泡沫』という言葉を知っていますか？ 先輩」

「……佐倉ちゃん」

「ほうまつ、とも読みますが、うたかた、と読むのも正解です。あわと水しぶき、転じてはかないもののたとえです。『泡沫夢幻』という四字熟語もありますが、これも同様の意味です」

佐倉の言葉は、どこか台本を読むように機械的で、終末から目を背けるように、結末を先延ばしにするように、青年には感じられた。

「水面の泡をさす『うたかた』という言葉に、『泡沫』を当て字にした、と言われていました。本来、『泡』にも『沫』にもそんな読み方はないのに。昔の人は適當ですね」

なんと言ったら良いか分からなかった青年だったが、ようやく「どうして」という言葉が口をついて出た。

「好きなんですよ。うたかた、って言葉の響きが」

佐倉は深呼吸をして、それから、覚悟を決めたように、青年の方を見て口を開いた。

「先輩、私には、とっても大切なひとがいるんです。好きなひとのために、強くないお酒を飲んで、ちょっと体を壊しちゃうような、大切なひとが。そのひとのためなら、私の出来得る限り、なんでもしてあげたいと、思うんです」

それから佐倉は一度言葉を詰まらせて、「でも」と言った。

「でも、私には、そのひとのことを思う権利なんてないんです。私は、卑怯者だから。先輩、私はこれから、か

なり卑怯で最低で恥ずべき行為をします」

一歩、また一歩と、佐倉は青年に近付く。

「先輩、それでも……それでも私を、軽蔑して下さい」

青年の胸倉を掴んで、ぐいと引き寄せて、佐倉は言った。

「私は、先輩のことが好きです」

佐倉の頬が染まっているのは、酔いのためだけでは、恐らくないだろう。

「……どうして喧嘩腰なのかな？」

「こうでもしないと、自分が保てないような気がするからです」

それから、すこしの後、青年は口を開いた。

「佐倉ちゃん、僕は……」

「どうして！」

「はい？」

「どうしてなにも言わないの、お姉ちゃん！」

「紹介します。私の姉です」

「あ……あああのあの、この姿では、はじめまして、ですね。うへへ……」

青年は「はあ、はじめまして」とこたえて、佐倉のかげに隠れた少女を見る。その少女は、佐倉の言うように、佐倉の姉、のようにはとても見えず、色々な意味で佐倉とは正反対のようだった。青年にはそう見えた。

「やっぱり無理だよおお。ねえ、もう、もういいでしょ？」

「よくない。だって、まだ自己紹介しただけだよ？」

「ううっ、せめて、変身してもいい？ いいでしょ？」

「よくない。あんなの、『さくら』を演じてるだけだよ。本当のお姉ちゃんじゃない」

「そんなあ、もう精一杯だよ。お姉ちゃん、泣いちゃうよお。それでもいいの？」

「よくない。泣いてもなにも解決しないでしょ？」

「姉思いの妹を持って、お姉ちゃん幸せ者だなあ……」

それから少女は観念したように、おずおずと、佐倉のかげから青年の方に進み出た。

「あ……あの、ええと、は、はじめまして」

「さっきも言ったと思うけど、はじめまして」

「おうふ。そ、そうですよね。おかしいですよ。うへへ……」

「はは……」

「うへへへ……」

「……」

「……」

少女の顔がみるみる赤く染まっていく。それから少女は、「やっぱ無理！」と言って地面を蹴って飛んだ。文字通り、飛んだ。

「お姉ちゃん！」

佐倉の声にこたえるように、上空から高笑いが聞こえた。

「ふっはっはっは！ 待たせたな、少年！ これが、私の真の姿だ。よく目に焼き付けておくがいい！」

上空からゆっくりと降りてきたのは、青年にとって見知った顔の、さくらだった。

「今日は！ 君に伝えなければならないことが、あるのだよ！ 少年」

さくらは絞り出すように、「私は、ええと……」と言う。顔がひどく紅潮して強張っている。しかし突如と

して、なにか吹っ切れたように、なにかに気付いたように、表情を一変させて、穏やかに微笑を浮かべる。
「妹はっ！ ……妹は、すごくいい子なんだ。優しくて、可愛くて。こんな私に、気を遣ってくれて。そんな子に告白されるなんて、君は幸せ者だな。羨ましいくらいだ」
さくらは言葉を詰まらせて、それからもう一度口を開く。
「……ええと、それじゃあ！ 妹をよろしく、幸せにしてやってくれ！ 私はこれで、ドロンさせていただく」
さくらの体がふわりと宙に浮く。しかし佐倉はその腕を掴んで、逃がすまいとする。
「そうじゃないでしょ、お姉ちゃん」
佐倉の微笑みに、さくらは「ひっ」と悲鳴をあげる。

佐倉はひとつため息をついて、「先輩！」と青年を呼ぶ。
「もう、しょうがないから、全て言います。……これから、姉がとっても大切なことを先輩に伝えます。精一杯の格好良い顔で聞いて下さい。然る後に、私じゃなくて、姉を選んで下さい」
「おーっと！ それは違うぞ、少年！ 君は妹を選ぶべきだ、こんな優良物件はそうないぞ！」
佐倉は「なっ！」と声を漏らす。
「君の話をしているときの妹は、とても幸せそうな顔をするんだ。君だってそうだっただろう、少年」
「そんな、そんなの……違うよ」
それから佐倉は、青年の方を向いて口を開く。
「先輩！ 姉は、料理がとっても上手です。私なんてゴミクズ同然ですよ」
「少年！ 妹は、ヘコンでるときに甘えさせてくれるぞ。至高の柔らかさと包容力だ」
「先輩！」
「少年！」
「姉は！」
「妹は！」
青年は、笑った。思わず嘔き出してしまった。
「二人とも、とっても仲が良いね」

佐倉は、本日何度目かのため息をつく。
「先輩、ごめんなさい。今日はこれで終わりにします。作戦の練り直しです。無かったことにして下さい。まあ、記憶は消えるので大丈夫だと思いますが」
それから、さくらの手をそっと握る。
「帰ろう、お姉ちゃん。大丈夫だよ」
「ううっ……ごめん、ごめんね」
ほどなくして、世界が崩壊を始める。地面が揺れる。星空も、桜の木も、泡がはじけるように、消えていく。
そのとき青年は、思わず口を開いていた。
「佐倉ちゃん」
青年は思う。言わなきゃ。夢が終わる、その前に。だって、まだ返事をしてないじゃないか。これだけは、伝えなきゃ。
「僕は……」

テーブルの上には、書き置きがあった。
「起こしても起きないので帰ります 佐倉」
寝起きにぼんやりとしている頭を回転させる。昨夜はなにがあったんだっけ。思い出せない。頭痛、倦怠感、

吐き気。しかしどこかすっきりした気分だった。なにかをやり遂げたような、目標を達成したような。

鏡の前の自分の顔は、にやけていた。気持ちの悪いことに。なにかいいことでもあったのか、と思う。

「先輩、おはようございます。昨日はどうも」

「いえいえ、こちらこそ。……なんだか、上機嫌だね」

その日、佐倉ちゃんは何故だかとても機嫌がよかった。

「わかりますか？ 実は、姉が部屋から出てきてくれたんです」

「へえ、佐倉ちゃんに、お姉さんがいたんだ。……部屋から？ 出てきてくれた？」

家族関係の話は初耳だった上に、気になる言葉があった。

「はい。大学に入って、生活が変わって、性格も変わってしまっ。人と関わるのが苦手というか、外に出るのが苦手というか……ぶっちゃけ引き籠もりだったのが、大学に行くって、言ってくれたんです」

「それは、なんだか突然だね。なにかきっかけでもあったの？」

佐倉ちゃんは、ふふっと笑って「秘密です」と言った。

「とにかくこれで、元の姉に戻ってくれるはず。格好良くて、憧れのお姉ちゃんに。……あ、そうそう、姉とは、ルームシェアで一緒に住んでるんですが……」

佐倉ちゃんによる、お姉さんトークはしばらく続いた。

「紹介します。私の姉です」

「あ……あああのあの、はじめまして……」

佐倉ちゃんのかげに隠れたその人は、佐倉ちゃんの言うように、佐倉ちゃんの姉、のようには見えなかった。色々な意味で、佐倉ちゃんとは正反対に見えた。

「はじめまして、かな？ どこかで会ったこと、ありませんか？」

お姉さんは、目を見開いて、こちらを見た。

「あの……入学式のあとの、オリエンテーションで、私、筆記用具、全部忘れてて……」

「……あのときの！」

そういえば、ひどく困った様子の人を助けたことがあった。

「ただ、引き籠ってたせいで留年して、先輩とは同学年ではないんですけどね」

「そうなんだ」

「は、恥ずかしい話ですが」

佐倉ちゃんは、お姉さんの手を取って、ぴたりとくっついた。

「だから、これから先生に怒られたり、授業の履修をしなしたり、しなければならないんです」

「ううっ、恥ずかしい話ですが」

「じゃあ先輩、私はその付き添いなので、これで」

それから二人は、僕に背を向けて、どこかに行こうとする。その光景に、強烈な既視感を覚えて、思わず口を開いた。

「佐倉ちゃん」

僕は、どうしてか二人を呼び止めていた。そうしなければならない気がした。言わなきゃ。どうしても、なにかを伝えなきゃ。あのときの、返事をしなきゃ。

「また今度、三人で話そうよ。お酒でも飲んで」

佐倉ちゃんとお姉さんは、笑った。

「いいですけど、私はかなり強いですよ。先輩」

「わ、私も」

そして僕は、駆けていく二人の背中を見送った。

ときどきある夢を見るようになった。誰かを探している夢。夢の中の僕は、祈っている。どうか、もう一度あの人に会えますように。夢で会ったあの人に。そのときは、どうか今度こそ、伝えられますように。

それから、僕がどんなに望んでも、「桜の宵」が僕の前に現れることはなかった。

この感覚を、喪失感を、なんと呼ぶのか僕は知っている。

僕は失恋したのかもしれない。

おわり

案山子 2014年夏号

<http://p.booklog.jp/book/88667>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

古井龍 鈴野拓海 松井流吏 三ツ葉葵 加々美翔 七乙女昂 葉月遼
夏村晋 幼花 今畑鏡 山吹弓穂 遇新来三 Ellie Blue 遠瀬瑠依歌 双梳空
Pueny Loran Seapon 日曜日憂 高天美月 外衛眞希
芳野朔 七分の六 松本惇暉 浦木英智

製本版 発行： 2014年 7月 18日

電子書籍版 発行： 2014年 8月 19日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88667>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88667>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ